

## はじめに

人類数千年の歴史上において、真の神（生命）が示された期間はわずかでした。それは、あまりにも神（生命）が近くにありすぎて、衆生には理解できなかったからです。そこで、二千五百年前にお釈迦様が、二千年前にイエス様が、神（生命）を示さんために下生されたわけですが、その教えも理解力の乏しい宗教家たちによってねじ曲げられ、あるいは時の権力者たちによって排除され、歴史のチリの中に埋もれてしまいました。

でも、そうなることを予測していたイエス様は、弟子たちに「人類の前に真の神が示される時代が来るだろう」と予言しておりました。

このたび、知花敏彦師が出現したのは、埋もれた真理を掘り起こし、イエス様の預言を実現させるためでした。まさに知花敏彦師は、神をはばからず口にする偉大な覚者でした。その当時、お釈迦様もイエス様も、はっきりと「私たちは神・仏である！」とっておられました。でも、その当時の人たちには、自分が神だなんてとても信じられなかったのでしょうか。でも、今は状況が違います。そのことを理解できる、熟した魂が沢山生まれてきているからです。

今日、地球が回っているといっても、疑る人は一人もおりません。それは、学校で教わり、思想化された

からです。それと同じことを私はしたいのです。

どうでしょう。人間神の子の教育は悪いことですか。人間罪の子の教えは悪いことですが、人間神の子の教えは決して悪いことではないと思います。

私の使命は、長い間覆い隠されてきた真実のペールを剥がし、神の名を堂々と語れる時代にすることです。本書は、その思想化の第一歩です。もし本書が受け入れられ、「神の子誰々さん！」と堂々と語れる世の中になれば、地球の様相は一変するでしょう。

これまで、神はずっと私たちのハートを叩いてきましたが、気づいてくれる人がいなかった。でも、ここに来て、やっと耳を傾ける人が出てきたのです。この本を読み、感動した人、心がさわやかになった人、うれしくなった人は、間違いなく神（生命）を自分として生きられる人です。

何とぞ、神探しの旅をしてください。神探しの旅こそ、自分探しの旅なのです。一人でも多くの方が、本当の自分（神）に巡り合えますことを、心より願っております。

※ このメッセージは、宗教と一切かわりのないものです。むしろ、宗教を否定しているメッセージといった方がよいかも知れません。そのことを冒頭にお断りしておきます。

(8) 生命から宇宙を探る.....294

(9) 無・空・無限から宇宙を探る.....313

第三章 神の独り言

(1) 神とは何か?..... 329

(2) すべては神の御業.....338

(3) 神の中には神しかない!..... 348

(4) 神に生きる.....357

(5) 神の偉大さ.....362

(6) 神の愛は完璧である.....367

(7) すべてに神を観る.....371

(8) 神は完全なり.....378

第四章 真実はひとつ

(1) 宇宙の法と宗教.....389

(2) 真実は自分の中にある.....406

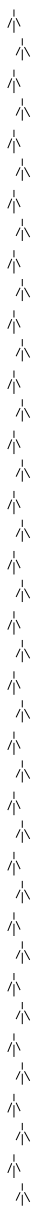
(3) 本質はひとつ.....417

(4) 真実はひとつ.....430

(5) 真理のよろず箱.....445

(6) 地球の夜明けは近い.....476

おわりに.....493



◎目次

はじめに.....	1
第一章 求道の心	
(1) 人生の目的・人生の意義.....	9
(2) 求道の旅.....	18
(3) 光と闇.....	43
(4) 人の世に病気がある理由.....	61
(5) 正しく生きる.....	73
(6) 体験こそ宝.....	91
(7) 愛の力・愛の心.....	109
(8) 天国(しあわせ).....	123
(9) 覚者の思い.....	138
第二章 宇宙を探る	
(1) 一から宇宙を探る.....	159
(2) 数字から宇宙を探る.....	184
(3) 意識から宇宙を探る.....	195
(4) 私から宇宙を探る.....	228
(5) 法則から宇宙を探る.....	245
(6) 瞑想・明想から宇宙を探る.....	259
(7) 物質と霊から宇宙を探る.....	282



# 第一章

# 求道の心

この解説書には、同じような言葉が随所に出てきます。字面だけ読めば読み過ぎしてしまう、何の変哲もない言葉ばかりです。でも、字面だけ読んだのでは、読んだことにはならないのです。字面だけ読むのではなく、文字の奥に隠されている香りを実感して欲しいのです。心の底で理解できたら、細胞が震えてきます。内的光が観えてきます。そうなるまで読み続けてください。

私の書の特徴の一つは、同じ文面を繰り返し返すパターンを用いている点です。真理を心の底で理解するには、何度も何度も繰り返し返す必要があるからです。どうか焦らず、じっくりと時間をかけて繰り返し読んでください。



## (1) 人生の目的・人生の意義

### ○人生は真実を知るためにある

人生は何のためにあるかと問われたら、私は躊躇なく、真実を知るためにある！ と答えます。なぜなら、人生ほど謎めいたものはないからです。人生は不可解なり！ と遺書を残し、滝つぼに身を投げた学生がいたと聞きますが、その気持ちが分からないでもありません。

あなたは、人生をどう捕らえていますか。今日まで何を求めて生きてきましたか。人は何のために生きているのかと問うと、家族を養うため、良い家庭を築くため、と答える人が大半です。ほとんどの人は、分からない、死ぬわけにゆかないから生きています、と首を傾げながらいます。なかには、食べるために生きています、楽しむために生きています、という人さえいるのですから、いかに人生が不可解なものか、思い知らされます。何も分かんず、何も考えず、ただ肉の欲するままに生きる、そんな人生でいいのでしょうか。生まれたからには、ぜひ人生の謎解きをして帰りましょう。

### ○人生において一番大切なこと

世の人々は、地位や名誉や財産を多く残した人を成功者と呼びます。でも、彼らは本当に成功者なのでしょうか。もしそうなら、この世の地位や名誉や財産を、そっくりそのままあの世に持ち帰っているはずですが、そのような人は一人もおりません。それは、地位や名誉や財産はこの世限りのもので、永遠のもので

はないからです。私たちが求めるべきものは、永遠になくならない真実です。

人生において大切なのは、

・ 幸せだったか、不幸せだったか、ではないのです。

・ 長命だったか、短命だったか、ではないのです。

・ 何を成し遂げたか、成し遂げなかったか、ではないのです。

・ 世に名声をとどろかせたか、とどろかせなかったか、ではないのです。

人生で一番大切なことは、

・ どれほど真実と向き合うことができたか。

・ どれほど魂を揺さぶる人生を送れたか。

・ すなわち、どれほど本当の自分を知り得たか、なのです。

しかし、多くの人は、物やお金や地位や名誉を得るために毎日命を削っています。私は、この世のものを否定しているわけではありません。地位や名誉や財産よりも、もっともっと大切なものがありますよ、それは真実を知ることなのですよ、とっているのです。

私たちが求めるべきものは真実です。本当の自分を知ることです。これ以外に、人生の目的はありません。成功者とは、真実に少しでも近づけた人のことをいうのです。

## ○真実を知るために生まれてきた私たち

では、本当の自分は何なのでしょう。ズバリいましょう。本当の自分は、「生命」です。この真実を知るために、私たちは生まれてきたのです。

これまで多くの覚者が下生し、衆生に真実を知らしめんと奮闘してきましたが、いまだに多くの人が自分のことを人間と思い、人間として生きています。そのため、生・老・病・死から逃れられず、苦しみに喘いでいます。生命に目覚めたら、一切の苦しみから解放されるというのに、それが人間には分らないのです。といっても、この迷妄から目覚めるのは容易なことではありません。だから神様は刺激の強いドラマを用意し、目覚めるのを待っているのです。

悲しいドラマも、苦しいドラマも、生命の自分を発見するために必要なドラマです。もし楽しいドラマや退屈なドラマばかりなら、何の疑問を持たず一生を終えてしまうでしょう。これでは、何のために生まれてきたのか分かりません。この世の厳しいドラマは、早く目覚めてください！ 早く目覚めてください！ と催促する目覚まし時計のようなものです。さあ、うるさい音に悩まされなくなったら、一日も早く生命の自分に目覚めましょう。

## ○人生の思索に死の題材は欠かせない

人は、肉親の死を前にして嘆き悲しみます。特に若者の死は、残された家族に強烈なショックを与えます。それを人は不幸と呼びます。でも、死は本当に不幸なのでしょう。幸せな時にはあまり考えませんが、肉

親の死を目の当たりにすると、人は死に対する疑問を持つようになるものです。

・死とは何か。

・人は死んだらどうなるのか。

・人生とは何なのか、等々……。

なぜ神は、人に生きる悩み、老いの哀れさ、病む苦しみ、死の恐怖を与えたのでしょうか。それは、人生に疑問を持つてもらうためではないでしょうか。その意味において、死は貴重な思索の題材を提供してくれていることになります。死を有益なものにするか無益なものにするかは、残された家族がどのように死と対峙するにかかっているのです。一人の死が周りの人たちの人生を変えた例はいくらでもあります。それほど、人の死は周辺に大きなインパクトを残していくのです。だから、人の死を単なる不幸と考えてはならないのです。

### ○不要な情報は受け取らないこと

私たちが毎日受け取っている情報は、すべて幻の情報は、すべて幻の情報は、なぜなら、この世そのものが幻だからです。この世の知識はこの世限りのもの……。そんな幻の情報を携帯電話やインターネットで追い求め、あなたの生活をおかしくなっていませんか。常に頭の中は雑念で一杯ではありませんか。これでは、心が安らぐはずがありません。できるだけ無駄な情報は受け取らないことです。また、自分から不要な情報を発信しないことです。どうしても必要な場合でも、必要最小限度に止めるべきです。この世の情報は、この世に用のある

人だけに必要であって、必要のない人には不要なのです。

情報の意味を漢字からひも解いてみましょう。情報とは「情」に「報いる」と書きます。ここでの「情」の意味は、人情や感情から生まれたこの世の様々な出来事を指しています。「報」とは、知る、あるいは受け取るという意味ですが、通して解釈すれば、「人情や感情から生まれたこの世の様々な出来事を受け取る」という意味になります。人間社会の出来事は、すべて「情」から生まれているのです。そんな情報は目覚めた者には必要ありませんから、彼らはできるだけこの世の情報から離れようとするのです。

よく、情のある人は善い人だといわれますが、魂が幼いから感情的になるのです。考えてもみてください。情がありすぎるために泣きわめくではありませんか。情がありすぎるために苦しむではありませんか。情がありすぎるために争い合うのではありませんか。どうか、これまで持っていた「情」に対する考え方を捨ててください。

ちなみに、真実に目覚めた人は愛報を求めます。「愛報」とは、天からくる情報のことです。いわゆる天啓とか、啓示とか、インスピレーションとかいわれるものです。この情報は、この社会の情報と違い、私たちの心を和ませてくれます。どうか、天の情報を求めてください。私たちは、一日も早く、外側の情報を必要としない人になりたいものです。

### ○本当の自分を知るために生まれてきた私たち

人間は、意識するしないにかかわらず、常に真実を求めています。これは、人間が宇宙生命なるがゆえの

本能的欲求ですが、顕在意識はその自覚がないため、この世的な何かを求めては自分を慰めているのです。それが地位であったり、名誉であったり、お金であったりするわけですが、どんなにニセモノを手に入れても心は満足しません。だから、多彩な趣味を持ったり、夜の街を徘徊したり、酒で自分をごまかすような行動に出るのです。でも、何をしても生きている実感が得られない。そのため、過激な行動に走る人も出てくるわけです。

私の人生は充実しています！ 私は幸せです！ といい切る人がおりますが、それはただの錯覚か負け惜しみです。彼らの笑顔の下には、満たされぬ心の苦しみが隠されているのです。だから、人生の終焉を迎えた時、人一倍強い悔悟の念を持ってこの世を去るのです。あくまでも、人生の目的は、真実を知ることにあります。すなわち、本当の自分を知ることにあるのです。真に生きている証が立てられるのは、本当の自分を発見した時のみです。それ以外は、錯覚か、ごまかしか、騙しです。

### ○充実した人生を送ろう！

あなたは、今日までの人生において、平凡だった時と苦しかった時の、どちらが印象に残っていますか。多分、苦しかった時だと思えます。その時、あなたは、なぜこんなに苦しいのだろう、と疑問を持ちませんでしたか。

平凡な人生を歩んでいる者の成長は少ないものです。なぜなら、苦しみや悲しみのないところに、疑問も気づきも起きようがないからです。人は疑問を持ってこそ、真実の扉を開こうと努力するのです。だからイ

エス様はいわれたのです。「苦しき者は幸いなり、その者は神の国を見るであろう」と……。

苦しみが人を成長させるのは、アスリートが肉体を鍛える心に通じています。その心の出どころは、強くなりたい！ 成長したい！ と願う向上心です。向上心の旺盛な人は、現状に満足できないのです。疑問を持ち、まだまだできると常に先を見つめています。だから、人生を価値あるものにできるのです。

無為な人生を送ることほど空しい一生はありません。ぜひ、充実した人生を送りたいものです。そのためには、大いに疑問を持つことです。持ったらその矛先を、人生最大の目的である自分を知ることに向けてください。アルツハイマー病(痴呆症)になる人は、人生の疑問を解こうとしなかった人たちです。人生の疑問を解こうと努める人に、アルツハイマー病はありません。

### ○老いの哀れさの意味

なぜ神は、人に老いの哀れさを与えたのでしょうか。それは、人生の意味を知ってもらいたいためではないでしょうか。

・なぜ人は老いるのか。

・なぜ人は病気になるのか。

・なぜ人はヨボヨボになってまで生きなければならないのか。

・人生って、いったい何なのか、等々……。

そうです。五官が衰えるのも、五体が衰えるのも、外側との縁を断ってほしい神の計らいなのです。いつ

までも若者のように元気であれば、外側との縁は断ち切りづらいでしょう。でも、弱ってくれば断ち切りやすくなります。神は、「もう外側に意識を向ける時期は終わったのですよ！ さあ、内側に意識を向けなさい！」というわけで、老いの哀れさを与えたのです。でも、多くの老人は、外側との縁を断ち切ろうとしません。それどころか、グルメに興じ、旅行に興じ、多彩な趣味に興じ、外側に夢中になっています。これでは、一番大切な老いの時期を逸してしまいます。

どんなに楽しいことも一時いつとまです。この世の楽しみほど虚しいことはないのです。そんな虚しいことに大切な老いの時を使うことほど大損はありません。人生を価値あるものにするかどうかは、ひとえに老いの時をどう使うかにかかっているのです。その意味では、体の不自由な人も同じです。体が不自由だからといって嘆くのではなく、成長できるチャンスだと捕らえ、できるだけ人生の思索をすることです。そうすれば、必ず充実した人生を送ることができるでしょう。人生で一番大切な時期は、「老いの時期である！ 苦難の道歩んでいる時である！」ということを知ってください。

### ○人の死は醜ければ醜いほど良い

死を美化する人がおりますが、人の死は醜ければ醜いほど良いのです。なぜなら、人生に対する疑問を深く持つてもらえるからです。だから私は著名人にいいたいのです。「あなたはかっこよく死んではなりませんよ！ できるだけかっこ悪く死んでくださいよ！ それが著名人の使命ですよ！」と……。事実、著名人が死ぬと、あの人があんな死に方をするなんて……人生って儂いものですね、と、多くの人の口から人生の



虚しさや儂さが語られます。それほど著名人の死はインパクトが強いのです。

こんな小話があります。

あるところに、庶民に神様のように慕われている義賊がおりました。特に若者の間では、彼はまさにヒーローでした。それを憂える一人の役人がおり、彼は必死になって義賊を追いかけました。その甲斐あって、ついに義賊が捕まってしまいます。そして磔の刑がいい渡されます。処刑の前の晩、捕まえた役人がこっそりと義賊に会いに行き、こういいました。

「お前のことだから義賊の誇りを持って明日堂々と死んでいくのだろうが、どうか、考えてほしい。お前にあこがれ、義賊になりたがっている若者が沢山いる。もし世のため人のためになりたいなら、明日、若者の夢を打ち砕くような死に方をして欲しい！」

義賊は黙って聴いていました。

処刑の日がやってきました。刑場に引き出された義賊は威風堂々として、一点の臆病風も見せません。しかし、今まさに槍で突き刺されようとしたその時、今まで堂々としていた義賊が、突然、「助けてくれ！おれは死にたくない！もう盗みはしないから許してくれ！」と喚き出したのです。それはそれは醜い最期でした。さあ、それを見ていた一般の見物人からはどよめきが起こり、若者の間からは落胆と溜息の音が漏れました。その中であって、一人、心の中で「ありがとう！」と手を合わせていたのはあの役人でした。小者の義賊なら見栄を張って堂々と死んで行ったのですが、その義賊は違っていたのです。

後日談になりますが、役人が調べたところ、その義賊は昼間まじめに働き、盗んだ金には一文も手をつけ  
ないという徹底ぶりだったそうです。この話は、今の宗教家には耳の痛い話だと思います。信者からお金を  
取って飯のタネにするのは、人助けと相反するものだからです。

そのことはさておいて、肉体人間の儂さや哀れさや虚しさを考えさせることほど、世のため、人のために  
なることはありません。人の死が醜ければ醜いほど良いというのは、人生に深い疑問を持ってもらえるから  
です。私は皮肉っていつているものではありません。死は、本当は美しい方が良いに決まっています。でも、  
真理を知らぬ者の多い今の地球においては、醜い方が人の成長のためには良いのです。その意味では、世に  
真理が浸透するにつれ、死は美しいものとなっていくでしょう。

## (2) 求道の旅

### ○人生には筋書きがある

人生に偶然は一つもありません。必ず筋書きがあり、意味があります。それも、あなたの成長に必要な意  
味のある筋書きです。だから、案ずることなく進めばいいのです。ただし、この筋書きは、一直線にはでき  
ておりません。こんな道を歩いていったい何になるのだろうと思うような、意味の分からない道を歩まされ  
ることもしばしばあるのです。だから、どうしても人生を疑ってしまうのです。

私たちが人生に迷うのは、神の書かれた筋書きがよく見えないからです。でも、よく見えないからといって、あなたに筋書きが書けますか。書いたとしても、せいぜい自我を満足させるような筋書きでしょう。しかし、神はそれさえも織り込み済みで、正しい筋書きを書いてくれているのです。さあ、神が書かれた筋書きを信じて進みましょう。信じて進めば、必ず意味の分かる時がやってきます。あなたはその時、目を輝かせて神に感謝できるようにしましょう。

### ○神の公平さは、悟りについても同じである

そびえ立つ山の裾野に、無数の道が走っています。はたして、どの道を選んだら最も早く頂上にたどり着けるのか。みな、溜息を漏らしながら手探り状態で歩み始めます。あの道を行っては迷い、この道を行っては迷い、時には袋小路に迷い込み、時には堂々巡りをし、よろけ、ふらつき、転び、もう止めようと何度思ったことか……。それでも何とか今日まで歩んできた私たち……。そして、ついに本物の道に巡り会えた私たち……。さあ、道は一本につながりました。もう迷いはありません。あとは頂上を目指し、力強く登るだけです。故郷はもう目の前です。

どのような魂も、いつか必ず目覚めるようになっております。そこに特別早いとか、遅いとかいったことはありません。同時期に出発した魂は、みな同時期に目的地に着くようになってるのが神の公平さだからです。楽あれば苦あり、苦あれば楽ありで、楽して悟る者もいなければ、苦しんで悟る者もいません。私たちは浮き沈みを繰り返しながら、いつか父の家にたどり着くようになっていくのです。

## ○環境の用意

環境の用意は、神の公平さを如実に表しています。たとえば、真剣に求める者の行く手には小石一つ落ちていないけれど、遊び心で求める者の行く手には岩や石が置かれているように……。これは、誰が置くのでもない、生半可だから叱咤激励の意味を込めて自分が置くのです。

環境の用意は、幾前世も前から始まっています。それは、一瞬一瞬の時の中において、一日一日の生活の中において、一つ一つの人生の中において……。だから今、与えられた環境の中で、精いっぱい生きなければならぬのです。環境は嗜め、叱咤激励し、後押ししてくれます。自分の意志で進めない険しい道も、環境は後押ししてくれます。厭だ！ 助けてくれ！ と泣き叫んでも、容赦はしません。環境は峻厳な愛そのものなのです。だから今の環境に感謝しましょう。

- ・両親に、
- ・兄弟姉妹に、
- ・隣人、友人、同僚、上司、先生など、周りの人たちに、
- ・あらゆる生き物に、
- ・社会に、国に、地球に、感謝しましょう！

憎まれ口をいう人も、罵声を浴びせる人も、いやがらせをする人も、みな自分を成長させてくれる環境です。さあ、感謝しましょう！ あなたの周囲に存在するどんな人も、どんなものも、みなあなたを成長させ

てくれる頼もしい環境なのですから……。

### ○介護は求道者の登竜門

学びの中でも、介護ほど魂を成長させる学びはありません。これは、介護する方も介護される方も、です。特に障害児を持つ親は、一生かかわりあって生きてゆかねばならないわけですから、大変な成長が期待できるのです。とはいっても、介護は、心身ともに疲れる大変な作業です。経済的にいっても、家庭を破壊し兼ねない難事です。

確かに介護人から見ると、被介護者は厄介者です。わがままはいうし、憎まれ口はいうし、甘えるし、真夜中に起こされるし、だから声を荒げたり邪険な態度で接したくなるのも無理はないのです。でも、そんな気持ちになった時、次のように考えてください。

「被介護者は、自分のために厭な役を引き受けてくれている犠牲者なのだ」と……。

そうなのです。被介護者は、嫌な役を引き受けてくれている、勇気ある魂なのです。誰も下の世話をしてもらう厄介者などになりたくないのです。でも、被介護者は、あなたのためにいやな役を買って出してくれたのです。だから、介護しているのではなく、介護させてもらっているのです。なのに、いやいや介護しては、被介護者に対して失礼です。

これは私の体験からいえることですが、いやいや介護している時は、憎まれ口をいったり我がままをいったりして、介護人を困らせるのです。私もはじめ、いやいやしていましたので、母は私によく憎まれ口をい

ったものです。でも、互いの立場の意味が分かり、感謝の気持ちで接するようになってからは、母の態度が変わったのです。

魂同士は、介護の意味をよく知っているのです。もし長期間介護で悩まされている人は、まだ学び足りないから介護を卒業させてもらえないのだと思ってください。そして、何が学び足りないのか、じっくり考えてみてください。特に、障害児を持つ親は、夫婦にどんな過ちがあつてこのような子が生まれたのか、よく反省しなければなりません。もし過ちに気づき、生き方を正したら、子の願いを適えたことになりしますので、子供に変化が起きるでしょう。

一方、被介護者の立場から見ると、介護人は大切な手助け人です。介護人がいなくては何もできません。なのに、憎まれ口をいって介護人を悩ませては、自分が困るだけです。確かに、病気になると我がままもいたくなるし、愚痴の一つもいたくなるのも分らないではありません。でも、そこに学びの材料があるのです。被介護者は、身の不自由さを次のように考えてください。

- ・私は、不自由な身体を通して、今、健康の尊さや自由の有り難さを学んでいるのだ。
- ・忍耐力や我慢強さを学んでいるのだ。

・介護人の大変さや、人の絆の大切さや、愛の素晴らしさを学んでいるのだと・・・。

もしそのように考えることができたなら、苦しみは半減するでしょう。そして、このような身体になった責任は自分にあると考え、その原因を追究すれば（自分の心に問う）、状況は好転するでしょう。さらに、今

の状況の中でできることを精いっぱいやれば、いっそう状況は良くなるでしょう。

この宇宙に一方通行はないのです。介護する方もされる方も、理由があつてそのような立場になったのです。そのことが分かれば、介護の仕方もある程度違ってくるでしょう。嫌なことが嫌でなくなるし、嫌であっても嫌さが半減するのです。また、いつ逆の立場にならないとも限らないわけですから、嫌とはいってられないでしょう。私たちは、転生において、立場を変えながら体験し、学び、成長してゆくのです。このことを知ってから、私は、介護することが楽しくなりました。でも、私の学びが終わったのか、母の学びが終わったのか、しばらくして母はこの世を去りました。

このように、互いに学び終わり、もう学ぶ必要がなくなったら、自然と状況が変わるのです。だから、介護する方もされる方も、一日も早く課題を克服するように努力することです。介護の意味が理解できれば、介護する方もされる方も、感謝の気持ちで接することができるでしょう。

#### 【介護人は被介護者に】

- ・ 私のために嫌な役を引き受けてくれてありがとう！
- ・ 介護させてくれてありがとう！ と、感謝しましょう。

#### 【被介護者は介護人に】

- ・ 介護してくれてありがとう！
- ・ いろいろと気づかせてくれてありがとう！ と、感謝しましょう。

介護は、厳しいがゆえに魂を大きく成長させてくれるのです。それゆえ、介護は求道者の登竜門といわれるのです。

### ○ホンモノの指導者とニセモノの指導者の見分け方

この世には、ホンモノの指導者よりニセモノの指導者の方が圧倒的に多いのです。だから、ニセモノの指導者に食い物にされてしまう人たちが後を絶たないわけです。

ホンモノの指導者に巡り会える確率は、おそらく  $0.00001$  %あるかないかでしょう。神の公平性からいって、ホンモノの指導者に巡り会えるチャンスはみな平等に与えられているはずですが、見分ける目を持たないがゆえに自らチャンスの芽をつぶしているのです。

では、どうすればホンモノかニセモノかを見分けられるのでしょうか。

- ・ホンモノは飾りません。
- ・現象（神秘）を見せびらかしません。
- ・団体（会社や会や宗教など）をつくりません。
- ・自力を説きます。
- ・いかなる偶像崇拜もさせません。
- ・お金を求めません。
- ・学びの友を平等に扱います。



・ エネルギーを込めて語ることができます。

・ 来る者拒まず、去る者追わずの姿勢を貫いています。（ホンモノは質を重んじる。だから、信者の数を重視する宗教はみなニセモノと思ってよい。）

・ 権威を振りかざすようなことはしません。

・ 人を集める宣伝をしません。

・ 個人的な話をせず、普遍的な話をします。

よく真理を金儲けの道具にしている団体がありますが、本当にそんな良い方法があるなら私なら惜しみなくタダで公開します。良いことは世に広め、多くの人に幸せになってもらうことが神の願いだからです。真理を金儲けの道具にするなど、もっての外です。

これは、特許制度についてもいえることで、本当に世のため人のためになる発見や発明ならば、広く世に公開して全人類の幸せのために使うべきです。利益を一企業や個人に独占させるなど、天に対する反逆です。なぜなら、素晴らしい発見や発明は人の脳から生まれるものではなく、天啓として天から授かるものだからです。

世の中には子羊の皮をかぶったオオカミが沢山おりますから、よくよく注意せねばなりません。その点、知花先生の教えに出合った皆さんは幸せ者です。これは千載一遇のチャンスです。ぜひ、そのチャンスを逃さないようにしてください。私たちは今、それほど有り難い道を歩んでいるのです。この幸せに感謝しまし

よう。

### ○悟りは亀の如し

どうしたことか。昨日はあれほど自覚が強かったのに、今日の自覚のなんと乏しいことか。自分の意識の中のどこを探しても、昨日のような強い自覚は見当たらない。自覚とは、このように移ろいやすいものなのだろうか……。でも、落胆してはなりません。一年前の自分と比べれば、間違いなく成長しているのですから……。いいではありませんか。一步進んで半歩下がり、一步進んで半歩下がりながら進んでも……。真理はどこにも逃げて行かないのですから……。

さあ！ 千里の道も一步からの心意気を忘れず、亀のように着実に歩みましよう。怠けず怠らず歩めば、必ず目的地に到着できるようになっているのですから……。求道は競い合うゲームではありません。ですから、いたずらに競い合ってはならないのです。

### ○すべて悟りの糧である

どんな不幸も悲しみも、どんな幸せも喜びも、みな悟りの糧になっております。日々の体験一つ一つが、自分の背丈を大きくしてくれているのです。今は分からないかもしれませんが、いつか必ず、そうだったのか！ と、合点のゆく日が出てくるでしょう。だから、無駄な人生などないといわれるのです。

- ・一歳で閉じる人生も、百歳で閉じる人生も、みな悟りに必要だったのです。
- ・病で散る人生も、戦場で散る人生も、みな悟りに必要だったのです。

・事故で死ぬ人生も、災害で死ぬ人生も、みな悟りに必要だったのです。

・痛い！ 苦しい！ 悲しい！ と泣き叫ぶ体験も、みな悟りに必要だったのです。

去る人に、逝く人に、よく頑張りましたね！ と、労いの言葉をかけてあげましょう。

### ○悟ることは当たり前のこと

多くの人は、「悟り」をよそごとのように考えています。身近でそんな話が出て、そんなことがあるのか、そんなことができるのか、と、まるでお伽噺か何かのような感覚で聞いています。ましてや、自分が悟るなどともない！ と考えています。しかし、悟りはよそごとではありません。あなたの人生の最重要課題です。何を放っておいてもやらねばならない、人生の一大事業なのです。

どうでしょう、

・あなたはあなたを知っていますか……。

・本当の自分を知っていますか ……。

知らないではありませんか。では、なぜ知ろうとしないのでしょうか。自分を知ることは、そんなに特別なことですか。当たり前前なことではありませんか。その当たり前前のことを、なぜしようとしないのでしょうか。今からでも遅くありませんから、始めようではありませんか。本当の自分を知るのに、早い遅いはないので……。

○一人で静かに登るしかない

悟りの難しさを考えれば、人を誘うことも人を引っ張って行くこともできません。自分一人で静かに登って行くしかないのです。でも、それでいいのです。なぜなら、自分の理解した世界を人に与えることなどできないからです。

自分の目を人に貸すことはできません。自分の耳を人に貸すこともできません。当然、自分の足を人に貸すこともできません。人それぞれ、自分の目と耳と足を使って山道を登るしかないのです。頼れるのは自分自身です。

人間には自由意思があります。自由意思があるだけに、他人はどうすることもできないのです。そうです。悟りの山登りは一人一人の自由意志を待つしかないのです。一人一人が納得し、その気になって自分の足で登るしかないので。たとえ代理で登ってくれても、山頂からの絶景は登った人にしか分からないからです。真理の受け売りはできないとは、そういうことなのです。

○救いようのない人とは？

●最も救いようのない人は、

自分のことを人間だと思い、人間だと信じ、人間として生きている物質人間のことで、唯物論者全員がこの部類に入ります。彼らは、地位や、名誉や、財産や、お金を信仰していますので、手の施しようがないのです。だから彼らは、一歩間違えば大罪を犯すのです。

●次に救いようのない人は、

自分のことを人間だと思い、人間だと信じ、人間として生きているのですが、何か不幸に出会うと、「罰が当たったのではないか」と疑念を持つ人です。こういう人たちは、神を信じなくても、何か目に見えない力に恐れを抱いていますので、罪は犯しても大罪を犯すことはないでしょう。彼らは、不幸と幸せの波間を行き来しながら、少しずつ成長してゆくでしょう。

●次に救いようのない人は、

自分のことを人間だと思い、人間だと信じ、人間として生きているのですが、何か不幸に出会うと、「神罰が当たったのではないか」と神に畏怖の念を抱く人です。こういう人たちは、神棚や仏壇に手を合わせます。一般的にいわれている善人とは、この部類の人たちで、ここまで来た人はもう悪の深みにはまることはありません。彼らの目に神殿が見えてくるのも、そう遠くはないでしょう。

●次に救いようのない人は、

自分ことを知的に神だと知り、神だと信じようとしているのですが、まだ神としての生き方のできない人です。つまり頭で知っていても、心の底から神だと思えない人です。ここまで信仰の深まった人は手本となれます。このような人は周りの人に良い影響を与えても、悪い影響を与えることはありません。ただ時々ネガティブな生き方をしますので、病や災難から逃れず苦しんでおります。でもここまで来た人は神殿の門前までできていますので、神の光に包まれる日も近いでしょう。

人には自由意志がありますので、力づくで神の世界に連れて行くわけにはゆきません。たとえ力づくで連れて行っても、心まで連れて行くわけにはゆかないからです。ですから、その気になるまで辛抱強く待つしかないのです。

私たちは同時に二つの信仰を持つことはできないのです。つまり闇も信仰し、同時に光も信仰することはできないのです。だから闇に目を向けている人は、どうすることもできないのです。救いようがないとは、そういう意味なのです。しかしいつか彼らも、必ず光に目を向ける時がやってきます。その時がチャンスです。それまでは温かく見守ってあげましょう。

### ○昔と今と、どちらが悟りやすいか

本来、悟るのに、良い時代悪い時代などないのです。いつの時代も、どんな時代も、良い時代なのです。悟れるか悟れないかは、本人のやる気次第だからです。真剣に求めれば、いつでも誰でも悟れるようになってるのが宇宙の仕組みだからです。悟りの条件を考えてみましょう。

- ・ 環境を整えることです。
- ・ 知ることです。
- ・ 理解することです。
- ・ 気づくことです。
- ・ 集中力です。

・根気とやる気と努力です。

この六点は、どんな時代にあっても欠かせない悟りの条件です。

昔は静かでした。人の行き来もあまりなく、目や耳から入ってくる情報も少なく、外から入ってくる雑音は今と比べると問題ではありませんでした。だから物静かに考える時間が多く取れました。これだけ考えると悟りに良い時代だったといえるかもしれませんが、反対にホンモノの指導者に出会えるチャンスが少なかったと思われます。今は、テレビ・ラジオ・携帯電話・インターネットなど情報の媒体が発達しているため、真剣に探せばホンモノの指導者に出会えるチャンスは多くあります。また交通機関が発達しているため、会いに行くのも容易にできます。さらにCDやDVDなどの文明の利器が、後押ししてくれる利点もあります。その一方情報の媒体が雑音を送り込み、心静かに考える時間を与えてくれない欠点もあります。

このように今も昔も一長一短あるわけですが、何よりも大切なのは本人のやる気です。やる気さえあれば、どんな障害も問題ではありません。悟りを時代のせいにはしないでください。それを口にする人は、戦いから逃げている臆病者といわれても仕方ありません。悟りの環境づくりは自分です。それは一生一生の人生において、日々の人生において、一瞬一瞬の人生において……。だから、今の生き様が大切になってくるのです。

### ○一歩一歩が大切である

人生の唯一の目的は、

・ 本当の自分を知ることです。

・ 悟ることです。

悟りは難しいといわれますが、短期間で悟ろうと焦るから難しく感じるのです。私たちは永遠の生命ですから、永遠の時をかけるつもりでやったらいいのです。何百万年かかろうが、何千万年かかろうが、あなたを叱る人は誰もいないのですから……。といっても、歩かなかつたら着くことはありません。悟りに必要なのは、歩き続けることです。一步、一步、歩を進めることが大切なのです。歩を進めるとは、

・ 神を意識することです。

・ 生命を意識することです。

・ 本当の自分を意識することです。

怠らず歩んでいけば、必ずゴールテープを切ることができます。一步一步の積み重ねが、あなたを悟りに近づけることを私は保証します。

○ **人にも生き、神にも生きることができない！**

真の幸せを得たいなら、人か、神（生命）か、どちらかを選ばねばなりません。肉の快樂も貪り心の喜びも得たいなど、虫がよすぎるというものです。二兎追う者は一兎をも得ずの諺のように、人にも生き、神にも生きることなどできないのです。真の信仰に生きられないのは、人間を捨て切れないからです。涙して訴えてくる人の多くは、人間を捨て切れず苦しんでいる人たちです。すべてを捨ててついてきなさい！ と釈



迦がいわれたように、真の幸せを得たいなら一時の快樂を追い求めないことです。人に生きるのではなく、神に生きることです。

それには、

- ・強い決意が必要です。
- ・勇気がいります。
- ・自分を律する強い意志がいります。
- ・続ける根気と努力がいります。

偉大なことを成し遂げるには、何かを捨てねばなりません。両手に物を持っていたら、天に通じる梯子は上れないからです。一時の快樂を選ぶか、永遠の幸せを選ぶかは、あなたの決意次第だということです。

### ○人生の差

真の求道者は幸せです。なぜなら、人生の駒を目に見える形で進めているからです。それは、求道という形で……。瞑想という形で……。しかし、多くの人は、目に見えない駒の進め方をしています。ただ肉体を維持するために……。家族を養うために……。この世的な幸せを手に入れるために……。確かにそれも伏線的な駒の進め方ではありますが、真の目的でないために、目に見える駒の進め方になっていないのです。

目に見える駒を進めている人と、目に見えない駒を進めている人の人生の差は実に大きいのです。できれば、目に見える駒の進め方をしたいものです。真剣に求めている人は、優先順位を間違えませんかから、常に

目に見える形で駒を進めています。生半可に求めている人は、この世のことを優先しますので、どうしても目に見えない駒の進め方をしてしまいます。どうか、優先順位を間違えないでください。

### ○なぜ悟りに苦しみが伴うのか

なぜ悟りに苦しみが伴うのでしょうか。いいえ、本当は喜びのうちに悟れるようになっていくのです。ただ、私たちは怠けて歩こうとしないから、一度に走らなければならなくなり苦しむのです。家の大掃除も、一年間まとめてやるから大変なのです。夏休みの宿題も、一度にまとめてやるから大変なのです。日々少しずつやっていたら、そんなに苦労することはないのです。

悟りだって同じです。一瞬一瞬を、一日一日を、一生一生を大切に歩んでいけば、そう苦勞せずゴールテープを切ることができるのです。いや、かえって励みになるでしょう。なぜなら、目に見える形でゴールテープに近づいて行けるからです。宇宙の仕組みは、決して苦しむようにはつくられていません。怠けるから苦しむのです。

### ○求道者にとってどちらが得か

知花先生の講演を聴き最初に感じたことは、「これだけ強烈なエネルギーを頂いているのだから、学びの友の中に相当進んでいる人がいるはずだ。ぜひその人たちからも教えを請けたいものだ!」と思ったことでした。だから、当時、そのような人がいないか真剣に探したものです。でも、世の多くの求道者は、自尊心を守ろうとするあまり、人の話を耳を貸そうとしません。これでは、真偽を見分ける目が育たないばかりか、

せっかくの学びのチャンスを逸してしまいます。

自分を成長させてくれる人を見つけたら、謙虚に教えを請うのが真の求道者だと思います。そのチャンスを自尊心で潰しては、悔やんでも悔やみきれません。自尊心を守ることが大切か、悟りに近づくことが大切か、真剣に真理を求めている人なら分かるはずです。

### ○悟りの道具を磨いている私たち

アスリートの夢は金メダルを取ることでしょうが、それを実現できるのはほんの一握りの人たちだけで、ほとんどのアスリートは無念の涙をのみます。でも、落胆してはなりません。競い合いでは負けても、一生懸命やったことに対するごほうびは、すでに「心の成長・魂の成長」という形でもらっているのですから…。結果より過程が大切だといわれるのは、そういった理由があるからです。ということは、あなたがこれまで流した汗と涙は、一滴たりとも無駄になっていなかったということです。

なぜこの世は、相対的にできていますか。それは、競い合いを通して強い精神力を築き上げるためではありませんか。「忍耐力・集中力・向上心・強い意志」みな、悟りに必要な道具ばかりです。私たちは、相対的体験を通して今悟りの道具を磨いているのです。このことを知れば、どんな厳しい鍛錬も挫けずにやれるでしょう。

心の成長は、一ミリ一ミリ、一步一步です。そのためには、目標を設定することが大切です。設定した目標に一步でも近づけたら、メダルを与えてやってください。メダルを与える基準などありません。あなたが、

「よくやった！」と思えたら、それが基準です。競う相手は自分自身です。ぜひ、自分に負けない自分を確立してください。

### ○極めれば極めるほど奥の深さが見えてくる

私たちは、今の理解力ですべてを推し量ろうとします。でも、この宇宙には、理解すべきことが無限に存在するのです。

宇宙は実に深淵です。極めれば極めるほど、奥に更なる極めるべきことが見えてきます。高みに登れば登るほど景観の素晴らしさが増してくると似ています。「景色が悪い！」と不平不満を漏らす求道者がおりますが、匠たくみの技の素晴らしさは、自分が近づいてはじめて知るのであります。近づきもしないで不平不満を漏らすなど、求道者としての資質に欠けます。素晴らしい景色を見なければ、一生懸命頂上目指して登ることです。登ってから文句をいってください。きっと景観の素晴らしさに満足するはずですよ。

### ○真の信仰者とは？

奇跡を見せてくれたら神を信じる！という人は、真の信仰者ではありません。何かを見せろというのは、神を試すことになるからです。こういう者に奇跡を見せても、決して信仰を深めることにはないでしょう。なぜなら、信仰は奇跡によって培われるものではなく、理解力によって培われるものだからです。

我が家に帰りたい！ 故郷に帰りたい！ 父の御胸に帰りたい！と一心不乱に求める者は、真の信仰者です。病を治したい！ 金持ちになりたい！ 幸せになりたい！ 神秘力を身につけたい！と御利益を求

める信仰者は、真の信仰者ではありません。心から本源に帰りたいと願う者はよく瞑想しますが、御利益信仰者は現象を追いかけるばかりで、あまり瞑想しません。また、知識を追いかける者も論争に夢中になるだけで、あまり瞑想しません。

でも、彼らを馬鹿にしてはなりません。なぜなら、動機は違っても同じ山に登っていることに違いはないからです。小川が大河につながっているように、真理を求める脇道も大道につながっているのです。神が完全といわれるのは、何一つ無駄がないからです。

### ○真に人を変えられるのは、科学的瞑想の実践である

どんな宗教も、道徳心を持ちなさい！ 倫理観を養いなさい！ 人として正しい生き方をしなさい！と教えます。でも、ただ口先でいってできるものでしょうか。できないから宗教を頼ってくるのですよ！

真の宗教は、人を変えるものでなくてはなりません。それができるのが瞑想です。私が瞑想を重視するのは、人を変えることのできる唯一の方法だからです。倫理も道徳も、人としての生き方も、瞑想によって生命の自覚が深まれば自然とできるようになるのですから、あえて口にする必要はないのです。

口先で人を変えられるなら、こんな楽なことはありません。変えられないから、今のような狂った社会になっっているのです。さあ、口先だけの宗教を捨て、実際に人を変えることのできる科学的瞑想を実践しましょう。

## ○知っているから求めたがるのである

子供がオモチャをせがむのは、オモチャが何なのか知っているからです。つまり、楽しく遊べる道具だと知っているから欲しがるのです。私たちが平安や安らぎを求めるのも、平安がどのようなもので、安らぎがどのようなものか知っているからです。真の平安や安らぎは天にあるのですから、私たちは天を知っていたことになりました。以前、天にいてその味を知っているから、今地にいてそれを欲しがるのです。知らない者が求めることはありません。知っているから求めるのです。これは、私たちが天の住人であったことの証あかしであります。

## ○信仰心を持たない者は一人もいない

信仰心を持たない人など、この世に一人もおりません。どんな人も何らかの信仰心を持って生きています。それは、神仏に対する信仰かもしれません。自然に対する信仰かもしれません。地位や名譽や財産に対する信仰かもしれませんが、全く信仰心を持たない人など一人もいないのです。

人間は、何かに心を委ねていなければ生きてゆけないのです。「神など信じない！」とうそぶく唯物論者ほど、肉体に対する信仰心は旺盛です。だから、人生の終焉を迎えた時、人一倍肉体に執着を持つのです。この世の無常なるものを信じていては、心穏やかに生きられません。なぜなら、私たちの本性は永遠不滅の生命だからです。永遠なる私たちが無常なるものを追いかけて、どうして心穏やかになれましょうか。私たちは、永遠なるものを掴んで初めて心穏やかになれるのです。

## ○現実逃避者と悟り人との違い

現実逃避者は、真理を追究している者の中にも結構見られます。彼らは、求道を隠れ蓑にし、家庭や社会から逃避している偽道者たちです。人頼りに生きている、意志の弱い、勇気のない人たちです。だから私は、時々、学びの場を「駆け込み寺」に譬<sup>たと</sup>えることがあるのです。

自分が不滅の生命であると自覚した者は、何が起ころうと心を乱すことはありません。ですから、トラブルを起こすこともなければ、人に迷惑をかけることもありません。しかし、現実逃避者は、ちよつとしたことで心を乱しますので、すぐにトラブルを起こしたり間違いを犯したりします。

現実逃避者と悟り人との違いは、現実逃避者は外の世界があると見て外から逃げているのに対し、悟り人は外の世界はないと見て外との関係を絶っている点です。ですから、まるで中身が違うのです。さらにいえば、現実逃避者は自分を肉体に閉じ込めた人、悟り人は自分を無限に解放した人です。この違いは天と地の差があるでしょう。

世の中には、もうすぐアセンションが起こって地球が変わる（その時自分が変わる）と思っている人がおられますが、自力で自分を変えられない現実逃避者だけがそのようなことを望むのです。実際、アセンションが起こってあなたは変わりましたか。自分は何もしないで、どうして変わるのでしょうか。あなたは、前に体験したアセンションのことを覚えていますか。覚えていないのではありませんか。ということは、今と何も変わらないということです。

自分を変えられるのは、自分自身です。どうか、自分で自分を変えてください。そのためには、自分の力を信じることです。肉体の自分の力を信じるのではなく、生命の自分の力を信じることです。そうすれば、きっと自分を変えることができるでしょう。

### ○素直さが大切

子供は実に素直です。ですから、子供に菓子袋を与えると、すぐに袋を破って中身を取り出します。大人はどうでしょうか。まずは袋のなぞ解きをします。そして、できるだけ袋を破らず中身を取り出そうとします。さて、どちらが素直な取り出し方でしょうか。

悟道も同じです。中身が大切なのであって、袋が大切なではありません。決して美しく装った外形に惑わされないでください。

外形とは、

- ・美しく飾られた言葉や文字のこと
- ・姿形のこと
- ・装いのこと
- ・形式や儀式のこと
- ・派手な現象のこと
- ・権威や名声のことです。



自身とは、

・ 本当の自分のこと

・ 生命のこと

・ 真理のこと

・ 神のことです。

### ○偶像崇拜者とは？

仏像やマンダラを拜んでいる人たちだけが偶像崇拜者ではありません。肉体を自分だと信じている人たちは、みな偶像崇拜者なのです。なぜなら、肉体は愚かな像だからです。木を切り刻んでつくった仏像も、宇宙の塵（原子）でつくった肉体も、何ら変らぬ偶像です。ですから、物質に目をくらませられている人たちは、みな偶像崇拜者なのです。物質をどんなに崇拜しても、そこからは何も得られません。物質は、必ず消えてなくなる幻だからです。創られた物を崇めるのではなく、創り主である生命を崇めましょう。

「汝の見るもの受け継がん！」といわれるように、生命を觀ればホンモノが与えられ、物質を見ればニセモノが与えられます。宇宙の法則は、意識したものに忠実に働いてくれるのです。それを決めるのは私たちの思いです。あなたは、どちらが欲しいのですか……。

### ○ただ幼いだけ!?

求道の旅は一直線にはできておりません。脇道にそれたり、堂々巡りをしたり、右に寄ったり、左に寄っ

たりしながら、ゴールテープを切るのです。赤ちゃんが幼児に、幼児が少年に、少年が青年に成長してゆくように、魂も少しずつ成長を遂げていくのです。

この世に悪人はおりません。自分が何をしているのか分からない、幼人がいるだけです。幼いから人を憎むのです。幼いから人に迷惑をかけるのです。幼いから危険なことをするのです。これは幼さゆえの罪ですから、責めるわけにはゆきません。大人になれば、犯した罪が我が身に返ってくることを知りますので、罪は犯さなくなりません。さらに成長すれば、すべてのものが自分であることを知りますので、どんなものも自分の如く愛せるようになるでしょう。

この世に幼人はいても悪人はいないとは、そういう意味なのです。

### ○悟りの認定人は自分自身である

誰かに認められて悟り人になるのではありません。どこかに認定人が裁定人がいて、「この者はここまで進んだから悟りの認定証を与えよう！」というものではないのです。あくまでも、自分自身が、心の底から、神であった！ 生命であった！ 宇宙そのものであった！ と自覚できて初めて悟ったといえるのです。だから、認定人は自分自身です。ただし、自覚の深さに際限はありませんから、悟りの認め印を押すことはできないでしょう。その境地がどの程度のものかは、自分でも分からないし、誰にも分からないからです。だから「悟った！」といっってはならないのです。

悟りは夢物語ではありません。真実なるものと結びついた、永遠に失わない喜びの境地です。ですから、

逃げて行くことはありません。あくまでも悟りは意識状態であることを知ってください。

### ○頭の中を白紙状態にしよう！

世の中には博識者といわれる人たちやクイズを得意とする人たちがごまんとおりますが、そういう人たちは理屈っぽく、あまり人のいうことを聞こうとしません。ですから、昔から、知識人は悟れない！ といわれてきたのです。

どうでしょう。知識でスキーが滑れるようになりますか。自転車に乗れるようになりますか。泳げるようになりますか。どんなに頭で知っても、実際に体験しなければ、滑れるようにも、乗れるようにも、泳げるようにもならないではありませんか。

悟りも同じです。頭に沢山の知識が詰まっています、知恵の入る隙間がありません。悟りたければ、頭の中を空っぽにすることです。余分な知識を捨てることです。そして、幼子のように素直な心で瞑想することです。瞑想が、滑ること、乗ること、泳ぐこと、つまり、体験することなのです。

### (3) 光と闇

#### ○プラス思考で生きよう！

世間には、苦しみを少しでもなくしたくて人に同情を買ってもらおうとする人がおりますが、そんなこと

をしたって苦しみはなくなるものではありません。なぜなら、苦しみは誰がつくったものでもなく、自分がつくったものだからです。

苦しみは、自分のネクラな心がつくった自作です。自分がつくった苦しみなら、自分で取り除くしかないではありませんか。人を頼るのはよろましよう！ そんな暇があるなら、ネクラな性格を直す努力をするこ  
とです。

いつも明るく、朗らかに、どんなことも良く受け取り、決して悪く考えないことです。明るいところには蝶や蜂が飛び、暗いところには蚊やゴキブリが寄ってくるのです。さあ、プラス思考で生きましよう。

・有り難う！ 有り難い！ の感謝の心

・嬉しい！ 楽しい！ の喜びの心

・成せばなるぞ！ の希望の心

・やってやるぞ！ の闘志の心

・凄い！ 素晴らしい！ の感動の心

・前進！ 邁進！ のひるまぬ心

・わはは！ あはは！ の笑いの心

気持ちの落ち込んだ時、この言葉を思い出してください。きっと晴れやかな気持ちになれるでしょう。

## ○自分たちで自分たちを追いつめている

この世の中には、自殺者がごまんとおります。投身自殺者やガス自殺者、首つり自殺者だけをいつているわけではありません。病気で死ぬ人も、戦争で死ぬ人も、交通事故で死ぬ人も、事件や事故で死ぬ人も、自然災害で死ぬ人も、みな自殺者なのです。なぜなら、横死はみな自殺だからです（自然災害も人災です）。

・ 一方では飢餓で死に、一方では贅沢病で死ぬこの両極端の死を、自殺といわないで、何というのでしょうか。

・ 人の欲によって引き起こされる戦争テロ、殺人事件を、自殺といわないで、何というのでしょうか。

・ 快適・快樂・便利を追究し、汚した環境からのしっぺ返しを、自殺といわないで、何というのでしょうか。

個人の欲望が個人を追いつめ、個人を殺しているのです。社会の欲望が社会を追いつめ、社会を殺しているのです。病気も、戦争も、事件や事故も、自然災害も、みな人の欲望がもたらした自殺であることに気づかない限り、いつまでたっても地球に平穏な日はやってこないでしょう。

## ○なぜ自殺は重罪か

遠い昔より自殺は重罪であるといわれてきましたが、なぜ自殺はそれほど罪が重いのでしょうか。それは、次のような理由からです。

一、魂を進化させる道具として、神は肉体を創造されました。その肉体を自ら破壊するのは、神に対する

反逆です。また、腹を痛めて生んでくれたお母さんに対しても裏切り行為となるでしょう。寿命をまっとうせずに帰れば、当然計画してきた目的は果せませんから、それだけ進化にもストップがかかります。これは魂にとって大きな損です。

二、形を取った原子は、様々な体験を通して進化するよう計画されており、その進化計画を狂わすのは、原子にとって大きな損です。また、表現宇宙にとっても大きな痛手でしょう。（一個一個の原子は、体験を通して最善の表現方法を学んでいる。）

三、人間一人一人は、縁ある人たちとの関係を通して進化するよう計画されており、その計画をまっとうせずに帰れば、自分の進化を狂わすばかりでなく、縁者たちの進化も狂わすことになるのです。たとえば、あなたはある芝居でAという役柄を演じていたとします。そのあなたが、演じるのがいやになったから途中で役を降りるといったらどうなるでしょうか。芝居が成り立たなくなりますね。芝居を成り立たせるために代役を立てねばならないわけですが、そうすると、代役を買って出た人の進化を狂わすと同時に、その縁者たちの進化も狂わすことになるのです。

四、自殺者のほとんどが、向こうへ帰って地団太を踏んで悔しがっています。その悔しさが地上に執着を持たせ、この世の肉親や知人に少なからず悪影響を与えるのです。いや、肉親や知人だけではありません。自殺した者と同じ波動を持つ人たちにも悪影響を与えるのです。近年、理由なき殺人が多発しておりますが、これはみなその影響によるものです。

五、この世を否定した者は光（神）を否定したことになりますから、その者は一寸先も見えない暗闇の中で喘がねばならなくなります。それは、誰がするのでもない、悔悟と絶望に打ちひしがれた自分です。

このように、自殺ほど重い罪はないのです。ちなみに、重罪のベスト三は、一に自殺、二に他殺、三に人を陥れる行為です。

### ○サタンを味方につけよう！

私たちはサタンを目の敵にしますが、サタンがいなかったら私たちは強くなれたでしょうか。温室育ちの花は弱々しいものです。私たちもサタンのいない温室で育ったら、決して強くなれなかったでしょう。サタンを悪にするのも善にするのも考え方次第なのです。たとえば、「サタンは私を強くするために意地悪してくれているのだ。有り難いことだ！」と思えば味方にできるでしょう。反対に、「サタンは私をいじめ嫌な奴だ！」と思えば敵に回してしまってください。

悪は善の裏返しです。悪口をいう隣人も、嫉妬深い妻も、口答えする子供たちも、口うるさい上司も、罵声を浴びせる隣国も、台風も、地震も、みな自分を鍛えてくれる味方です。どんな苦しみも、どんな悲しみも、どんな不幸も、感謝に置き換えられた時、あなたからサタンが去っているでしょう。

サタンは自分の弱い心に住んでいる自分自身です。でも、そこには天使も住んでいるのです。サタンを住まわすか天使を住まわすかは、あなた次第だということです。光と闇の関係はそうだったものなのです。

## ○神がサタンの横暴を許している理由

日々、悲惨な事件や事故が新聞紙上にぎわしています。なぜ神は、サタンの横暴をこうも許しているのでしょうか。本当に神がいるなら、こんな横暴を許すはずがないのに……と思うのも無理はありません。しかし、決して神を恨んではなりません。神がサタンの横暴を許しているのは、サタンが成長剤の役割をはたしてくれているからです。もしサタンの抵抗がなかったら、私たちはおそろくここまで強くなれなかったでしょう。

・嵐があればこそ、嵐に負けない強い自分を築くことができます。

・厳しい寒暖あればこそ、強い忍耐力を養うことができます。

・越えねばならない垣根があればこそ、不屈の精神を築くことができます。

今の強い自分があるのは、ひとえにサタンのお蔭であると思えたら、気持ちもズーツとズーツと楽になるでしょう。

## ○言葉の受け取り方次第

私たちは、言葉の受け取り方一つで不幸にも幸せにもなれるのです。たとえば、もう六割も進んだから、もうすぐ終わると思えば嬉しくなるでしょう。まだ六割しか進んでいないから、まだ終わらないと思えば苦しくなるでしょう。「もう！」と思うか、「まだ！」と思うかで、気持ちの中に天と地の開きができるのです。



最近、ブログで中傷され、自殺する人まで出てきました。確かに中傷する方も悪いのですが、受け取る方も悪いのです。どんな中傷も良く受け取れば傷つくことはないのです。悪く受け取るから傷つくのです。それは、おもしろい料理に誘われて食べ、腹を壊しているようなものです。食べなければ腹を壊すことはないのですから、食べないことです。食べないとは、無視すること、相手にしないこと、もし相手にするならば、これは自分を強くしてくれる味方だと思って感謝することです。そうすれば、どんな食べ物も自分の栄養となってくれるでしょう。

どんなことにも裏と表があるものですが、そこに善悪のレッテルは貼ってありません。どう受け取るかで、善にも悪にもなるだけです。つまり、ネガティブに受け取れば悪となり、ポジティブに受け取れば善になるだけです。

### ○光の戦士になろう！

今どこかに不幸があっても、一人でも光を放つ人がいれば不幸は軽減されるのです。なぜなら、光は闇を駆逐する力を持っているからです。だから私は、できるだけ瞑想し、光を放つよう心掛けています。

今地球では闇の想念が強烈に働いています。それは、闇人間の方が圧倒的に多いからです。このままだと地球は闇に埋もれてしまうかもしれません。では、闇に埋もれさせないためには、どうすればいいでしょうか。それは、光の戦士を一人でも多くつくることです。今このメッセージを読んでいるあなたは、その資格を持つ方です。どうか、光の戦士の一人になってください。

どこかに戦いに行きなさい！ といっているのではありません。戦場はあなたの心の中です。瞑想はその武器です。あなたが神を思う時、あなたの体から強烈な光の弾丸が発射されます。その光の弾丸が、闇を蹴散らしてくれるのです。さあ、瞑想し光を放ちましょう！ 光人間になりましょう！ それは、どんなボランティアよりも貢献できるものなのです。

### ○救いようがないとは？

私たちは自由意思を持っています。思うことは自由なのです。しかし、思うことは自由であっても、一度に二つの思いを持つことはできません。できないがゆえに、災いでもあり、幸いでもあるのです。たとえば、思いがサタンに向いている時は、神の入る隙間がありません。反対に、神に向いている時は、サタンの入る隙間がないのです。ですから、私たちが救われるのは、神に思いが向いている時です。

今、多くの人が物に溺れています。彼らの心はサタンで一杯なのです。そんな人たちを救うことは絶対できません。彼らが痛い目に遭い、物から心が離れたときが、手を差し述べるチャンスです。それまでジッと待つしかないのです。

### ○余計な情報が世を混乱させている

世の中には言葉で招いている災いがごまんとあります。たとえば、テレビ・コマーシャルで流される、ガソリン検査の勧め、生命保険や災害保険の勧め、交通事故防止の宣伝、薬の宣伝、医療に関する宣伝等々……。また、事件・事故・自殺・災害・戦争などの報道もその一つでしょう。宣伝する方も聞いている方も、良い

イメージを持っていると思いますか。どちらも心に暗い影を落としているのですよ。良い情報ばかり発信するならば、マスメディアは世の救世主となれるかもしれませんが、残念ながら圧倒的に悪い情報の方が多いのです。

マスメディアが発達したせいで、どれほど世が乱れたことでしょうか。携帯電話やインターネットなどの悪用による情報被害の増大は、それを証明しているのではないのでしょうか。今や地球の周りは悪想念で一杯です。このまま進めば、地球は悪想念で破壊されてしまうかもしれません。情報の取り扱いがいかに大切か、真剣に考える時期に来ているのではないのでしょうか。

### ○光を呼び込むには？

ある女子レスラーがこんな話をしていました。戦いの終盤に差し掛かった時のこと、「こちらから積極的に攻め込もうか。でも、反対に返されたらどうしよう。今同点である。一点取られたら挽回できない!」。そう思った瞬間、相手に攻め込まれて負けてしまったというのです。

こんな話も聞きます。マラソンで一番苦しいとき、落ちてくる選手を一人一人拾ってゆくうちに、いつの間にか先頭に躍り出たという話……。先の話は消極が足を引っ張った話、後の話は希望が力を与えた話です。なぜこうなるかといいますと、消極は闇を呼び、希望は光を呼ぶからです。これは、日常生活あらゆるところで見られる現象です。

たとえば、

・ いやいや仕事をすると疲れますが、楽しみながらすると疲れません。

・ 病氣見舞いに行くのと疲れますが、誕生祝に行くのと元気になります。

・ 葬式に出ると疲れますが、結婚式に出ると生き生きしてきます。

・ ひいきのチームが負けると疲れますが、勝つといくら騒いでも疲れません。

このように、ポジティブは光を呼び、ネガティブは闇を呼ぶのです。ならば、ポジティブな思いを持つとはありませんか。思うことには一円のお金もかからないのですから……。

### ○闇の中に光あり

宇宙は対になり、完全を演出しています。たとえば、陰と陽が対になって完全を演出しています。物質と霊が対になって完全を演出しています。闇と光が対になって完全を演出しています。一方は不完全に見え、一方は完全に見えます。でも、不完全は完全の一部なのです。

・ 悪の背後には、善が潜んでいるのです。

・ 闇の後ろには、光が控えているのです。

・ 不幸の向こうには、幸せが待っているのです。

私たちがこの世に生まれてくるのは、闇を体験して光を発見するためです。光だけでは光を知ることができません。闇と見比べ、引き比べ、相対させ、何が完全で何が不完全なのか知るので、あなたは、自分が美人か不美人かをどのようにして判断しますか。足が遅いか速いかをどのようにして判断しますか。誰かと

比べて判断するものではありませんか。このように、光と闇の関係は、私たちの成長を促す格好の舞台づくりをしているのです。

### ○ホンモノの自分とニセモノの自分との戦い

馬券が空中に舞い、最終レースが終わりました。しょぼくれた顔をして帰途につく私に、真我の私が囁きかけます。

「お前はなんと馬鹿な奴なのだ！ 確率からいっても勝てるわけじゃないか！ もう止めろ！」と…

「そうだ！ なんて俺は馬鹿な奴だ！ もう競馬は止めよう！」そう思い、私はくしゃくしゃになった予想紙をゴミ箱の中に放り投げます。競馬場の出口に差し掛かったところで、明日の予想紙が目に入ります。

「今日はツキがなかっただけさ、明日は絶対勝てるぞ！」と、サタン（偽我の私）が囁きかけます。

「そうだ、今日はツキがなかっただけだ。明日はきつと勝てるさ！」私はサタンの誘惑に負け、フラフラと予想紙を買いに行こうとします。

「止めろ！ まだ懲りないのか！ なんてお前は馬鹿なのだ！」と、真我の私が止めにかかります。

「いや、明日は絶対勝てるさ！」サタンが誘惑します。

「よせ、止めろ！」

「いや絶対勝てるさ！」

サタンと真我との戦いが心の中で始まります。

ハルマゲドンには、いつかやってくるものではありません。私たちの日々の思いそのものが、ハルマゲドンなのです。つまり、ホンモノの私とニセモノの私との戦いです。私たちは日々戦いの最中にいるのです。肉欲に打ち勝つ戦い、金銭欲に打ち勝つ戦い、名譽欲に打ち勝つ戦い、感情に打ち勝つ戦いなど、いかにニセモノの自分に打ち勝つか、ハルマゲドンの戦いのカギになっているのです。決してニセモノの自分に負けてはなりません。負けた日は、二十四万円損したと思ってください。勝った日は、二十四万円得したと思ってください。さあ、今日から思いの収支簿をつけましょう。ぜひ黒字にしてください。

### ○肯定的な言葉は光を呼ぶ

世の中には何につけ反対する人がいますが、その人はその場の波動を極端に落としております。反対、否定、批判、これすべて、サタンの武器です。もし声高に反対したり批判したりする人がいたら、あなたはそこから立ち去ってください。わざわざそこにいて低い波動に汚されることはありません。もしどうしてもいなければならない場合は、希望の言葉を投げかけその場の雰囲気や和らげてやってください。そうすれば場の波動も変わり、正しい意見の交換ができるようになるでしょう。

世の人々は、あまりにも言葉が無頓着に使いすぎます。言葉は神なりき！ といって、言葉は神のものなのです。神しか言葉は使えないのです。なぜ「のど仏」といいますか。仏（神）の思いを音声に変える場所が「のど仏」だからです。それほど「のど仏」は神聖な場所なのです。火葬場で「のど仏」を大切に

扱うのはそのためです。しかし人間は、言葉がどこからきているか知りません。だから簡単にサタンの餌食になるのです。

神は決して否定的な言葉は使いません。神は肯定的な言葉、明るい言葉、希望溢れる言葉のみ使います。否定的な言葉、気の沈むような言葉、絶望的な言葉、やる気をなくするような言葉、怒りを強めるような言葉を使う人は、みなサタンにやられていると思って間違いありません。その人の口から出てくる言葉は、支離滅裂で論理が整然としていないはずで、現代社会でサタンにやられていない人はほとんどいないでしょうが、意識して注意していれば逃れることができます。次のような想いになった時は、自我が活発化しサタンが騒いでいると思って間違いないでしょう。

- ・ 外側の物に欲が駆り立てられたとき（物欲・食欲・情欲・金欲・名声欲・自己顕示欲など）。
- ・ 真理の追究が否定的になったとき（昨日は神を肯定していたのに、今日は否定的になっている）。
- ・ 急に身体の調子が悪くなったとき。
- ・ ソワソワイライラして心が落ち着かなくなったとき。
- ・ 消極的な想いになったとき。等々……。

否定的な言葉話す人は、闇を呼ぶサタンです。肯定的な言葉話す人は、光を呼ぶ天使です。ぜひ、光を呼ぶ天使になってください。

○声なき声に惑わされてはならない！

よく神の声を聴いたとか、神からの啓示をうけたとかいう人がおりますが、神の声は聴こえるものではない。内側から自分の思いとなつてフツフツと湧き上がってくるのが神の声（真我の声・聖音）です。外側から聴こえてくるのは、すべて低級な迷つた幽界人の声です。確かに、声なき声としてはつきりと聴こえます。以前私も、何度もこの声に惑わされたことがあります。たとえば、こんなことがありました。「今日ガス会社の人が来るから雪かきをしておきなさい！」という声が聴こえてきたのです。本当に来るのか、と疑いながらも、いわれた通り雪かきしておく、本当にその日、ガス会社の人が来たのです。

邪悪な幽界人のいうことはよく当たるのです。だから神の声だと勘違いしてしまうわけですが、神は、普遍的なこと、宇宙的なことを啓示するのであつて、個人的なことを啓示することは絶対ありません。また神は「こうしなさい！ ああしなさい！」といった命令口調で語ることもありません。「人を殺せ！」とか「これから飛び降りろ！」といった命令口調の声はみな迷つた幽界人の仕業ですから、決して騙されなくてください。邪悪な幽界人は邪悪な想いに同調してくるのですから、原因は自分にあるのです。明るい想いを持つてください。あるいは神に思いを向けてください。そうすれば、決して邪悪な波動に惑わされることはありません。

○明るい所を好む人間になろう！

サタンは光や聖水やニンクなどを嫌うといわれますが、これには一理あるのです。太陽は霊太陽と直結



しているため、太陽からは強烈な光エネルギーが放出されています。聖水（清水・湧き水）も酸素を多く含んだエネルギーの強い水です。臭いのきついニンニクなども、ものすごくエネルギーが強いのです。エネルギーは光ですから、光を苦手とするサタンは、エネルギーの強いものには弱いのです。

よく夜型の人とか昼型の人がいるといわれますが、昼型の人に健康的な人が多いのは、太陽から多くのエネルギーをもらっているからです。反対に夜型の人は、太陽からもらうエネルギー量が少ないため、不健康になりやすいのです。さらに、物欲の強い人もあまり健全とはいえません。なぜなら、物質は波動が低いからです。水商売に争いがつきものなのは、水は物質の象徴的な存在で、エネルギーが低いからです。エネルギーの高い所は光り輝いていますので災いは寄って来づらいますが、エネルギーの低い所は薄暗いので災いが寄ってきやすいのです。これは、波動の同調による科学的現象で、崇りでも何でもありません。百鬼夜行といわれるように、夜半から夜明けにかけて事故や事件が多発するのはそのためです。

この地球の周りには様々な波動が飛び交っていて、私たちに良くも悪くも影響を与えております。私にも暗い時代があり、よく悪い波動の影響を受けたものです。その当時の私は、夜の繁華街や映画館など暗い所を好んだのです。案の定、寄ってきたのは災いばかりでした。反対に、明るい所を好むようになってからは、災いは嘘のようになくなりました。このように、暗い所を好むか明るい所を好むかで、人生は変わるのです。幸せでありたかったら、できるだけ太陽の下で健康な生き方をしてください！

○この宇宙に本質的な悪はない！

完全な宇宙に悪があるわけがありません。もしあるなら、宇宙を創った神は完全でなくなってしまう。神が完全だから、この宇宙に善のみが存在するのです。

この世に悪があるように見えるのは、人間が人間の使い方を誤っているからです。たとえば、火を暖房に使えば善になりますが、放火に使えば悪になります。包丁を料理に使えば善になりますが、人殺しに使えば悪になります。大腸菌はお腹の中に入れれば善になりますが、口に入れば悪になります。どんな良薬も使い方を誤れば毒になるように、使い方を誤れば何でも悪になってしまうのです。この世に悪人がいるように見えるのも、人間の使い方を誤っているからです。

人間を人間として使えば、物を欲しがり、金を欲しがり、権力を欲しがりますので、争い事が起きるのは当然です。でも、人間を生命として使えば、平安を欲しがりますので、争い事が起きるわけがないのです。人間をどう見るか、すなわち「人間として見るか生命として見るか」、人間をどう使うか、すなわち「人間として使うか生命として使うか」、で悪になるか善になるか決まるだけです。人間を正しく使えば、みな善人ばかりなのです。この世に本質的な悪はないのです。ただ、使い方がいいことによって、悪になるか善になるか決まるだけです。どうか、使い方を誤らないでください。

○闇（影）は実在するものではない！

闇（影）は実際にあるものではありません。ただ、光のない所を闇（影）といっているだけです。闇は光

の不在なのです。物質（肉体）をどんなに分析しても何も発見できないのは、物質（肉体）は影だからです。病気が実在しない理由も、肉体は影にしか過ぎないからです。あくまでも病気は、光のない状態なのです。影がどうして影をつくれましようか。肉体がどうして病気をつくれましようか。つくれるのは光のみです。その光を閉ざして病気をつくっているのは、人の妄念です。影が実在するという迷いの思いが光を閉ざし、病気をつくっているのです。

不完全が実在しない理由も同じです。不完全は不完全を信ずる人にもある迷妄で、実在するものではないのです。真理を知らぬ迷いの思いが、不完全を生み出しているだけです。「罪を憎んで人を憎まず！」という諺がありますが、その罪は人の無知がもたらした影ですから、本来憎む対象にはならないのです。憎むべきは真理を知らぬことです。だから、真理を知らぬことが最大の罪である！ といわれるのです。

### ○光と闇と心の関係

私は、光と闇と心の関係を研究していくうちに、三つのおもしろい発見をしました。

一つは、心は光を好み、闇を嫌うという発見です。

なぜ心は光を好み、闇を嫌うかといいますと、光は心に幸福感を与えるのに対し、闇は不快感を与えるからです。光はエネルギーそのものですから、エネルギーの性質上、光に満たされれば心は喜びを感じるのです。これは、次のような実験で確かめることができます。

テレビ・ドラマを次の二つに分類します。一つは、人を陥れたり、殺したり、傷つけたり、恐怖を与えた

りする闇的（悪的）ドラマ、もう一つは、人を助けたり、励ましたり、希望や勇気を与えたりする光的（善的）ドラマです。前者のドラマを見た後の心は苦しくなり、後者のドラマを見た後の心は楽しくなりました。これは、人間なら誰でも感じる当たり前の心理状態で、何の不思議もありません。では、なぜ悪的ドラマを見ると苦しくなり、善的ドラマを見ると楽しくなるのでしょうか。理由は、悪的ドラマは心に闇を注ぎ込み、善的ドラマは心に光を注ぎ込むからです。

二つは、心は自由を好み、不自由を嫌うという発見です。

皆さんも体験したことがあると思いますが、何かの事故で身動きが取れなくなったとき、心は苦しみませんでしたか。また、しがらみに縛られやりたいことをやれなかったとき、心は苦しみませんでしたか。自由とは光のある状態なのです。不自由とは光のない状態なのです。だから心は光のある自由を好み、光のない不自由を嫌うのです。

三つは、心は本当に有るものを好み、本当のないものを嫌うという発見です。

この宇宙は、本当に有るものだけが実在し、本当のないものは実在しないのです。心はそのことを本能的に知っているため、本当にあるものを好み、本当のないものを嫌うのです。

来ないと分かりきっている電車を待つことほど、苦しいことはありません。同じように、ないと分かりきっている闇に心を向けることほど、苦しいことはありません。さあ、本当にあるものに心を向けましょう。

・ 本当のないものは、不調和であり、闇であり、不善であり、不正義であり、不自由であり、現実であ

り、偽物の自分です。

・ 本当に有るものとは、愛であり、光であり、善であり、正義であり、自由であり、真実であり、本当の自分です。

#### (4) 人の世に病気がある理由

##### ○この宇宙には秩序がある

この宇宙には、きつちりとした秩序があります。秩序があるということは、意志があるということです。意志があるということは、宇宙は意識を持った生きものであるということになります。その意識を持った生きものを、私たちは「宇宙生命」と呼んだり、「宇宙意識」と呼んだり、「神」と呼んだりしているわけです。宇宙に意識と意志があるということは、宇宙で展開されるどんな出来事にも意味があり、計画性があり、目的性があるということではないでしょうか。なぜなら、計画性も目的性もない意志はありえないからです。では、宇宙意志（以後、宇宙生命と呼ぶことにする）は、いったい何を目指しているのでしょうか。

宇宙生命は、真・善・美を枕とした、愛と正義と誠を貫き通す大調和を目指しております。宇宙が常に安定した運行を保っていられるのは、この大調和の意思がどこまでも貫かれていますからです。では、宇宙生命の意志は、どのような形で実現されているのでしょうか。それは、人間が宇宙生命の口となり、手となり、

足となって働くことで実現されており。人間がコンピューターを操って様々な創造をなしているのは、まさに宇宙生命の代弁・代行者としての使命をはたしている証であり、宇宙生命が人間を通して自らの意志を実現している何ものでもないのです。まず、この事実を知ってください。

### ○病気が存在する意味

さて、宇宙で展開されるどんな出来事にも意味があり、計画性があり、目的性があるならば、当然この世のどんな出来事にも意味があり、計画性があり、目的性があることになります。では、病気には、いったいどのような意味があるのでしょうか。

#### 【意味その一】

宇宙生命はしっかりと監視の目を持って、地球上の生き物たちを調和へ導いております。もし調和を乱そうものなら、この監視の抑制力が働きだし、即座に不調和を解消しようとします。たとえば、水や空気が汚れば、台風がその汚れを解消しようとします。汚れた想念が地下に溜まれば、地震がその汚れを解消しようとします。汚れた想念が地上に溜まれば、雷がその汚れを解消しようとします。人体が汚れば、病気がその汚れを解消しようとします。台風も地震も雷も病気も人間にとっては災難ですが、その災難が人間を調和へ導いているのです。もし病気がなかったら、人類はとくに自滅していたことでしょう。これまで人類が曲がりなりにも存続してこられたのは、病気という抑制力によって行動が制御されてきたからです。端的な例を示せば、物質に偏りはじめたところから、ガンという病気が多く発生するようになりました。性

の退廃が進みはじめたころから、エイズという病気が発生するようになりました。グルメに狂いはじめたころから、狂牛病やO一五七や鳥インフルエンザなどの奇病が発生するようになりました。このように、まるで人類の乱行に釘を刺すように、新しい病気が発生しているのです。これを偶然と見るか必然と見るかは皆様の良識に任せますが、いずれにしても、宇宙生命の見えない監視の目によって制御されてきたことは疑いがないのです（抑制力とは、原因と結果の法則のことである）。

### 【意味その二】

人間は肉体を自分だと思っていますが、人間の本性は生命です。自分のことを人間と思っている限り、奪い合い、争い合い、挙句の果てに環境を破壊しますから、人類の存続は不可能です。そこで宇宙生命は、人間を自覚めさす手段として病気や不幸を用意したのです。これは人間をいじめるためではありません。あくまでも自分の本性に気づいてもらうためです。残念なことですが、人間はこの身で苦しみや悲しみを体験しなければ、真実を見詰めようとしません。このように、病気は自覚めさせる（気づかせる）手段としてあるのです。

### 【意味その三】

病気は自覚めさせる手段としてあるといいましたが、見方を変えれば、因果の法則に基づいて起きているのです。火のない所に煙が立たないように、病気になるにはなるだけの原因を人間はつくっているのです。その原因は、心の乱れからくる生活の乱れです。人間は不幸を人のせいにする癖がありますが、人から与え

られた不幸など一つもありません。すべて身から出た錆です。この宇宙に偶然はないのです。すべて必然です。原因あつての結果です。そのことに気づいてもらいたくて、宇宙生命は不幸を用意したのです。

### ○宇宙生命の目的

では、宇宙生命（神）は、人類に何を望んでいるのでしょうか。それは、この地球上に理想の世を築いてもらうことを望んでいるのです。そのためには、どうしても己の本性に目覚めてもらわなくてはなりません。そこで宇宙生命は、難解な病気を人間に与え、疑問を持たせるよう仕向けたのです。神が万能の薬を人間に与えないのはそのためです。なぜなら、病気治療が難しければ難しいほど疑問を深く持ち、真剣に人生の思索をはじめようになるからです。その意味では、どんなに医学が進歩しても自分の本性に目覚めない限り、地球上から病気がなくなることはないでしょう。といっても、人類はいつまでも幼いままではありません。苦しみや悲しみを通して大人になり、自分の本性に目覚めるでしょう。その時こそ、地上天国の到来なのです。

このように、宇宙生命は、壮大な計画を持って人類を行くべき処へ運んでいるのです。それはそれは、気の遠くなる年月をかけた一大事業です。人間の目は近視眼的にできているので、壮大な計画の全容は見えないかもしれませんが、宇宙生命はしっかりとした目的意識を持って私たちを導いているのです。

### ○病気になる原因

さて、人の世に病気がある理由を知りました。宇宙生命の目的も知りました。といっても、病気にはなり



たくないし、苦しい病気から生還したいのも人情です。では病気の直接の原因は何でしょうか。それが分かれば病気にならずに済むし、なっても治すことができるはずです。

病は「気」からといわれるように、病気は「気」の不足によって起きているのです。「気」とはエネルギーのことですから、病気はエネルギー不足によって起きているのです。では、エネルギー不足になると、なぜ人間は病気になるのでしょうか。

私たちは肉体が生きて肉体が働いていると思っておりますが、肉体は生きてもいないし働いてもいないのです。生きて働いているのは生命です。つまり、エネルギーが働いているのです。車がガソリンというエネルギーによって動かされているように、人間も生命というエネルギーによって生かされ、働かされているのです。だから、生命力が弱まれば、働きが鈍くなって病気になってしまうのです。老人や幼子や脆弱な人が感染症にかかりやすいのはそのためです。

もう一つ、私たちは薬が病気を治すと思っておりますが、薬で病気が治ったためしがありません。薬は狂った生命力（自然治癒力）を正常に戻す補助的働きをしているだけで、実際に病気を治しているのは生命力です。風邪を治しているのも、傷を治しているのも、みな生命力のお陰です。では、その生命力を狂わしているのは何でしょうか。

それは人の想いです。考え方です。生き方です。たとえば、怒り・ねたみ・そねみ・嫉妬・恨み・憎しみ・心配・恐怖・イライラ・過度の欲望などの悪的想い、年を取れば病気になるのは当然だといった先入観、人

間は弱いもの、傷つきやすいもの、病気になるやすいもの、といった暗示的想いが生命力を狂わせているのです。

(注) 物質は、それぞれ特異な性質(波動)を持っており、たとえば、物を柔らかくする性質、膨張させる性質、固くする性質、狭くする性質など、様々な性質を持っており、その性質を利用しつくられたのが薬ですから、確かに肉体に影響を与えることはできません。でもそれは、生命力を強める補助的役割をしているだけで、薬そのものが治しているわけではないのです。治しているのは、あくまでも生命力(自然治癒力)です。

### ○エネルギー(生命力)を高める方法

病気はエネルギー不足によって起きることが分かりました。では、どうすればエネルギー不足にならずに済むのでしょうか。というより、どうしたらエネルギーを高めることができるのでしょうか。私はその方法を、十ヶ条にまとめてみました。

一、人生の総懺悔(反省)をして心の曇りを取り除く。

心に曇りをつけていると、宇宙エネルギーを閉ざしてしまいます。たとえ入ってきたとしても、完全燃焼させることができません。エネルギーを完全燃焼させるためには、心の曇りを取り除く反省が必要なのです。人生の過ちを反省し、二度と過ちを犯さないと堅く心に誓えば、心の曇りは取り除かれ、光(エネルギー)が入ってきます。心から反省すると、身体が軽くなったり気持ち晴れ晴れしたりするのは、光に満たされ

ためです。ぜひ、反省することをお勧めします。

二、明るく、楽しく、ポジティブな想いを持って生きる。

なぜポジティブな想いを持つ人に病人が少ないかといいますと、陽の方に意識が傾いているからです。陽の意識とは、明るく朗らかな意識、つまり光の意識ですから、このような意識を持っている人は、エネルギーが高いので病気になりづらいのです。反対に、ネガティブな想いを持っている人は、エネルギーを低める陰の意識に傾いていますので、どうしても不健康になりやすいのです。特に精神病は、ネガティブな想いに悪波的波動が同調してきて病状を悪化させますので、よくよく注意せねばなりません。どうか、ポジティブな想いを持つ、健康的な人になってください。

三、生活環境を良くする。

生活環境も、エネルギーを強めたり弱めたりする要因の一つです。明るく清潔な環境はエネルギーを強め、暗く不潔な環境はエネルギーを弱めます。これは人間関係についてもいえることなので、できるだけ明るい人つき合うようにしてください。というより、自分が明るければ波動の同調によって明るい人たちが集まってくるから、まずは自分の方から明るくなることでしょう。明るい所に蝶や蜂が飛び交うように、明るい環境にもエネルギーが飛び交うようになるのです。

四、生命(神)を意識して生きる。

物質の虜になっている限り、人間は病気から逃れられることはありません。なぜなら、物質はエネルギー

が低いからです。エネルギーの低い物質（肉体を含め）を意識していて、どうしてエネルギーが高まりましたか。物質文明が栄えると病気が増えるのは、多くの人が物質の虜になっているからです。

私は生命(神)である！と常に想ってください。生命を意識していれば、間違いなくエネルギーは高まります。それも、強く思えば思うほど、多く思えば思うほど、高まります。ぜひ生命を意識して生きてください。

#### 五、人生の思索をする。

人生の思索を行う者に痴呆症はありません。神が、真実を知ろうとしている者の頭を狂わすわけがないからです。痴呆症になりたくなかったら、どうか人生の思索をしてください。

人生の思索とは、「人生は何のためにあるのか?」「人間とは何か?」「死とは何か?」など、疑問に思っていることを自分に問いかけることです。人生の思索をすると光が入ってきますので、その者は気づきと健康の二つの恵みが与えられるでしょう。

#### 六、腹式呼吸をして、宇宙エネルギーを多く取り込むようにする。

宇宙エネルギーは空气中に遍満しているわけですが、そのエネルギーを多く取り込むためには、腹式呼吸が最良の方法なのです。まずは寝る前三十回、起きてから三十回から始めてください。コツを覚えると、自分に合った回数が分ります。腹式呼吸をし、明るくポジティブに生きる者に病気はありません。

#### 七、睡眠を多く取るようにする。

人間には偉大な生命力が宿っており、本来ならエネルギーに満たされていて当然なのですが、ほとんどの人はネガティブな生き方をしてエネルギーを低下させています。これでは病気になるのも無理はありません。といっても、そう簡単にネガティブな想いを手放せないのが人間です。そこで神様は、ネガティブな想いから一時避難させる手段として、「睡眠」という特効薬をお与え下さったのです。

眠るとなぜ鋭気が養われるかといいますと、眠っている間ネガティブな想いから解放されるからです。ネガティブな想いから解放されれば、エネルギーが入ってくるので元気になるのです。といっても、惰眠は良くありません。また、睡眠薬を使うのも良くありません。なぜなら、どちらも浅い眠りになるからです。浅い眠りは、低い波動の世界と同調するので良くないのです。心地よい音楽を聴くか、「生命・神」に思いを寄せれば、自然に深い眠りに誘われますので、その方法をお勧めします（深い眠りほど多くエネルギーを取り込むことができる）。

八、感謝の思いを持って生きる。

無感謝の思いは光を閉ざし、感謝の思いは光を呼び込みます。感謝の思いはエネルギーを高める最良の方法なのです。あなたの両親に、兄弟姉妹に、あなたの周りの人たちに、感謝してください。また、自分の身体にも感謝しましょう。さらに、過ちに気づかせてくれた病気にも感謝しましょう。ありがとう！ ありがとう！ の感謝の思いは光を呼び込みますので、闇である病気は退散するしかありません。どうか、日々、感謝の思いを持って生きてください。

## 九、適度な運動をすること。

人間の身体は、適度な運動をすることによって健康が保たれるようにできております。適度な運動は体内の気の流れを良くし、細胞を活性化させるからです。特に血液の濃い人は運動が必要です。でも、きつい運動は避けてください。何でもそうですが、「適度、中庸、ホドホド」が良いのです。

## 十、適量・適度・ホドホドの生活をする事。

私たちの体は、何を食べてもエネルギーに変わるようになっております。しかし、現代社会の食生活は、一物すべてを食べておりません。食べづらい部分を捨てているのです。一物一価といって、本来、食べ物に捨てる部分はないのです。どんな食べ物も丸ごと食べれば、それだけで十分栄養が摂れるようになっております。その証拠に、昔のエスキモー人は、魚や獣を丸ごと食べていたので、野菜や果物など食べなくても健康でいられたのです。その意味からいえば、何を食べても良いわけですが、先ほどもいったように、現代人の食生活は食べづらい部分を切り捨てているので、一物一価になっていないのです。だから、適度な種類の食べ物を、適量摂る必要があるのです。

食べ過ぎるのは良くありません。食べないのも良くありません。また、辛すぎるのも、甘すぎるのも、濃すぎるのも、脂っこすぎるのも良くありません。何事も中庸・中道が大切です。また、楽しみも、極端な快楽は良くありません。なぜなら、楽は苦の対極にあるからです。麻薬はその典型例です。運動も食事も楽しみも、ホドホドが良いのです。エネルギーはバランスが取れた時、一番高くなるようになってくるからです。

さて、宇宙エネルギーを高める方法について述べてきましたが、私がこの十ヶ条の実践を勧めるのは、真理の面においても、実生活の面においても、一石二鳥、いや三鳥も四鳥もの良い効果を生み出すことができるからです。要するに、エネルギーを高める十ヶ条の実践は、病気にならない方法であり、病気を治す方法であり、実生活を整える方法であり、人生の課題を克服する方法なのです。だから、十ヶ条を実践すれば、悪い原因が良い原因に置換えられるので運命が良くなるのです。

### ○病気や不幸に見舞われた際の心構え

人は、思いもよらぬ不幸に出会うと、動揺し、心配し、ほとんどの人がネガティブな想いに傾いてしまいます。これでは状況が悪くなる一方です。状況を良くしたければ、悪い部分を意識するのではなく、悪い部分の背後に隠れている良い部分を意識するようにしましょう。不幸に出会ったとき、次のように考えてください。

「神様は意味のない不幸は与えないのだから、この不幸には必ず意味があるはずだ！」と……。

きっと心が安らぐはずです。安らぎが戻ったら、「不幸は私にいったい何を求めているのだろうか？ 何に気づきなさいといっているのだろうか？ 何を望んでいるのだろうか？ 何を正しなさいといっているのだろうか？」と自分に問いかけてみてください。必ず答えが見つかるはずです。もし回答が得られない場合は、先の十ヶ条の中から見つけてください。

私は、平々凡々の人生を歩んでいる人より、苦難の人生を歩んでいる人の方に喝采を送ります。なぜなら、

人は苦難の中でこそ大きく飛躍できるからです。確かに、見た目には、波風のない人生の方が幸せそうに見えるかもしれませんが。でも、波風のない人生に、いったい何の意味があるのでしょうか。人は苦しめば苦しむほど成長できるのですよ！ ですから、病気になったからといって悲観するのではなく、自分が成長できるチャンスだと捉え、凶を吉に変えることです。

よく悲劇の主人公となり、人の同情を買う人がおりますが、どんなに人に憐れみを買っても、自力で原因を取り除かない限り病気の回復は望めません。特に慢性病で苦しんでいる人は、医者や薬に頼る癖がついておりますから、よほど心してかからないと完治は難しいでしょう。病気は誰が与えたのでもなく自分の想いと行いが与えたのですから、自分で取り除くしかありません。悟りが自力によらねばならないように、病気も自力によって治すしかありません。厳しい言い方ですが、現実を直視しなくては何も解決しないので、あえていわせてもらいます。

病気は人生の目的を見誤らないために用意された警鐘ですから、決してネガティブに受け取らないことです。むしろチャンス到来だと思ってください。病気は、人生を顧みるチャンスです。過ちを見つけるチャンスです。人生の行く先を再確認するチャンスです。そして、本当の自分を発見するチャンスです。



(5) 正しく生きる

○正しいモノの見方とは？

ポディーを自分だと思っている人は、モノを正しく見ていません。なぜなら、実際に有るのは形ではなく本質だからです。形はあくまでも本質の現れであって、実際に有るものではないのです。実際には有るものと見て、どうして正しい物事の判断ができませんか。それでは正しく生きられるわけがありません。人間の不幸は、モノを正しく見ないところから波生しているのです。

・内と外は同じモノです。だから内と外を同時に見なくてはなりません。

・空と色は同じモノです。だから空と色を同時に見なくてはなりません。

・本質と形は同じモノです。だから本質と形を同時に見なくてはなりません。

・生命と人間は同じモノです。だから生命と人間を同時に見なくてはなりません。

同時に見るとは、一つとして見なさい！ 同じモノとして見なさい！ という意味です。同じモノとして見られるようになった時、私たちは正しく生きられるようになるのです。なぜなら、正しくモノが見られるようになった人は、人間として生きられると同時に、生命としても生きられるようになるからです。その者は、もう天に入ったのです。

## ○二つの目が与えられている

私たちはこの地上界に出るに当たり、二つの目が与えられました。一つは見える物を見る目、もう一つは見えないモノを見る目です。見える物を見る目を肉眼といい、見えないモノを見る目を心眼といいます。この二つの目を上手に使い分けることで、この地上界を迷いなく生きられるわけです。でも、私たちはいつの間にか肉眼だけを使うようになり、心眼を使うことを忘れてしまいました。その結果、ニセモノの影響を受けるようになり、様々な不幸を背負う羽目になったのです。

ニセモノとは、いうまでもなく物質のことですが、実際には物質をあると信じれば、物質の影響を受けないわけにはゆかないのです。なぜなら、信ずる心が物質に力を与えてしまうからです。心配、恐怖、イライラ、これみなニセモノを信じた心の産物です。物欲、色欲、金銭欲、権勢欲、これもニセモノを信じた心の産物です。これらの産物が、病気や、自殺や、事故や、戦争や、自然災害などの副産物を生み出しているのです。もし物質がニセモノだと心から思えたら、もう物質の影響は受けなくなり、そこに悪なる産物も副産物も生まれません。だから心眼を開く必要があるのです。

心眼のことを理解眼ともいいますが、心の底で見えないモノが理解できるようになると、見えないモノが見える状態になります。すなわち、理解力が物の本質である見えないモノを観させるのです。その者は物の奥に隠されている真実を観ることができるので、もうニセモノの奴隷になることはなくなるのです。

## ○正しく生きるには二つの意味合いがある

正しく生きるには、二つの意味合いがあります。

【一つは、今の今を生きる生き方です。】

私たちが使える時間は、今の今です。私たちは今の中にしか生きられないのです。しかし、ほとんどの人は、過去のことや未来のことに時間を使っています。それも、悔んだり、懐かしがったり、憂いたり、心配したりして大切な時間を浪費しております。過去は過ぎ去ったページです。未来はまだ来ぬページです。そんなページに、どうして大切な時間を使うのでしょうか。

さあ、今の一瞬一瞬を大切に生きましょう。その人は正しく生きている人なのです。

【二つは、真実に生きる生き方です。】

ほとんどの人は、ボディを維持するために、家族を養うために、今を生きております。これでは真実に生きているとはいえません。なぜなら、この世の生事や雑事はみな幻だからです。どうでしょう、肉体は永遠になくならないのでしょうか。いつまでも家族と暮らせるのでしょうか。肉体も、家族も、この世の雑事も、みな消えてなくなる幻ではありませんか。私たちはそんな幻に生きるのではなく、真実に生きなければなりません。

真実に生きるとは、実際に有る生命に生きることです。生命は実際に有るので、生命に生きている人は真に生きていることになるのです。では今雑事に生きている人は、無駄な人生を送っていることになるのでし

よいか。いいえ、決してそのようなことはありません。なぜなら、今正しく生きられるようになるためには、雑事の中から色々学ぶ必要があるからです。

一足飛びに正しく生きられるようになる人など、この世に一人もおりません。何度も何度も痛い目にあつて、徐々に正しく生きられるようになるのです。その意味では、今雑事に生きている人は、本線に入るための準備として、今伏線上进行中だと思つたらよいでしょう。学習を終えたら、誰でも正しく生きられるようになるのですから、それまで温かく見守つてやりましょう。

### ○真実に生きれば心穏やかに生きられる

なぜ、人間に苦しみが多いと思いませんか。それは、過去を悔やんだり、未来を憂いたり、今の雑事に心を痛めたり、しているからではありませんか。私たちが見聞きしているもので、真実なるものが一つだけあります。またあなたの脳裏にあるもので、一つだけ真実なるものがありますか。本当にあると思つている肉体さえ、消えてなくなる幻なのですよ。そんな幻を追いかけ、どうして心穏やかに生きられましょうか。

生命に生きれば、心穏やかに生きられるのです。生命は永遠不滅・完全無欠なる真実ですから、生命に生きれば心穏やかに生きられるのです。では、具体的にどのように生きれば良いのでしょうか。

それは、

- ・ 宇宙の法則を順守して生きることです。
- ・ 思いも、言葉も、行為も、生命に委ね生きることです。すなわち何を思うにしても、何を語るにしても、

何を行うにしても、生命が思い、生命が語り、生命が行っていると思いながら生きることです。

・ 雑事から解放された時は、静かに本当の自分に（生命に）意識を留め瞑想することです。

すべて思いが先行します。生命を意識して生きれば、思うことも、語ることも、行うことも、間違いなくやれるでしょう。

### ○ 正しく生きるとは、宇宙の法則を順守して生きることである

宇宙の法則を体系的に分ければ、陰陽の法則と因果の法則の二つに分けられます。陰陽の法則のことを横の愛といい、因果の法則のことを縦の愛といい、この二つの交差した形を十字架と呼んでおります。十字架は宇宙のバランスの象徴なのです。また、陰陽の法則と因果の法則の交差した点を、第二の聖点と呼んでおり、絶対宇宙を表現宇宙に写す鏡のような役割をはたしております。すべての成合は、この第二の聖点を通して行われ、この第二の聖点を通して成長するよう仕組まれているのです。そしてこの第二の聖点こそ、幸せの原点であり、私たちの目標なのです。

この宇宙は、陰陽の法則と因果の法則を順守して生きることによって、心穏やかに生きられるようになっております。なぜなら、第二の聖点から離れば幸せから遠のき、近寄れば幸せに近づく仕組みになっているからです。では、この二つの法則を順守して生きる生き方とは、どのような生き方なのでしょう。

#### 【陰陽の法則を順守する生き方】

物質とエネルギー（生命）をバランス良く生きることです。すなわち、物質にもエネルギーにも偏らない

生き方をする事です。といっても、今人類は、物質に偏るだけ偏っていますので、これ以上物質を意識して生きる必要はありません。生命のみを意識して生きたらいいのです。生命を意識して生きたら、この世から争い事や病気など、一切の不幸災難はなくなりません。今人類が様々な苦しみに喘いでいるのは、あまりにも物質に偏った生き方をしているためです。物質に偏ればエネルギーの低下を招きますので、どうしても不幸災難に見舞われるのです。

### 【因果の法則を順守する生き方】

良い原因には良い結果が、悪い原因には悪い結果が付いてきます。この法則は絶対的法則ですから、いかなる者も逆らうことはできません。だから私たちは、素直に因果の法則を順守して生きなければならぬのです。

因果の法則を順守する生き方とは、良心に恥じない生き方をする事です。私たちの良心は、生命心そのもの、宇宙法則そのものですから、良心に恥じない生き方をしたら、幸せになれるのです。

正しく生きるとはこのように、生命に生きること、法則に生きること、すなわち、良心に生きることなのです。

### ○今を真実に生きれば、過去も未来も正当化できる

いまだかつて、過去や未来があったためしがありません。過去や未来は実際にはない現実の世界にのみあり、真実の世界にはないからです。ということは、過去や未来に想念を使っている人たちは、実際にはない世界に

生きていることになるわけですから、正しく生きているとはいえないのです。

今のページに想念を使っている人は、真実に生きていことになります。過去や未来のページに想念を使っている人は、真実に生きていといえません。なぜなら、過去は過ぎ去ったページであるし、未来はまだ来ぬページだからです。そんな幻のページに想念を使うほど、愚かなことはありません。

正しく生きる生き方とは、想念を真実なる今のページに使う生き方です。その人は、過去を正当化できると同時に未来も正当化できるのです。なぜなら、今正しい原因をつくっているからです。今正しい原因をつくれれば、当然未来も正しく生きられるでしょう。しかも、今正しく生きられるのは、過去において教訓を学んだ結果ですから、それは過去を変えたことにもなるのです。過去は今の原因です。今は未来の原因です。だから、今正しく生きれば過去を正しく生きたことになり、未来も正しく生きられるようになるのです。すなわち、過去を正当化し、未来も正当化できるのです。だから、今の生き様が何よりも大切になってくるのです。

### ○理解力をもって観る

見えるのは、ある幅の波長の光が目が捕らえ、心に伝えているからです。もし心が受けつけなかったら、目の前に何があっても見えないのです。また、見える物の理解がなされていなければ、どんなに見えても見えている状態にはならないのです。心が受けつけ、さらに理解して、初めて見えている状態になるのです。

見えないモノを観る場合も同じ理屈が働いています。見えない生命を観るには、生命が何なのか理解が伴

っていないければ観えないのです。心が「なるほど」と納得すれば、見えない生命が観える状態・感じる状態になるのです。

宇宙には目で捕らえ切れない光が数多く存在しますが、理解力が乏しいうちは見えないのです。でも意識が高まり理解力が増せば、見えない光も見えるようになってくるのです。そうなると、まるで違った宇宙観を持つことができます。神様は私たちに肉眼という狭量な目と、理解眼という万能な目をお与え下さったのです。正しく生きるためには、この万能の目を上手に使わなくてはならないのです。

### ○理解している世界を認め合うことの大切さ

小学生の理科で習ったと思いますが、物質の色を混ぜ合わせれば黒くなり、光の色を混ぜ合わせれば白くなります。これは白の中にも黒の中にも、すべての色が包含されている証なのです。いわゆる、黒も白も総合色なのです。だから黒はただの黒ではないし、白はただの白ではないのです。この理解がなされれば、黒と白の中にすべての色を見ることができ、また単色の中に黒色と白色を見ることがもできるのです。見えないモノを観る場合も同じ理屈が働いています。

見える物は見えないモノの塊です。見えないモノが集まって見える物になっているのです。その理解がなされれば、見える物の中に見えないモノを観ることができるようになるのです。単色の中に白色や黒色を見ることができるよう……。私たちは同じものを見ているつもりですが、人それぞれ理解力の差によって見ているものが違っているのです。つまり理解力の差によって、世界観や宇宙観が違っているのです。だから



人のいうことを否定しても、批判してもならないのです。自分の理解している世界と、人の理解している世界の齟齬を言葉や文字で埋め合うことはできないからです。

どうして意見が違うからといって敵対し合うのですか。見ているものが違うのですから、意見が食い違うのは当然なのです。相手は相手が見ている通りの正しい意見をいつているのです。理解力の差によって意見が食い違っているだけです。これは仕方のないことなのです。だから、人を責めてはなりません。責めるのではなく、互いに認め合うことです。この世で皆と仲良く生きるためには、一人一人が理解している世界を認めてやることです。そのように考える人が増えたら、宗教戦争も政争も一切なくなってしまうでしょう。

### ○正しく見(観)なさいとは？

正しく見なさいとは、たとえていえば、描かれた絵の中に描いた画家を観なさいということです。つまり、表現物の中に表現者を観なさいということです。表現物をただの表現物として見るなら、その表現物は死んでしまうのです。現わしているものを無視し、現われている物だけ見ている者は、その物を殺してしまうのです。だから人間の中に生命を感じなければ、人間はただの死に絵になってしまうのです。

正しく表現するためには、現実の世界と真実の世界を同時に見て、同時に生きなければなりません。絵が(人間が)、私は画家(生命・神)だと思えなければ、画家の思いを正しく表現できないのです。要するに、天の意を地に正しく表現できないのです。今の私たちは、描かれた絵を自分と思いいし、絵として好き勝手に生きているのです。だから、この地上世界に不幸が絶えないのです。

人間が生きているのではなく、生命・神が生きているのです。表現物が生きているのではなく、表現者が生きているのです。表現物が生きていると思うから、表現物としての生き方しかできないのです。実際には表現物が、実際にある表現者の立場で生きられるわけがないのです。人間の立場でものを見るということは、実際にはない立場でものを見るわけですから、正しい判断ができるわけがないのです。もし自分のことを、生命・神だと思えたら、天の意を地に正しく表現できるでしょう。地上天国が到来するのはその時です。

### ○物の本質を観よう！

見える物は見えないモノであり、見えないモノは見える物です。見える物と見えないモノは同じものだから、見えないモノが見える物になれるのです。見える物と見えないモノが別々のものなら、見える物は永遠に見える物であるし、見えないモノは永遠に見えないモノのままであるはずで、とすると、その宇宙は死んでいることになりました。なぜなら、変化しない宇宙は死んでいるからです。

私たちは形だけを見て物事の判断をしますが、形があるからには必ず背後に素材である本質があるのです。見える物は、見えない本質なしに見える物になれないのです。何かが生み出されるからには、その何かを生み出した本質が必ず背後にあるのです。これは当たり前のことですが、その当たり前のことを人間は心から理解できていないのです。だから人間は形に翻弄され、様々な苦しみを背負ってしまうのです。

物の本質が理解できるようになれば、見える物の中に見えないモノを観ることができるようになりますから、その人は見えない本質としての正しい生き方ができるようになります。

## ○もう一つの目

正しくものが見えるようになった人は、生命以外何も観えません。大生命しかないと思っている人の目には、大生命しか写らないのです。たとえば、パンもクッキーもケーキも小麦粉によってつくられていると知った人は、何を見てもみな小麦粉に見えるのです。花も虫も人間も生命によってつくられていると知った人は、何を見てもみな生命に観えるのです。

理解眼を開くとは、理解力によってももの真意を把握することです。心の底からものの真意が把握できれば、見えないモノが観えるようになってくるのです。見えるといっても、形として見えるのではなく、光として観えるのです。光は生命そのものであり本質そのものですから、そのようなことが起きるのです。この真意を把握する眼のことを、理解眼といいます。私たちには、見える物を見る肉眼と、見えないモノを見る理解眼が与えられているのです。ただ私たちは、その目を使わなくなったため、見えなくなってしまっただけです。使わなくなったのは、見える物に翻弄され、見えないモノを探究する意欲を失ったからです。どうか疑問を持ってください。探究心を強く持つってください。それがあなたの人生を価値あるものにするのです。

## ○正しく生きるという本当の意味

心ある多くの人たちは、法律を守ったり、倫理や道徳を守ったり、人の道に恥じない生き方をすることが、正しい生き方だと思っております。私も十数年前まではそう思っていました。特にある教えを信じていた私

は、娘にもからかわれるような四角四面の生き方をしておりました。でも知花先生の教えに触れ、その誤りに気づいたのです。

確かに、人の道に恥じない生き方をすることは大切です。なぜなら、人の道に反した生き方をしているのは、心穏やかに生きられないからです。心穏やかに生きられなくては、瞑想どころではありません。でも、どんなに人の道に恥じない生き方をしても、生命の道に反する生き方をしているのは、正しく生きていっているとはいえないのです。つまりこの世の雑事や生事に追い回され、生命に意識を向けない生き方は、正しい生き方とはいえないのです。

正しく生きるとは、

- ・ 生命（本当の自分）を意識して生きる生き方です。
- ・ 何を思うにも、語るにも、行うにも、生命がやっていると思いきる生き方です。
- ・ 良心（法則）に生きる生き方です。

生命に愛されるには、常に生命に意識を向けていなければなりません。本当の自分に愛されるには、常に本当の自分に意識を向けていなければなりません。生命に、本当の自分に、意識を向けていけば、自然と正しく生きられるようになります。もうその者は、倫理も道徳も宗教も必要ありません。正しく生きるとは、そういうことなのです。

## ○思い煩うことなかれ

何を食べ、何を飲み、何を着けんと思い煩うことなかれ！ という言葉には、縁による深い意味合いが込められています。縁による深い意味合いとは、次のようなことです。

この世に縁によらないで生まれてくる物など一つもありません。また縁によらないで与えられる物も一つもありません。国も家族も友達も職場も生活必需品も、すべて縁によって与えられているのです。今私たちは、生活必需品を遠いところから取り寄せて使っていますが、本来それらの物は身近なものを使うべきなのです。私たちの肉体そのものが、その土地に根差したものだからです。気候風土にマッチした肉体が気候風土にマッチしたものを使う、それが自然の摂理です。だから食べ物も着る物も住む家にしても、地縁の物を使うべきなのです。

自然の摂理といえば、結婚するのも子供を授かるのも、縁を大切に考えなくてはなりません。縁がなければ一生独身でも構わないし、縁がなければ子供を産まなくてもいいのです。人の卵子や腹を借りて子供を授かるなど、言語道断といわねばなりません。気持ちは分からないでもありませんが、不自然（理のない）なことは避けるべきです。

- ・食卓に上がった食物を感謝して食べましょう。
- ・与えられた衣服を感謝して着ましょう。
- ・与えられた住まいを感謝して使しましょう。

・縁が与えてくれた飲食物、縁が与えてくれた衣服、縁が与えてくれた住居、縁が結びつけてくれた親兄弟や妻や夫や子や孫に感謝しましょう。

それが、何を食べ、何を飲み、何を着けんと思ひ煩うことなかれ！ の本当の意味なのです。

### ○殺生とは？

殺生には二通りの殺生があります。一つは殺す殺生、もう一つは生かす殺生です。私たちの生活は、鉱物や植物や動物などの犠牲の上に成り立っておりますが、本来に必要な消費は生かす殺生になり、欲望や遊びの消費は殺す殺生になるのです。鉱物や植物や動物は、人類の進化を援護する使命をもっていますので、本来に必要な彼らは喜んで私たちの犠牲になってくれます。でも「理のない」使い方をされると、彼らは涙を流して悲しがります。モルモットとして殺されるネズミや、闘牛によって殺される牛や、釣りや狩猟マニアによって殺される魚や動物は、みな泣いています。無駄に使われている品々も、寝かされている品々も、きつと同様の気持ちでしょう。ある人がこんなことをいっていました。

「引越しの際、タンスや引き出しの中に一度も使ったことのない物があるのに気づいて驚いた！」と……。タンスや引き出しの中で寝かされていた物は、きつと泣いていたことでしょう。有効に使われてこそ、彼らの使命は全うされるのです。理のない消費も殺しの殺生ですが、使われない消費も殺しの殺生なのです。

### ○真の奉仕とは？

本当の自分を知った者は、自然社会においても、人間社会においても、正しく生きられるようになります。

それは生命の本源につながったからです。その者は、

・愛深くなります。

・エネルギーが強くなります。

・判断力が鋭くなります。

・直感力が増します。

・正しく思い、語り、正しい行いができるようになります。

・物事の善し悪しが自然と分かるようになります。

世の中には派手なパフォーマンスをしたがる人たちが沢山いますが、彼らは何に揺り動かされそのようなことをしているのでしょうか。自我に揺り動かされてでしょうか。それとも真我に揺り動かされてでしょうか。

・神棚や仏壇に手を合わせるのが、正しい生き方でしょうか。

・賛美歌を歌い大声で主の名を呼ぶことが、正しい生き方でしょうか。

・聖書を持って家庭訪問することが、正しい生き方でしょうか。

いいえ、それは自己満足にしか過ぎません。

正しい生き方とは、常に本当の自分を意識して生きる生き方です。本当の自分を意識することは、神を意識することですから、神と同じ思いで生きられるのです。神は大調和ですから、神の思いで生きる人は、神

と同じ調和のとれた生き方ができるのです。すなわち、常識人として、当たり前な人として、愛深い人として、奉仕者として、光を放つ人として……。

瞑想している時は真理を実践しておりますので、光の中におります。光の中にいる者は光を放射していますので、これ以上の奉仕はありません。釈迦が「三千名に飯を盛るより、瞑想する方が世のため人のためになるのですよ!」といわれたのは、このことをいっておられたわけです。

私たちはどうしても派手なパフォーマンスをしたがりです。人に良く見られたいという自己顕示欲が働くからでしょうが、いったん外側に表した奉仕は、もう真の奉仕ではありません。パフォーマンスをした時点で、徳が自己宣伝費として使われてしまったからです。真の奉仕とは、人の目の届かない所とする無欲の奉仕です。なかでも、心の中とする奉仕は、最も尊い奉仕です。すなわち、多くの人に安らぎと平安をもたらす瞑想の奉仕は、最上位の奉仕なのです。それゆえ、瞑想に勝る奉仕はないといわれるのです。

### ○喜びを求めよ!

快楽とは、読んで字のごとく、「快く楽する」ことです。しかし、この快楽は苦の対極にありますので、どうしても苦がつきまとうのです。麻薬とよく似ているのがこの快楽なのです。

快楽と対照的なのが「喜び」です。これは心で味わう喜びですから、満ち足りた喜びを満喫することができます。瞑想から得られる喜びは、その最たるものといっています。

その喜びは、



静かにやってきます。心を溶かします。永続します。

楽しみも適度な楽しみならいいのですが、度を超すと苦しみに早変わりしますので、要注意です。特に、肉の快樂には気をつけたいものです。

### ○未来を見通す方法

時をデジタル的に捕らえると一秒先も見通すことができませんが、アナログ的に捕らえると案外と見通しやすいです。それは、原因を線として捕えられるからです。これが、いわゆる「先見の明」といわれているもので、未来を探る一つの方法です。

過去は現在の原因です。現在は未来の原因です。この流れを読めば、現在の結果がどのような原因から来ているかが分かり、過ちが修正しやすくなります。修正された原因は正しい未来の流れをつくりますので、未来の予測がしやすくなります。それはもう、予測ではなく実測です。なぜなら、原因と結果は一致するものだからです。だから、今正しく生きれば、未来も安心して生きられるのです。

過去を悔み未来を憂えるのは、原因点である今を正しく生きていないからです。今は過去であり、今は未来であるといわれるのは、今の原因点の中に過去も未来もあるからです。その意味では、過去の結果を今の原因点の中で修正すれば、過去の原因を修正したことになり、さらに未来を正しく築く原因ともなるのです。それをはっきり知るには、時空から意識を引き上げねばなりません。つまり、相対界から絶対界へ意識を引き上げ、過去を今として、今を今として、未来を今として見ることでです。

## ○善業を成すとは？

どのような宗教も「善業を成しなさい」といいます。でも、真の善業がどのようなものか教えている宗教はありません。真の善業とは、ボランティアをしたり、人に施しをしたりすることではありません。自分の心の中に巣くっている悪癖をなくすことが、真の善業なのです。すなわち善業を成すとは、外側で何か良いことをすることではなく、自分の心に良いことをすることなのです。この考えは、一見利己主義に見えますが、心は全体性ですから、己の心の革命は全体の心の革命になり、それは全体主義になるのです。

人間は様々な悪癖を持っています。たとえば、酒や麻薬にのめり込む癖、バクチや性欲の虜になる癖、強欲な癖、怒りっぽい癖、ネクラな癖、引っ込み思索癖、嫉妬深い癖、ねたみ深い癖、被害妄想癖など、挙げれば限りがありませんが、これすべて心の中に巣くっている悪癖です。世間には、これらの悪癖を持ったまま一生を終えてしまう人が多いわけですが、これではこの世でどんな偉業を成し遂げても何の意味もありません。

人生の目的は地位や名誉や財産を得ることではなく、自分の心の中に巣くっている悪癖を一つでも多くなくして帰ることなのです。一日一善という言葉がありますが、これは一日一つ良いことをするという意味もあります。本当は一日一つ自分の心に良いことをするという意味なのです。自分の心に良いことをするという意味は、自分の心に善い想いを持って、すなわち神の想いを持つてくるという意味です。

ある宗教では、悪癖を出さないよう意識して生きることが大切であるといっておりますが、それでは悪癖

を認めることになり、矛盾になってしまいます。悪癖を認めながら悪癖をなくすことなど、絶対できないのです。悪癖（結果）をなくすには、単純に善い想い（原因）を持つてくれば良いのです。

善い想いを持つてくる手段が瞑想です。神（生命）は善い想いそのものですから、神を想えば悪癖は消えてゆけしかないのです。瞑想が悪癖をなくす有効な手段といわれるのは、神の想いそのものが善い思いだからです。もし瞑想によって悪癖をなくすことができれば、これは大変な偉業です。さあ、強い決意を持つて悪癖をなくす瞑想に挑戦しましょう。それがこの世に生まれてきた目的であり、使命なのですから……。

**外側の革命を成すより、内側の革命を成すほど偉大な革命はない！**

#### （6）体験こそ宝

#### ○この世は体験道場である

人を諭そうとしても、諭せるものではありません。また、自分も人から諭されるものでもありません。人を諭そうなど、傲慢というものです。では、何が人を諭してくれるのでしょうか。それは体験です。体験だけが人を諭してくれるのです。特に裏返しでの体験は、諭しの効果が大きいでしょう。

たとえば、

・夫が大酒飲みで苦しんでいる妻は、以前自分が大酒飲みで妻を苦しめていた裏返しを体験させられてい

るのです。

・強制労働させられている人は、以前怠けて働かなかった代償を今払わされているのです。

・不自由な体を持ち苦しんでいる人は、以前人の自由を奪った代償を今払わされているのです（自ら家族の学びのために犠牲になっている場合もある）。

・盗まれたこと、殺されたこと、騙されたこと、犯されたこと、すべて裏返しを体験させられているのです。

人間は、相手に与えた痛みや苦しみをこの身で体験しなければ、犯した罪の重さが分らないのです。だから魂は、わざわざ苦しい環境に身を置くのです。安易に人の苦しみを取ってはならないといわれるのは、そういう理由があるからです。

間違いに気づき、生き方を正したら苦しみは去ります。もう体験する必要がなくなったからです。「なぜ、いつまでもこんなに苦しまねばならないのだ!？」と人は嘆きますが、魂はその理由をちゃんと知っているのです。だから、人は苦しんでいるけれど魂は喜んでいるといわれるのです。

### ○苦しめば苦しむほど成長する魂

日々、戦争や災害や交通事故など、悲惨な報道がなされています。人はそれを見て可哀そうだといいます。でも私は、平然と見ていられるのです。なぜなら、私は苦しみを悪いことだと思っていないからです。

人を諭せるのは苦しい体験だけです。人は苦しまねば過ちに気づかないのです。大病を患った後、人が変

わったといわれるのも、大きな事故に遭った後、生き方が変わったといわれるのも、何かを気づかされたからです。

・ 人に踏みにじられ、しおれてゆく野の花を見ます。

・ 寒空の下、路上でうずくまっている痩せこけた猫の姿を見ます。

・ 厳寒の朝、裸足で震えている浮浪者の姿を見ます。

・ 骨と皮だけになった幼子が、乳の出ない母親の胸にすがって泣いている姿を見ます。

神がおられるなら、なぜこのような酷なことを許しているのだろうと思われるかもしれませんが、これら厳しい体験を通して魂を成長させる神の計らいなのです。体験のみが人を成長させてくれるのです。だから私は、可哀そうと思う代わりに、一日も早く目覚めてください！ 一日も早く気づいてください！ 一日も早く成長してください！と祈るのです。

### ○相対を知って絶対を知る

なぜ宇宙に絶対界と相対界が存在するのでしょうか。もし一つのものしかないなら、その一つの存在をどうして知ることができるでしょうか。もし自分だけなら、自分の存在をどうして知ることができるでしょうか。

・ 棒が長いか短いかは、もう一つ棒を持ってきて比べてみなければ分かりません。

・ 足が速いか遅いかは、二人を競わせてみなければ分かりません。

・光の中には、光を知ることにはできないのです。

・幸せの中には、幸せを知ることにはできないのです。

何かを知るには、比べてみて知るしかないのです。すなわち、真実を知るには、非真実を通して知るしかないのです。絶対を知るには、相対を通して知るしかないのです。私たちは、ホンモノとニセモノの勉強、善と悪の勉強、完全と不完全の勉強など、絶対界では学べない貴重な体験を、今相対界においてさせてもらっているのです。だから、不幸を単なる不幸と考えてはならないのです。

### ○体験はことごとく善の塊である

今あなたが味わっている苦しみは、あなたが求めた苦しみで、人から与えられた苦しみではありません。すべて自らが引き寄せた苦しみです。自分が望んだのです。自分が欲したのです。それは、その苦しみから学ぶ必要があったからです。

「どうしていつまでも苦しみから抜け出せないのだ!」と嘆く人がおられますが、それはまだ課題を克服していないからです。課題を克服しない限り、何度も何度も同じ体験をさせられるのです。もし苦しみから抜け出したいなら、一日も早く課題を克服することです。苦しみや悲しみは、早く課題を克服しなさいという神様からのメッセージなのです。

この世に不要な体験はないといわれる理由は、体験でしか課題を克服することができないからです。だから体験は、ことごとく善の塊であるといわれるのです。

○人生を教えてくれるのは唯一体験である

人生を教えてくれるのは、人ではありません。体験です。人生を教えましょうという人がいたとすれば、その人は傲慢な人です。誰も人生を教えることはできません。自分が自分の人生体験を通して自分に教えるのです。

・一つの苦しみは一段階段を上らせてくれます。

・一つの悲しみは一段階段を上らせてくれます。

それは、自分の足で上ったのです。本を読んで、人の話を聴いて、階段を上った人など、一人もいません。今のあなたの成長は、自分の足で上った成果なのです。

私を感じるのには、体験豊富な者ほど苦しみや悲しみが少なく、体験少ない者ほど苦しみや悲しが多いという不思議さです。でも、それは当たり前なこと、何の不思議もありません。なぜなら、体験豊富な者は苦しまない方法を多く学び、体験少ない者は苦しまない方法を少なく学んだわけですから、苦しみに差ができるのは当然だからです。だから私は、「人生を教えてくれるのは体験である！」と断言できるのです。

○どんなものも動いている

動いているものを動物といい、生きているものを生き物といいます。鉱物も植物も動物も微生物も人間も、みな生きて動いています。原子さえも振動しています。物質を絶対零度に凍結しても、振動は止まりません。では、なぜ物はみな動いているのでしょうか。

動けば必ず出会いがあり、体験があります。動くということは、体験できるといことです。体験は、魂を成長させる最善の方法なのです。だから、原子も、微生物も、水も、空気も、衛星も、惑星も、恒星も、銀河も、みな動いているのです。

よく家に閉じこもっている人がおりますが、その人は振動すること(体験すること)を嫌っているのです。これでは大きな成長は望めません。何でもいいから外へ出て動くことです。働くことです。体験することです。そうすれば、実り多い人生になります。それも、厳しい体験であればあるほど、実り多い人生となるでしょう。

### ○神の国に住む権利

今の自分に満足している者は、何も求めようとしません。それは満足心に酔っているからです。能力的にも体力的にも恵まれたアスリートが、大した成績も残せず終わってしまうのは、自分に満足していたからです。満足心に酔っている者は、向上心が芽吹かないのです。芽吹いても少ないのです。それは苦しみが少ないからです。疑問を持つことが少なかったからです。

神の国に住む権利は、苦しい体験をした者のみに与えられます。もし神の国の住者になりたかったら、大いに苦い薬を飲んでください！ 苦い薬を飲んで沢山疑問を持つてください！ その者は、必ず神の国を見るであります。



## ○変化は成長である

人は全員が全員、自分の波動に合った生き方をしています。その方が楽だからです。でも、いつまでも同じところで足踏みしていたのでは成長は望めません。そこで、真我なる私は、それを打開しようと環境を変える画策をします。それが変化です。変化は酔生夢死の人生にカツを入れる特効薬なのです。

その変化は病かもしれません。事故かもしれません。肉親との別れかもしれません。離婚かもしれません。あるいは会社の倒産かもしれません。そこで人は、なぜこのようなことが起きるのだろうか、と疑問を持ちます。疑問は気づきをもたらし、気づきは波動を高めます。波動が高まれば環境が変わります。変わった環境の中で一段上位の体験をします。そして成長します。再び変化が訪れます。気づきます。環境が変わりません。新しい体験をします。

このようにして、私たちは環境の変化と共に少しずつ成長して行くのです。こういえるのも、私とその体験者だからです。

環境の変化は、ステップダウンではなくステップアップなのです。だから、変化がやってきたらステップアップできるチャンスと考え、果敢に挑戦することです。恐れる必要は全くありません。

## ○三位（身）一体を体験する

個体を扱うのはそう神経をいきませんが、液体を扱う場合は慎重にせねばなりません。個体はこぼしても元に戻すのは簡単ですが、液体はそうはいかないからです。これが気体なら、なお一層の慎重さが要求され

るでしょう。

これは、個体・液体・気体によって組み立てられた物質世界だからできる体験で、これを三位（身）一体の体験といい、判断力や集中力や忍耐力や緻密さなどを養うのに役立ちます。個体を扱うこと、液体を扱うこと、気体を扱うことは、同じ意識ではできないのです。特に気体を扱う場合は、意識を高める必要があります。意識を高めれば、粗雑な世界から精妙な世界へ昇華できるのが宇宙の仕組みですから、この三位一体の体験は、この世でどうしてもやっておかねばならない学習の一つなのです。

どのような意識を持てば、どのような結果を招くか。どのような意識を使えば、どのようなことを成し得るか。その体験の場が、この表現世界というわけです。

- ・ 集中力を養う学び
- ・ 忍耐と努力を養う学び
- ・ 精妙な意識を持ち続ける学び
- ・ 美意識を養う学び
- ・ 誠を（真）を打立てる学び
- ・ 善を全うする学び
- ・ 完全を見続ける学び
- ・ 正しい信念を持ち続ける学び、等々……。

頭を使う体験も、体を使う体験も、感性を磨く体験も、みな意識を高みに押し上げてくれるのです。いや、どんな体験も意識の高揚へつながっているのです。それも、低度なものから高度なものへ、幼稚なものから高尚なものへ、厳しいものから穏やかなものへと、学びの要点を変えていくのです。無駄な体験など一つもないとは、そういう意味なのです。

○**体験を恐れてはならない!**

体験を恐れて何もしない人に成長はありません。憶病風を吹かせ、何もしない者に、どうして果実が与えられましょうか。何でもいいのです。やってみる事です。たとえそれが危険なことでも……。なぜなら、それをやるべきかやらざるべきかの判断力も、体験を通してこそ養われるからです。正しい判断力は、体験なしには養われないのです。その意味では、無駄な体験など一つもないことになります。

神は不要な体験は用意しません。必要だから、今あなたに用意されたのです。たとえそれが不善と思われる体験であっても、その体験から学んだことはいつか必ず役に立つのです。歩いてこそ躓くのです。躓けば、その者は必ず何かを拾って起き上がります。躓かなければ何も拾うことはありません。

といっても、わざわざ嫌な体験をしに行きなさい! といっているわけではありません。与えられた場合逃げてはなりませんよ! といっているのです。心配いりません。必ず何かを得ます。体験はことごとく善の塊なのですから……。

### ○無用な体験は避けよう！

鉱物も植物も動物も、食べられることに喜びを感じています。特に、自分より上位の者に食べられることを喜びとしています。なぜなら、上位の者に食べられることで、より高次の体験ができるからです。といっても、弱肉強食や共食いは創造主の本意ではありません。進化の追隨に、それも必要に迫られた場合のみ許される行為です。野生の生き物が、必要最低限度の殺しや破壊しかしないのはそのためです。人間はどうでしょうか。

人間は無用の体験をしようとしません。無用の体験とは、遊びや、自己顕示欲や、欲望を満足させるためにやる殺しや破壊のことです。無用な殺しや破壊は、無用な苦しみを生み出すだけで何の益にもなりません。無用とは、「用」が「無」という意味で、不要という意味です。そんな不要な体験は、できるだけ避けるべきです。それだけでなくても人間は、無用な争い事に首を突っ込みたがるのですから……。

### ○夢も貴重な体験の一つである

今朝方私は、亡くなった娘と夢の中で語り合いました。取り留めのない話ばかりでしたが、二人にとっては楽しい一時でした。また昨夜私は、幽界で母と幸せな一時を過ごしました。どちらも夢・幻の世界での話です。

今、あなたは大きな仕事を成し遂げ、時の人となっています。今、あなたは素晴らしい記録を打ち立て、アスリートの鏡となっています。でも、その得た富や名声は永遠のものでしょうか。いいえ、一時夢を見て

いるに過ぎないのです。この世の出来事も、夢の中の出来事も、幽界での出来事も、みな夢幻の中の出来事です。そこで成し得たことに何一つ意味はないのです。だから軽んじていい、とっているわけではないではありません。成し得たことに意味はなくても、体験で刻んだ心象は決して夢幻で終わることはないからです。魂にとつて、どんな体験もみな貴重な学びの糧になっているということです。

このように、神様はこの世の体験ばかりでなく、夢幻の中の体験においても貴重な糧となる種を残してくれているのです。

### ○誰もが通る道

なぜ、幸せな人と不幸せな人がいるのでしょうか。それは、法則を正しく生きた人と生きなかつた人との違いではないでしょうか。いい換えれば、人生体験を多くした人と、しなかつた人との違いです。これは誰が悪いでもなく、ただ体験不足なだけです。体験不足はその人のせいではありませんから、劣等感を持つ必要はありません。体験を多く積んでゆけば、誰でも幸せの人生を歩むことができるのですから……。

赤ちゃんは、いつまでも赤ちゃんのままではありません。子供は、いつまでも子供のままではありません。少年・少女は、いつまでも少年・少女のままではありません。日々色々な体験を通して大人に成長して行くのです。

- ・火傷をして火の扱い方を覚えるのです。
- ・手を切つて刃物の扱い方を覚えるのです。

- ・病んで健康の有り難さを知るのです。
- ・傷ついて戦いの愚かさを知るのです。

私たちは、地球という学習道場で色々なことを体験しながら、少しずつ大人になって行くのです。だから、幼いからといって人を見下してはならないのです。あなただって、昨日までそうだったのですから……。

### ○体験し、知る、学ぶ

幼子は宇宙のルールを知りませんから、欲するままに生きるのもやむをえないでしょう。でもそれを放置していたのでは宇宙の秩序は保たれません。そこで神様は、ある限度を越えた時点で赤信号を出すようにしたのです。それが痛みであり、苦しみであり、悲しみです。

神様はこういっておられます。

「幼子よ！ この世で大いに楽しんでください！ ただし、足ることを知った上で楽しんでください！ また、幼子よ！ この世で大いに楽しんでください！ ただし、偏らない生き方をした上で楽しんでください」と……。

・赤信号を無視した幼子は事故を起こします。そこで幼子は、赤信号は止まれという合図なのだということを学びます。

・乱れた生活をした幼子は病気になります。そこで幼子は、生活を乱したら病気になるのだということ学びます。

・人を殴った幼子は人に殴り返されます。そこで幼子は、人を殴れば自分も殴られるのだなということを学びます。

・人を殺めた幼子は自分も殺されます。そこで幼子は、人を殺せば自分も殺されるのだなということを学びます。

私たちは、一挙に今のようない見識を持つようになったのではありません。気の遠くなる年月をかけ、やっとここまで成長してきたのです。今後も色々な体験を積みながら、成長し続けるでありましょう。

### ○悪のないことを体験する

悪を知った者のみが悪を見るのであって、悪を知らぬ者が悪を見ることはないのです。神様は悪を知らぬがゆえに、神様の目には悪は見えないのです。私たちも神様と同じ目を備えねばならないわけですが、そのためには、悪の本質を体験的に知らねばなりません。だから私たちは、生身の体を纏ってこの世に生まれてきたのです。

・苦しみを知って喜びを学ぶ体験。

・不幸を知って幸せを学ぶ体験。

・不完全を知って完全を学ぶ体験。

・悪を知って善を知る体験など……。

神様の目に悪が写らないのは、悪と見えるものすべてが善の塊だからです。悪は悪ではなく、善ならしめ

る悪なのです。悪は悪ではなく善なのです。このことが心から理解できると、神様のように、何を見ても笑っていられるようになるのです。ちなみに、生身の体が必要なのは、痛みや苦しみなしに真剣な体験はできないからです。

### ○体験を通して悟りの道具を磨いている私たち

「どうして、このような苦しみや悲しみを味わわねばならないのか！」と人は嘆きます。幼い内は、その苦しみや悲しみの意味が分からないのです。でも、何度か体験している内に意味が解ってきます。これが体験知です。

つまり、

- ・このような想いを持てば、このようなことが起きる！
- ・あのような想いを持てば、あのようなことが起きる！
- ・このようなことをしたら、このようなことが起きる！
- ・あのようなことをしたら、あのようなことが起きる！

その一つひとつの想いと行為が、いかに自分に影響を与えるかを学ぶのです。愛の峻厳さや完璧さも同時に学ぶでしょう。こうした一つひとつの体験が、最終的に悟りにつながって行くのです。

生身の体をまとったのは、頭で知っても、身に置き換えなくては絵に描いたボタモチで終わってしまうからです。体と心が結びついて、はじめて本当のボタモチになるのです。だから、痛みや苦しみの体験がどう



しても必要なのです。

### ○警告すべきか、すべきでないか

ある人はこういいいます。

「人は苦しみを通して成長するのだから、苦しむことは良いことだ！」と……。

またこうもいいます。

「おせっかいな人助けは、人から成長材料を奪うことになるから、安易な人助けはすべきでない！」と……

確かに、苦しみは人を成長させてくれるでしょう。だからといって、みすみす苦しむのが分かっているのに、見て見ぬふりをしていいものでしょうか。今深みに嵌ろうとしている人を目前に、何もしないで黙って見ていていいものでしょうか。どんなにおせっかい焼きといわれても、私にはできません。中には聞く耳を持つ者もいるはずだからです。

幼い魂は耳を貸さなくても、熟した魂は人のいうことを聞く素直さが身につけているものです。今はただ迷いが濃いため正しい判断ができず、深みに足を向けているだけです。彼らはもう苦しむ必要のない魂です。だから警告してあげるべきです。警告を受け入れるか否かは、本人の自由意志に任せればいいのですから……。

必要な苦しみは避けて通れないにしても、無用な苦しみはできるだけ避けて通るべきです。私たちの苦し

む姿を見て、神様が喜ぶはずがないからです。

### ○体験を通して不完全のないことを知る

この世には様々な苦しみや悲しみがあります。全能の神がおられるなら、なぜこのような不完全があるのだろうか、と疑問に思うのも無理はありません。

実は、不完全は完全の証なのです。完全が完全のままでは終結を意味します。終結は止めであり終わりですから、それ以上進展も発展もしません。進展も発展もしない宇宙は「無」を意味します。それは宇宙の死です。宇宙が永遠に存続するためには、動き、循環し、進展し、発展していなければならないのです。それは、不完全と完全の循環によってのみ可能なのです。

完全たらしめるためには、不完全との交わりが必要なのです。完全とは満足している状態です。向上心のない状態です。思考の停止です。それでは死んでいるのと同じです。死なないためには、

- ・嘆きたくなる不完全が必要なのです。
- ・疑問を持たせる不完全が必要なのです。
- ・向上心を鼓舞する不完全が必要なのです。

だから不完全は完全なのです。完全たらしめる不完全は完全なのです。私たちが肉を持ってこの世に生まれてくるのは、そのことを知るためです。つまり、

- ・不完全が何なのか知ればこそ、完全が何なのか知るので。

・不完全を熟知すればこそ、さらなる完全を求めて努力するのです。

・不完全の姿を知ればこそ、完全の完全な姿を知るのです。

神が完全な目を持っているように、私たちも完全な目を持つためには、不完全から色々学ぶ必要があるのです。

### ○何でも味方にしよう！

人生の幸・不幸は、どのような想念を持つかで決まります。ほとんどの人は、取り越し苦労をしたり、心配ごとをしたりしては心を痛めています。これでは、良い運命が引き寄せられるわけがありません。といっても、過去生の暗い体験が災いとなって、なかなかネガティブな思いから抜け出せないのも事実です。では、どうすればネガティブな思いを捨てることができるのでしょうか。そのコツは、何でも味方にすることです。もしあなたに何の苦しみもなく、一生平々凡々の日々が続いたら、あなたの人生にいったい何の教訓が残るでしょうか。

・野に咲く雑草は踏まれれば踏まれるほど強くなるものです。

・傷ついた皮膚はより丈夫になるものです。

・あんは練れば練るほど艶を出すものです。

・鋼は叩けば叩くほど強靱になるものです。

私たちも苦しめば苦しむほど強くなって行くのです。

不幸を味方にしてください。不幸が起きたら、この不幸は自分を強くするためにわざわざ起きてくれた、有り難いことだ！ と、ポジティブに受け取り、感謝することです。感謝すれば何でも味方になってくれます。味方にすれば痛みや苦しみは半減します。ポジティブな思いは光（エネルギー）を強めてくれるからです。

自分を憎む人も、悪さをする人も、病気も、事故も、災害も、みな味方にしてください。

・あの人がいなかったら強くならなかった、彼は私の恩人だ！ 有り難いことだ！

・この病気がなかったら気づけなかった、有り難いことだ！

・この災害（事故）がなかったら酔生夢死の人生を送っていたかもしれない！ 有り難いことだ！

このように、ポジティブに受け取り感謝できれば、ますます光は強くなるでしょう。もうあなたの人生に、一カケラの暗闇も見当たらないうでしょう。

### ○ボディーは敏感に反応する環境である

ボディーは心に最も敏感に反応する環境の一つです。それも、何よりも近い環境です。ゆえに、健全な思いを持てば即健康なボディーとなって、不健全な思いを持てば即不健康なボディーとなって現れるのです。要するに、心の動きが最も顕著に現れる場が肉体という環境なのです。こんな体験はありませんか。

- ・人のアクビを見て自分もしたくなったとか……、
- ・金切り音を聞いて背筋がゾーツとしたとか……、

- ・嫌な匂いを嗅いで胸が悪くなったとか……、
  - ・酸っぱいものを見て唾液が出てきたとか……、
  - ・ヌルーとしたものを触って身震いしたとか……、
  - ・神経を使い過ぎ胃の調子がおかしくなったとか……。
- このように、ボディーという環境は、見て、聞いて、嗅いで、味わって、触って、感じたことを正直に表現してくれるのです。同じように、社会も、自然も、地球も、ボディーと同じく敏感に反応する環境です。
- ・病気は肉體環境が発信する危険信号です。
  - ・事件や事故や自殺は社会環境が発信する危険信号です。
  - ・生き物の異常行動は自然環境が発信する危険信号です。
  - ・自然災害は地球環境が発信する危険信号です。
- その原因の源は人間の心です。みな人の心が関係しているのです。

## (7) 愛の力・愛の心

### ○愛の力とは？

愛の力とは、善し悪しを問わず、調和の中心に引き寄せる力のことです。すなわち、均衡力・均一力・中

庸力です。中心に引き寄せられたものはみな毒消され、本来の素直な性質に戻って行くのです。この拮抗させる愛の力こそ、宇宙生命の性であり望みなのです。

・なぜマクロはミクロに戻ろうとするのでしょうか。・・・マクロはミクロの塊だからです。

・なぜ物質は霊に戻ろうとするのでしょうか。・・・物質は霊の塊だからです。

・なぜ大金持ちの周辺に波風が立つのでしょうか。・・・お金はエネルギーの塊だからです。

塊は偏りで、均衡を欠いた状態です。だから、愛の力が分散を命じるのです。愛の力はエネルギー均衡の法則そのものですから、偏ったものが安定状態に戻ろうとするのは当然のことなのです。それは、常に平安でありたい！ 穏やかでありたい！ と願う、宇宙生命の望みと合致するものだからです。愛の居場所は中心点にありますから、中心から離れば苦しみとなり、痛みとなり、不幸となって帰ってくるのは当然で、戦争も自然災害も病気も、みな中心点に戻ろうとする愛の反動なのです。

### ○安易な人助けをしてはならない！

人助けを美学の象徴とする人がおりますが、この考え方は非常に危険です。なぜなら、安易な人助けは人を墮落させる危険性をはらんでいるからです。私は何も、見て見ぬふりをしなさいといっているのではなく、まだ乗り越えられるハードルを、偽善や慈悲魔で奪ってはならないといっているのです。

・ライオンは我が子を谷底に落とすといいます。

・親鳥は巣立ちさせるために、我が子を巣から突き落とすといいます。

・可愛い子には旅をさせるともいいます。

もし私たちに苦しみがなかったら、ここまで成長してこられたでしょうか。だから私はいうのです。穴に落ちている人を上から引っぱり上げるのではなく、自力で這い上がれるようになるまで下において支えてあげなさいと……。

慈悲魔は感情の沸騰であり、偽善は自己顕示欲の沸騰です。どちらも人を墮落させます。学びの材料を奪うほど無慈悲なことはありません。ぜひとも、神のような峻厳な愛を買きたいものです。

### ○高い愛に至る戸口に立っている私たち

この宇宙には、たった一つ、私の宇宙があるだけです。なぜ私の宇宙しかないのかといいますと、この宇宙には唯一の生命、唯一の意識、唯一の靈しかないからです。一つのものしかないなら、私はその一つのものではありませんか。あなたはその一つのものではありませんか。万象万物は私ではありませんか。あなたも万象万物もないのです。あなたも万象万物もみな私なのです。

私しかないなら、自分をいたわる愛しかないではありませんか。相手をいたわる愛は、自分の他に何かを認めたところから生まれた偽りの愛で、真実の愛ではありません。唯一の存在が、唯一の存在をいたわるのです。唯一の存在が、唯一の存在を愛するのです。その愛の働きは、自分の意識が永久に幸せであるよう心配りすることです。この高い愛にいたるには、すべてのものを自分と認め、自分の如く愛せるようにな

らなければなりません。

しかし、自分しかないところで、自分を愛する体験はできません。相手を通して愛の技法を学ぶのです。その学びの場が相対界です。地球です。私たちは今、相対的体験を通して愛の技法を学んでいる真つ最中というわけです。すなわち、高い愛にいたる戸口に立っているのです。

### ○真の愛とは？

一般的にいわれている愛は、夫婦愛とか、親子愛とか、隣人愛とか、人と人との愛のことを指していつているようですが、これらの愛は狭い意味の愛で、真の愛とは程遠いものです。真の愛とは宇宙愛のことです。宇宙を自分の如く愛する愛のことです。この宇宙に存在するものは、みな自分自身だからです。しかし、そのような大きな愛を一挙に育むことは苦しみとなりますので、まずは小さな夫婦愛から育みなさいというわけで、神様は男女の結びつきを出発点とされたのです。

大きな愛を育む順序は、

- ・ 夫婦愛を育むこと
- ・ 家族愛を育むこと
- ・ 隣人愛・友人愛を育むこと
- ・ 村民愛・市民愛・県民愛を育むこと
- ・ 国民愛を育むこと



・ 人類愛を育むこと

・ 地球愛を育むこと

このような順序を踏んで、最終的に宇宙を自分の如く愛せるようになるのです。これが、多様な物をお造りになった神様の目的です。私たちは自分と違う形の物を忌み嫌いますが、どんな物もみな同じ原子から生まれた兄弟姉妹ですから、すべての物を自分の如く愛さねばならないのです。そもそも、形造っている原子そのものが、生命と物質の調和した愛の結晶だからです。なのに、私たちは、単なる物質の塊だと思い違い、自分と違った形の物を愛せないのです。

真の愛を育むには、すべての物の中に生命を観なければなりません。すべての物を生命として観ることができれば、人類愛はもとより、宇宙愛も育むことができるでしょう。そうなったら、もう外に出て奉仕活動する必要はありません。

愛を、飾りつけた包装紙（美しい言葉や偽善）に包んで与えないでください。裸のまま（真心のまま）与えましょう。裸の愛こそ真の愛です。その愛は、神（生命）そのものの御姿です。どうか愛を偽らないでください！ 愛を隠さないでください！ 愛を弄ばないでください！ 純真な愛を貫いてください！

○なぜ不幸を喜ぶのか

本当の自分を追究するうちに、私は神の愛の峻厳さを心から受け止められるようになりました。それ以来、私は、どんな不幸を見ても心を痛めなくなりました。いや、むしろ喜べるようになったのです。このよう

なことをいうと変人呼ばわりされそうですが、決しておかしなことではないのです。

自分をいじめ抜くアスリートと甘やかすアスリートの、どちらが良い成績を残すと思いますか。波乱万丈の人生を送った人と平々凡々の人生を送った人の、どちらが魂的に成長すると思いますか。いわずもがなです。だから私は、人の不幸を目の当たりにする度に、ああこの人はまた一歩成長できるのだなあ！ 良かったなあ！ と、ひとりでに頬が緩んでくるのです。

### ○許し合い

幼いうちは、相手を傷つけてもあまり良心を痛めないものです。自他の隔たりが大きく、相手が遠くに見えるからです。しかし、大人になり自他の隔たりが小さくなるにしたがい、相手を身近に感じるようになります。これは魂が成長した証です。大人になれば誰でもそのようになるのですから、罪を犯したからといって人を責めてはなりません。責めるのではなく、彼は幼いがゆえに、自分が何をしているのか分からないのだ、と思って許すことです。イエス様は、自分の体に釘を打ちつける人さえも許しました。許せたのは、人と自分との間に隔たりがなかったからです。

私たちは、何かにつけ、人を恨んだり憎んだりしますが、それはまだ人と自分との隔たりが大きいかからです。幼いうちは仕方がないのです。だから人を責めてはなりません。自分も昨日までそうだったのです。いえ、今だってそうかもしれませんが、でも、それを許してくれている人がいるのです。ただそれに気づいていないだけです。

### ○自分を愛するとは？

自分を愛している人とは、本当の自分に意識を向けている人のことです。自分を愛していない人とは、本当の自分を忘れている人のことです。瞑想している人は、本当の自分に意識を向けている人ですから、自分をこよなく愛している人です。反対に、外側に意識を向けている人は、本当の自分を忘れている人ですから、自分を愛していない可哀相な人です。

我が子を愛している親は、常に子供のことを思っています。我が子を愛していない親は、子供のことを忘れていきます。これと同じように、自分を愛している人は、決して本当の自分を忘れません。常に自分を見詰め、自分を意識しています。自分を愛していると同時に、すべてのものを愛しているのです。なぜなら、すべては自分だからです。愛するとは、意識することです。思うことです。意識しないところに愛が育たないことを知ってください。

### ○神の愛を信じよう！

今、あなたに苦しみを与えられているなら、必要だから与えられた、神様からの贈り物だと考えてください。今のあなたには、その苦しみが必要なのです。後で振り返れば、納得のいくものばかりです。今のあなたの目には非情に映っているかもしれないませんが、いつか必ずその意味の深さに感謝できる時がくるでしょう。ですから、今苦しいからといって恨みごとをいってはなりません。神の愛を信じている者は、決して恨みごとをいいません。神の愛を信じられない者だけが、恨みごとをいうのです。

神とは、あなたの良心のことです。本当のあなたのことです。そのあなたが課したあなたの荷物なら、あなたが担がねばなりません。決して人を頼ってはなりません。心配いりません。きつとうまくゆきます。神の愛を信じましょう。

### ○許すのは自分自身である

反省して罪が許されるなら、世の中に罪人は一人もないことになります。罪は、二度と過ちを起こさない！と、堅く心に誓ったとき許されるのです。許すのは誰でもありません。自分自身です。なぜなら、罪をつくったのは自分自身だからです。自分がつくった罪は、つくった自分だけ許すことができるのです。

よく「神様私の罪をお許してください！」と祈る人がいます。神様がつくった罪なら神様にお願ひしなくてはなりません、罪をつくったのは自分ですから、自分しか許すことができないのです。

罪にさいなまれノイローゼになる人がいますが、それは、罪の所在が分からないからです。罪は自分の中にあるのですから、自分が許せば罪は消えてなくなるのです。いつまでも罪悪感を持っていては、一生罪から解放されることはありません。罪を認め、二度と過ちを犯さないと心に誓ったとき、罪の清算は終わったのですから、自分を許せばいいのです。それが、自分がつくった罪は自分だけが許せるという意味なのです。さあ、二度と過ちは犯さないと堅く心に誓いましょう。そのとき、あなたは許されたのです。

### ○人を許してはじめて自分も許される

あなたが自分を許さない限り、あなたが許されることはありません。なぜなら、許さない！という罪を

あなたは犯しているからです。自分が罪を犯しながら、自分が許されるわけがないのです。

逆も真なりで、人を裁けばあなたも裁かれます。なぜなら、あなたは人を裁くという罪を犯しているからです。人を裁けばあなたも裁かれ、人を許せばあなたも許されるのです。

この宇宙に他人はおりません。あなただけがいますのです。人を許せば、人は自分ですから、自分が許されるのは当たり前です。人を裁けば、人は自分ですから、自分が裁かれるのは当たり前です。だから、人を許して初めて自分も許されるのです。それは自分が自分を許したのです。

### ○愛はエネルギー

愛はエネルギーです。エネルギーであるがゆえに、高い愛の持ち主から低い愛の持ち主へ流れて行くのです。だから、わざわざ愛を与えに行く必要はありません。高い愛さえ持っていれば、黙っていても愛の貢なげはなされるのです。

また、エネルギーには循環の法則が働いていますので、与えた愛は必ず自分のところに返ってきます。ですから、愛されたいと思ったら、まず自分の方から愛を与えることです。愛を与えれば必ず愛は返ってきます。これは、私が保証するのではなく、愛の法則が保証するのですから、これほど確かなことはありません。

なぜ愛が吸引力かといいますと、高い愛が低い愛を引きつけるからです。一見、エネルギーの逆流に見えますが、吸引と放射は同時に働いていますので、低い愛が高い愛に引きつけられるのは当然のことなのです。

愛は与えるものではありません。また愛はもらうものでもありません。

常に高い愛を持ち続けることです。

### ○愛の救護員

暗い所にハエや蚊が発生するように、愛のない暗い所にも病氣や苦しみが生まれます。でも、愛はバランスですから、愛のない状態がいつまでも続くことはありません。愛の救護員が直ちに駆けつけ、愛の不在は解消されるでしょう。愛の救護員とは、痛みであり苦しみです。この愛の救護員の働きがあればこそ、私たちは反省し、過ちに気づき、正しい生き方をするようになるのです。

愛の救護員を感謝して受け入れられるようになった人は、正しい愛を学んだ人ですから、もう痛みや苦しみにも悩まされることはないでしょう。愛の救護員に不平不満をいつている人は、まだ正しい愛を学んでいない人ですから、気づくまで不幸を人のせいにして怒りを食べ続けるでしょう。

愛の救護員は外にいたるのではありません。自分の中にいるのです。自分が自分を叱咤激励し、自分が自分を立ち直らせるのです。このことが分かれば、厳しい愛も（病や不幸）感謝して受け入れられるようになるでしょう。

### ○自分を愛せぬ者は他者も愛せない！

自分を愛せない者が、どうして他者を愛することができましょうか。また、他者を愛せない者が、どうして自分を愛することができましょうか。

自分を愛している状態は、自分が喜んでいる状態ですから、人を愛し、許し、思いやり、優しくしている

時は、自分を愛していることになるのです。反対に、自分を愛していない状態は、自分が苦しんでいる状態ですから、人を憎んだり、恨んだり、嫉妬したり、怒っている時は、自分を愛していないことになるのです。

・ 他者を愛していない状態は、自分が苦しんでいる状態です。

・ 他者を愛している状態は、自分が喜んでいる状態です。

・ 自分が苦しんでいる状態は、他者を愛していない状態です。

・ 自分が喜んでいる状態は、他者を愛している状態です。

どうでしょう、自分を憎まずして人を憎むことができますか。自分を怒らずして人を怒ることができますか。憎しみも怒りもみな自分の中から出てくるのですから、自分を汚してからしか人を汚せないのです。ならば、人を愛するにも、自分を愛してからしか愛せないではありませんか。

人を憎んでいる人は、まず自分を憎み、その憎しみを人にぶつけているのです。人を怒っている人は、まず自分を愛し、その愛を人に与えているのです。憎しみも怒りも愛も、みな自分の中から出てくるのですから、自分が影響を受けないわけにはいかないのです。だから、人を呪えば自分も呪われるのです。

自分は人であり、人は自分です。宇宙には自分しかいないのです。さあ、人を愛してください！ その人は自分ですから、人を愛すれば自分が愛されることになるのです。

人を汚すには、自分を汚さなくてはできない！ 人を清めるには、自分を清めなくてはできない！ 人を

憎むには、自分を憎まなくてはできない！ 人を愛するには、自分を愛さなくてはできない！

### ○愛と甘やかしは別である

ある人はこういいます。

「完全な福祉国家ができれば、みな幸せに暮らせるだろうにと・・・」

でも、私はその意見に反対です。今の人間の心の状態でそんな世の中ができれば、弱々しい魂ばかり育ててしまうからです。

なぜ神は、愛しい我が子を、荒野といわれるこの厳しい世界に送られたのでしょうか。強い子に育てて欲しいためではありませんか。なのに、一から十までオンブにダッコの福祉国家で、どうして強い子が育ちますでしょうか。

今、多くの人たちが、愛の履き違いをしています。何でも助けてやるのが愛だと思っているのです。一例ですが、最近、一部の幼稚園では、園児の安全を考え、取っ手にカバーをつけたり、段差をなくすなどのバリアフリー対策を取っています。でも、そんな温室の中で、どうして強い花が育つのでしょうか。

・手を切つて刃物の扱いを覚えるのですよ！

・火傷やけどをして火の扱いを覚えるのですよ！

・手や足や頭をぶつけて身を守る方法を覚えるのですよ！

危険を恐れ何も体験させないで、どうしていざというとき身を守ることができるのでしょうか。近年子供の



事故が増えているのは、過保護すぎるからです。愛と甘やかしとは違うのです。本当に子供を愛するならば、厳しい体験をさせることを恐れないことです。

介護にしてもそうです。本人がまだやれるのに他人がやっては、自分でやれることもやれなくなってしまう。それに、一旦そのような癖がつくと、頼っていた人がやってくれなかったら、その人を恨むようになります。これでは百害あって一利なしです。今の介護はあまりにも過保護過ぎて、本人から努力と向上心を奪っているのです。手を差し伸べるにしても、相手を見て、状況を見て、甘やかさない程度にやるべきです。過保護は魂にとって大敵です。厳しい愛こそ本当の愛であることを知ってください。

荒野といわれる今の社会は、魂を磨くには最適な環境です。努力すれば報われる実力主義社会（弱肉強食社会、アメリカンドリーム社会）は、今の地球人類にとって必要なシステムなのです。神が矛盾多い今の社会を容認しているのは、神の思惑を立派にはたしているからです。私が理想世界を希求しているのは、ドロに身を浸しても汚されない心を築き上げた暁の話です。身を浸せば心まで汚してしまう今の人類の状態では、理想世界の住人になる資格はありません。その意味では、今の社会は、発展途上の魂にとって必要不可欠なシステムといっています。ただし、今の社会はあまりにも行き過ぎています。富が偏り過ぎ、魂を成長させるどころか、墮落させているのです。何でもそうですが、ホドホドでなくてはならないのです。愛と甘えは紙一重です。私たちは、その境界線を慎重に見極めなくてはならないでしょう。

## ○愛の法則

近年、ますます宝くじの当選金額が高額になっておりますが、これは国民の不幸を後押しする、最も悪い制度の一つです。国民に夢を持ってもらうためといっておりますが、愛の法則を知らないからそんなことを平気でいいます。宝くじに当たり幸せになった人など、いまだかつて一人もいないのですよ。私は幸せになりましたという人は、人生の続きを見ていないからです。

この宇宙は、楽しんで得するようにはできていません。また、苦しんで損するようにもできていないのです。なぜなら、この宇宙は愛の法則によって支えられているからです。愛の法則は偏りを嫌うのです。もし愛の法則に逆らおうものなら、その反動として必ず苦しみがやってくるでしょう。

たとえば、

- ・遊んで働かない人は、いつか必ず強制労働をさせられます。
- ・人から奪っている人は、いつか必ず人に奪い返されます。
- ・ギャンブルで儲けている人（楽しんで儲けている人）は、いつか必ず損をさせられます。

「私は何も悪いことをしていないのに、なぜこんな苦しい目に合わねばならないのだ！」と嘆いている人は、前世のツケを今払わされているのです。

因果の法則に裏支えされている愛の法則は、決して偏りを許さないので。この愛の法則は絶対的法則ですから、誰も逆らうことはできません。だから、楽しんで儲けようなどと、よこしまな考えは持たないことで

す。今よかったらいいという人は、どうぞ愛の法則を犯してください。来生、きっと地獄のような苦しみが待っているでしょう。

楽あれば苦ありは真理なのです。でも、この真理は、体験なしには身につかないのです。だから今、私たちは、楽して苦しみを、苦しんで楽を、体験しているのです。やがて私たちは、どちらにも偏らない生き方を身につけるでしょう。

本当の愛は、甘やかすことでも、楽させることでもありません。どうか、社会に出て、額に汗して働いてください。愛の法則は、きっとあなたの生命核（魂）を大きくしてくれるでしょう。

**真の愛は魂を成長させるものでなくてはならない！ 魂を墮落させる愛は、單なる甘やかしである。**

## （ 8 ） 天国（しあわせ）

### ○天国とは意識状態である

人は天国に帰ることに憧れますが、天国はあくまでも意識状態であって、どこかに天国という場所があるわけではありません。天国とは、幸せな意識状態を指す言葉です。その言葉を自分のものにするには、心の底から本当の自分を知らねばなりません。唯一至福に満たされるのは、本当の自分を心から知った時だからです。

天国に入るのに、地位も名誉もお金も何もいりません。必要なのは、生命の自覚を持つことだけです。生命の自覚が持てれば、幸せは自分の意識の中の出来事であることが分かりますので、その心は、もう、どんなことにも動揺しなくなるのです。その人は、もう天国に入ったのです。

なぜ生命の自覚が持てれば幸福感に満たされるかといいますと、生命には何でも与えられているからです。生命は常に満腹なのです。満ち足りているのです。それも、永遠に失われない、変わらない、飽きの来ない、満ち足りた状態です。その意識状態は、入った当人にしか解らないでしょう。

天国はどこか遠くにあるものではありません。一番身近な自分の中にあることを知ってください。

### ○法則が天国に連れて行ってくれる

世間には、人の世話をし、法事があれば積極的に手伝い、町内会の役員も率先して行なう、いわゆる善人といわれる人たちが沢山おります。でも、どんなに善いことをしても、自分が人間だと思っている限り、決して天国に入ることとはできないのです。なぜなら、人間だと思っている限り、人間以上の波動が出せないからです。この宇宙は科学的にできているので、何よりも法則が優先するのです。だから、どんなに神の名を呼んでも、どんなに讚美歌を歌っても、どんなにお経を唱えても、法則を犯している限り天国には入れないのです。

天国は精妙な波動の世界ですから、鈍重な波動を持っている限り入ることはできません。天国に入りたければ、人間の波動を神の波動まで上げるしかありません。人の称賛が天国に入れるのでも、信心深さが天国

に入れるのも、徳の高さが天国に入れるのもありません。意識の高さが（波動の高さ）天国に入れるのです。

この世で何を成さなくても、意識を高めれば、間違ひなく法則はあなたを天国に連れて行ってくれます。法則は絶対に嘘をつきません。だから私は、瞑想して波動を上げてくださいというのです。

○己を幸せにしている者は他者も幸せにしている

自分を幸せにしている者は宇宙を幸せにしており、他者も幸せにしています。なぜなら、自分は宇宙そのものであり、他者そのものだからです。裏返せば、自分が不幸であれば、宇宙も他者も不幸だということです。

宇宙に一つでも苦しんでいる何かがあれば、自分が苦しくないはずはないのです。その何かは自分だからです。あなたが苦しんでいる人を見て平気でいられないのは、その苦しんでいる人が自分であることを、あなたの魂が知っているからです。

では、自分を苦しめず、他者も苦しめず、宇宙も苦しめないためにはどうすればいいのでしょうか。それは、苦しみを認めないことです。認めないとは、嫌なものを意識に入れられないこと、入れても良きように受け取り、決して心を痛めないことです。そうすれば、苦しみは生まれません。自分が苦しまなければ、宇宙も他者も苦しみません。これが、自分を苦しめず、宇宙も苦しめず、他者も苦しめないコツです。

自分を苦しめている人は、宇宙を苦しめ他者を苦しめている大罪人です。大罪人呼ばわりされたくなければ

ば、決して自分の心の中に苦しみをつくらないことです。それは、コツを掴めば誰でもできることなのです。

### ○生きているとは幸せであること

生きているとは何でしょうか。ただ息をしていること、ただ気持ちの良いこと、ただ痛いこと、ただ楽しいこと、ただ苦しいこと、それが生きていることなのでしょう。

生きているとは、喜びと感動と幸せを心の底で感じている状態です。よく、生きている証が欲しいと肉体を痛めつける人がおりますが、肉体は生きていないし、実際にはないので、そんなことをしたって生きている証が得られるわけではないのです。生きているのは唯一生命（意識）ですから、生命（意識）を喜ばしてこそ、真に生きていることになるのです。

では、生命という意味を、日本の漢字からひも解いてみましょう。

「生命」とは「命」が「生」きると書きます。つまり生命とは、「命」が「生」きているのですよ！と漢字はいつているわけです。日本の漢字は、相対させて読めば意味が解るようになってきているのです。たとえば、姉とは、「市」の「女」と書きますが、「市」とは上または大きいという意味ですから、姉とは上の大きい女という意味になります。もう一つ、田畑という言葉の意味は、「田」とは自然が与えてくれた畑のことを意味します。「畑」とは人力（畜力）を加えてつくった畑を意味します。なぜなら、畑の左辺の「火」はエネルギー（力）を意味しているからです。このように、日本の漢字は、字をよく観察すれば意味が解るようになっていなのです。

横道にそれてしまいました。この宇宙には、唯一「命」のみしか「生」きていないのです。その命は「意識」の別名ですから、意識が生きているのです。その意識は、常に喜びと感動と幸せを求めているのです。生きているとは、まさに、感動に、喜びに、幸せに浸っている意識状態をいうのです。

### ○比べるところに幸・不幸がある

なぜ不幸と思うのでしょうか。なぜ幸せだと思うのでしょうか。それは、他人と比べるからではないでしょうか。もし比べる相手がいなければ、自分が幸せか不幸せか分かるはずがありません。どんなに幸せであっても、どんなに不幸せであっても、それが当たり前と思えば、幸せとも不幸せとも思えないからです。相手と比べてはじめて、私は幸せだと思えるし、私は不幸だと気づけるのです。だから、比べなければ不幸は生まれず、幸せもまた生まれずです。

しかし、これは逆も真なりをいったもので、本当は、幸せも不幸も比べて生まれるものではないのです。なぜなら、幸・不幸は当人だけが感じる主観的なものだからです。本当は、幸・不幸は公平なのです。億万長者が感じている幸福感と浮浪者が感じている幸福感を、どうして比べることができますか。比べられませんか。物質的な豊かさを比べ、幸・不幸といっているだけです。比べるところに幸・不幸が生まれると私はいうのは、客観的見方から生まれた物質界特有の感じ方であって、実際は幸・不幸は比べられないのですから、そのようなことはいえないのです。ただし、物質界特有の感じ方ができればこそ、私たちは人に負けないうよう頑張り努力するのですから、幸・不幸を客観的に感じるには決して悪いことではないのです。

○天国は自分で持ってくるしかない！

すでに述べたように、天国という場所があるわけではありません。天国は、私たち一人一人の心の中にあるのです。それは意識状態として、心的状態として。だから、天国に入りたければ、自力で天国を持ってくることができるのです。多くの人は、何かをして天国に入ろうとします。たとえば、善いことをして、宗教に入って、神にこびて……。でも、どんなに人のために尽くしても、どんなに宗教に入っても、どんなに神棚や仏壇に手を合わせても、どんなに神に頭を垂れても、幸せな心を持っていなければ天国に入ることはできないのです。天国は外にあるのではなく、私たちの幸せな心の中にあるからです。

では、何が幸せな心にしてくれるのでしょうか。

- ・ お金がしてくれるのでしょうか。
- ・ 財産がしてくれるのでしょうか。
- ・ 地位や名誉がしてくれるのでしょうか。
- ・ 家族がしてくれるのでしょうか。

いいえ、本当の自分を知った心がしてくれるのです。本当の自分を知れば、心は幸福感に満たされます。だから、自分で天国を持つてくるしかないというのです。

では、具体的にどうすれば本当の自分を知ることができるのでしょうか。必要なのは、生命に対する己の理解力です。納得力です。自覚力です。それを可能にするのが瞑想です。さあ、瞑想し、自分の手で天国を



持ってきましょう。

○ **幸せをもたらすのは心である**

ラジオやテレビの始めの頃は、番組も少なかったので、家族全員が同じ番組を見ていました。食事も家族全員で食卓を囲み、同じ時間に、同じものを食べていました。また、どこか旅行に出かける場合も、家族全員で行ったものです。何をすることも家族全員が参加し、共に楽しみ、共に夢を膨らませたものでした。ですから、その頃は家族全員が一つになっている実感があったものです。

今はどうでしょう。経済的に豊かになったお陰で、家族一人一人が自分の部屋を持てるようになりました。テレビも、一人一台あてがわれるようになりました。旅行も、自分の稼いだお金で勝手に行けるようになりました。確かに見かけは幸せそうに見えますが、本当に幸せになったのでしょうか。豊かになった今日の方が、家庭崩壊・殺人・強盗・自殺・事故・病気などが多くなっているではありませんか。こうして見ると、豊かさとは幸せは関係ないように思います。

そうです。幸せは物やお金に関係しているのではなく、一人一人の心の在り方が関係しているのです。幸せを感じるのは肉体ではなく、心だからです。私たちは物事を逆さまに見ているのです。

物が有るから心が有るのではなく、心という原因が有って、物という結果が有るのです。同じように、幸せも、心という原因が有って、幸せという結果が有るのです。心は原因で、幸せは結果です。どうか、原因（心）あつての結果（幸せ）であるという、幸せの原理を知ってください。

○外側に苦の種はあっても幸せの種はない！

どんなに美しく装っていても、どんなにきらびやかに飾っていても、外側には何一つ幸せの種はありません。なぜなら、外側の物はすべて消えゆく幻だからです。幻を手にして幸せになった人など、いまだかつて一人もいないのです。

五官に入ってくるものは、みな苦しみの種になるものばかりです。なのに人間は、どうして外側に幸せを求めたがるのでしょうか。それは、幸せの種がどんなものか、どこにあるのか、知らないからではないでしょうか。

幸せの種は、私たちの心の中にあるのです。その種は見えないし触ることもできませんが、間違いなく一人一人の心の中に実在するのです。その種は宇宙に一つしかない、「生命」という掛け替えのない種です。その種は、腐ることも摩耗することも、増えたり減ったりすることもない、不変にして不動の種、永遠にして無限の種です。その種に水を与え、光を与え、肥料を与え、大切に育てましょう。そうすれば、きっと芽を吹き、花を咲かせ、実を結ぶことでしょう。

- ・ 知識がその水です。
- ・ 理解力がその光です。
- ・ 瞑想がその肥料です。

### ○なぜ神様は「飽き」をつくられたのか

どんな楽しいことも、同じことを繰り返していると必ず飽きがくるものです。この世に飽きのこないことなど、何一つないのです。飽きないことを望む人がおりますが、もし飽きなかったらそれは苦しみとなりませんか。考えても見てください。同じ家族同士が、永遠に顔を突き合わせていられるでしょうか。同じ環境の中に、永遠に閉じこもっていられるでしょうか。永遠にですよ。多分、もう沢山だ！ 何とかしてくれ！と叫びたくなるでしょう。

滞りは宇宙の死です。飽きがくるから、新しいものを求めて努力するのです。飽きがくるから、進歩発展しようと努力するのです。もし飽きがこなかったら向上心は湧かないでしょうから、進歩も発展も望めないでしょう。神様が飽きのくる仕組みをつくられたのは、宇宙に新鮮さを吹き込み、進歩発展させるためなのです。

### ○両極を知って真の幸せを知る

この宇宙に一方通行はありません。押せば押し返されます。引けば引き返されます。やればやり返されます。与えれば与え返されます。今、私たちは相対的体験を通して、何が善いか悪いか学んでいる真つ最中なのです。

- ・楽しいことばかりが善いではありません。苦しいことも善いのです。
- ・幸せなことばかりが善いではありません。不幸せなことも善いのです。

・良い眺めばかりが善いではありません。悪い眺めも善いのです。

このようにいうと、マゾヒストのように聞こえるかもしれませんが、もし毎日ご馳走ばかり食べていたら、ご馳走がご馳走でなくなってしまうのではありませんか。毎日同じ美人と接していたら、その美人に何の魅力も感じなくなるのではありませんか。毎日楽しいことはかりしていたら、楽しいことも楽しくなくなってしまうのではありませんか。いや、楽は苦の対極にありますから、逆に苦しくなるでしょう。

私たちは極右と極左を体験し、中庸の有り難さや素晴らしさを知るのでした。このことが分かってくると、どちらにも偏らない中道・中庸を歩むようになります。私が苦しいことも楽しいこともあつていいといったのは、中庸を発見するためであり、苦しいことや楽しいこと自体をいいといったのではありません。

神は愛なりです。愛こそ、中庸こそ、真の幸せの原点であることを知ってください！

### ○私たちが求める究極のものは何か

「人生は重き荷を背負って遠き道を行くが如し！」という名句がありますが、その思いは、今生、いやと  
いうほど苦しみを味わった者ほど強いようです。だから、このまま眠りに就き、二度と目覚めなければどれほど幸せかと思いたくなるし、永遠に意識の途絶えることを夢見たりもするのです。

しかし、私たちの意識は、永遠になくなることはありません。どんなになくなりたいと願っても、決してなくなることはないのです。なぜなら、私たちそのものが宇宙そのものだからです。もし私たちの意識がなくなるなら、宇宙もなくなってしまうことになり、すべて「無」の中に葬り去られてしまうことになります。

そんなことは絶対あり得ないわけですから、宇宙も私たちも決してなくなることはないのです。もう諦めましょう。自分の意識がなくならない事実を認めましょう。それよりも、絶対なくならない自分の意識をどのような状態に置けば幸せか、そのことだけを考えましょう。

そうです。永遠の意識（命）を持つ者の究極の望みは、いかに自分の意識を幸せの中に留め置くことができるか、それも永遠の時の中に絶対飽きない状態で、なのです。

その幸福感とは、

・とろけるような幸福感……。

・とろけるような喜び……。

・とろけるような気持ちの良さ……。

・満ち足りた喜び、満足感……。

・喜びを喜びとも思わせない静かな喜び……。

・永遠にそこから出たくない平安と安らぎ……。

・どんな言葉を持ってきても表現できない究極の幸福感……。

そうです。この幸福感は伝えようがないのです。一人一人が自分で味わうしかないので。いずれにしても、この幸福感を掴まがために、今、私たちは奮闘しているのです。

## ○天国に入るカギは!?

これまで述べてきましたように、良いことをしたから天国に入れるのも、宗教をやっていたから天国に入れるのではありません。その人の理解力が天国の扉を開くのです。つまり、心の底から「私は生命である!」と思えるようになって、はじめて天国に入れるのです。だから、どんな極悪人も改心し、自分が生命であると思えるようになれば、天国に入ることができるようです。それゆえに、私は、天国に入るチャンスを手で奪う死刑などあつてはならないというのです。

世の中には「あの人は人のために尽くしているから、間違いなく天国に帰れますよ!」という人がおりますが、天国に入るのに、善人悪人、頭の良し悪し、お金の有るなし、地位や名譽の有るなしなど、一切関係ありません。

天国に入るカギは、

- ・ 自分は生命である!
- ・ 自分は宇宙である!
- ・ 自分は神である!

と、心の底で思えるようになることだけです。思えるようになることは、そのものになることです。頭で知っただけでは何の変化も起きません。変化が起きるのは、心の底でそう思えた時です。愛だ! 調和だ! 分かち合いだ! と、美しい言葉を並べても、どんなに素晴らしい讃美歌を歌っても、本当の自分が自覚でき

なくては、天国に入ることはいけません。宗教家のいつている天国など、どこにもありません。だから宗教家で天国に帰った人は、いまだかつて一人もいないのです。

### ○人はなぜ三欲に走るのか

世の中には、酒に溺れ苦しんでいる人がおります。麻薬の虜になり苦しんでいる人がおります。パチンコ、競馬、競輪など、ギャンブルから足を洗えず苦しんでいる人がおります。情欲や性欲に溺れ正気を失っている人がおります。ブランド品を買いきり満たされぬ心を慰めている人がおります。人はなぜこのような過ちを犯すのか。その心理状態を追求してゆくと、面白いことが分かってきます。

私たちは、意識するしないにかかわらず、常に真の幸せを求めているのです。でも、どうしたら真の幸せが得られるかが分からない！ だから、一番簡単に得られると思われる、食欲・性欲・物欲の三欲に走るのです。

この社会では、お金が三欲を得る手段となっていますので、どうしても拝金主義へ傾いてしまうのです。地位や名誉や権勢欲に走るのも、突き詰めればみな真の幸せを得たいがためです。ですが、三欲を満たしても、地位や名誉や権勢欲を満たしても、真の幸せは得られません。当然です。真の幸せはこの物質の世界には（五官の中には）ないからです。

覚者になぜ欲がないかといいますと、真の幸せに直接触れる技術を身につけているからです。しかし、私たちはその方法を知りませんので、五官を刺激しては、かりそめの幸せに浸っているのです。真の幸せを得

るためには、本当の自分を知ることです。本当の自分を知れば、真の幸せに直接触れることができずから、もう麻薬や酒、性欲などの代替品はいらなくなるのです。真の幸せを得たい人は、どうか本当の自分を知ってください。

### ○幸せの進化とは？

幸せの進化とは、生命の目覚めに比例して、幸せの味が増してくるという進化です。自分が人間だと思っている限り、人間としての幸せしか求めないし、事実、人間としての幸せしか掴めません。でも、生命の自分を追究するようになれば、自覚に比例した幸せが掴めるようになるのです。人間が求める幸せは一時の幸せ、色あせる幸せですが、生命が求める幸せは永遠の幸せ、色あせない幸せなのです。

幸せは、

- ・ 生命の実体を深く知れば知るほど味が増すのです。
- ・ 理解力が深まれば深まるほど味が増すのです。
- ・ 気づきが深まれば深まるほど味が増すのです。
- ・ 自覚が深まれば深まるほど味が増すのです。

この宇宙は、悟りが深まれば深まるほど幸せの味が増すようになっているのです。

### ○神の平等性は幸せについても同じである

神の平等性の一つに、幸福の平等性があります。どのような平等性かといいますと、人それぞれの幸福度



は比べられないから平等である、という平等性です。

幸福度というものは、客観的に測れるものではありません。幸福というものは主観的なものですから、幸せと思う幸せ度はみな平等なのです。幸福度は人と比べることなどできないわけですから、私はあなたより幸せだ、とは誰もいえないのです。もしいう人がいるとすれば、それは自己満足に過ぎないのです。比べられない幸せは、みな平等なのです。

この人とあの人の幸せ度を、どうして外から測ることができるでしょうか。幸せは当人の感受ですから、測りようがないのです。ということは、悟っている人の幸せ度も、悟っていない人の幸せ度も、みな同じであるということです。どれだけ魂的に差があらうと、幸福度だけは測れないのです。だから神の平等性は素晴らしいといえるわけです。

私たちは、成長していくにしたがい、幸せの階段を一段一段昇っていくことは確かです。でも、その幸せ度は、永久に測ることができないのです。つまり、人と比べることは永久にできないのです。本人だけがその幸せの高さを知っているのです。本人の成熟度に見合った幸せ度は、本人だけが知る幸せの高さです。これが、この宇宙における幸せの平等性の実態なのです。

幸せには限界がないのです。それは測りようがないからです。測れないものは無限なのです。無限なるがゆえに、私たちは無限の幸せの中に永遠に浸ることができるのです。この、比較できない幸福の平等性は、主観宇宙の根本原理を成している部分ですから、深く心に留めておいてください。

( 9 ) 覚者の思い

○覚者の思いを推し量ることはできない

覚者の思いを推し量ることは誰もできません。それは、夫婦であろうと、血を分けた親子であろうと、兄弟姉妹であろうとも、です。覚者の意識は無限大になっているからです。無限をどうして推し量ることができるとでしょうか。ですから、決して覚者を批判してはならないのです。

覚者の言葉を、

- ・素直に受け入れましょう。
- ・素直に信じましょう。
- ・素直に実践しましょう。

そうすれば、覚者の思いの深さ、知恵の深さを知ることができます。

○覚者の真の姿を見る

神の化身がこの世で活動するには、この世の言葉や習わし、ルールなど、人間臭い表現方法を身につけてはなりません。自我の世界では自我の表現方法(個性)が必要だからです。しかし、それが仇<sup>あだ</sup>となつて、誰も神の化身と認めようとしません。特に、肉親や近親者にその傾向が強く見られます。ですが、どんな人間臭くても、口にする言葉は神の言葉に違いないのです。

高い意識の持ち主は、覚者の言葉の中に強いエネルギーを感じ取っています。また、意識を高めてくれる強い思いも受け取っています。気持ちの良い波動で全身が震える体験もしています。しかし、意識の低い人はそれが分からないのです。彼らにとって覚者の言葉は、ただ空気を揺らす振動にしか過ぎないのです。たとえ真剣に聴いていても、受け取り方が違っているため真意が伝わらないのです。

人間を見ないでください。姿形を見ないでください。言葉尻だけを捕らえ判断しないでください。覚者の背後に鎮座する、神の御姿を見てください。それが覚者の真の姿なのですから……。

このようにいうと、覚者を神秘化してしまいそうですが、覚者も私たちと同じ生命から生まれた兄弟姉妹で、何一つ変わりません。ただ、覚者には生命の自覚があり、私たちにはその自覚がないだけです。

だから、覚者を決して神秘化しないことです。と同時に、自分も卑下してはなりません。覚者も私たちも、同じ神であり生命であることに違いはないのですから……。

### ○外から呼びかける覚者

一旦ポディーを持ってば、ほとんどの人は本当の自分を見失ってしまいます。本当の自分を見抜く人は稀で、ほとんどの人は気の遠くなる年月さ迷い続けます。

このままでは、永久に迷い続けなくてはなりません。そこで、神は自分の分身を送り、外側から迷っている人たちに呼びかけることにしたのです。それが肉を持った覚者たちです。

神の御使いは、私たちが心を開くのを待っています。そして、準備のできた者に呼びかけます。「さあ、

私の下において下さい！」と……。外側に夢中になっている者は気づきませんが、心を開いた者は気づきません。そして集まってきました。「あなたたちは、自分でここに来たと思っっていますが、私が呼んだのですよ！」と覚者がおっしゃるのは、そのことをいっているのです。

### ○自然熟成の法に従う進化の歩み

ある人はこういいます。

「本当に覚者がいるなら、即座に地球をユートピアにできるはずだ！」と……。

確かに、神の意識に達した者なら、どんなことでもできるでしょう。でも、覚者はそうはしません。宇宙には、進化の歩みは自然熟成の法に従わねばならない！という、暗黙の決まり事があるからです。一人の手で一挙に進化を押し進めるのは、自然熟成の法を犯すことになり、宇宙のバランスを崩しかねません。もし強引に押し進めるなら、大きな代償を払わねばならないでしょう。

青柿は決して食べられません。また、寿命半ばの若人の死は大きな苦しみを伴います。自然に熟成すれば美味しいし、寿命をまっとうした人の死は苦しみを伴いません。だから神は、自然熟成によるユートピアを気長に待っているのです。

### ○実相を見ている覚者

イエスは、手を下さずに病を癒したといわれますが、なぜそのようなことができたのでしょうか。それは、仮相（闇）を見ず、実相（光）を覗いていたからです。私たちの実相は神ですから、そこには光があるだけで

す。イエスは、病も悩みも不幸も闇の産物であることを知っていましたので、闇を無視し、光だけを観て病を癒したのです。

人間は、自分の中に全知全能の神がおられるのに、それを認めようとしません。認めれば即神そのものになれるのに、どうしても形を見て人間だと見下げてしまうのです。人間と思えば、人間以上の力が発揮できないのは当然です。認めなければ一億円持っただけでも使えないように、認めなければ神の力も使えないのです。

知花先生が時々「私はあなたたちを人間として見ているではありません。神として見ているのです!」とおっしゃるのは、そのことを知っているのです。

### ○理解してくれる者だけに伝える

神の自覚を得るのは容易なことではありません。この自覚という言葉さえ、ほとんどの人が理解できないのです。だから知花先生は、すべての衆生に真理を伝えるのではなく、理解できる人だけに伝えようとしてきたわけです。先生が「来る者拒まず、去る者追わず」の姿勢を貫いてこられた理由はそこにあるのです。

今は理解できなくても、覚者の話を聴いていけば、後々重要な布石になることは間違ありません。ですから、今理解できないからといって諦めないでください。また、真理の縁を結んでおくためにも、今のチャンス逃さないようにしてください。今日あなたが学んでいられるのも、過去生において縁を結んでいたからであって、偶然に学ぶようになったものではありません。求道は永遠と続くものです。決して閉ざさないこ

とです。決して足踏みしないことです。

### ○覚者の歯痒さ

覚者が一番歯痒く思うのは、真理を理解してもらえない歯痒さです。いや、理解してもらえない段階ならまだしも、それ以前の段階で、さらにそれ以前の段階で、すでに理解の境界線から遠のいている歯痒さです。このように、いつていることさえ理解してもらえない歯痒さに、覚者は落胆と諦めの狭間で唇を噛んでいるのです。

解ってもらえる言葉がない！ 文字がない！ 思いを入れてもらえない隙間がない！ まさにお手上げ状態です。私たち求道者でさえそうなのですから、一般人ならなおさら分かるはずがありません。ただ時期が来るまで見ていないしかない！ ただ黙って氷の融けるのを待つしかない！ これほど歯痒いことがありますか。

でも、仕方ありません。青い果実を強引に赤くすることなどできないのですから……。たとえできたとしても、人工的に赤くしたのではまともな味が出せるわけがありません。だから覚者は、愛の目でジツと熟すのを待っているのです。

### ○増やすか。減らすか

こんな譬え話があります。ある会社の社長が、三名の社員にある金数のお金を与え旅に出ました。数年後、旅から帰った社長は、三名の社員を呼びつけ、与えたお金がどうなったか訊ねました。

一人の社員は、与えられたお金をすべて使い切り、一文なしになっていました。もう一人の社員は、一円のお金も使わず大切に持っていました。三人目の社員は、与えられたお金を投資し、莫大な財産を築いていました。

さて、社長は、三人の社員のうちの社員を褒めたでしょうか。

この譬え話は、与えられた真理を俗世の泥にまみれ失った人と、与えられた真理は大切にはしていたが、少しも理解力を高めなかった人と、与えられた真理を自力で追究し、何倍もの理解力を高めていた人の中で、誰が真の求道者だったかを問うている話なのです。

○真理が一つなら教えも一つでなくてならない

真理は一つしかありません。一つの真理しかないならば、教えが二つも三つもあるわけがありません。答えが一つしかないのに、二つも三つも違う答えが出てくるわけがないからです。覚者の言葉が一つの教えで固まっているのは、真理が一つしかないという証なのです。今この世の中に沢山の宗教があるということは、間違った教えが沢山ある証であり、それはとりもなおさず、ニセモノの指導者が沢山いる証でもあるのです。ある人がこんなことをいっていました。

「知花先生は昔こんなことをいっていたのに、今はこのようなことをいっている、いっていることが違ってきているのではないか」と……。

確かに、表現の仕方は変わってきているかもしれませんが、ですが、真理の内容そのものは何一つ変わって

いないのです。どんな人も進歩しているのです。覚者として同じです。昔より今の方が表現の仕方に進歩があつて当然ではありませんか。

### ○覚者の言葉には無限の思いが込められている

真理は文字や言葉で伝えられないといわれるように、文字や言葉は実に不便です。多く使えば使うほどのから遠のいてしまうのが、文字や言葉であります。だから覚者は語彙をできるだけ少なくし、簡潔に語るうとするのです。

といっても、覚者の言葉の本身はすべて別モノです。たとえば「愛」という言葉一つ取って見ても、今朝語った「愛」と昨夜語った「愛」とは違うのです。覚者は一つの言葉の中に、無限の思い（意味）を込めることができるのです。ですから、同じ言葉でありながら、初心者には初心者、理解力に合った内容となつて、中級者には中級者の理解力に合った内容となつて、古参者には古参者の理解力に合った内容となつて届くわけです。しかも、その言葉は永遠に生き続けているのです。ある日突然気づきが始まるのはそのためです。気づきは成長の証です。意識が高まると理解力が高まるため、気づきが始まります。気づきが始まると自覚が高まり、さらに意識が高まります。意識が高まると理解力が増すため、次の気づきにつながります。その気づきはさらなる自覚を高めます。こうして自覚の階段を上っていくのです。できるだけ覚者に添いなさいといわれるのは、覚者の生の言葉には、理解力を高めてくれる強いエネルギーが込められているからです。



## ○覚者がお金を求めない理由

お釈迦様もイエス様も、在家からいただいた貢物（寄付）と山や川の幸で生活しておりました。知花先生も、十数年間朝晩講話しておられましたが、一円のお金も取ったことがありませんでした。なぜ覚者はお金を求めないのでしょうか。理由はこうです。

・真理は自分が与えるのであって、人（覚者）が与えるではありません。だからお金を取ってはならないのです。いや、取れないのです。何でもそうですが、与えてこそお金が取れるのです。与えないで、どうしてお金が取れるのでしょうか。

・神が語り、神がエネルギーを与えているのに、どうして人間（覚者）がお金を取るのでしょうか。これでは、神様から、あなたは盗みの罪を犯していますよ、といわれても仕方がないでしょう。

・話は、聴いてくれる人がいて成り立つのです。これはおあいこなのです。だから、話す人がお金を取って、聴く人がお金を払うというのはおかしいことなのです。

・知花先生はよくいいます。「私は話しながら自分も学んでいるのですよ!」と……。そうなのです。この宇宙に一方通行はないのです。与えれば必ず与え返されます。これは宇宙の法則なのです。なのに、人からお金を取っては、二重取りになってしまいます。

・与える喜びは、もらう喜びより大きいのです。そんな喜びをもらっているのに、お金を取っては、これも二重取りになってしまいます。私が、お金をもらって嫌な気分になるのは、喜びが相殺され小さな喜びに

変わってしまうからです。

・一番恐ろしいのは、見返りを望む欲の心を育ててしまうことです。これは、他力依存につながる落とし穴で、最も注意しなければならぬ点です。悲しいことですが、人間はお金を出した分、見返りをもらわなければ損だと思ってしまうものなのです。真理を学んでそんな心を育てるなら、学ばない方がましです。

・神は、貧乏人であろうとお金持ちであろうと、悟りの機会を平等に与えています。なのに、貧乏人が学べないのでは、悟りの平等性を欠いてしまいます。悟りの門戸をできるだけ広くしておくのが覚者の務めです。だから、ホンモノの覚者は、決してお金を取らないのです。神の名を語ってお金儲けしている人は、詐欺を働いているといわれても反駁できないでしょう。神はお金を必要としません。お金を必要としているのは人間だけです。

### ○なぜ覚者は簡潔に語るのか

機械を部品ごと細かく解体すると、全体像がボヤけてしまいます。真理も同じで、明細に説明すればするほど核心から遠のいてしまうのです。

私たちは、宇宙を総合的に知らねばなりません。それには、全体像をできるだけ簡潔に説明し、あとは聴いた人の理解力に委ねた方が間違いないのです。なぜなら、聴いている人の中に、何でも知っている全能の神がおられるからです。覚者から聴いた言葉を自問自答し、全能の自分から答えを得る、これほど確実なことはないでしょう。

○不平をいう前に実践しよう！

よく、師の教えに不平不満を漏らす人がおりますが、「ではあなたは頂上まで登ったのですか」と私はお訊きたい……。まだ裾野にいながら、景色が悪いと不満を漏らすのはおかしな話ではないでしょうか。素晴らしい景色が見たければ、頂上に登って見ることです。きっと景色の素晴らしさに、啞然とさせられることでしょう。

恩師はよくいます。「私の見ているものをあなたたちにも見せてやりたい！」と……。これは、一日も早く素晴らしい景色を見せてやりたいという、親心から出た言葉なのです。

○自分を失うのを恐れている

知花先生はおっしゃいます。「あなたたちは、靈的自覚を持つことによって、自分がなくなってしまうのではないかと……。」「

そんなことはありませんので安心してください。

確かに、靈的自覚が高まれば、人間臭さは剥落はくらくしていきます。たとえば、テレビや映画などにあまり興味を持たなくなる、どんな娯楽も馬鹿らしくなる、あまりおしゃべりをしたくなくなる、肉親の情に流されなくなる、といったふうに、昔とは違った自分に変わっていきます。でも、どんなに靈的に目覚めても、個性を失うことはありません。なぜなら、全体は個性の集まりだからです。

氷が水に溶ければ全一の水となります。一滴の水が大海に戻れば全一の水になります。そうなれば、

知恵も力も無限大になるでしょう。しかし、いかに全一体になろうと、一個の分子としての記憶と個性は失うことはないのです。小さな自分と大きな自分は、どこまでも一つです。個の自分と全体（無限）の自分は、どこまでも一つであり続けるのです。

### ○賢者は必然に生き 愚者は偶然に生きる

すべてが必然によって運ばれているがゆえに、私たちは日々安心して生きられるのです。もし偶然というものがあるなら、いつもビクビクして生きねばならないでしょう。「必然」は神の愛の証です。悟り人がいつも穏やかでいられるのは、神の愛を心より信じているからです。神に生きていられるなら、そこに不幸はありません！ その不動の確信が安心感を生み出しているのです。

神に生きるとは、光（法則）に生きることです。光の中に闇は入ってこられませんから、光に生きている者は安泰なのです。賢者はそれを知り、光に生きているわけですから、心穏やかに生きられるのは当たり前なのです。でも、愚者はそのことが信じられないため、自ら不幸の種をまきながら、それを偶然と考え、苦しみや悲しみに喘いでいるのです。賢者は必然に生き、愚者は偶然に生きるとは、そういった意味なのです。

確かに、不幸を偶然の名で処理してしまえば、自分が責任を取る必要がないように思えて、気分的には楽かもしれません。ですが、それはそう思っているだけで、実際は自分が責任を背負っているのです。痛みとして、苦しみとして、悲しみとして……。その証に、愚者は様々な悩みや苦しみを持っているではありませんか。この宇宙に偶然など一つもありません。すべて必然です。原因あつての結果です。

○人間は偉大な能力の持ち主である

ヒマラヤの聖者たちは、姿を消したり、水の上を歩いたり、空中から物を取り出したり、色々と不思議な事ができるといわれます。彼らも私たちも、何ら変らぬ手順を踏んでこの世に生れた人間なのに、なぜそのようなことができるのでしょうか。

この宇宙に特別な人間など一人もおりません。ただ、ヒマラヤの聖人たちには「生命」の自覚があり、私たちにはないだけです。だからイエスはいわれたのです。「本当の自分を知れば、あなたたちも私以上の御技を成すであろう!」と……。しかし、私たちは自分人間として見下げて生きています。そして、何か不都合が生じると、人間だから仕方がない、といって自己弁護しています。

そうです。

- ・人間だから仕方がないのです!
- ・人間だから悪いことをするのです!
- ・人間だから愚かな戦争をするのです!
- ・人間だから病気になるのです!
- ・人間だから不幸になるのです!

自ら無能な人間に成り下がり、幸せになりたいなどあまりにも虫がよすぎます。悪を犯す人間を認めながら、幸せが欲しい! 健康が欲しい! と願うのは、矛盾というものだからです。幸せになりたかったら、

人間を認めないことです。

この宇宙には、私たちの知らない神秘がごまんと存在します。でも知ってしまえば、神秘は当たり前になるのです。ヒマラヤの聖者たちを特別な人間と思うのは、宇宙の仕組みを知らないからです。本当の自分を知らないからです。本当の自分を知らなければ、誰もが、何だ当たり前なのだ！ と苦笑するはずですよ。

○覚者の言葉に無駄なものはない！

何気なしに語っている覚者の言葉をよく噛み締めてみると、実に深い意味合いがあり、感心させられます。言葉一つ一つに、自覚へ導く味と、響きと、香りが折りたたまれているのです。

たとえば、

- ・ 境目が無い。
- ・ 全体は一つ。
- ・ 一元である。
- ・ 切り離せない。
- ・ 独立したものなどない。
- ・ 源は一つ。
- ・ 一つのものだから分けられない。
- ・ 大いなる一体、等々……。

言葉尻だけ捕らえれば何の変哲もない言葉ばかりですが、覚者の口を通すと生き物に変わるのですから驚きです。一言一句が自覚の呼び水になり、気づきの切り口になっているのです。だから、覚者のどんな言葉もよく噛み締め、味わうことが大切なのです。さあ、もう一度聴き直しましょう。もう一度読み直しましょう。

### ○根気よく訴えかける覚者たち

波頭の生みの親は大海ですが、波頭は自分のことを大海だと思っていない。だから、海に帰ってもすぐに戻ってくるのです。そのまま放っておいたのでは、いつまでも波頭と大海の間を行き来し続けるでしょう。そこで大海は、波頭を目覚めさせるべく導き人を派遣したわけですが、それが釈迦であり、イエスであり、知花先生であり、名もない覚者たちです。

派遣された覚者は波頭の一つに姿を変え、外から根気よく訴えかけます。「あなたは波頭（人間）ではなく、大海（生命）だよ！」と……。訴えかけているうちに、一人、また一人と、目覚める者が出てきます。波頭にはそれぞれ誕生の歴史の違いがあるため、一挙に目覚めることはありません。だから、覚者が目指す当面の相手は、熱しかなかった果実です。一人でも目覚めさせることができれば大成功です。私を手ぶらで帰さないでください！という知花先生の言葉の裏には、目覚めさせることの大変さが伺い知れます。でも、どんなに大変でも、覚者は決して諦めません。一人でも多く目覚めさせようと、今日も、明日も、明後日も、必死になって訴え続けているのです。

二〇一二年にアセンションが起き、人類の意識が変わるといわれてきましたが、知花先生のような覚者たちの出現によって、着実に人類の意識は変わりつつあります。アセンションとは、覚者たちの言葉によって地上に真理が根づくことをいっているのであって、何か特別な力によって人類の意識が変わるわけではないのです。その意味では、アセンションはすでに始まっているといえるでしょう。

### ○天の道を示す覚者

これまで、沢山の宗教の指導者たちが世に輩出されましたが、ほとんどの指導者は人の道を解くことに終始し、天に入る道を説こうとしませんでした。なぜでしょうか。それは、どの指導者も天がどこにあるか知らなかったからであります。

知花先生は自分がどこから来て、どこに帰るか知っております。天に入る道を知っているのです。だから、我は道なりと平然と公言し、私に添いなさい！ 私に着いてきなさい！ と訴え続けているのです。

知花先生のような指導者が出てきた背景には、地球の事情があるようです。地球に一大転換期が近づいているようなのです。今地球に熟した魂が沢山生まれているのはそのためです。彼らは言葉に囚われぬ優秀な魂ばかりです。だから、知花先生は、これまで誰も公になかった「密教」を開き、一つの思想になるような説き方をしているのです。

先生は、見事なまでに真理をスリム化して説いております。これほど分かりやすく説いた指導者は、いまだかつて一人もいなかったでしょう。



といつても、天に入るには自力に寄らなくてはなりません。どんなに解りやすく説かれても、天に帰る方法は昔も今も何ら変わらないからです。だから先生は、「生半可では駄目ですよ!」と口癖のようにいわれるのです。それほど、天に帰る道はイバラで、細く、長く、厳しいということです。

○悟りに「ねばならない」という言葉はない!

酒を飲み、タバコを吸い、妻子を持つ者に、ホンモノの覚者はいない、という人がおりますが、そんなことはありません。悟りはあくまでも本人の志次第シツジです。それを実証して見せてくれたのが知花先生です。知花先生は、大酒を飲み、タバコも吸い、妻帯もし、五人の子供も設けていますが、やる気と強い意志があれば、そんな障害など問題ではないということを、私たちに実証して見せてくれたのです。

学びの友の中にも酒を飲み、タバコを吸い、家族を持つている人たちが沢山おりますが、それが障害となつて悟れないなら、その人たちは今生諦めなくてはなりません。先生は、そんな人たちのために、悟りは形ではなく、本人の志次第だということを自ら実証して見せてくれたのです。先生だって、わざわざ障害物を背負いたくなかったはず。事実、先生の計画は10年遅れたといわれます。それでも、10年遅れても、既成概念を打ち壊す方が重要だったのです。だからといって、先生の真似をしないでいるのではありません。障害物は少ない方が良いに決まっています。それでなくても、悟ることは難しいのですから……。

○常人にはできない普及への熱意

本当の自分を知るのは容易なことではありません。このことは、自覚が深まれば深まるほど思い知らされ

るものです。ですから、覚者は一旦普及を諦めてしまうのです。しかし、宇宙の仕組みを深く知れば知るほど己の役割の大きさに身震いし、何としても伝えねばと、再び憑かれたように普及活動に熱を入れるのです。それが言葉が強める理由です。常人なら、何年も説いていればトーンが下がるところですが、知花先生の場合は益々高くなっているのです。これは驚くべきことです。

この思いの陰には、数少なくても必ず解ってもらえる人がいるはずだ、との強い確信があるからだと思います。知花先生の熱意は常人ではありません。それが、覚者の覚者たるゆえんなのでしょうが……。

### ○聖者は自分の中におられる

多くの人たちが、聖者を求めヒマラヤに行きます。しかし、いまだかつて聖者に巡り会った人は一人もおりません。当然です。聖者は外にいたるのではなく、自分の中におられるからです。自分の中に聖者を見つけれない人が、どうして外に聖者を見つけれましょうか。外には幻しかありません。幻から真実を見つけることなどできるわけではないのです。聖者に会いたいなら、自分の中を探すことです。

- ・自分の中に聖なる泉があるのです。
- ・自分の中に聖なるヒマラヤがあるのです。
- ・自分の中に聖者キリスト・仏陀・知花先生がおられるのです。
- ・自分の中に聖書があるのです。

だから、いわれるのです。「神を知る前に己を知りなさい！ 己を知ったとき神を知るのである」と……。

「聖者に会う前に己に会いなさい！ 己に会ったとき聖者に会えるのである」と……。聖者も、聖なる場所も、聖書も、自分の中におられるし、あるのですから、わざわざ外に探しに出かける必要はないのです。イエス様を拝んではなりません。お釈迦様を拝んでもなりません。聖者を拝む者は、みな偶像崇拜者です。聖者は拝むべきものではなく、「見習うべき」ものです。

**匠の技を知るのは、真に匠の技に近づいた者だけである！**



# 第二章

## 宇宙を探る

宇宙は単純でありながら、多面的な顔を持っております。それも目に見えず肌で感じない顔です。その顔の見えない多面的な宇宙を採るには、多面的な角度から光を当ててみる必要があります。そのことを踏まえ、この章では、さまざまな角度から宇宙を採ってみたいと思います。

( 1 ) 一から宇宙を探る

○宇宙に一つのものしかないことを知る

この宇宙に存在する全てのものは、一つのもので創られ、一つのもので生かされ、一つのもので働かされています。その一つのものとは、生命のことです。私もあなたも鉱物も植物も動物も、すべてこの一つの生命によって創られ、一つの生命によって生かされ、一つの生命によって働かされているのです。形は様々でも、その中で思い、考え、働いているのは唯一の生命なのです。生命の世界においてあなた私はありません。すべて「私」です。このことを知れば、誰とも仲良くなれます。もうその世界に、どのような不都合もどのような争い事もなくなります。すべて自分だと知った者が、どうして人を憎んだり怒ったり争ったりできるでしょうか。人は自分ですから、自分を相手にどうして憎み怒り争えますか、ということなのです。

○一つ目になるとは？

一つ目になるとは、何を見ても生命だと思えるようになることです。この宇宙に存在するものはみな生命の化身ですから、山を見ても花を見ても、動物を見ても人間を見ても、何を見ても、生命だと思えるようになることです。そう思えるようになった者は、一つ目になったのです。

・一つの生命が、様々な形を現わしている。

・様々な形は、一つの生命の表現媒体である。

- ・ 生命は、内にも外にも到る処に存在している。
- ・ 自分を現わしているのは、唯一の生命である。

この理解力を高めましょう！

もし、どんな物も生命だと心の底で思えたら、自分も生命だと思えるようになるでしょう。そうになると、自分の細胞が震えてきます。自分が光つてきます。これは、自分が生命に蘇った証です。これは、大変な偉業です。

### ○コップとガラス

「ガラスがある形をとった。その形にコップという名をつけた。コップ、コップと呼ぶうちに、本当にコップがあるかのような錯覚に陥ってしまった」

このコップとガラスの話は、知花先生が最も理解して欲しいと願っている部分です。コップとガラスの話の中に、真理が集約されているのです。だから先生は、常にコップを前にしてコンコンと説いているのです。

この理解が心底でなされたら、細胞が震えてきます。自分が光つてきます。内的光が見えてきます。そのために、コップと睨めっこしてください。そして、何があるからコップがあるのか深く考えてください。

深く考えれば、実際にあるのはガラスで、コップは形につけられた名前にしか過ぎないということが分かります。しかし、どうしても形に囚われ、コップをガラスだと思えないのです。でも、コップを粉々に壊してしまえば、途端にガラスだと思えるのです。



では、この話を、人間と生命にそっくりそのまま当てはめて考えてみましょう。

「生命がある形をとった、その形に人間という名をつけた。人間、人間と呼ぶうちに、本当に人間がいるかのような錯覚に陥ってしまった」

生命が人間の形をとったのですから、実際にあるのは人間ではなく、生命です。もし人間が本当に存在するならば、人間から生命を差し引いても人間は残らなくてはなりません、生命が抜けたら人間は存在しなくなるのです。人間は名前だけの存在だからです。本当にはないからです。

この宇宙には、生命の他に何もありませんから、何かがあるとしたらそれは生命であるはず。ならば、現に存在している人間は生命ではありません。人間の形をとった生命はいても、人間の形をとった人間など、どこにもいないのです。

・蛙の子は蛙ではありませんか？

・犬の子は犬ではありませんか？

・猫の子は猫ではありませんか？

犬の子が猫の子になることにはないのです。同様に、生命の子が人間の子になることにはないのです。生命の子はあくまでも生命の子です。だから私たちは間違いなく生命なのです。このことが心底で理解できたら、自分が生命だと思えるようになるのです。思えるようになった途端、細胞が震えてきます。内的光が見えてきます。そうなるまで自分を追求してください。

○一なる宇宙は、一なる目で理解しなくてはならない！

宇宙を理解するには、総合的、包括的に捕らえねばなりません。もし宇宙を分解して理解しようとするれば、おそらく元の姿とは似ても似つかぬものになってしまふでしょう。一万円を細かくすればするほど勘定が合わなくなるように、小さな物差して測れば測るほど狂いが生じるように、宇宙も分解すればするほど狂いが生じてくるのです。

一なるものは、一なる目で理解することです。小さな物差して宇宙を理解するのではなく、無限大の物差して理解することです。そうすれば、寸分も狂わぬ宇宙像を把握できるでしょう。

○知ることは唯一つ

私たちは、難しい学問など学ぶ必要はないのです。学ぶべきことは、この宇宙にたった一つのものしか存在しないという真理です。なぜその学びが大切かといいますと、そのことを知れば、すべてのものが自分だと思えるようになるからです。すべてのものが自分だと思えるようになれば、すべてのものを等しく愛せるようになるでしょう。また、自分のことは何でも知っているはずですから、あえて外側の物を知る必要もなくなるでしょう。自分しかないと思った人が、何かを知ろうと思うでしょうか。何かを欲しがるといえるでしょうか。他に何かがあると思っている人だけが、何かを知ろうとし、何かを欲しがるのであります。

知識人が外側の物を知ろうと躍起になるのは、自分の他に何かがあると思っているからです。また多くの人が何かを欲しがると、自分の他に何かがあると思っているからです。この心理状態は、一つの真実を掴

みたい欲求から出たものですから、決して悪いことではないのですが、外側の物に目が奪われると、どうしても内側が疎かになり真実を掴み損ねてしまうのです。

外側の物は実際にはないのです。内側にのみ真実は有るのです。そのことを知らない人間は、外側の物をまさぐっては自分を慰めているのです。このことを知るのは容易なことではありませんが、いつか誰でも知らねばならない真理なのです。

### ○一つに帰る別れ

人の世には、愛別離苦があります。愛しい人と別れねばならない！ 親しい人と別れねばならない！ 別れを前にして人は嘆き悲しみます。これは無知ゆえの悲しみです。形をホンモノとと思っている人にとっては、形との別れは悲しいのです。しかし、生命をホンモノと知っている人にとっては、当然と思えるのです。

別れは別れではありません。故郷へ帰る別れです。生命へ帰る別れです。人は幾度の出会いや別れを繰り返し、いつか終着駅である生命という故郷へ帰るのです。それは、出てきたところへ帰る別れです。一つに帰る別れです。一つに戻る別れです。そんな別れを別れというでしょうか。このことが分かれば、もう別れを前にして嘆き悲しむことはないでしょう。

### ○一つ目の人は光を見ている

宇宙空間は原子の海です。原子は、原子（闇・幻）の側面と絶対原子（光・真実）の側面とが一對となっておりますので、本来宇宙には光だけしかありません。しかし人間は、闇である原子の側面だけを見るよう

になり、いつしか光の宇宙を闇の宇宙にしてしまったのです。

鉱物も植物も動物も人間も、みな輝いております。この宇宙は、それはそれは美しい光の海なのです。地球はその光の海に浮かぶ青い玉石です。私たちの肉体も、水晶のようにそれは美しく輝いているのです。もし人間がこの宇宙を一つ目で見られるようになったら、宇宙は即座に光の宇宙に変身するでしょう。一つ目とは、理解眼のことです。理解眼を持った人は、この地球上のあらゆるものを光輝ける工芸品として見て見るのです。

### ○一つを知るために多様なものをお創りになった

地球上には、色も形も大きさも性質も違う様々な生き物が生息しています。人間一つ取って見ても、目の色も肌の色も形も大きさも違う人種が存在しています。なぜ神様は、みな様にお創りにならなかったのでしょうか。

物質は一なる生命から生まれました。この宇宙に存在するすべての物は、色や形や大きさが違うだけで、みな一つの本質から生まれたのです。しかし人間は差別観を抱いて敵対し、様々な争い事を生み出しております。

この宇宙には、たった一つのものしかないのです。七光色を重ねれば白色となるのも、七色の絵の具を重ねれば黒色となるのも、すべて一つの色から生まれた同胞だからです。人間も、元をたどれば一つの色から生まれ同胞人なのです。分かれた七色が白光に帰らなければならぬように、色分かれた人間もいつか一

つの生命(白光)に帰らなければならぬのです(オリンピック旗の五色の輪は、五つの人種の融和を願っている)。形は違って同じ兄弟姉妹なのですよ、早く気づいてください! と、神様は人類に訴えかけているのです。多なるあなたを見て一なるあなたを知りなさい! これが一樣にお創りにならなかつた理由であります。

### ○原子番号とは神の番号のことである

この宇宙には、神の外に何もありません。神の外に何もなければ、すべてのものに神の名をつけるべきでしょう。紛らわしいなら、神一、神二、神三、と番号をつければいいでしょう。そうです。神の番号が原子番号なのです。宇宙には無数の元素が存在しますが、それは神(白光)から放たれた色光の数だけあります。白光から枝分かれした色光の一つひとつが、元素一つひとつとなつていてという意味です。その元素一つひとつにはみな特異な性質が持たされていて、それが個性として付された原子番号なのです。

この宇宙に一つのものしかない理由は、すべての物が神から生まれた子供たちだからです。今、地球上には七十億を越す人類が存在していますが、元をただせば一組の人類から分かれた子孫たちなのです。いや、その一組でさえ、最初は一樣だったのです。原子も同じなのです。白光が色光となり、さらに無数の原子に変身し、その原子が様々に組み合わされて、様々な物質に姿を変えたのです。しかし、そうであっても、どんなに姿を変えても、その大元は神なのです。神の番号である原子番号は、人間一人一人に付された固有の名前と同じで、元をただせば一つの神から生まれたものなのです。名前は違っていてもみな同じ神の子ですから、

決して喧嘩してはならないのです。

### ○中身はみな同じ

私は宇宙に一つしかない素材です。なぜそう断言できるかといいますと、宇宙に素材は一つしかないからです。一つの素材しかないなら、今、現に存在している私は、その一つしかない素材の現れではありませんか。そう、私という素材がすべての物の中に存在し、すべての物を形造っているのです。もし私の外に何かがあるなら、私はその物の中にいないことになるわけですから、その物があるわけもないし、認識することもできないはずです。一つのものしかないから、私は到る所においてあらゆる認識の基となれるのです。

あなたは私から離れたこともなければ、私はあなたから離れたこともありません。いや、すべてのものは私から離れたことがないし、私はすべてのものから離れたことがないのです。一つのものの中に、私、あなたがあはるはずがないからです。一つのを分けるわけにゆかないのですから、一つのものの中には私だけがいるのです。分けられないなら、あなたは私であり、私はあなたではありませんか。すべてのものは私であり、私はすべてのものではありませんか。形において別々に見えても中身は一つなのですから、そうなるのは当然でしょう。

### ○1から生まれたものは1である

万象万物は初めから1であったという意味は、1なるものが万象万物に化身しても、1には何ら変りなく、依然として1であり続けるからです。1なるものは素材そのものですから、万象万物に化身しても素材であ

り続けるのは当然です。だから、万象万物は初めから1なるものなのです。

どんなに古くても、途中で生まれたものは子孫と呼ばれ、すべて消えゆく幻です。人間が神になれない理由は、途中で生まれた幻だからです。人間はもともと神だから、神になれるのです。

初めからあった神は実在しますが、途中で生まれた原子は実在しません。しかし、原子はもともと神から生まれた子供たちだから、神になれるのです。同様に、人間も、もともと神から生まれた子供たちだから、神になれるのです。このように、1から生まれたものは1になれるのです。もしこの宇宙に二つのものがあるなら、このようなことは絶対いえないはずですよ。

### ○境目はない！

神は物質を創らなかつた。神は地を創らなかつた。神は人を創らなかつた。神は不完全を創らなかつた。神は多くのものを創らなかつた。そうです。神は一つのものしか創らなかつたのです。人の迷いの目が、生命と物質を分け、天と地を分け、神と人を分け、一を二に分けてしまったのです。もし、すべてのものを一つのものとして見ることができたら、神と人間との境目はなくなるでしょう。境目がないなら、どこからどこまでが神で、どこからどこまでが人間だといえなくなりません。ならば、すべて神だといってもいいし、すべて人間だといってもいいことになります。私は、その時、ためらいなく、私は神である！と大言するでしょう。なぜなら、神は私そのものであり、すべてのものの源だからです。

この宇宙には、一様の神しか存在しないのです。ただ、裏の側面と表の側面があるだけです。それは一つ

のもです。手に裏表の境目がないように、神にも裏表の境目はないのです。

○切り離されたものなど存在しない！

この宇宙に一つでも独立しているものがあるなら、宇宙は無限でなくなるし、完全でもなくなります。表面上独立しているように見えても、本質的には無限のつながりを持っているのです。本質が無限であるということは、この宇宙に本質は一つしかないということになります。一つしかないなら、分離することも分割することもできないのは当たり前です。だから、本質を見る者は、宇宙を一つとして見られるし、無限として見られるのです。その本質が形を支えているわけですから、どんな形も兄弟姉妹なのです。無限を内在させた兄弟姉妹なのです。つまり、表面を見れば兄弟姉妹ですが、内側を見れば一つの本質、一つの無限、すなわち一つの私なのです。

私は宇宙に全一体として存在する本質です。だから私は唯一の宇宙です。唯一の生命です。唯一の神です。

○境目がないから一つである

手には裏と表がありますが、どこからが裏でどこからが表だという境目はありません。でも、裏と表は厳然として存在しております。もし境目を見るとすれば、理解力で観るしかありません。

この宇宙のすべてのものは、二つで一つなのです。その代表例が、物質とエネルギー（生命）です。表である物質は見えても、裏であるエネルギーは見えないのです。どこからが見える物質で、どこからが見えないエネルギーだという境目はないのです。裏を知るには、表を理解力で見て知るしかありません。



すなわち、境目のない物質「表」は、そのままにしてエネルギー「裏」ではないのか。エネルギーである「裏」は、そのままにして物質「表」ではないのか。境目がないのですから、そのような見方ができるはず  
です。

○すべてはつながっている

地球には五大大陸があり、沢山の島々がありますが、本来、地球には地球島という島が一つあるだけなのです。五大大陸も島々も海の下ではつながっているからです。いや、それだけではありません。空気でもつながっているし、水でもつながっているし、エネルギーでもつながっているのです。この考えを広げれば、地球が無数の星々とエネルギーでつながっていることも理解できるでしょう。

私たちはどうしても形に囚われ、他人がある、他国がある、他の星があると思いがちですが、私たちはみな一つのものでつながっているのです。一つなるがゆえに、私が病めば宇宙が病み、私が苦しめば宇宙も苦しむのです。東北の大地震で建物の残骸がアメリカにまで届いていることを考えても、地球が一つであることが分かるでしょう。だから、自分と他人が別だと思っではなりません。自国と他国が別だと思っではなりません。地球と他の星が別だと思っではなりません。

自分が苦めば他人が苦しみ、他人が苦しめば自分が苦しむのです。自国が苦しめば他国が苦しみ、他国が苦しめば自国が苦しむのです。地球が苦しめば他の星が苦しみ、他の星が苦しめば地球が苦しむのです。

さあ、宇宙が健康になる生き方をしましょう！ 宇宙が喜ぶ生き方をしましょう！ 宇宙に別ものなどな

いのですから……。みな一つなのですから……。私は宇宙です。あなたは宇宙です。どうか今日から、「私」を「宇宙」に置き換えてください。

### ○一元論と二元論

本来宇宙には、一元論しかありません。二元論は人間の迷いが生み出した迷信であって、真実ではありません。確かに、宇宙は対で成り立っているように見えます。でもそれは見えてはいるだけで、実際には一つのものしかないのです。ただ私たちは二つ目で見えるから、二つのものがあるように見えるのです。これは錯覚なのです。すべてのものは、一つから生まれた現象なのです。

すなわち、

- ・ 光と影……影は光から生まれた現象です。
  - ・ 陰と陽……陰は陽から生まれた現象です。
  - ・ エネルギーと物質……物質はエネルギーから生まれた現象です。
  - ・ 男と女……女は男から生まれた現象です。
  - ・ 天と地……地は天から生まれた現象です。
  - ・ 完全と不完全……不完全は完全から生まれた現象です。
  - ・ 善と悪……悪は善から生まれた現象です。
- すべて、見せかけとしてつくられた現象です。私たちは、一つを二つに見せかける巧妙なトリックに引

掛かっているのです。この迷信から目覚めるには、瞑想によって意識を高めるしかありません。二つが一つに見えるようになったとき、私たちは真実が見えるようになったのです。つまり一つ目になったのです。

### ○思えるようになるのに理屈はいらない

面白いから面白いのです。楽しいから楽しいのです。面白いにも楽しいにも何の理屈がいらないように、生命だと思えるのに何の理屈もいらぬのです。ただ「生命」を思い続けていれば、いつか「生命」と思えるようになるだけです。これは理屈抜きです。何の技術も何の修行もいりません。

本当に生命だと思えたら、自分が変わります。誰かに、何かに、変えてもらうのではないのです。そう思えたら、ひとりで変わります。思えるか、思えないか、ただそれだけのことです。なぜそのようなことが起きるかといいますと、もともと私たちはもの思える生命だからです。もの思える生命だから、生命と思えれば生命になれるのです。生命イコール思いです。思いイコール生命です。生命そのものが思いそのものであるという意味です。だから、生命だと思えれば生命になれるのです。いや、なれるのではなく、そのものである！ ということです。生命になるのに、何の理屈も、何の技術もいらぬことを知ってください。

### ○宇宙に「二つ」のものはない！

宇宙が存在している絶対条件として、これだけは知って欲しいと思います。

・宇宙に二つのものがないことを……。

・宇宙に別々のものがないことを……。

・宇宙に独立したものがいないことを……。

・宇宙に孤立したものがいないことを……。

・宇宙に離れ離れがないことを……。

二つがないということは、一つしかないということです。別々なものがないということは、一体であるということです。独立したものがいないということは、全体であるということです。孤立したものがいないということは、一つのものの中にいるということです。離れ離れがないということは、すべて自分であるということです。

・もし神の他に何かがあるなら、二つのものがあることになります。

・もし無限の他に何かがあるなら、二つのものがあることになります。

・もし生命の他に何かがあるなら、二つのものがあることになります。

・もし私の他に何かがあるなら、二つのものがあることになります。

それでは絶対条件を満たすことはできません。ということは、宇宙は存在できないことになりました。だから、

・神しかないのです。ならば人間は神であります。

・無限しかないのです。ならば個人は無限であります。

・生命しかないのです。ならばすべては生命であります。

・私しかいないのです。ならばすべては私であります。

### ○宇宙と私は相似である

この表現宇宙には、反原子と絶対原子に支えられた、三位（身）一体の原子が遍満しております。なぜ三身一体になっているかといえば、原子も反原子も絶対原子も、単独では時空に存在できないからです。絶対原子が時空で活動するためには、自らが反原子と原子を吐き出して乗り物を造り、その乗り物に乗って出てくるとはできません。絶対原子のままでは、時空に存在できないということです。もちろん、絶対原子が存在できないければ、反原子も原子も存在することはできません。第一、時空そのものが生まれません。空気が水となり氷となっているように、絶対原子も反原子となり原子となっているのです。

その原子によって造られた人間は、当然のごとく反原子と絶対原子を内在させ、表現宇宙と同じ構造を成しております。だから、原子と、人間と、宇宙は相似なのであります。

### ○創り主と造られたものは同じもの

造られたものと創り主は、絶対不可分といって、決して分離することはできません。造られたものは創り主そのものだからです。創り主が何かを造ろうと思えば、創り主自らがそのものに成るしかないので。すなわち、創り主が人間を造ろうと思えば、創り主自らが人間になるしかないということです。幸い、創り主は素材そのものですから、直接そのものになることができます。

創り主が誰かに頼んで何かを造ってもらえない理由は、この宇宙には創り主しか存在しないからです。自

分しか存在しないなら、自分がそのものになるしかないのではありませんか。だから、造られたものと創り主は同じものといえるのです。

・水が氷になっただけ、だから氷と水は同じものです。

・生命が物質になっただけ、だから物質と生命は同じものです。

・神が人間になっただけ、だから人間と神は同じものです。

そこには、ただ一つのもの（創り主・神・生命）があるだけです。

### ○個人問題などない！

この宇宙に、個人問題などあるわけがないのです。個人などどこにもいないからです。一つの生命が、すべての物の中に生きて働いているわけですから、全体問題はあっても、個人問題などあるわけがないのです。「これは個人問題だから放っておいてくれ！」という人がおりますが、個人は全体とつながっているのですから、口が裂けてもそのようなことはいえないのです。

一人の苦しみは全体の苦しみです。一人の悩みは全体の悩みです。細胞一つ病んでも身体全体が痛むように、あなた一人病んでも宇宙は痛むのです。それゆえに自愛が大切なのです。自愛は一見利己的に見えますが、これは利他愛につながっているのです。だから、決して自殺などしてはならないのです。

**自分を大切にする者は、全体を大切にする利他愛者である。**

## ○一つのさやに帰る

元数はすべての分数の親元です。すべての創造物の大元となっているのが元数なのです。知恵も、力も、光も、形も、そこから生まれてきます。その元数から生まれた分数には、無限の能力と、無限の可能性と、無限の発展性が受け継がれております（元数の中に無限の分数が存在し、無限の分数の中に一なる元数が存在している）。だから、分数を組み合わせ、様々な物を創造することができるわけです。ただし、その能力と可能性を発揮するためには、分数が元数から出てきたことを悟らねばなりません。

なぜ私たち分数は、一つに降りたがるのでしょうか。それは、自分が元数の子であることを、本能的に知っているからではないでしょうか。そうです。私たち分数は、元数から出てきた兄弟姉妹同士なのです。にもかかわらず、私は分数一だ！ 分数二だ！ 分数三だ！ といっってはいがみ合っています。しかし、神はそうなることを予測し、私たちに愛のDNAを組み込まれました。鉱物においては親和力として、植物においては本質として、動物においては本能として、人間においては愛情として……。結晶し合い、融合し合い、団結し合い、吸引し合い、元のさやに帰るよう意図されているのです。一から出てきた分数は、一に帰るのが定めです。一つの鞘さやに帰ってこそ、宇宙は永遠の営みが可能なのです。

## ○すべての核は宇宙の中心核と結びついている

どんな物の中にも核が存在します。たとえば、雨の中にも、貝の中にも、原子の中にも、地球の中にも、太陽の中にも、銀河の中にも、もちろん人間の中にも……。核がなければ形が維持できないのです。なぜな

ら、核がなければエネルギーが貰えないからです。原子核は宇宙の中心核と結びつき、そこからエネルギーをもらって形を維持しているのです。白光から放射された光線一つ一つが原子となり、元素となり、物質となっているからです。

このようにイメージして見てください。まず、大宇宙を無限の球体と考え、その中心に霊太陽が輝いているとイメージします。次に、霊太陽から放たれた無数の光線一つ一つが原子となり、その原子一つ一つの中心核が存在するとイメージします。その霊太陽の核と原子一つ一つの核が連なり、さらにすべての原子核同士が横のつながりを持っているとイメージしてください。そのようにイメージすれば、無限の球体の宇宙においてどの原子核も宇宙の中心核になれるはずで、なぜなら、宇宙においては大核も小核もないからです。だから、どんな原子も大宇宙の中心点に立てるし、その原子を内在する私たちも宇宙の中心点に立てるので、

大きい小さいは、意識の仕方によって生まれた幻です。小さな肉体の自分を意識すれば小宇宙となり、大きな宇宙の自分を意識すれば大宇宙となるだけです。意識の持ち方次第で宇宙の中心点に立てるのは、そのような理由からです。

○表を追求すると裏が解り、裏を追求すると表が解る

見える物が何であるか知る者が、見えないモノが何であるか知るのです。また、見えないモノが何であるか知る者が、見える物が何であるか知るのです。



・見える物と見えないモノは同一のものだからです。

外が見えると内が見え、内が見えると外が見えます。反対に外が見えないと内が見えなく、内が見えないと外が見えません。

・外と内は同一のものだからです。

外側の物が分からなければ、内側のものは分かりません。内側のものが分からなければ、外側の物も分かりません。反対に、外側の物が分かれば、内側のものが分かります。内側のものが分かれば、外側の物も分かります。

・外側の物と内側のものは同一のものだからです。

この世が何であるか分からない者は、あの世が何であるか分かりません。あの世が何であるか分からない者は、この世が何であるか分かりません。反対に、あの世が何であるか分かる者は、この世が何であるか分かります。この世が何であるか分かる者は、あの世が何であるか分かります。

・この世とあの世は同一のものだからです。

手の表と裏を同時に見た者は、実際に手を見たことになるのです。この世とあの世を同時に見た者は、実際にある世界を見たことになるのです。外と内を同時に見た者は、実際にある真実を見たことになるのです。

・表と裏、この世とあの世、外と内とは同じものだからです。

内と外とが同一のものなら、内外平等に愛さねばならないでしょう。もし外側の物を粗末にするなら、内側のもも粗末にすることになるし、内側のもを粗末にするなら、外側の物も粗末にすることになるからです。そうです。二つのものを一つに観る者は、両方を愛せる者です。二つのものを二つに見る者は、どちらも愛せない者です。

このように、表を追究すると裏が解り、裏を追究すると表が解るのが、この宇宙の特徴なのです。

### ○一つの中に居ては一つが分からない

自分しかいなくては自分が分からないように、一つの中に居ては一つが分からないのです。だから私たちは、表現宇宙に出て多くのものと交わり、この宇宙がたった一つのものでできていることを学んでいるのです。すなわち、外に出て多くのものと出会い、一つの真実を知ろうとしているのです。

私は、私以外のものを知ること、この宇宙に私以外何も存在しないことを知りました。私以外何も存在しないと知った私は、宇宙のすべてを知ったことになりましたので、私はもう宇宙の知恵者です。

それは一つしかないという知恵、……一つしかないという真実。……これは凄いことです。私以外何もないことを知った者は、宇宙の大王です。天上天下唯我独尊（存）を豪語できる者です。

### ○分離感が災いをもたらす

この宇宙には、宇宙生命という生き物が一匹存在するだけです。私たちはその生き物の細胞の一つ一つです。でもその一つの細胞は、単なる一つではありません。一つでありながら全体であり、全体でありながら

一つなのです。なぜなら、私たちは宇宙生命という生き物の中におり、私たちの中に宇宙生命という生き物があるからです。だからこそ、私たちは宇宙生命そのものといえるのです。

なぜ地球に争いが絶えないのでしょうか。それは地球の細胞である人間同士が、私は私、あなたはあなた、という分離観を持ち、敵対し合っているからではないでしょうか。もし、一つ一つの細胞が、私は地球だという一体観に目覚めたら、決して敵対し合うことはないでしょう。一体観に目覚めた者のサイフ(ポケット)は一つになりますから、もう私のサイフあなたのサイフとはいわなくなるでしょう。

・ Aがお金を儲けたのは、単に右のポケットから左のポケットに財が移っただけです。

・ Bがお金を損したのは、単に左のポケットから右のポケットに財が移っただけです。

・ A国が裕福になったのは、単に左のポケットに財が多くなっただけです。

・ B国が貧乏になったのは、単に右のポケットに財が少なくなっただけです。

AもBのポケットも同じ私のポケットなら、どのポケットに財があってもいいのではありませんか。足りなければ財を移せばいいのですからね……。そんな考えが定着したら、もう、あなたが損した、私が儲けた、とはいわなくなるでしょう。そんな世界に貨幣は必要でしょうか。

### ○一つのものの中には一つのものしかない

・ 空気の中には空気のものしかないのです。

・ 海の中には海のものしかないのです。

・地球の中には地球のものしかないのです。

・宇宙の中には宇宙のものしかないのです。

・生命の中には生命のものしかないのです。

役者が化粧を変え、カツラを変え、衣装を変えても同じ役者にならないように、生命がどんなに姿形を変えても、生命であることに変わりはないのです。

一つのものの中には一つのものしかない、という考えは、とても大切なことなのです。もしこの宇宙に異質のものがあるなら、一時の存在も許されなかったでしょう。幸い一つのものしかないから、これまで宇宙は存続してこられたし、これからも存続できるのです。私たちが日々無事で生きられるのも、同じ一つの中において、同じ一つのものとして接し、同じ一つのものとして融合し合っているからです。私たちは一つの生命から生まれた生命の中の生命なのです。

だから、私は生命そのものです。あなたは生命そのものです。すべての物は生命そのものです。ゆえに、私はあなたでありあなたは私です。すべての物は私であり私はすべての物です。

### ○分けるから悪が生まれる

一つのものの中には、一つのものしかないのです。一つのを分けるから、損と得、貧乏と裕福、不幸と幸福、悪と善、不完全と完全、ニセモノとホンモノが生まれるのです。ニセモノからニセモノが生まれることはありません。ニセモノはホンモノから生まれるのです。一見詭弁に聞こえますが、ないものからは何

も生まれないのです。有るものから、すべての物が生まれるのです。だから、元に戻せばすべてホンモノに帰すわけです。

実際にはない悪が悪を生むことはありません。実際に有る善が悪を生むのです。でも、その悪はもともと善ですから、元に戻せば善に帰るのです。もし本当に悪があるなら、一旦悪になったら永久に悪でなければなりません。幸い悪は善から生まれたニセモノですから、元に戻せば善に帰すことができるのです。

だから、一つは一つで置くべきです。二つに分けるから災いを招くのです。ただし、その災いは幸いです。幸いから生まれた災いだからです。

善が善のままでは善ではありません。悪の苦みを知ればこそその善です。だから、悪は悪ではなく、善なのです。

神はなぜ一つのを二つに分けられたか。もうお判りになったことでしょうか。

### ○二つのさを一つのさにする

一つしかないものが、同じ一つのものの中で何かを見せても、何の意味も成しません。なぜなら、どんなに素敵なパフォーマンスを見せても、自分の前ではただの自己満足にしか過ぎないからです。同じように、神がどんな素晴らしい技を披露しても、神の前では自己満足にしか過ぎないのです。だから神は、相対宇宙を創ってそこに分身（人間）を送り、その分身を通して自分の存在を認めてもらおうとしているのです。しかし、神なる人間はその相対宇宙を本物の世界だと誤認するようになり、損得感情や善悪感情など、様々な

悪感情をつくってしまいました。

したがって、自分を認めてもらう以前に、その悪感情を取り除く作業が急務になったのです。この悪感情を取り除くには、ニセモノとホンモノを一つのさやに戻さなくてはなりません。つまり、次のような理解力を持って誤解を解かなければならないのです。

- ・ 幻とホンモノに境目はない！ ゆえに二つは一つである。
- ・ 物質とエネルギーに境目はない！ ゆえに二つは一つである。
- ・ 人間と神に境目はない！ ゆえに二つは一つである。

・ あなたと私の境目はない、ゆえにあなたと私は一つである。

一つであるということは、幻はない！ 物質はない！ 人間はない！ ということですから、そこに、損得感情や善悪感情などの悪感情が生まれようがないのです。あなたと私を分けるから、さやが二つになり、悪感情が生まれるのです。さあ、さやを一つにして、そのさやの中にあなたと私を帰しましょう。帰した時はじめて、分身が神のパフォーマンスを認めることができます。

### ○一つの答えを用意すればいい

あなた（私）が持つ答えは、たった一つです。それは「生命」という答えです。この宇宙には生命の他何もないからです。だから、どんな質問を浴びせられても、あなたは生命という一つの答えを用意すればいいのです。もし他に答えがあるなら、この宇宙は無限でも永遠でもなくなり、生命は完全でなくなってしまう

ます。そうなれば、あなたは消えてなくなるしかありません。

しかし、生命はどこまでも完全ですから、あなたは決して消えてなくなることはないのです。ゆえに、あなたの持っている一つの答えで事足りるのです。

なぜ、あなたを（私）としたかといいますと、一つの答えしかないからです。一つの答えしかないということは、あなたは私であり、私はあなたであるということですから、あなたを（私）としたのです。このように、一つの中にあなた私はないのですから、一つの答えを用意すればいいのです。

### ○私の物はあなたの物、あなたの物は私の物

この宇宙にはたった一つのものしかありません。これは絶対真理ですから、誰も覆すことはできません。ということは、すべての物は、その一つのものではありませんか。一つのものしかいないなら、どんな物も一つのものなのは当たり前ではありませんか。

ならば、私はその一つのものではありませんか。あなたはその一つのものではありませんか。万象万物は、その一つのものではありませんか。ということは、私はあなたであり、あなたは私ではありませんか。私は万象万物であり、万象万物は私ではありませんか。

宇宙に一つのものしかないという意味は、そういうことなのです。形を見ないでください。形の背後にあるたった一つの真実を覗いてください。その真実が覗かれたら、もう私のモノとかあなたのモノとかかわず、私のモノはあなたのモノ、あなたのモノは私のモノというでしょう。

さて、ここまで同じ繰り言を述べてきましたが、なぜドクドクと同じことをいうのかといいますと、宇宙に一つの物しかないという真理を心底で知れば、自分を変えることができます。観念的に変わるのではなく、実際に自分の身に変性変容が起きるのです。これは体験した者でなくては解らない、宇宙の不思議な部分です。どうか、一つ目になることの重要さを理解してください。

## (2) 数字から宇宙を探る

### ○元数と分数(幻数)

宇宙を知るには数字を理解すればいいといわれるくらい、数字は宇宙を如実に現わしています。特に「1」という数字は宇宙創成の起源となっているため、この「1」を心底で理解できれば、宇宙のすべてを知ることができ、宇宙のすべてを語ることができるのです。

では「1」とは何でしょうか。「1」とは「一命」といって「命」を意味します。この宇宙に「命」は「1」しかない、ということをしているわけです。その一は数ですから、「数は命であり、命は数である」という意味になります。それが「数命」という言葉が生まれた理由です。だから、数を知れば命を知ることができ、命を知れば数を知ることができるわけです。

なぜ数と命は同じかといいますと、「1」という数字から無数の命が生まれたからです。だから「1」は



命の故郷、命の起源ともいわれているのです。この宇宙には、「1」という一つの数字しかないのです。「1」は元数といって、すべての数の大元です。大元なるがゆえに無限です。ゆえに $1 \parallel \infty$ と記すのです。

元数1から別れた数を「分数」または「幻数」といっておりますが、そう呼ばれる理由は、表現世界（物質界・幽界）にのみ存在する幻の数だからです。分数は物質界の元素に当り、物質を形ついている大元（原子）です。幻数は幽界の幽質に当たり、幽体を形ついている大元（反原子）です。物質界における原子番号は、その元素に番号を付したものです。

このように、「元数1」から無数の分数と幻数が生まれたわけですが、その分数一つ一つには、その数字にしか果たせない特別な役割が持たされています。一には一の役割が、二には二の役割が、三には三の役割が、四、五、六、……そのすべての分数に特別な役割が持たされているのです。これは、分数が表現宇宙を創造する素材（元素）となっていると看做すところから、その一つ一つに特異な性質や能力が持たされていると考えられるわけです。

様々な物質は、その組み合わせによって生まれてくるわけですが、これは宇宙の約束事の一つです。たとえば、ある分数にある分数をプラスすればこのような性質の物質が生まれ、ある分数からある分数をマイナスすればこのような性質の物質に変化する、といった具合です。その分数は単体になればなるほど性質がぎつくなり、合体されればされるほど穏やかになります。分数一つ一つの役割はすでに決定されていますから、単独では変化できないのです。合体したり分離したりすることによってのみ変化できるのです。本来、合体

は調和で、分離は不調和です。分離すればするほど元数1から遠のき、合体すればするほど元数1に近づいて行くからです。すなわち、元数1から遠のけば知恵や力や光が弱まり、近づけば反対に強まるわけです。とはいえ、分離も必要な場合があります。建設的な分離は、合体と同じ効果を生み出すからです。分離と合体の循環は調和なのです。

さて、この宇宙は、体験の必要のうちには数の分散が行われ、体験が終われば調和を目指して「1」に帰って行きます。「1」から生まれたものが「1」に帰るのは宇宙の定めなのです。ところが、この元数1には、実に不思議な能力が備わっています。それは、元数1をどんなに分け与えても少なくならないという不思議な能力です。

たとえば、ここに一つの砂糖の山（元数1）があり、その砂糖を分け与えたとしましょう。でも、どんなに分け与えても、砂糖の山は少なくならないのです。また分け与えた砂糖を回収しても、以前の砂糖の山と変わらないのです。だから $1-1=1$ であり、 $1+1=1$ であり、 $1-50=1$ であり、 $1+50=1$ なのです。元数1にどんなに分数をプラスしてもマイナスしても、1にしかならないのは、分数は元数1から生まれた子供たちだからです。元数1を切り刻んだのが分数ですから、切り刻んだ分数を分けようが集めようが元数1なのは当然でしょう。

これは、元数1が無限だからできる技なのです。宇宙がいつまでも均衡を保っていられるのは、この無限の働きが揺るぎないからです。だから、すべて同じ一、同じ宇宙、同じ生命、同じ意識、同じ私になるので

す。沢山のものがあるのではなく、一つの元数1つの宇宙、一つの生命、一つの意識、一つの私があるだけです。絶対なる元数1は全能です。無限の力、無限の知恵、無限の光を秘めた本源・本質です。

※「分數Ⅱ物質・原子」 「幻數Ⅱ幽質・反原子」 「元數Ⅱ生命・絶対原子」この三つの數は、通常三身一体（元數1）になっている。幻數である幽質も、分數である物質も、同じ物質と考えていい。

### ○分數（幻數）が元數に歸るためには？

分數は、いつか必ず元數に歸らなければならぬ定めにあります。なぜなら、分數はもともと元數から生まれた分身だからです。といつても、自分が元數から出てきた分數であると認めなくては歸れません。つまり、私は分數（物質・肉體）ではなく元數（生命）であると悟らなくては、本源の世界に歸ることができないのです。悟りが必要なのはそのためです。

悟りとは、元數1から生まれた無數の分數が、元數1に歸る旅です。すなわち、白光源から放射された無數の意識核（生命核・元素・原子）が、再び白光源に歸る旅が悟りの旅なのです。瞑想は「1」に歸る手段です。「分數が元數を認めたとき、分數は事實上元數になる」といわれるのは、分數が元數から出てきたことを悟れば、分數は元數のような生き方や働き方ができるようになるからです。

どんなものも「1」の現れだと自覚できたら、それは「悟り」です。様々なもの、様々な數があると思っ  
ているうちは迷いです。世の人々は、他人がある、鉱物がある、植物がある、動物があると思っ  
ているから、平氣で恨んだり憎んだり怒ったり殺したりするのです。すべて「1」から生まれた兄弟姉妹だと知ったら、

決してそのような愚かなことはしないでしよう。何かを恨んだり殺したりすることは、自分を恨み殺すことになるからです。つまり「1」を殺すことになるからです。

この宇宙には、一つの数字しかありません。一つの命しかありません。一つの意識しかありません。私しかいないのです。私からすべてのものは生まれたのです。孫悟空が自分の毛をむしって息を吹きかけ、沢山の分身を生み出したように、宇宙も宇宙生命が塵に息を吹きかけ、無数の分身を生み出したのです。その分身が、分数であり、元素であり、物質であり、人間です。すべて宇宙生命の分身です。元数1からすべてのものが誕生したなら、どんな悪も、どんな不完全も、その根が完全なのは当然でしょう。

### ○元数1が持つ性質と働き

毒は毒をもって制するという諺がありますが、なぜ毒をぶつけると毒を制することができるのでしょうか。それは、自分が痛い目に遭うことによって相手の痛みが分かるように、毒をぶつけられることによって悪の苦みを知り、潜在していた善を引き出すことができるからです。目には目を、歯には歯をという旧約聖書に出てくる言葉は、そのことを教えているのです。やられたらやり返せ！ という意味ではないのです。自分が受けた同じ苦みを、人に与えてはならないという戒めの言葉なのです。悪を体験することで悪の苦みを知り、良い行いが引き出せるというわけです。それは、この宇宙に、もともと悪や不善がないからできることなのです。それを地で行っているのが、ホメオパシーという医療です。

偏った生活をするとう毒をつくり、病気になるりますが、その毒に毒をぶつけ現象面で治そうというのが、ホ

メオパシーという薬餌療法です。この治療法は、もともと毒も薬も出所は同じ元数1である、という考えが前提になっています。

元数1から生まれた分数には、元数の能力や性質が受け継がれているわけですが、通常は与えられた役割を忠実に果たすだけで、その能力や性質は潜在したままです。ところが、自分と同じ数字をぶつけられると、潜在していた能力や性質が蘇り、抗体あるいは免疫として働くようになるのです。要するに、痛い目を見て目覚めるわけです。これは、分数にもともと元数の能力や性質が受け継がれているからできることなのです。いや、もともと一つだからできるのです。

このように、元数1は分数に身をやつしても、どこまでも「1」として働いているのです。

### ○ゼロ（0）と元数1の関係

先に、宇宙に数字は元数1しか存在しないといいましたが、厳密に言えばもう一つ存在するのです。それは0という数字です。0が数字かどうかは異論のあるところですが、この0は相対世界にだけ存在する特別な数字なのです。ちなみに0は、循環によって永遠と完全を演出する補助的役割を担っています。0にどんな数字をかけても、割っても、足しても、引いても0になります。0は毒消しのような働きがあるのです。また0は、どこから始まって、どこで終わるという境目がありません。永遠に弧を描いています。0の中に入れば、すべてが完全になってしまうのです。無限の印である8は、二つの0を縦に結んだもので、上の0は絶対界を意味し、下の0は相対界（表現世界）を意味し、この二つの0をつないで $\infty$ とし、そこを循

環することで宇宙は永遠と完全を得ているのです。

つまり0は、相対宇宙と絶対宇宙をつなぐ、架け橋的存在になつていのです。さらにいえば、元数1は相対界を超越した絶対宇宙そのものなのに対し、0は絶対宇宙を相対宇宙に写し出す、鏡の役割をはたしているのです。このことは、電子と原子核(陽子)の關係になぞらえることができるかもしれません。つまり、電子は創造の場で現れているもの、原子核は創造の力で現わしているもの、この二つの關係は、相対宇宙と絶対宇宙の依存關係そのもの、すなわち、0と1の關係そのものといえるでしょう。

元数1は父なる神を示し、第一の故郷です。0は母なる神を示し、第二の故郷です。すなわち元数1は「天・無限」で、0は「地・有限」です。私たちは、いつか母なる大地である0から、父なる天である1に帰らなければならぬのです。

### ○元数1は絶対宇宙である

元数1(生命)から別れた分数(原子)は、単なる分数ではありません。元数1の属性を備え持った分身です。その分数によって私たちは創られたわけですから、私たちも元数1の属性を備え持っていて当然でしょう。その元数1は、無限なるがゆえに絶対宇宙そのものです。

ということ、私たちの中にも絶対宇宙が内在していることになりました。いや、私たちだけではありません。石一個の中にも、虫一匹の中にも、花一輪の中にも、絶対宇宙が内在しているのです。だからいわれるのです。表現宇宙の中に絶対宇宙が内在し、絶対宇宙の中に表現宇宙が内在していると……。すべてのもの

の中に私がおり、私の中にすべてのものがあるといえるのも、私はあなたでありあなたは私であるといえるのも、すべてのものの中に私がいるからです。私は元数1そのものであり、宇宙生命そのものだからです。原子が有限であると同時に無限なのは、原子の中に絶対原子が内在しているからです。すべてのものの中に私がいる理由も、絶対原子と対になっている原子が、すべてのものの中に内在しているからです。ただし、原子そのものは絶対原子の媒体として造られたものですから、実在しているものではありません。役割が終れば、自ら生み出したブラックホールに呑み込まれ消えて行く儂い存在です。原子は幻なのです。だから物質も幻です。人間も幻です。表現宇宙も幻です。一個一個の原子の中に、幻とホンモノが同居しているというわけです。

一つのものの中には、一つのものしかないのです。もし、この宇宙に二つのものがあるなら、宇宙は一瞬に消滅してしまわなくてはなりません。しかし、現に今、宇宙は存在しているわけですから、一つのものしかないという証になるのです。私が個人でなく無限の存在といえるのも、現に今、私が存在しているからです。もし私が個人なら、宇宙はとっくに消滅しているはずで、真実の世界に真実なるものが二つも三つもあるなら、それは真実でなくなってしまう。無限の中に個があるなら、無限は無限でなくなってしまうのと同じ理屈です。無限しかないから、無限は無限でいられるのです。

だから、この宇宙に個人はいないので、宇宙に一つのものしかない理由が、無限の私しかないことを証明しているのです。真実の世界においては、一と多は同居できないのです。同居できるのは表現の世界の

みです。その点からいっても、私たちの住んでいる表現宇宙が、幻の世界だということが分かるわけです。あなたの中にはあなたしか存在できないのです。あなたの中にあなたしかいないから、今あなたは存在できています。宇宙の中に一つの宇宙しかないから、今宇宙は存在できています。一はどこまでも一です。一が二にも三にもなることはないのです。私があなたになれなく、あなたが私になれないのと同じです。真実は一つしかないからです。

ただし、一つしかない真実は、そのままでは自分の存在を明かすことができません。そこで真実は非真実の世界を創り、そこから自分をアピールしているわけです。真実の世界に真実は一つしかないけれど、非真実を通してなら真実はいくらでも存在できるのです。だから、一は多であり、多は一なのです。個は無限であり、無限は個なのです。すなわち私は無限であり、無限は私なのです。

なのに私たちは肉体を自分と誤解し、無限の自分を小さな自分にしていきます。自分を無限に解放すれば、風にも、雲にも、月にも、星にも、太陽にも、大宇宙にもなれるのに、自ら小さな肉体の中に閉じ込め、自らを不自由しているのです。どうか小さな肉の中に自分を閉じ込めないでください。

### ○一つの命しかないという真理

先ほど述べたように、この宇宙には「一命」といって、一つの命が存在するだけです。一つの命しか存在しないということは、すべてはその一つの命の現れではありませんか。一つはどこまでも一つなのです。一つが二つにも三つにもなることはないのです。もし二つにも三つにもなるなら、沢山の命があることになり、



それでは「一命」しかないという真理は崩れ、この宇宙は消滅してしまわなくてはなりません。だから、命は一つでなくてはならないのです。

その命は形がないので、見ることも触ることもできませんが、しっかりとした意識と意志を持ちながら、この宇宙を永續させよう、調和させよう、喜ばせよう、と懸命に働いております。人格は持ちませんが、人格を持った人間以上に目的意識を持ち、あらゆるものの中で生きて働いているのです。

私たちは、人間が生きておられると思っておりますが、生命が人間の中で生きているのです。ものを考え、思い、語り、行動しているのは、宇宙生命なのです。人間は、脳や心臓や肺や腸などの部品が集まり、人の形を取ってはじめて生きるものになると思っておりますが、人体はあくまでも生命の乗り物であって、実際に生きて働いているのは生命です。では生命を見せろという人がいますが、生命は形がないので見せるわけにはゆきません。どんなに科学が発達しても、生命は見る事ができないのです。その見えない生命が、ものを考え・聞き・語り・行動指令を出し、肉体を動かしているのです。

最近、ロボット工学が進み、人の動きに近いロボットが開発されていますが、そのロボットは自分で生きているのでしょうか。スイッチを切ったら、動かなくなってしまうのですよ……。人間も、生命というスイッチを切ったらただの抜け殻になってしまうのですよ。蛇の抜け殻を蛇というのでしょうか。セミの抜け殻をセミというのでしょうか。命の抜けた人間を人間というのでしょうか。

中身が生きているのです。中身が働いているのです。人間の中に入って、生きて働いている生命こそが、

本当の私たちなのです。でも、私たちは形を自分と誤信し、人間として生きています。だから、生・老・病・死の苦しみから逃れられないのです。

意識が生きているのです。意識 $\parallel$ 生命 $\vdots\vdots$ 生命 $\parallel$ 意識です。ゆえに、意識を持っている人間は、生命そのものなのです。人間が生命である証は、意識を持っていることで証明されるのです。

### ○打ち出の小槌

表現宇宙のすべてを知るには、無限の時が必要でしょう。いや、無限の時をかけても、おそらく永久に知ることにはできないでしょう。表現世界において、元数1は無限の分数に分割されているからです。無限の分数を一つ一つ知ることなど、とてもできるものではありません。ましてや、無限の分数の組み合わせによって造られたすべての表現物を知ることなど、とてもできるものではありません。

確かに、多くの分数を知れば活用範囲が広がり、私たちの生活に役立てることができるかもしれません。ですが、それには危険性も伴ってくるのです。その典型的例が核爆弾です。だからこの宇宙では、知る権利に一定の歯止めがかけられているのです。

私たちに必要なのは知識や物ではありません。究極の幸せです。知識や物は、幸せを得る一つの方便ではありませんが、目的ではないのです。真に求めるべきは、本当の自分を知ることです。本当の自分を知れば、究極の幸せに身を浸すことができますので、余計なことを知る必要も、余分な物を得る必要もなくなるのです。

本当の自分とは元数1のことです。そこには、宇宙のすべての知恵が埋蔵されています。だから、元数1を知れば、宇宙一の知恵者になれるのです。さあ、本当の自分を知ってください。そして、そこから知恵を頂いてください。

この知恵を称して、打ち出の小槌というのです。打ち出の小槌を手に入れた者は、究極の幸せを得る知恵を得たわけですから、もう何も要求しなくなるのです。

### (3) 意識から宇宙を探る

#### ○意識はひとつ？

意識とは、存在の思いです。何かを認識できる思いです。私と考える思いです。思うにはエネルギーが必要ですから、意識はエネルギーでもあるわけです。先ほど意識≡生命とりましたが、意識とは、エネルギーであり、生命なのです。

あなたの意識、私の意識など、沢山の意識があるように見えますが、宇宙には宇宙生命という、たった一つの意識があるだけです。なぜなら、エネルギーは宇宙に一つしかないからです。一つの意識しかないから、私たちは分かり合え、愛し合えるのです。そう断言できるのは、私自身面白い体験をしているからです。

十数年前のことですが、家で子猫を一匹飼っていました。その子猫はやんちゃ坊主で、色々と悪さをして

は家族を困らせるのです。あまり悪さをするので、私は本気で子猫を叩いたことがありました。それ以来、今まで私の膝の上で寝転がっていた子猫が、寄りつかなくなりました。何日も寄りつかないものですから、やり過ぎたと思い、私は心の中で子猫に詫言いました。すると、どうでしょう！ 詫言いた途端、以前のよう私の膝の上で寝転がるようになったのです。その時私は、思いは通じるものだな、とつくづく感心させられたのです。

花や木の世話をしている人の話を聞くと、思いを寄せた花や木と、寄せない花や木の花持ちのよさ、枝ぶり、明らかに違うといえます。これも、世話人の意識が影響しているからです。よく、以心伝心とか、人を呪わば穴二つとかいわれますが、同じ一つの意識だから通じ合うし、影響を受け合うのです。もし意識が別々なら、このようなことは絶対起きないはずですよ。

このように、私たちの意識も、万象万物の意識も、宇宙生命から生まれた同一の意識であり、宇宙生命そのものなのです。

### ○一番厄介なことは？

この宇宙で最も確実なことは、意識は絶対になくならないという事実です。しかし、これが一番厄介なことなのです。意識があるから憂い、悩み、苦しむからです。もし無意識状態になれば、いや、それさえも感じない空白状態になれば、どんなに幸せでしょう。なにせ、何も分からなくなるのですからね……何も感じなくなるのですからね……そもそも、こんな考えさえ持たなくていいのですからね……。

残念ながら、意識は絶対なくなることはありません。これは実に困ったことです。そこで私は、神様に、私の意識を完全に葬り去ってくださいとお願いしてみました。「何をいうか！ お前の意識を奪えば、その瞬間宇宙は消え去ってしまうのではないか。そんなことができるわけがない！ 宇宙はお前であなたは宇宙なのだから……。」これが神様からの回答でした。

本当の私は永遠になくならない意識です。その意識は肉体に属するものではなく、宇宙に属するものだから、絶対なくなることはないのです。ならば、意識のなくなることを望むのではなく、どうしたら永遠の幸せの中に意識を留め置くことができるか、そのことだけ考えるべきでしょう。

**なぜ私たちは悟らなければならぬのか。それは、私たちの意識が永遠になくならないからである。**

○意識したものはどこまでもついでくる

もし、肉体が朽ちると共に意識がなくなってしまうなら、何一つ悩むことも心配することもありません。肉体が朽ちるまで、ただおもしろおかしく生きていきたいでしょう。その行為がどんなに悪意に満ちたものであっても、「後は野となれ山となれ！」だからです。でも神様は、そのような野放図な仕組みをおつくりになりませんでした。私たちの意識は決してなくなることはないのです。また、意識したことは、後々必ず何らかの結果を生むようになっていくのです。

悪しき思いを持ち、悪しき行いをすれば、悪しき結果がついてくる。良き思いを持ち、良き行いをすれば、良き結果がついてくる。だから、私たちは常に正しい想念を持ち、常に正しい行為をなさねばならないので

す。見えないからといって意識を甘く見てはなりません。意識は生きものです。何でも知っています。何でもつくれます。何でもできます。意識ほど素直で、正直で、確かで、恐ろしく、楽しく、また頼もしいものはないのです。

### ○「私」が（私）の意識を拡大させる

この宇宙には「私」という、たった一つの意識があるだけです。その「私」が形にまみれることにより、偽我の（私）をつくってしまったのです。その（私）は形に惑わされつくったニセモノの（私）であり、真我の「私」を目隠している（私）です。真我なる「私」が偽我の（私）によって「私」を見失い、その結果、大きな意識の「私」が小さな意識の（私）に成り下がってしまったのです。

形を（私）と思って生きる限り、「私」は小さな意識に留まっていなければなりません。それはまさに、カゴの中に閉じ込められた小鳥同然です。自由になりたかったら、形から意識を解き放ち、本来の「私」に立ち帰ることで、それは、ただ思うだけでなれるのです。偉大な魂は意識を宇宙大にしています。（私）も、意識を拡大させることで、偽我の（私）を真我の「私」に帰すことができます。

### ○自分を知れば誰でも宇宙を知ることができる

本当の自分を追究してゆくと、誰でも自分が宇宙であることを知るようになります。自分の意識が、宇宙そのものであることを知るからです。自分の意識がなければ、妻も子も宇宙もありません。自分の意識が認めるから、それらのものは存在できるのです。何があろうと起ろうと、すべて自分の意識の中の出来事です。

自分の意識がなければ何もあり得ないし、何も起こりようがないのです。自分の意識が拒否すれば、宇宙だって消し去ることができるのです。

でも、自分の意識がなくなっても、他人の意識はなくならないのだから、宇宙がなくなるはずがない、と反論されるかもしれません。それは客観的に物事を考えているからです。意識はあくまでも主観的なものです。自分が意識しなければ、何も生まれなし、何も存在しないのです。あなたが関係している妻も子も宇宙も、あなたの意識の中での出来事であって、他人が関係しているわけではないのです。確かに、肉体が意識をつくるなら、肉体の死は宇宙の死を意味するかもしれません。しかし、肉体が死んでも意識は絶対なくならないのですから、宇宙がなくなるわけがないのです。肉体を自分と思うから、肉体の死が宇宙を消し去ってしまうのです。

あなたは死後、本当に自分の意識が途絶えると思えますか。永遠の眠りに就いてしまふと思えますか。いつかまた自分と考える意識が生まれ、目覚める日がやってくると思うのではありませんか。そう思うのが自然です。そうでなければ、あなたのこれまでの人生はいったい何だったのでしょうか。妻（夫）をめぐり、子をなし、色々な人と出会い、泣き笑いしてきた人生は、いったい何だったのでしょうか。

意識はあなたです。あなたは意識です。そのあなたの意識は、絶対になくならないのです。そうでなければ今のあなたの存在はあり得ないからです。今あなたが存在していること自体、永遠のあなたを保証しているのです。永遠になくならない意識は宇宙に一つしかないからです。永遠になくならない自分の意識と永遠

になくならない宇宙は、イコールなのです。自分が認めることによって宇宙が存在できるわけですから、宇宙が自分なのは当然でしょう。だから、自分イコール宇宙です。それゆえに、あなたは永遠の存在なのです。

この事実を心の底で知った者は、もう何も知ろうとしないでしよう。また、何も求めようとしなくていい。自分しかいない宇宙で、他に何を知らうというのですか。何を求めようというのですか。

### ○魂の大小は意識の大小

宇宙には誰彼の生命も、誰彼の魂も、誰彼のエネルギーもありません。たった一つの、無所得で無差別の「生命・魂・エネルギー」があるだけです。ただ私たちは、形を自分と思い違いすることで、無差別の魂を個別の魂にしてしまっただけです。意識を小さくすれば小さな魂となり、大きくすれば大きな魂となるのは、意識の大きさに魂が添ってくれるからです。だから、魂を大きくしたければ、意識を大きくしなければならぬのです。意識の大きさが魂の大きさなのです。

意識を小さく分けた魂を分霊・分魂と呼んでいます。霊も魂も分けられるものではなく、共有されているものなのです。ただし、共有されているという言い方は、自我の魂が沢山あるとしたところから生まれた言葉で、本来自我などないわけですから、本来、分霊・分魂という言葉さえないのです。

意識を宇宙大にしている者にとっては、あくまでも寛大な魂が一つあるだけです。個別の魂があるように見えるのは、寛大な魂から放たれた一光線の末端を見ているからで、一光線を辿ってゆけば光源につながっているわけですから、本来同じ一つの魂なのです。ただ、意識を光線の末端に持って行くか、光源に持って



行くかで、大きな魂となるか小さな魂となるかだけの話です。

小核は大核そのものです。小生命は大生命そのものです。分霊は大霊そのものです。意識を外に向けるか内に向けるか、縮めるか拡大するかで、分霊となるか大霊となるかが決まるだけです。あくまでも意識の持ち方一つです。私たちの意識は、個の意識であると同時に全体意識であり、全体意識であると同時に個の意識なのです。その理由は、意識は宇宙に一つしかないからです。意識次第で宇宙の中心点に立てるのも、宇宙に一つの意識しかないからです。一個の小核は大核と縦でつながり、また小核は小核同士で横につながっているのです。宇宙は無限の球体となっていますので、すべての核は大核とつながりながら中心点に立てるのです。

人間は宇宙そのものです。意識を小さく使うか大きく使うかで、小さな人間となるか大きな宇宙となるかが決まるだけです。

### ○意識こそ絶対実在

この宇宙で最も確かなものは、意識です。意識こそ絶対実在です。すべての本源であり、本質です。意識の外何も存在しないのです。その意識は、創造の源泉です。知恵の源泉です。光の源泉です。愛の源泉です。次元を超越できるのは、唯一意識です。自然の法則を超越できるのは、唯一意識です。

意識は生命です。大霊です。神です。エネルギーです。本当の私です。意識は無限です。完全です。絶対善です。全能です。意識は宇宙そのものです。世界そのものです。

## ○思いはもろ刃の剣

私たちは思いを持っています。思いを持っている者は、宇宙を持っています。思いのあるところに宇宙があり、宇宙のあるところに思いがあるからです。ゆえに、思いを持つ私たちは宇宙の主なのです。宇宙の主なら、思いのままに宇宙を創ることができましょう。

さあ、思いのままに宇宙を創りましょう。そして堂々と宇宙の王として君臨しましょう。ただ一点、注意しなければならぬのは、思いは何でも生み出す力を持っていますので、決して悪しき思いを持たないことです。

世間ではよく、幸せな人、不幸せな人、という言い方をしますが、良い思いを持っている人を幸せな人といい、悪い思いを持っている人を不幸せな人と呼んでいるだけです。包丁が、料理の包丁と人殺しの包丁に分けられていないように、思いも、悪い思いと良い思いに分けられているわけではないのです。どんな思いを持つかで、良くも悪くもなるだけです。それは、思う人が決めるのです。思うことは自由です。誰も邪魔できません。その自由な思いをどう使うか。その決定権は一人一人にあるのです。

「思いはもろ刃の剣であることを知ってください！」

## ○空論では意味がない

どんな素晴らしい絵（形）も、その感動を永遠に留めておくことはできません。必ず飽きがきます。陳腐化します。色褪せてしまいます。では神は、なぜ飽きのくる形の世界をお創りになったのでしょうか。

画家がどんなに素晴らしい絵の構想を持っていても、描いて見せなければ意味がありません。また、科学者がどんなに卓越した理論を持っていても、発表しなければ意味がありません。同じように神の素晴らしい理念も、頭の中で終わっては意味がないのです。だから神は、表現の世界をお創りになったのです。

・表してこそその宇宙です。

・表してこそその真・善・美です。

・表してこそその愛です。

表現宇宙は、神の想いの丈をいっぱいに表示した世界なのです。

### ○死に絵とは？

見えないモノは生きていますが、見える物はすでに死んでおります。なぜなら、形を取った物はそれ以上進展しないからです。キャンパスに描かれた絵は、自ら変化することのできない死に絵です。しかし、思いの中の絵は脈々と生きています。このことは、次のようなたとえでいえるかもしれません。

湖面が大きく波立っています。いったい波の下に何がいるのだろう。人々は興味を抱きます。

「どんな魚だろう？」

「大蛇かもしれない」

「いや、もしかしたら恐竜かもしれない」

夢はどこまでも膨らみます。その時、ピシーと魚が跳ねました。

「なんだ、魚だったのか！」

途端に夢は萎んでしまいます。

旅行の楽しみは、企画している時や出掛ける前にあるといわれますが、それは、まだ実現化されていない生きた状態だからです。実際に旅行が始まって見ると思ったほど楽しくないのは、刻々と死に絵になって行くからです。夢は、実現化されると冷めてしまうものなのです。絵も同様に、一旦絵になってしまくと死んでしまうのです。

死に絵とは、限定された表現物、あるいは進展しない表現物という意味で、表現された絵をどのように眺めても、その絵以上のものにはなれないのです。人間も同じように、形を取った人間をどのように眺めても、その人間以上のものになれないのです。でも、人間を表している生命は、無限の可能性と発展性を秘めています。その人間が生命に目覚めたとき、死に絵は脈々と生き始めるのです。その意味では、形に生きる者は死人であり、生命に生きる者は生人であります。

・ 宇宙の面白さは、見えないモノの中にあるのです。

・ 宇宙の荘厳さは、空の中にあるのです。

・ 宇宙の真実は、思いの中にあるのです。

## ○人類永遠の課題

私たちが最も大切にすべきものは何でしょうか。なくなるものでしょうか。なくならないものでしょうか。

誰が考えても、なくならないものですね……。では、今あなたは、なくならないもののために生きているのでしょうか。それとも、なくなる物のために生きているのでしょうか。

「物はなくなります。お金はなくなります。地位や名誉はなくなります。もちろん、肉体もなくなります」

しかし、意識はなりません。生命はなりません。

大昔より、覚者の関心事は、この永遠になくならない意識をどう処遇すべきかにあったのです。もし意識がなくなるなら、誰に迷惑をかけようが、何をしようが、好き放題に生きたらいいでしょう（そのように生きている人もいる）。しかし、絶対なくならない意識だからこそ、意識の処遇に苦慮せねばならなかったわけです。

すなわち、どうしたら意識を永遠の幸せの中に留め置くことができるか。……これが、人類の永遠の課題になったわけです。

### ○想念は実現の母

想念は実現の母といわれるのは、私たちの持っている想念は創造力そのものだからです。その想念を悪用したらどうなるでしょうか。考えただけでも恐ろしいですね……。でも、その恐ろしいことを、今、人間は平気でやっているのです。

残虐な人殺し、悲惨な戦争、悲惨な事故、これみな、想念を悪用した結果です。人間は、自分たちで苦し

みをつくっていることに気づいていないのです。「私の思いは私のものだから、どう使っても私の勝手だ！」という人がおりますが、あなたの思いは全世界を揺るがすのです。いいえ、全宇宙を揺るがすのです。あなたの思いは、あなた一人の問題ではないのです。

あなたが嬉しければ、全世界が、全宇宙が、嬉しいのですよ！あなたが悲しければ、全世界が、全宇宙が、悲しいのですよ！どうか世界を、宇宙を、悲しませないでください。

### ○意識こそ唯一の真実である

時空は実際に有るものではありません。時空は意識（光）が生み出した、一種のスクリーン（影・幻）にしか過ぎないのです。実際には影（時空）は消えてしまうのです。だから、実際にならぬ時空を計測しても何の意味もないのです。幻の時空を幻の道具で測っても、幻の結果しか得られないからです。

たとえば、UFOで宇宙を移動したとします。しかしそれは影の中を移動したのであって、光の中を移動したわけではありません。幻の中を移動したのであって、真実の中を移動したわけではないのです。唯一意識が真実ですから、真実の中での移動などあり得ないからです。（意識には空間が無く距離がない）UFOの旅行も、日々の生活も、みなスクリーンの中の夢物語にしか過ぎないのです。大切にすべきは、スクリーンに映っている物ではなく、映し出している意識です。意識こそ絶対実在であることを忘れないでください。

## ○現象が独り歩きすることはない

現象が勝手に独り歩きすることはありません。どのような現象も、思いが先立っての話です。

たとえば、

・先に肉体が動いたのではなく、思いが先立ち、後に肉体が動いたのです。

・先に不幸があったのではなく、不幸な思いが先にあつて、後に不幸がついてきたのです。

・先に戦いがあつたのではなく、戦う人の心が先にあつて、後に戦いが始まつたのです。

・先に地球環境が汚れたのではなく、汚れた人の心が先にあつて、後に地球環境が汚れたのです。

このように、すべて思いが先行しているのです。幸せになりたければ、先に幸せな思いを持つてくることです。悪しき思いを持ちながら、良い結果を望むのは矛盾というものです。どうか、思いが先立つことを知ってください。

## ○不幸は神が与えたものではない！

人間は、幸せにしてください！ 健康にしてください！ 地球環境を良くしてください！ 平和にしてください！ と祈ります。でも神様は、そのような不完全なものを一度だつて人間に与えたことはありません。不幸にしているのは人間自身です。自分で不幸にしながら、幸せにしてください！ と祈るのは、おかしいではありませんか。

誰が地球環境を汚したのですか。誰が戦争を起こしたのですか。誰が病気にしたのですか。すべて人間で

はありませんか。自分でやりながら神頼みするとは、どういう見でしょうか。甘えるのはよしでしょう。幸せも、健康も、環境も、平和も、自分たちの手で取り戻すことです。幸せの源は想念にあるのです。想念を良くし、言葉づかいを良くし、行いを良くすれば、黙っていても幸せになるのです。

### ○恐ろしいのも想念なら頼もしいのも想念である

この宇宙で一番恐ろしいのは想念です。また、この宇宙で一番頼もしいのも想念です。あなたは今日、どのような想念を多く使いましたか。ネガティブな想念ですか。それともポジティブな想念ですか。多くの人は平気で悪想念の無駄遣いをしています。それがどれほどの損失をもたらしているかも知らないで……。私たちが使っている悪想念をお金に換算したら、おそらく目の飛び出るような金額になるでしょう。人間は欲張りなくせに欲がないのです。

良い想いを持つか、悪い想いを持つかは、誰がするのですか。良い言葉づかいをするか、悪い言葉づかいをするかは、誰がするのですか。良い行いをするか、悪い行いをするかは、誰がするのですか。あなたではありませんか。その想いや言葉、行為は、すべてあなたの心から生まれてくるのですよ！ 人間は身近に幸せになる方法があるのに、それに気づいていないのです。

- ・ 幸せは想念をどう使うかで決まるのです。
- ・ 人生は想念をどう使うかで決まるのです。
- ・ 世界平和は想念をどう使うかで決まるのです。



ならば、良い想念を使おうではありませんか。一人一人が良い想念を使うようになったら、何をしなくても世界は平和になるのですから……。

### ○想念のコントロールの必要な理由

人間には、何でも成し得る偉大な想念力が持たされています。機械文明の恩恵と災いの両面がそれを証明しています。ビルディングも、飛行機も、船も、車も、コンピュータも、みな想念による作品です。戦争も、環境破壊も、災害も、事件も、事故も、病気も、みな想念による作品です。想念はもろ刃の剣のようなものなのです。それだけに、想念の扱いが大切になってくるのです。特に神の自覚を得た者の想念の扱いは、慎重になされなくてはなりません。彼らの想念は、宇宙をも破壊しかねない偉大な力を秘めているからです。想念のコントロールのできないうちは覚者になれないといわれるのは、そういった理由があるからです。

私たち一般人の想念力は、人間の自覚に与えられたものですから、そこまでの力はありませんが、悪想念が集まれば、地球を破壊する大きな力になりかねません。だから、私の想念は私のものだからどう使ってもかまわない！ といってはならないのです。どうか想念を良いことに使ってください。

### ○人類を救うのは一人一人の想念である

欲したものは何でも与えられるのが宇宙の法則です。悪い思いを持てば悪いことが与えられ、良い思いを持てば良いことが与えられるのです。実に想念の力は偉大です。今地球上に悪しきものがはびこっているのは、人類が悪しきものを欲してきたからです。悪しきものを欲しながら、神様、幸せにしてください！ と

祈るのは矛盾というものです。

よく、ボランティアをやりながら愚痴をこぼしたり人を批判したりしている人がいますが、どんな良いことをしても、少しでも悪想念を持てば帳消しになるのですよ！ そんな悪想念を持ちながらボランティアをするよりも、悪想念を放たないようにする方がどれほど世のため人のためになっていることか……。あなたは、一日どれくらい悪想念を放っていると思いますか。言葉や行為に出さなければ、いくら悪想念を放っても構わないと思っている人がおりますが、とんでもない！ 思ったことと行ったことは同じ重さを持っているのですよ！

世に貢献したければ、悪想念を放たないようにすることです。人類を救うのは、政治でも、経済でも、科学でも、教育でも、宗教でもありません。私たち一人一人の想念です。

### ○損得を知らない人間

世の中には、一円でも損したらカンカンになって怒る人がおりますが、その人は外側の損には敏感なのに、内側の損には実に鈍感なのです。

内側の損とは、善き思いを持てば得をし、悪しき思いを持てば損をするという、心の法則にかかる損得です。善き思いは善きものを引き寄せ、悪しき思いは悪しきものを引き寄せるのが心の法則ですから、悪しき思いを持つ人は損をし、善き思いを持つ人は得をします。しかし、そのことを誰も真剣に考えようとしないのです。心の法則の働きが人の目に見えないからでしょうが。でも、目に見えなくても、間違いない私

たちの人生を左右しているのです。

たとえば、よく病気をする人、よくケガをする人、よく交通事故を起こす人、よく人に騙される人、よくドロボーに入られる人、これみな心の法則によって起きている不幸です。それなのに、人間はただ、運が悪かった、だけで済ませているのです。この世の中には、幸運も不運も偶然も奇跡もあります。すべて心の法則によって起きる必然です。自分の思いが、自分の言葉が、自分の行為が、自分を幸せにしたり不幸にしたりしているのです。どうか思いの大切さを知ってください。

### ○悪想念で汚染される地球

情報通信の進歩は私たちの生活に多大な恩恵をもたらしましたが、一方で、人の心を腐らせる要因ともなっています。

- ・ 過剰な情報は私たちの心にネガティブな影を落としています。
- ・ コマーシャルは誤った概念を押しつけ人の欲望を掻き立てています。
- ・ インターネットは理性を打ち砕く要塞と化しています。
- ・ 携帯電話は悪想念垂れ流しの温床となっています。

今や、地球は黒い想念で汚染され、窒息寸前です。近年多発している凶悪犯罪のほとんどが、この黒い想念によって起きていることを知らねばなりません。物的公害による環境汚染も深刻ですが、心的公害による環境汚染は、もはや猶予できないところまで起きているのです。

戦争も、病気も、事件も、事故も、異常気象も、地震も、すべて悪想念による人災です。人類一人一人の悪想念が堆積し、そのような災厄を招いているのです。人間は、目に見える物で目に見える物を改善しようとはしますが、目に見えない想念によって招いた災厄は、目に見えない想念で改善するしかないので。結果で結果は改善できないということです。

真の改善方法は、

- ・ ポジティブな想いを持つことです。
- ・ 良い言葉を使うことです。
- ・ 良い行いをするということです。
- ・ 瞑想をすることです。

さあ、世のため人のためになりたいなら、常に明るい想いを持ち、ポジティブな言葉を使い、良い行いをしてください。さらに、テレビを見る時間を少し割いて、瞑想する時間にあててください。その方が、ボランティアをやるよりよほど世のため、人のため、地球のためになっているのですから……。

### ○ネガティブな想いを持つな！

世の母親は、何かというとき子供のことを心配します。「風邪を引かないだろうか。怪我をしないだろうか。事故に遭わないだろうか」と……。また、テレビでアナウンサーがこういます。「季節の変わり目です。体調にお気をつけください！ 寒くなりますのでお風邪を召しませんように」と……。

大きなお世話だ！ と私はいいたいです。どうして想念をネガティブに使うのでしょうか。

世の人々は、心配してやるのが良いことだと思っています。一方、心配される方もそれを望んでいます。しかし、これはすべて慈悲魔です。甘えです。偽善行為です。良く見られたいと思う自己顕示欲です。それも、悪い結果を招く呪いの想いです。

・ 思いを持つなら、良い思いを持つてください。

・ 人の力になりたいなら、希望の言葉を口にしてください。

・ 人に幸せを与えたいなら、ポジティブな言葉で励ますことです。

それができないなら、何も思わないことです。何もいわないことです。何もしないことです。あなたの思いが、すべからく世に影響を与えていることを知ってください。

### ○何に思いを向けるか？

何も思わないでいる人など、この世に一人もおりません。全員が全員、家族のこと、友たちのこと、恋人のこと、仕事のことなど、日々様々な思いを持って生きています。それも、過去のことを悔やんだり懐かしがったり、未来のことを憂いたり恐れたり、なるかどうか分からないことをくよくよ考えたりして心を痛めています。これでは、幸せになれるはずがありません。

幸せになりたかったら、自分の方から幸せをもらいに行くことです。もらいに行くという意味は、想念を上手に使うという意味です。想念を上手に使えば、幸せは黙っていても向こうからやってきます。誰も幸せ

は与えてくれません。誰も不幸は与えてくれません。与えるのは自分の想念です。ならば、想念を上手に使おうではありませんか。

想念の上手な使い方とは、

- ・ 前向きな想念を持つことです。
- ・ 建設的な想念を持つことです。
- ・ 明るく楽しい想念を持つことです。
- ・ 希望あふれる想念を持つことです。

一番大切なのは、どんなことが起きても決して悪く受け取らないことです。悪く思わないことです。そのためには、心の法則を熟知し信ずることです。信ずる心が強まれば強まるほど、幸せは身近に寄ってくるでしょう。

### ○すべて想念が関係している

野球、サッカー、ゴルフなど、ボール競技真つ盛りの昨今ですが、勝負事はいったい誰がやっているのでしょうか。ボディーでしょうか。想念でしょうか。

これは、想念と想念が闘っているのです。

- ・ 強い想念を持つ方が、弱い想念を持つ方を制するのです。
- ・ 良い想念（ポジティブ）を持つ方が、悪い想念（ネガティブ）を持つ方を制するのです。

良い想念は光を呼び、悪い想念は闇を呼ぶからです。光が強ければ幸運を呼び、闇が強ければ不運を呼ぶのが宇宙の法則ですから、そのようなことが起きるのです。この法則は、誰も逆らうことはできません。

よくボール競技で見られることですが、勢いづくボールは自分たちの都合のいい方へ転がり出し、劣勢になるとボールは自分たちの都合の悪い方へ転がり出します。イレギュラーする、デボットに入る、人のいないところに転がる、これはみな、光がボールを支配することによって起きる現象です。ボール競技だけではありません。どんな競技も、想念の持ち方が勝敗に大きく影響しているのです。もちろん、スポーツ競技は相手あることです。力（技術）が拮抗している場合という条件はつくでしょうが、想念が勝敗のゆくえんに大きく影響していることは間違いないのです。

人生における幸・不幸も同じです。そこに神も、仏も、奇跡も、偶然も、関係ありません。良い想念をどれだけ多く、どれだけ強く使うかで、幸・不幸は決まるのです。ですから、幸せになりましたか、ポジティブな想念を、多く、強く、使うことです。どんな思いを持ってても一円のお金もかかりませんが、思いには必ず損得がついてくるのです。それなら、得する思いを持つとうではありませんか。

- ・ 国の医療費がどれほどになっていると思いますか。
- ・ 犯罪防止にどれほど予算がつか込まれていると思いますか。
- ・ 交通事故防止にいくら予算が費やされていると思いますか。
- ・ 国防費などといったどれほどになっているでしょう。

・災害防止や復旧にいくらお金がつき込まれているでしょう。

人類が正しい想念を使うようになったら、こんな費用は一切必要なくなるのです。人間は、目に見える損得には敏感なのに、目に見えない損得には実に野放図です。

一日も早く、このような予算の要らない世の中にしたいたいものです。それは、想念の持ち方一つでできるのです。

### ○地球を救うのは人の目覚めである

私たちのポデーは、神がお造りになった傑作品ですから、完璧に造られております。だから本来、不健全な形で生まれたり、病気になるったりするわけではないのです。でも実際は、五体に欠陥のある子が生まれたり、病気になるったりしています。なぜ、そのようなことが起きるのでしょうか。

神の細胞はどこまでも完璧です。ただし、そこに不健全な意識の介入がなければ、の話です。残念なことに、人間は、心配、恐怖、イライラ、怒りなどのネガティブな意識を介入させ、健全な細胞を損ねております。どんな頑丈な車も乱暴に扱えば壊れてしまうように、人間のポデーも乱暴に扱えば壊れてしまうものなのです。

地球も同じです。人類の悪想念が、地球を病気にしているのです。今、人類は、地球を救おうと様々な環境対策を講じていますが、造られた物（人間）が造られた物（地球）を救えるわけが 아닙니다。唯一救えるのは、創り主である生命です。だから人間は、一日も早く生命に目覚めなければならないのです。生命に



目覚めれば、造られた者から創り主に変身するわけですから、地球を救うことなど朝飯前にできるのです。

### ○想念フィルターを歪めるな！

純朴な神の光が、人の想念フィルターを通して映し出されたのがこの表現世界です。もし人間の想念フィルターに歪みがなければ、美しい影が映し出されたことでしょうが、残念なことに、今、地球上には沢山の歪んだ影が映し出されています。自分が人間だと思えば、身を守らねばなりませんから、競ったり、奪ったり、戦ったりしなければなりません。そこに当然、心配、恐怖、怒り、憎しみが生まれるでしょう。その歪んだ想念が、醜い影となって表現世界に映し出されているのです。

今、地球は、極限まで病が進行しています。この病を治すには、人間の歪んだ想念を正す以外ありません。すなわち、人間意識から生命意識への意識の変換が必要なのです。もし意識変換できたら、神の光は真づくに届くでしょうから、地球上に美しい影が映し出されるでしょう。その美しい影こそ、神が望んでいる地上天国なのです。

### ○想念を利用しよう！

想念は実現の母といわれるように、想念は何でも実現させる偉大な力を持っています。私たちはその想念を利用し、今日まで欲しい物を手に入れてきました。物を、お金を、地位を、名誉を、お嫁さんまでも……でも、それら手に入れたものは、みな消えゆく偽物ばかりでした。私たちの想念は、そんな偽物を得んがために与えられたものではありません。永遠に失わないものを得んがために与えられたのです。永遠に失わない

ものとは、本当の自分のことです。生命の自分のことです。

さあ、今までやってきたことと同じことをしましょう。

物が欲しいと思って物を手に入れたように、お金が欲しいと思ってお金を手に入れたように、お嫁さんが欲しいと思ってお嫁さんを手に入れたように、生命が欲しいと思って生命を手に入れましょう！ 思えば必ず実現します。これは宇宙の法則ですから、間違いありません。思ったが手に入らなかった、という人は、想念を正しく使っていなかったか、忍耐強く思い続けていなかったか、またはその両方かもしれません。

生命を手に入れるには、生半可では駄目なのです。手に入るまで、忍耐強く、求めて！ 求めて！ 求め続けなければなりません。継続は力なりです。どうか、手に入るまで求め続けてください。

### ○汝の見るもの受け継がん！

世の中には、言葉で招いている災いがございます。たとえば、テレビ・コマーシャルで流される宣伝文句や、事件・事故・災害・戦争などの報道がそれです。汝の見るもの受け継がん！ といわれるように、一旦自分の意識に入れたものは、自分の責任として受け継がねばならないのです。たとえそれが、どのような邪悪なものであろうとも、です。

なぜこのように災いが増えたと思いますか。それは、余計な情報が多くなったせいではありませんか。良い情報ばかりなら、マスメディアは世の救世主となれるかもしれませんが、残念なことに、圧倒的に悪い情報の方が多いのです。悪い情報を見聞きして心を汚さない人など、一人もおりません。だから、情報量が多

くなればなるほど、世は乱れて行くのです。

いらぬ情報で、どれだけ人々の心に憎悪や恐怖が膨れたことでしょうか。今や地球の周りは悪想念で一杯です。情報の管理がいかに大切な、人類はそろそろ気づいていいころです。

### ○自己処罰

神の法則は、私たちの想念の中に組み込まれています。偉大な創造原理を付与された私たちの想念は、法則そのものなのです。だから、悪いことを思えば不幸が、良いことを思えば幸せがやってくるのです。

今、人間社会は、災厄のオンパレードです。誰のせいでもありません。すべて人の悪想念が生み出した結果です。自ら苦しみをつくり、自ら勝手に苦しんでいるのが人間なのです。人間はそのことに気づかず、責任を他人に転嫁しては自分を慰めているのです。なんと哀れなことでしょう。

神様は、一度たりとも人間に苦しみを与えたことはありません。苦しんでいるのは、みな自己処罰です。自分の誤った想念と行為に、自分が罰を与えているのです。

それは自分が神だからです。自分が生命だからです。神なる生命なる自分が肉の自分に罰を与え、目覚めさせようとしているのです。なんとも健気だとは思いませんか。

### ○幻を想念するな！

迷いとは、ないものを有ると思うことです。ないものを有ると思えば、ないものの影響を受けないわけにはゆかないのです。なぜなら、汝の見る物受け継がん！の法則に基づき、想念したものは必ず実現するよ

うになっているからです。

有るもののみを思いましよう。有るもののみを見ましよう。有るもののみを聞きましよう。有るものとは、生命のことです。神のことです。エネルギーのことです。本当の私のことです。ないものがどんなに騒ごうと、そんなものは幻にしか過ぎませんから、無視することです。無視すれば幻は消えてゆくしかないのです。幻は自ら生きていないからです。幻は、迷いの想念からエネルギーをもらって生きている吸血鬼のようなものですから、エネルギーを与えなければ消えてゆくしかないのです。

病気は迷いの想念が生み出した幻ですから、思いを断ちエネルギーを与えなければ消えて行くのです。かわるから、幻は力を得て騒ぐのです。意識するから、幻は力を得て騒ぐのです。認めるから、幻は力を得て騒ぐのです。意識することは認めることです。欲することです。望むことです。欲すれば与えられるのが宇宙の法則ですから、幻は力を得て騒ぐのです。

人間は自分で幻をつくり、その幻に苦しめられていることに気づいていないのです。さあ、気づいてください！ 外側からきたものはすべて幻だから、自分が認めなければそんなものの影響は受けないということ……。

### ○限定意識を捨てよう！

偉大なアスリートになりたかったら、人間はこれだけのことしかできない！ あれだけのことしかできない！ といった限定意識を捨てることです。私たちは幼い時から、両親や学校や書物やテレビなどで、人間

はどんなに鍛錬してもこれだけの力しか出せない、跳べない走れない泳げない、といった限定意識を植えつけられてきました。特に、スポーツ科学の発達した現代社会においては、一層その限定意識は強められておられます。スポーツ科学は自然科学をベースにつくられたものですから、どうしても人間を一個の物体と見、考え、研究しがちなのです。そうなれば、自然法則内で最大限の力を引き出す研究しかしませんので、人間以上の力は引き出せないのです。

私たちは人間ではありません。生命です。本性においては、とうに自然の法則を超えたものなのです。だから、生命に目覚めれば、偉大な力が発揮できるようになるのです。もちろん、悟ってしまえば自然法則外に出てしまうわけですから、競い合うこと自体無意味になってしまいますが、たとえ悟らなくても「私は無限の力を持った生命である！」と強く思えば、二割増し三割増しに力を発揮することができます。

アリは、自分の体重の何十倍もの物を運ぶことができます。バッタは、自分の身長何十倍ものジャンプができます。チーターもシマウマも、軽く時速七、八十キロのスピードで走ることができます。彼らには限定意識がないからです。人間も限定意識を捨てれば、彼らと同じような力が発揮できるのです。

### ○幸せの売買人は自分の想念である

幸せは、どこか遠い彼方にあるものではありません。誰かが持ってくるのでもありません。幸せは、自分の想念が持ってくるのです。ネガティブな思いを持っていては、決して幸せを受け取ることはできません。幸せを受け取りたかったら、ポジティブな思いを持つことです。

そうですね！ 幸せを受け取るこんな簡単な方法があったのです。なのに人間は、外側に幸せがあると勘違いし、躍起になってお金を稼ぎ、幸せを買おうとしています。買える幸せなど、どこにもないのに……。想念は自由自在です。どうにでも思えるのです。その自由自在な想念が、幸せを持つてくるのです。自分の想念が幸せの売買人です。ぜひ、自分の想念で幸せを買ってください。

### ○嘘をつけば嘘を受け継ぐ

嘘をつけば、嘘しか受け継げないのは当たり前です。原因が嘘で、結果が本当ということはありません。人間社会に不幸が絶えないのは、全員が全員嘘をつき続けてきたからです。人間だと思えば人間を受け継ぎ、生命だと思えば生命を受け継ぐのです。人間を受け継げば、不幸（生・老・病・死）を受け継ぎ、生命を受け継げば、永遠の幸せを受け継ぐのです。

嘘から出た誠（真）はありません。嘘からは嘘しか出ないのです。ですから、真実が欲しかったら、決して嘘をつかないことです。さあ、今日から、人間という嘘をつくことを止めましょう。そして、生命という真実を語るようにしましょう。そうすれば、永遠の幸せを受け継ぐことができるのですから……。

### ○世界は変えられますか？

ある人から、「世界は変えられますか」と質問されたことがありました。私はそのとき、躊躇なく、ええ、変えられますよ、と答えました。世の人々は、世界は変えられないと思っていますが、それは外側に世界があると思っているからです。

意識（心）は世界の別名です。世界は意識の別名です。あなたは今意識を持っていますね。ということは、あなたは世界を持っているということです。

誰もが一つの共通世界しかないと思っていますが、世界は人の数だけ有るのです。なぜなら、一人一人見ているもの、感じているものがみな違うからです。同じ立場で見られる人など、この世に一人もいないのです。それは、主観的世界しかないことを意味します。その主観世界を変えられるのは誰でしょうか。主観者である自分ではありませんか。だから私は、世界は変えられますよと躊躇なく答えたのです。自分の世界を変えればいいのですから、こんな簡単なことはありません。（実際は、これほど難しいことはないのだが……）

私の世界しかないと思えたら、それは悟りです。その人は外側に目をやらず、自分の世界（心）のみ見詰めることでしよう。そして、自分の世界を平和にするよう心掛けるでしょう。ですが、外側に世界があると思っている者は、外に出て旗を振り、大声を上げ、世界平和を訴えます。その拳句、外側から様々な苦悩を持ち帰っては、自分の心（世界）を乱します。世界を平和にしたければ、一日も早く本当の自分に目覚めることです。目覚めたら、世界は黙っていても平和になるのですから……。

さあ、実際にはない外側の世界に平和を求めめるのではなく、実際にある内側の世界に平和を求めてください。

### ○創作余地の残されているドラマは楽しい！

テレビで放映されたドラマは、百パーセント死に絵になっています。なぜなら、登場人物の顔・形・年齢・

性別・演じられる背景など、百パーセント画面を通して知ることができるため、そこに視聴者の入る余地（創作余地）が残されていないからです。これがラジオドラマならどうでしょう。まだ少し創作余地が残されていますので、残された部分を飾りつけて楽しむことができますでしょう。

今の私たちは、百パーセント表現された絵として生きているため、完全な死に絵になっております。でも、もし表現者として生きることができたら、どのようにでも創作し、大いに生き絵を楽しむことができるでしょう。表現されたものとして生きるか、表現者として生きるかで、生き方に天地の差が出るのです。

私たちは一日も早く、創作者（画家・生命）に目覚めなくてはなりません。目覚めたら即、創作者として活躍できるのです。すなわち、死に絵から生き絵に早変わりできるのです。

### ○新時代は想念のコントロールが最大の鍵になる

新時代は生命王国の時代になります。人間を含め、あらゆる生き物が一つの命で生かされている事実が、公然と認められる時代になるのです。あなたも私も、鉱物も植物も動物も、同じ宇宙生命から生まれた兄弟姉妹同士です。だから、あなたが苦しめば、全宇宙が苦しむのです。私が苦しめば、全宇宙が苦しむのです。私は関係ないといっても、そうはいかないのが想念の仕組みなのです。人間はこれまで、この想念の重要性をあまり考えようとしませんでした。自分の放った想念が他に影響を与えらることも、我が身に帰るとも思えなかつたからです。だから、何を思おうがまるで他人事だったので。

新時代に真っ先に取り組まねばならないのは、想念のコントロールです。幼いうちから正しい想念の扱い



を教え、それに沿った生活をするよう徹底的に指導することです。社会の仕組みをこうしよう！ 政治の仕組みをこうしよう！ 経済の仕組みをこうしよう！ ではないのです。いかに正しい想念を使えるようになるかが、理想世界を築く最大の鍵になるのです。

生涯学習として、想念教育に全力を注ぎましょう。それができれば、理想世界は必ず実現します。それも、意識の高さに比例した理想世界が実現します。

### ○慈悲の波動で打ち消そう！

一度時空に放った悪的想念は、必ず降りてきて苦しい結果を生みだし、原因を消そうとします。これが慈悲(因果の法則)の波動の働きです。この慈悲の波動の働きは、時が解決する根拠になっているわけですが、それを当てにしていたのでは時間がかかり過ぎるし、第一、処刑を待つ囚人のようで哀れ過ぎます。やはり、こちらから積極的に働きかけ、先に結果を打ち消した方が賢いでしょう。ようするに、結果がやってくる前に反省し、悪的波動を打ち消すのです。

反省の波動は、悪的波動の反対の性質を持っていますので、波の干渉によって、結果を和らげたり消したりしてくれるのです。だから、反省の波動を慈悲の波動ともいうのです。

ただし、反省は「二度と過ちを犯さない！」という、強い決意の伴ったものでなくてはなりません。本心から悔い改めることができたなら、間違いなく「黒石」を「白石」に置き換えることができるでしょう。

## ○想念の入れ替え

私たちの抱く想念が、人生を大きく左右していることを知ってください。想念の偉大さを知った者は、宇宙の真髄を知った者であるといわれるくらい、大変重要なことなのです。

私たちを無能な人間にしているのは、生命の自分を人間という思いで落としているからです。自分が生命であると思えば、必ず変化が起きてきます。それも、自覚の強さに比例した変化が起きてきます。人それぞれ理解力が違いますから、全員に同じ変化は保証できませんが、想念が入れ替われば、間違いなくあなたは変わります。

私たちの肉体はほぼ同じ形をしていますから、外側からではその人の魂の大きさは分かりません。でも、肉体を脱いだとき、その差は歴然とします。だから、今何も変化が起きないからといって落胆しないでください。

さあ、目先の現象に惑わされず、一心に生命の自覚を高めましょう。その成果は、間違いなく肉体を脱いだとき分かるのですから……。

## ○私という意識の存在

深い眠りから覚め、朦朧とした意識の中で、私は何ものなのか、今私はどこにいるのか、私はいったい……私？ 私？ 私？ ……こんな意識の迷子になった体験はありませんか。まるで自分が何者か分からないのです。しかし、眠りから覚めるに従い、そうか私は誰々だったのだ。今何という町の、何というホ

テルに泊まっているのだ。そして今日、これこれをするためにこの町に来たのだ！　ということを出し、そんな体験はありませんか。

人は深い眠りに入ると、形のしがらみから解放され、ただの私、つまり純粹な生命の私に戻るのです。その時の意識には、何の色も何の印もついていないのです。自我の自分に目覚めることで、色や印の記憶が蘇り、自分が置かれている立場や、やらねばならないことを思い出すのです。

このように、本来私たちの意識には、何の色も何の印も何のラベルもついていないのです。無所得の意識です。無差別の意識です。そこには、ただ一つの普遍的な生命意識があるだけです。意識の迷子の体験は、この宇宙に一つの意識しかないことを知る貴重な体験です。ぜひ、朝方の朦朧とした意識の中で、唯一の生命意識を確認してください。

### ○自分で生きているものが本当に有るものである

本当に有るもののみが、生きているのです。本当に有るもののみが、生き永らえることができるのです。生かされているものは、生かされている間だけ生きられるのであって、生かされなくなれば消えてゆくしかないのです。それは消極だからです。自分で生きていないからです。

意識は自分で生きているものです。生命は自分で生きているものです。しかし、肉体は自分で生きているものではありません。肉体は本当に有るものではないのです。肉体に執着してはならないのは、本当に有るものではないからです。永遠の意識が、消えてなくなる肉体を追いかけ、苦しむはずがありません。本

当に有るものが、本当でないものを追いかけるのは矛盾だからです。求めるなら、永遠になくならないもの、自分で生きているもの、本当にあるものを追い求めましょう。それが永遠の幸せを掴む秘訣です。

#### (4) 私から宇宙を探る

##### ○私とは？

宇宙において、この「私」というのが一番の曲者なのです。「私」を知った者はすべてを知る者といわれるほど、この「私」を知ることほど大切なことはありません。では「私」とは何でしょう。

「私」という漢字を分解してみると、左辺に(禾)と書き、右辺に(ム)と書きます。右辺の(ム)には、大きい、広い、無限といった意味があります。(ム)は、宇宙を意味しているのです。左辺(禾)には、束とか、個とか、集まったものといった意味がありますので、通して解釈すれば、「私」とは、宇宙が集まったものということになります。すなわち、「私」という漢字は、「宇宙」を意味しているのです。

その宇宙の私には、二つの私があります。一つは白光の「私」、もう一つは白光から放射された無数の光線の末端につくられた影の(私)です。光源は一つしかありませんので、白光の「私」も一つしかありません。しかし光線は無数ですから、影の(私)は無限に存在することになります。光源は永遠になくありませんが、影は必ず消えてなくなります。だから影の(私)は幻の私です。

つまり、左辺の（禾）東・個の私は、実在しない私になります。このように、右辺の（ム）なる白光の私は永遠なる「私」なのに対して、左辺の（禾）なる影の私は無常なる（私）なのです。

（私）は「私」から生まれたわけですが、では、なぜ（わたし）と呼ぶようになったのでしょうか（本当は【あたし】と発音する）。

この（わたし）は、宇宙創成時最初に発せられた言葉で、神ご自身を指しているのです。だから、この地球では、神を示す言葉に「アイアム・アオーム・アミー・アミダ・アルファー・アーメン」など、【あ】の響きに近い言葉が使われているのです。

### ○私（自分）の外に何もないことを知る

私の外に何もないと知った者は、何の苦しみも、何の憂いも、何の恐怖もありません。私が私を害することなどあり得ないからです。人間が不安や恐怖に怯えるのは、私の外に何かがあり、その何かが私に危害を加えると思うからです。

私の外に何かがあると思っている者は、外側から幻を拾ってきては、それを妄念によって組み立て、自ら苦しみや悲しみ（病気や事故など）をつくっています。当人は、その苦しみが外側から来たものだど勘違いしているのです。本当の私を知った者は、自分の意識が世界をつくっていることを知っておりますので、わざわざ外から雑念を持ち込むようなことはしないのです。ですから彼らは、常に自分の中に平安な世界を持っています。

この宇宙には私しかいないのです。私しかいないなら、誰と、何と、敵対するというのでしょうか。一つの中に、敵対したり対立したりする材料などあるわけではないのです。敵対心を持つのは、私の外に何かがあると思うからです。私しかないと知った者は、決して不調和な思いは持ちません。持たなければ不調和なものが現れるわけがありませんから、その者はもう安泰なのです。

○私の世界に入れてはならない！

外側にどんな世界があったとしても、私には関係ありません。私は外側の幻の世界で生きることなどできないからです。唯一私が生きられるのは、内なる真実の世界です。その真実の世界は、私がつくったオリジナルな世界です。私オナリーの世界です。私の思い一つでどうにでもなる、融通無碍なる世界です。その世界に嫌なものを入れなければ、嫌なものは一つもありません。だから私の世界は、常に楽しく、平安で、幸せです。私の世界に、不幸という文字はないのです。たとえ嫌なものが入って来ても、

・ 拒絶したらいいい！

・ 締め出したらいいい！

・ 追い返したらいい！

・ 認めなければいい！

一切受け取らないことです。一切受けつけないことです。一切認めないことです。たとえ五官を通して入って来ても、

・門の中に入れなければいい！

・入口で締めだしたらいい！

・一方的に入ってきてても無視したらいい！

・強引に入ってきてても認めなければいい！

もちろん、楽しいものなら入れましょう！ 幸せをくれるものなら入れましょう！ しかし、嫌なものは

一切入れないことです。また、わざわざ外に出て、嫌なものを拾ってくる必要ありません。外に出て嫌な

ものと戯れるから、災いを受けるのです。外は幻の世界です。実在しない世界です。ですから、

・外側のものを見ないことです。

・外側のものを聴かないことです。

・外側のものを味わわないことです。

・外側のものを嗅がないことです。

・外側のものを触らないことです。

・外側のどんなものも拾わないことです。

私の世界に留まっていたら、いつも安泰でいられるのですから……。

ただし、こういえるのは、本当の自分に目覚めた者だけです。外側に何かを認めている迷い人は、絶対このようなことはいえません。

### ○私の認めないものはない！

私の認めないものはないのです。なぜなら、私の認めるところにこそ私（本質・光）がおり、影をつくっているからです。私の認めないところに光はないわけですから、影のできようがないのです。私が認められるのは、そこに私がいるからです。本質そのものが私ですから、認めた瞬間に、本質である私とそのものになるのです。そこに光があるということは、そこに本質である私が存在し影をつくっているということです。私が宇宙を創造したのです。私が宇宙の創造主なのです。私の意識しないところに宇宙はないのです。私の認めないところには何も存在しないのです。

- ・今私が宇宙を認めているから、今宇宙があるのです。
  - ・今私が世界を認めているから、今世界があるのです。
  - ・今私が花を認めているから、今花があるのです。
  - ・今私が妻子を認めているから、今妻子があるのです。
  - ・今私があなたを認めているから、今あなたがあるのです。
- だから私は創造主なのです。

### ○私のつくった私の世界

今、私が感じている世界は、私の意識が生み出したオリジナルな世界です。私がつくったオリジナルな世界だから、私が認めなければそんな世界はないのです。今、私が世界を感じているのは、私が認めているか



らです。

今、私は、このボディを自分だと感じています。だから今の私は、小さな世界の主なのです。もし宇宙を自分だと思えたら、宇宙の主になれるでしょう。すなわち、人間を私と思えば人間となり、宇宙を私と思えば宇宙になるというわけです。

私は意識している通りのもので、それ以上のものでも以下のものでもありません。ならば、小さなボディを意識するのではなく、無限の宇宙を意識しようではありませんか。思えば即あなたは宇宙です。思えば即あなたは無限です。さあ、無限の自分を思いましよう。思うに一円のお金もかからないのですから……。

### ○認識するものと認識されるものは同じもの

私は本質そのものであり、創造物そのものであり、認識者そのものであり、創造主そのものです。先にモノが存在するから認識できるのではなく、先に認識者がいるからモノが存在するのです。もし先にモノが存在するならば、原因のない所から結果が生まれたことになり、天地が逆様になってしまいます。

認識されるものと、認識するものは同じものなのです。認識者が認識することで、認識されるものが生まれるのです。つまり、今私が見ているモノの中に私がいるから、そのモノが存在できるのです。見ているモノの中に本質である私が居なければ、そのモノはあり得ないわけですから、私が認識できるわけがないのです。私とそのモノの中に居て形造っているから、私は認識できるのです。今、私が認識しているということは、今、私とそのモノの中にいるということです。

・今、私が花を認識しているということは、今、その花の中に認識者である私がいるということです。  
・今、私があなたを認識しているということは、今、あなたの中に認識者である私がいるということです。  
・今、私が宇宙を認識しているということは、今、宇宙の中に認識者である私がいるということです。  
・今、私が私を認識しているということは、今、私の中に認識者である私がいるということです。  
私はそんなものをつくった覚えがない、という人は、自我で物事を考えているからです。原因者がいなければ、結果が生まれるわけではないのです。親あつての子です。子が先に生まれることはないのです。認識者が先にいて、認識されるものが後で生まれるのです。つくった覚えがないという人は、つくり主と自分とを分けて考えているからです。宇宙には、あなたしかいないのですから、あなたがつくったのです。あなたという本質が、あなたという創造主が、そのモノをつくったのです。

ゆえに、

- ・本質は私そのものであり、創造物そのものであり、認識者そのものであり、創造主そのものです。
- ・創造物は本質そのものであり、私そのものであり、認識者そのものであり、創造主そのものです。
- ・認識者は創造物そのものであり、本質そのものであり、私そのものであり、創造主そのものです。
- ・創造主は認識者そのものであり、本質そのものであり、私そのものであり、創造物そのものです。

○認められているものの中に認めている私がいる

私が存在しなければ何も存在しない、というのは真理です。私が存在し、認識するから、すべてのものは

存在できるのです。認めている私がいるから、認められるものがあるのです。私が認めているものの中に私がいなければ、認められるものはあり得ないということです。宇宙に認識者は私しかいないからです。しかも、その認識者である私は、素材そのものですから、そこに物があるということは、私という素材がその物の中にいることとなります。私という素材がその物の中にいるから、その物が存在でき、また私はその物を認識できるのです。

反復します。

認められているものと、認めているものは同じものです。認めている私と、認められている私は同じ私です。私があるものを認めているから、そのものは存在できるのであって、私が認めなければそのものはあり得ないのです。

○私たちは孤独ではない！

私たちは、自分の外に何かがあると思っています。だから、家族や友達のない人は寂しがるのです。しかし、私たちは一つの中にいるのであって、沢山の何かと共にいるのではないのです。確かに、形を見ると沢山の何かがあります。でも、その中身はたった一つしかない私なのです。その私を生命と呼べば、沢山ある何かは生命そのものです。生命が、私が、様々な形を現わしているだけです。孤独だと思っている私は、生命であり、一つであり、全体なのです。外側に現われているものを見て、沢山のものがあると錯覚し、そこから離れて一人になっているから孤独に感じるので。沢山の人たちがいると思えば、その沢山の人たちが

ら離れていれば、孤独に感じるのは当たり前です。ですが、その沢山の人たちが自分だと思えば、どうして孤独を感じるでしょうか。

何もかもが私です。何もかもが私の化身です。すべては私なのです。私を分けるから、物と私が別だと思うのであって、すべての物が私だと思えば、沢山の物に囲まれている私に、どうして孤独感が生まれるでしょうか。考えても見てください。周りに沢山の物があると思っている人が一人になったら、孤独に感じるのは当たり前ではありませんか。しかし、自分しかないと思っっているなら、自分一人になってもそれは当たり前ですから、孤独を感じるわけではないのです。

あなたが着けている洋服も、靴下も、家の中に置かれているタンスも、テーブルも、テレビも、みな私です。その沢山の私に囲まれている私は、幸せ一杯ではありませんか。どうか私に声をかけてやってください。きつと私は喜ぶでしょう。また、そう思えば、家族がいなくても、友達がいなくても、寂しくないはずです。

○心を汚してはならない！

この宇宙には、唯一、私の世界しかありません。世界をつくっているのは私の意識だからです。私の心だからです。その心を汚したら平安は崩れ、私の世界に不幸が蔓延します。反対に、心が清らかであれば悩みはなく、私の世界に幸せが蔓延します。

外側にホンモノは一物とてありません。だから、外側から何も受け取ってはなりません。入ってきて拒

否することです。無視することです。そうすれば、私の世界は常に清らかでいられます。

心がけるべきことは、私の心を汚さないことです。曇らせないことです。傷つけないことです。痛めつけないことです。騙さないことです。それは誰がやるのでもありません。私の意識がするのです。自分の思いがするのです。自分の世界を守る管理人は、自分の意識である、自分の思いである、ということを知ってください。

○私が認めないものはない！

何度もいいますように、意識は私の意識しかありません。その意識は、主観的意識です。一なる意識です。主観とは、自分を起点として考える世界観です。だから私が主役なのです。

この宇宙には、沢山の「幻」が漂っておりませんが、幻ですから実在するものではありません。でもその幻は、縁の力を利用して、強引に私の意識の中に入ってこようとします。それは自分がつくった縁だからです。でも、どんなに自分がつくった縁であろうと、自分が拒否すれば入ってくることはできないのです。拒否するとは、認めないことです。認めないものは、ないので。自分の意識に入れないものは、ないので。たとえ強引に入ってきてても、自分が認めなければ何の影響も受けないのです。

「見て見ず、聞いて聞かず、触って触らずです」

私たちが苦しむのは、私の意識の中に幻を入れるからです。実際にはない幻を有ると錯覚し、自分の屋敷に入れるから、屋敷の中が汚されてしまうのです。幻はあくまでも幻ですから、食べないことです。食べない

れば腹を壊すことはないのです。世界をつくっているのは私の意識ですから、嫌なものは自分の意識に入れないことです。入れなければ、嫌なものの影響は受けません。私の世界をどんな世界にするかは、ひとえに自分の意識次第だということです。

だから私はいのです。

・世界を平和にしたければ、自分の心を平和にすればいいと……。

・宇宙を平和にしたければ、自分の心を平和にすればいいと……。

・皆を幸せにしたければ、自分の心を幸せにすればいいと……。

そのような人が一人でも多くなれば、間違いなく世界は平和になります。

### ○宇宙即我・我即宇宙

今、あなたは、意識を持っていますね。ということは、あなたは宇宙を持つてことになります。この宇宙に意識は一つしかないからです。一つの意識しかないならば、一つの宇宙しかないことになり、それはあなた自身であるということになります。個々の肉体を見れば、私があり、あなたがあり、他人があると思ってしまうですが、一なる意識を自分として見るなら、そこには一つの世界、一つの宇宙があるだけなのです。この宇宙には、唯一自分しかないのです。自分しかないなら、自分の世界しか、自分の宇宙しかないのは当然ではありませんか。

よろしいですか、

・宇宙が有るから自分が有るのではなく、自分が有るから宇宙が有るのですよ！

・宇宙が自分を創ったのではなく、自分が宇宙を創ったのですよ！ 自分が宇宙の主なのですよ！

宇宙即我・我即宇宙といわれるのは、自分が消えれば宇宙が消え、宇宙が消えれば自分が消えるからです。

宇宙を創っているのは自分の意識ですから、自分の意識が消えれば宇宙が消え、宇宙が消えれば自分の意識が消えるのは当然でしょう。自分そのものが宇宙そのものであり、宇宙そのものが自分そのものだからです。

さあ、思いを内側に向けましょう。その者は宇宙を意識できます。本当の自分と対面できます。その者は、宇宙即我！ 我即宇宙！ と大宣言することでしょう。

### ○私が相手関係をつくっている

私がいるから相手関係が生まれるのであって、私がいなかったら何の関係も生まれません。（私がいなかったらそもそも何もありませんが……。）

私の存在が、すべての相手関係をつくっているのです。なぜなら、相手は私の意識がつくっているからです。相手は、私がつくった私なのです。ですから、私は私と関係し合い、様々なドラマを演じ合っているのです。ドラマに出てくる相手役は私であり、そのドラマの主人公も私です。相手は無限に存在しますから、一人無限役、それが私なのです。

内側には私しかいませんが、外側には無限の私が存在するのです。

## ○天上天下唯我独尊（存）の私

一が分化すれば粗雑になり、時空が必要になり、マクロ宇宙が生まれます。分化したものが一つに統合されれば、精妙なるものになり、時空が不要になり、一なるミクロ宇宙に帰ります。一なるミクロ宇宙の中ですべての良きものが存在し、それは脈を打ち、呼吸をし、生きています。一なるミクロ宇宙は何でも吸収し、何でも吐き出すヒョウタンのようなもので、そこが私たちの故郷です。そこには唯一「私」がいるだけです。

私はミクロ宇宙の主です。ミクロ宇宙から生まれたマクロ宇宙も私です。ミクロがマクロを生み、その両宇宙に住み、生きて働いているのが唯我独尊の「私」なのです。

この宇宙には、唯一私の世界しかありません。唯一私の宇宙しかありません。私は世界の主です。宇宙の王です。絶対者です。私しかいないのですから、他人のことをとやかく詮索する必要もなければ、心配する必要も気を使う必要もありません。ただ自分の幸せだけ考えたいのです。自分が幸せであれば、私の宇宙は幸せだからです。一見利己的に見えますが、唯我独尊の宇宙において、私が幸せであるということはすべてが幸せであるということになり、これは利他的になるのです。だから、自分の幸せだけ考えればいいのです。その幸せはどこかにあるのでも、誰かがつくるのでも、誰かから与えられるのでもありません。私の心がつくり、私の心が与えるのです。私の心次第です。

心次第とは、

・どんな影を見ても、自分の心に影を落とさなければ、そんな影はないという意味です。



・どんな悪を見ても、自分の心に悪を見なければ、そんな悪はないという意味です。

・どんな不完全を見ても、自分の心に不完全を見なければ、そんな不完全はないという意味です。影をつくり、悪をつくり、不完全をつくらせているのは、自分の心だからです。

この宇宙には、「私」しかないのです。「私」の世界しか、「私」の宇宙しかないのです。その私が幸せなら、私の世界は、私の宇宙は幸せです。これが、天上天下唯我独存の「私」の冥利というものです。

○真理を知ろうと思わない者は、自分を知ろうと思わない者である

世の中には、株価や為替レートを知らうと躍起になる人は沢山いるけれど、真理を知ろうと躍起になる人はほとんどおりません。ニセモノを知らうと躍起になる人は沢山いるけれど、ホンモノを知らうと躍起になる人は皆無なのです。消えるものに夢中になり、永遠のものを疎かにする、こんなおかしな話がありました。うか。しかも、それをおかしいとは誰も思っていないのです。

真理を知ろうと思わない人は、自分を知ろうと思わない人です。ホンモノを知ろうと思わない人は、自分を知ろうと思わない人です。あなたがニヤニヤ手にしている物やお金は、すぐに消えてしまう幻なのです。よ！ あなたがほくそ笑んで手にしている財産は、すぐに消えてしまう幻なのですよ！ あなたが鼻高々に自慢している地位や名譽は、すぐに消えてしまう幻なのですよ！

反対に、誰も見向きもしない真理こそ、永遠になくならないホンモノなのです。すぐに消える幻が大切な。永遠に消えない真理が大切な。よく考えて欲しいと思います。

○**本当の自分を知ることが特別なことではない!**

私たちは、自分のことを知っているつもりでおりますが、本当に知っているのでしょうか。あなたはどれほど自分のことを知っているのでしょうか。あなたはどれほど人間のことを知っていますか。私たちは自分のことを何でも知っているつもりですが、知っているのは幻の部分で、真実の部分は何一つ知っていないのです。あなたのボディは、実際にあるものですか。あなたが今日まで体験した諸々の出来事は、本当にあったことですか。いいえ、みな夢幻です。

自分のボディを含め、この世の様々な物、様々な人、様々な出来事、これすべて時と共に消え去る幻です。消え去る物に、一つとして真実なるものはないのです。私たちは幻を見て、本当であると錯覚しているのです。そんな幻を知ったって、得たって、いったい何になるのでしょうか。私たちが知るべきことは、得るべきものは、絶対なくならない真実です。

真実なるものは、見えません。聞こえません。味わえません。臭いませぬ。触れません。真実なるものは、五感を超越しているからです。本当の自分は、五感を超越した自分の心の中にあるのです。ですから、感覚で知ることはできません。でも意識で知ることはできます。見えない意識の自分こそ、本当に知らねばならない自分です。ぜひ、本当の自分を知りましょう。

○**本当の私とは?**

私には、外なる(私)と内なる「私」があります。本来私は一つしかないのですが、ボディの私を私と思

っている人には、二つの私があるのです。そのボディーなる(私)が本当の「私」を知った時、私は一つの私になるのです。すなわち、外なる(私)が内なる「私」を知った時、外なる(私)は内なる「私」になるわけです。

本当の私は特定することができません。限定することもできません。姿形がないからです。本当の私は、宇宙を構成している本質そのものですから、本当の私を見ることは誰もできないのです。もし見られるとすれば、私の化身が見られるだけでしょう。それは、

- ・ 原子として
- ・ 鉱物・植物・動物・人間として
- ・ マクロ宇宙として
- ・ 無限の知恵として
- ・ 無限の力として
- ・ 無限の光として
- ・ 無限の愛として……。

その私は、永遠不滅の存在です。完全無欠の存在です。絶対善なる存在です。私は大バランス、すなわち大調和そのものです。私は言葉や文字を超越した存在です。その私に名前をつけるとすれば、「生命」という名が相応しいでしょう。生命は意識そのものであり、意識は生命そのものだからです。(私)が「私」と思

えるのは、意識あるがゆえですから、意識を持つ私を生命と呼ぶに何の問題があるでしょう。

○**本当の自分に主導権を握らせよう!**

誰も、このボディを自分だと思って生きています。ホンモノの自分(生命)とニセモノの自分(ボディ)が、あまりにも一体化しているため、どうしても錯覚してしまうのです。

今日まで私は、このボディを自分だと思って生きてきました。しかし、瞑想を続けるうちに、どうもこのボディが自分ではなく、ボディを動かしている何かが自分ではないかと思えるようになりました。その自覚が強くなるにつれ、形の私の影が薄くなり、見えない本当の私が前に出て、以前の私と全く違った言動を取るようになったのです。どうやら、本当の私が主導権を握ったようです。

ボディを自分だと思っている限り、どうしてもボディが主導権を握りがちです。何をするにも、ボディの安全第一を考えてしまうのです。だから本当に善かれと思うことも、やれずに終わってしまうことが多いのです。

では、主導権を握った見えない私とは、いったい何者なのでしょう。それは、今、私と意思を持っている意識です。意識こそ、本当の私なのです。その私に名前をつけるとすれば「生命」という名が妥当でしょう。今、あなたは意識を持っていますね。その意識を持っていること自体が、生命である証なのです。

ここまで「私」について述べてきましたが、知って欲しいことはただ一つ、「すべては一つですよ! それは私ですよ!」という真理です。この真理を心底で理解できれば、自分を大きく変えることができるので

す。

宇宙があつて「私」があるのではない！ 「私」があつて宇宙があるのである。

### (5) 法則から宇宙を探る

#### ○宇宙の創造原理

白光は無数の色光の集積されたものです。その色光は波長の違いによつて特異な性質を持っていて、この表現宇宙は、その性質を利用した創造が行われているのです。すなわち、白光の波動を下げた色光とし、さらに波動を下げて元素とし、さらに波動を下げて性質を際立たせ、その性質を利用することで物の創造が可能になっているのです。

味や臭いも同じです。本来、宇宙には、集合された味と臭いがあるだけです。つまり、無味・無臭があるだけです。無味・無臭とは、ないという意味ではありません。すべての味と臭いが包含されているという意味です。その包含された一部を取り出した時、特異な味と特異な臭いが生まれるのです。

色や、音や、味や、臭いや、感触を分離させれば表現上個性が生まれ、集めれば表現上個性がなくなるのが宇宙の大調和の仕組みです。ですから、一なるもの、集合されたものには性質がないのです。あるのは全体性のみです。完全性のみです。それを大調和というのです。

一なるものを多に分ける作業は、物の創造の始まりです。多なるものを一つに統合する作業は、物の終焉の始まりです。

「初めに光ありき、その光によってすべては成れり！」

「最後に闇ありき、その闇によってすべては終われり！」

この相反する働きが循環の法則によって一つとなり、宇宙は永遠と完全を得ているのです。

### ○三身位）一体の構造

宇宙の構造は、すべて三身一体になっております。たとえば、氷と水と空気のように……物質界と幽界と霊界のように……原子と反原子と絶対原子のように……。

しかし、実在しているのは空気であり、霊界であり、絶対原子です。絶対原子という聴き慣れない言葉が出てきましたが、絶対原子は生命そのものであり、創造主そのものであり、宇宙の主そのものなのです。いわゆる、姿形を持たない生命意識そのものです。ですから、そのままでは何の意味もありません。そこで絶対原子は姿形を取ることにしたわけですが、絶対原子は生命意識（エネルギー）ですから、そのままでは物の形を取ることができません。そこで絶対原子は、反原子を吐き出し、さらに原子を吐き出し、それを組み立て物の形を取ったわけです。

ゆえに、原子と反原子と絶対原子は、通常時空において三身一体の構造をなして存在しているのです。それは丁度、原子の中に、物質と、反物質と、生命意識が同居している状態と考えたらいでしょう。さらに

原子は「濃厚な影」、反原子は「薄い影」、絶対原子は「光」と考えれば、なお解りやすいかもしれません。

### ○小と大は同じ

無限大に膨張した宇宙は、やがて無限小に帰ります。膨張したものは必ず収縮するのです。その収縮も膨張と連動しております。収縮すれば一点に収まると考えがちですが、無限の縮小は無限の膨張と連動しているのです。一点に収まることは、循環の停止を意味するわけですから、それでは止めになり、有限になってしまいます。有限の宇宙があるわけがありません。

宇宙はどこまでも無限です。無限に収縮したその先には、無限の膨張が待っているのです。無限に膨張したその先には、無限の縮小が待っているのです。いや、無限の縮小は、無限の膨張そのものなのです。無限の膨張は、無限の縮小そのものなのです。意識に大きい小さいはないのですから当然です。

ために、目をつぶって意識をどこまでも拡大してみてください。どこまでも広がるはずですが、今度は、縮小してみてください。どこまでも縮小できるはずですが、いや、むしろ縮小の先には、無限の広がりを感じるはずですが、もし無限に壁があり、縮小に限界があるなら、エネルギーも生命も無限でなくなってしまう、宇宙は無限でなくなってしまう。そんなことはあり得ないわけですから、宇宙に小さい大きいはないのです。

宇宙が無限なのは、すべてにおいて「限」りが「無」いからです。もし限りがあるなら、宇宙は不完全になり神は完全でなくなってしまう。神が完全を誇れるのは、宇宙が無限だからです。無限とは神の別名

なのです。無限とは完全の別名なのです。その無限は一つしかないのです。ということ、小も大もないということ。もし、小もあり大もあるなら二つあることになり、それでは無限でなくなってしまう。この宇宙は、あくまでも一つなのです。この事実を心の底で知ってください。知れば、本当のあなたを発見できるでしょう。

### ○循環の法則の特徴

大きなものに終わりがあるなら、宇宙は無限でなくなります。また、小さなものに終わりがあっても、宇宙は無限でなくなります。宇宙が無限であるためには、極小は極大でなくてはならないし、極大は極小でなくてはならないのです。無限大の極小、無限小の極大という意味です。要するに、一つに帰るのです。これが循環の法則の一つの特徴です。ですから、宇宙に停止や終わりや死はありません。永遠と無限と完全があるのみです。一本の線を辿ってゆくと元の線に戻ってくるのは、宇宙が永遠であり無限だからです。

人は不老不死に憧れますが、もし不老不死が可能なら、それは苦しみ以外の何ものでもないでしょう。なぜなら、永遠の生は永遠の死を意味するからです。あなたは同じ家族と、永遠に顔を突き合わせて暮らすことができずか。あなたは、何の変化もない環境で、永遠に過ごすことができますか。永遠にですよ！

どんな美人も毎日見ていたら飽きがるものです。どんな綺麗な水も、動かなければ腐ってしまうものです。変化があるから、日々新鮮に生きられるのです。宇宙に永遠が約束されるのは、変化があるからです。循環しているからです。循環は死の世界にはありません。循環こそ、永遠の生を約束する原動力となってい



るのです。

### ○エネルギー均衡の法則

エネルギーは、常に、高いところから低いところへ流れようと身構えています。山を削り、谷を埋め、平坦にする働きです。これがエネルギー均衡の法則の特徴です。欲念でお金を貯めてもいつまでも手元に置いておけないのは、エネルギー均衡の法則が働いているためです。エネルギー均衡の法則は、金持ち三代続くの裏づけになっているのです

宝くじに当たった人を幸せ者と考えるのは軽率です。なぜなら、エネルギーの先取りをしているからです。先取りしたエネルギーは、必ず返さねばならないのが宇宙の鉄則です。その返済内容は人様々ですが、通常は、当人もしくは家族の不幸によって清算させられます。(前世あるいは今生で、エネルギーをどれだけ世のため人のために使っていたかで清算内容は違ってくる。)

宝くじが当たって幸せになったという人は、人生の続きを見ていないからです。

- ・なぜ生まれながらにして幸せな人と、不幸せな人がいると思いますか。
- ・なぜ病弱な体を持って生まれてくる人と、頑健な体を持って生まれてくる人がいると思いますか。
- ・なぜ豊かな家(国)に生まれてくる人と、貧乏な家(国)に生まれてくる人がいると思いますか。
- ・なぜ事故や災害に多く見舞われる人と、見舞われない人がいると思いますか。

それは、エネルギーの先取りをしていたか、していなかったかの違いです。

徳を積むことがなぜ幸せにつながるかといいますと、エネルギーを天に積んでいるからです。つまり、エネルギーの先取りとは反対に、先払いをしているからです。宝くじやギャンブルで得たお金はエネルギーの先取りですが、徳を積む行為はエネルギーの先払いですから、後々埋め合わせが起きるのは当然なのです。エネルギー均衡の法則は絶対にごまかしが利きません。だから、楽しんで儲けようなど、よこしまな考えは持たないことです。エネルギーは、出した分入ってくるようになっていくのですから、まずは先に出すことです。息も出さずから吸えるのであって、吸う一方では窒息死してしまいます。その意味では、人に何かを恵む場合でも、エネルギー均衡の法則に照らして適切に行うべきでしょう。

### ○宇宙を知るには一つのを二つに分けることである

宇宙の謎は、表裏を解体することで明かされるようになっていきます。

たとえば、

- ・ 生命と物質の解体
- ・ 光と影の解体
- ・ 陽と陰の解体
- ・ 幸と不幸の解体
- ・ 善と悪の解体
- ・ 完全と不完全の解体

・愛と不調和の解体

・生と死の解体

・相対と絶対の解体、など……。

一対で成り立っている宇宙は、一つを二つに分けることで謎解きができるようになっていっています。

すなわち、

・片方の謎を解けばもう片方の謎も解き明かせる。

・裏を理解すれば表も理解できる。

・人間を知れば宇宙も知ることができる。

宇宙は一つのものでできているわけですから、一つのを深く理解すれば、すべての謎解きが可能なのです。それが相似形の宇宙を知るコツであり、真実を知るコツなのです。

### ○宇宙は黒板のようなもの

黒板が便利なのは、書き込んだ絵や文字を消し、再び書き込むことができるからです。宇宙が永遠の存続が可能なのも、宇宙に描いた表現物を消し、何度も描くことができるからです。要するに、黒板も宇宙も、循環の法則によって再表現できるから便利なのです。

理念の主である生命は、自分の思いを表現する場として、時空という黒板をつくりました。思いを表現する媒体は原子で、原子はチョークのようなものです。そのチョークによって描かれた絵が私たちです。描か

れた私たち（絵）は、いずれ消えてゆかねばなりません。もし居続けたら、黒板（宇宙）は絵で一杯になってしまふからです。しかし、残念がることはありません。そこで体験した諸々は、宇宙の記憶庫に保管され、再び形を取る時に生かされるようになっていくからです。

表現し、消え、表現し、消え、表現し、消える……。この繰り返されるドラマが、進化を目指す表現宇宙の原動力になっているのです。宇宙は実にうまくできているものです。

### ○両輪で成り立つ宇宙

宇宙の実相は、一のみ・天のみ・生命のみ・光のみ・エネルギーのみ・霊のみ・絶対原子のみ、すなわち、神のみです。しかし、一のみでは宇宙は成り立ちません。光一辺倒では物語は生まれなからず。影あってこそその光です。どうでしょう。一人で芝居ができますか。絡み合う相手あってこそ、芝居ができるではありませんか。

真つ白な雪の中で白ウサギがどんな素敵なパフォーマンスをしても、見えなくては自己満足にしか過ぎないのです。神がどんなに素晴らしい理念を持っていても、表現しなくては何の意味もないのです。理念を具体化するには手足となって働いてくれる何かが必要であり、それが鉱物・植物・動物・人間なのです。その手足を使ってキャンパスに絵を描く、そこに感動的なドラマも生まれてくるのです。

だから、

・時空が必要です。

・地が必要です。

・人間が必要です。

・物質（女）が必要です。

・影が必要です。

要するに、二つのもの（相対と絶対）が必要なのです。この宇宙は、両輪揃って完成されるのです。

### ○なぜ相対世界は存在するのか

私たちの住んでいるこの世界は相対世界といわれ、すべてが相対的に創られています。なぜこのような世界が用意されたかといいますと、一つでは事の善し悪しが分らないからです。たとえば、長いか短いかは、二つのものを並べてみなくては分かりません。速いか遅いかは、二つのものを走らせてみなくては分かりません。善も悪も完全も不完全も、比べてみなくては分かりません。愛を育むにも、一つでは育めないのです。今、私たちは相対の世界にいますが、それは相対を知って絶対の偉大さ、有り難さ、尊さ、素晴らしさを知るためです。

すなわち、

・陰を知って、陽の偉大さを知るのです。

・影を知って、光の有り難さを知るのです。

・悪を知って、善の尊さを知るのです。

・不完全を知って、完全の素晴らしさを知るのです。

この地球は、それを知るために用意された学びの道場なのです。

### ○造られた物の中には必ず創り主が存在する

絶対宇宙は理念（心・意識）の中にありますので、姿形がないのは当然です。いわゆる思いの中にあるのが絶対宇宙です。ですから、そのままでは闇の中にある絵のようなもので、何一つ感動を生み出すことはできません。表現されないものは、有ってもなきに等しいのです。だから、絶対宇宙は、自分の思いを具現する場として相対宇宙を創られたのです。思いの中にある見えない絵を見る絵にするには、どうしてもキャンプが必要だったからです。絶対宇宙は原因の世界で、そこには必ず理念の主である創造主・神がおられます。

・神を否定する人は、絵を肯定し画家を否定する愚かな人です。

・神を否定する人は、建物を肯定し建築主や設計者や大工を否定する愚かな人です。

・神を否定する人は、子供を肯定し親を否定する愚かな人です。

あなたに親がいるように、何かが存在するからには、何かを生み出した親が必ず存在するのです。絵が絵を生むことがないように、人間が人間を生むことはないのです。絵は画家が生むのです。人間は理念の主が生むのです。画家が絵の生みの親であるように、理念の主が表現宇宙の生みの親なのです。その理念の主を私たちは、神と呼んだり、仏と呼んだり、生命と呼んだりしているのです。神という言葉が嫌いなら、創造

主と呼んでも、宇宙意識と呼んでも、表現者と呼んでもいいのです。呼び名は何であれ、造られた物の背後には、必ず創り主が存在しているのです。

・造られた物は結果で、相対宇宙です。

・創り主は原因で、絶対宇宙です。

この二つの宇宙が一つとなって、はじめて宇宙は存続でき、存在意義が出てくるのです。

### ○宇宙のカラクリ

この宇宙には、ないものを有るように見せかけるカラクリと、一つのものしかないのに沢山の物があるように見せかける、二つのカラクリがあります。私たちはこの二つのカラクリに騙され、様々な苦しみや悲しみをつくってきました。この二つのカラクリを見破らない限り、私たちに真の幸せはないのです。

では、それを見破るコツを教えましょう。

一つ目のカラクリを見破るコツは、本当にあるものは私たちの感覚にかからないものである。すなわち、すべての物は一つの見えない本質(生命・理念)によって創造され、一つの見えない本質によって生かされ、一つの見えない本質によって働かされている、という真実を知ることです。

・物質があるといいますが、本当にあるのは物質ではなく、原子という本質です。……原子は見えません。

・人間がいるといいますが、本当にいるのは人間ではなく、生命という本質です。……生命は見えません。

もし物質が本当にあるなら、物質から原子を差し引いても物質は残らなくてはなりません。物質から原

子を差し引いたら物質はなくなってしまうのです。もし人間が本当にいるなら、人間から生命を差し引いても人間は残らなくてはなりません、人間から生命を差し引いたら人間はなくなってしまうのです。なくならないということは、物質も、人間も、本当に存在していないからです。私たちは外形に惑わされ、本当にある本質を見失っているのです。

二つ目のカラクリを見破るコツは、この宇宙には一なる理念の主（生命）しか存在しないという真実を知ることです。その一なる理念の主が、万象万物を創造し、万象万物の中で生きて働いているのです。なぜ理念の主が万象万物を創造し、その中で生きて働けるのかというと、理念の主イコール本質（素材）だからです。ならば理念の主は、私そのものではありませんか。私は、理念の主そのものではありませんか。それは、一つしかない本質（生命・理念の主）が私の生みの親だからです。このことを前提に考えれば、次のような論理が成り立つはずです。

「理念の主である私が認めることによって、物が、世界が、宇宙が、創造されるという論理です」  
理由はこうです。

私が認めることによって物が創造される、という意味は、私は宇宙を創造している本質（素材）そのものですから、私とその物を認めれば、素材である私が即その物となり、その物の中にいることになるのです。私が認めた物の中には必ず私がいるということ、つまり素材である私がいるということです。認めた私は素材そのものですから、認めた途端に素材である私が即その物になるわけです。私が物を認識するためには、



私はその物となってその物の中にいなくてはその物は有り得ないわけですから、その物を認識できるわけがないということです。これが、神が物を創造する場合、神自らがその物になるしかないといわれる理由です。

私が宇宙を認めたから、宇宙は存在できるのです。私が宇宙を認識する限りにおいて、素材である私が宇宙そのものとなっていなくては、宇宙を認識することができないのです。

要するに、そこに物が、世界が、宇宙が存在しているということは、私とその物を、その世界を、その宇宙を認めたということです。認めたということは、素材である私が、その物となって、その世界となって、その宇宙となって、そこにいるという意味です。だから、物は、世界は、宇宙は、私の意識が創造しているといえるのです。意識そのものが生命そのものであり、素材そのものであり、私そのものだからです。

認めている私と認められている私は、同じ私なのです。見ている私と見られている私は、同じ私なのです。私が人間を認めているということは、人間は私であるということです。認めている私は、認められている人間そのものだからです。認められている人間は、認めている私そのものだからです。私が生命を認めているということは、生命は私であるということです。認めている私は、認められている生命そのものだからです。認められている生命は、認めている私そのものだからです。

一なるものが、二にも三にもなることはないのです。一なるものは、どこまでも一なるものです。宇宙に一なる素材（生命）しかないという絶対真理は、私しかない、私の世界しかない、私の宇宙しかない、つまり天上天下唯我独存を意味しているのです。すべてを一なる目で見ることができたら、天下天上唯我独存

の意味が理解でき、二つのカラクリを見破ることができるでしょう。

宇宙のカラクリで一番惑わされやすいのは、一を多に見せかける巧妙なトリックですが、物の本質を一つとして見る事ができれば、このトリックを見破ることができるのです。本当は一つのものしかないのに、沢山の物があるように見せかける巧妙なトリックが、本当の自分を見失わせてきたのです。騙されてはなりません。どんなに沢山の物があるように見えても、みな一つのもの（本質・生命）から生まれたのです。その一つのものが私ですから、私の外に何も無いということです。

存在とは、存在の心です。存在させている意識です。私という意識です。その意識は、本質であり、生命です。その私という意識は、宇宙に一つしかないわけですから、すべての物は、私の意識によって存在させられているといえるのです。何を見ても、何を感じても、みな私の意識の現れであると心から思えたら、もうこのカラクリに騙されることはないでしょう。

**物が、世界が、宇宙が有って自分が有るのではない。自分が有って、物が、世界が、宇宙が有るのである。なぜなら、物は、世界は、宇宙は、自分の意識が創っているからである。**

(6) 瞑想・明想から宇宙を探る

○なぜ瞑想によって宇宙を知ることができるのか

これまで何度も述べてきたように、私たちの本性は「生命」です。人間の身体は生命によって創られた器であり、その器の中に宿っている意識も生命です。生命意識そのものが宇宙そのものですから、人間を探れば宇宙を知ることができるわけです。しかし、探るといっても、外側の身体である器は影ですから、影を探っても何も出てきません。宇宙を知るためには、内側の生命意識を探らなければならないのです。

では、どうすれば探ることができるのでしょうか。それは意識で意識を探ることです。このようにいうと意識が二つあるように思われるかもしれませんが、意識は宇宙に一つしかありません。しかし、その一つの意識は、応用によって沢山の意識を生み出すことができます。

たとえば、その意識が生命だと思えば、生命意識になります。人間だと思えば、人間意識になります。私たちは気の遠くなる年月を人間として生きてきたために、生命意識を人間意識に変えてしまったのです。変えたというより、思い癖をつけてしまったといった方が正しいかもしれません。人間意識とは表面意識のことです。生命意識とは潜在意識のことです。つまり、人間と思う癖が、潜在意識を表面意識に変えてしまったのです。しかし、深いところにある意識、つまり潜在意識は、純粋な生命意識のままです。上水は人間意

識で汚されていても、深水は純粋な生命意識のままなのです。だから、表面意識を潜在意識に接触させれば、宇宙を知ることができるわけです。

### ○瞑想の基本的作業

私たちは何百万年もの間、人間である！ 肉体である！ 個人である！ と思いつけてきたために、「人間」という思い癖をつけてしまいました。その思い癖を取るには、自分は生命である！ 神である！ 無限である！ と、本来の自分を思い続けるしかないのです。思いつけていけば、表面意識が潜在意識に取って代わられ、本当の自分を思い出すのです。何の技術も何の修業もありません。ただ生命を思い続けるだけです。思い続けていけば、必ず生命の自分を思い出すことができます。瞑想は、人間意識で汚されている上水と、純粋な生命意識の深水を接触させる作業なのです。

世の中にはよく理屈をこねる人がおりますが、どんなに理屈をこねても実践しなければ身につくことはありません。理屈で泳げるようになった人など、いまだかつて一人もいないのです。だから覚者は、理屈をこねる前に実践しなさいというのです。

知識に溺れ時間を無駄にしないでください。知識に溺れている人は、目的と手段を取り違えているのです。知識ではなく、実感が大切なのです。実感がなぜ大切かといいますと、知識を行動に移すにはためらいがありませんが、実感を行動に移すにはためらいがありません。実感を得るには、ただ一心に生命に意識を向けること、本当の自分に意識を向けること、すなわち「生命」を「神」を「無限」を、思い続けることです。

思い続けていれば、必ず生命（原因者・本当の自分）の自分を思い出すことができます。想念は実現の母だからです。思うことは、電車に乗っていても、歩いていても、料理をしていても、お風呂に入っているでも、きるはずですから、少しの間も見つけ、やってください。その少しの積み重ねが、後々大きな成果をもたらすのです。このように、瞑想の基本的作業は、生命を思い続けることなのです。

では、具体的にどのように思い続けられるのでしょうか。

まず目を閉じ、背中の奥の奥に意識を潜らせます。次に、暗闇の一点に意識を置き、そこに生命をイメージします。生命をイメージできない人は、光をイメージしても結構です。その生命（光）が「吾生命なり！」とマントラを唱える（想う）のです。肉体の自分が唱えるものではありません。生命の自分が唱えるのです。それも、生命に対する理解力を持って唱えてください。

本当に有るものが、本当に有るものを想うのです。神が神を想うのです。生命が生命を想うのです。だからそこに、「神を崇拜するには神そのものになって崇拜せよ！」という言葉が出てくるわけです。残念ですが、いえるのはこれだけです。後は自分で工夫してやってください。瞑想は文字や言葉で教えることができないのです。

このように、瞑想の基本的作業は、生命に意識を留め、生命を思い続けることなのです。思い続けていれば、必ず生命の自分を思い出します。思い出すとは、生命が実感できるという意味です。実感とは、本当にそう思えることです。五官で感じるのではなく、心で感じることで、つまり自覚することです。

## ○自覚の意味

「自覚」とは何でしょう。自覚せよといっても、自覚がどのようなものか分からなくては自覚のしようがありません。かといって、言葉や文字で伝えられないのも自覚です。自覚とは「自」らに「覚」めると書きますが、自らとは生命のことですから、生命に自覚めることが、自覚したという意味なのです。

このように説明しても、自覚がどのような意識状態か理解できないと思いますが、本当に自分が生命と見えるのです。ああこれがレモンの味なのか！ リンゴの味なのか！ と実感できるように、私は生命なのでと実感できるのです。私は人間だと今実感しているように、私は生命だと実感できるのです。そう思えるのです。なぜそう思えるのかと訊かれても、そう思えるのですから仕方ありません。これ以上いいようがないのです。思えている時は生命そのもの宇宙そのものになれ、本当に宇宙を闊歩できる気分になれるのです。この意識状態は、体験した者でなくては分らないでしょう。

以前、五歳の男の子が火の中から赤ちゃんを助けたという珍事件が話題になりましたが、その子はいつもスパイダーマンの恰好をして遊んでいたといいます。彼は、強きをくじき弱きを助けるスパイダーマンに成り切っていたのです。成り切っていたから、火の中から赤ちゃんを助けることができたのです。役者は役に成り切ることが大切だといわれますが、本当に役に成り切った役者は、顔も声も立ち振る舞いも変わるといいます。この、成り切ることが自覚に近いものなのです。

次のようなたとえもそうです。

「合点がいった！」という言葉は、不明な「点」が「合」わさったときに使う言葉ですが、この合点があった状態が、自覚に近い状態なのです。ただ、地球上にないモノは、それを表す言葉も文字もないわけですから、「合」わさる「点」もないのです。自覚という意識状態も地球上にないわけですから、合わさる点（言葉や文字）もないのです。地球上にない味や臭いが教えられないように、自覚も教える言葉や文字がないのです。

このように、自覚は、体験した者にしか分からない稀有な意識状態なのです。

### ○自覚を得る瞑想法

自覚の意味を知ること自体容易なことではないのに、ましてや、実際に自覚を得るとなると至難の業です。しかし、自覚を得る方法が全くないというものでもないのです。その方法を教えましょう。

この相対の世界には、白いモノ黒いモノ、硬いモノ柔らかいモノ、大きなモノ小さなモノ、重いモノ軽いモノなど、相反するモノが存在します。これらの相対物は、比べてみなければその違いの差が分かりません。たとえば、小さな背丈の者同士並んでは、小さな実感はわかりません。でも、二メートルもある大きな人と並んでみれば、自分の小ささが実感できます。それも、違いの差が大きければ大きいほど強い実感が得られます。この違いの差を利用して実感を得ようというのが、自覚を得る瞑想法なのです。

まず左側に、鈍重で、汚くて、臭くて、不自由で、無能な人間を思い浮かべます。次に右側に、精妙で、清らかで、香ばしくて、自由で、全能な生命を思い浮かべます。そして、私は、鈍重で、汚くて、臭くて、

不自由で、無能な人間なのか、それとも、精妙で、清らかで、香ばしくて、自由で、全能な生命なのかと自分に問いかけます。それを何度か繰り返しているうちに、その違いの差から、気持ちの良い波動が意識の中で感じられるようになります。感じられたら、その気持ちの良い波動を忘れないよう、「吾生命なり！ 吾生命なり！ 吾生命なり！」とマントラを唱え（思い）続けるのです。おそらく「吾生命なり！」のマントラの中に、生命の実感が伴っているはずですよ。

このように、違いの差を利用すれば生命の自覚が得られやすいのです。知花先生が「物質なのか。霊なのか。個人なのか。無限なのか。闇なのか。光なのか、自分に問いなさい」と口癖のようにいうのは、違いの差を利用すれば自覚が得られやすいからです。

### ○補色を応用した瞑想

生命（神）に意識を留め、マントラを唱え（思い）続けなさい、と一口にいつても、生命には姿形がありませんので、なかなか意識を留めることができません。そこで、意識を留めやすくするために、次のような方法をお勧めします。

学校の理科で習ったと思いますが、赤色をジッと見つめたのち視線を移すと、残像として青色が見えます。その青は赤に対する相対的な色になっているのです。つまり、赤は青でもあるわけです。この補色を瞑想に応用しようというわけです。

まず、白紙に赤く塗りつぶした●を描き、それを十秒ほどジッと見詰めてください。次に、その赤い●か



ら隣に視線を移します。そこに青い○が残像として見えるでしょう。今度は赤い●を見たのち、目をつぶってください。瞼の裏側に青い○が残像として見えるでしょう。その青い○を生命だと思い、そこに意識を留め、「吾生命なり！」とマントラを唱える（心で唱える）のです。これを繰り返しやれば、やがて赤い●を見なくても瞼の裏に青い○がイメージできるようになるはずです。イメージそのものが生命の想いですから、生命に意識を留めたときと同じ効果を生み出すのです。もちろん、生命（神）は意識の深いところにありますから、イメージをより意識の深いところに潜らせなくてはなりません、コツを掴む方法としては大いに役立つと思います。

### ○マントラの必要な理由

では、なぜマントラが必要なのでしょう。本当は、マントラなど必要ないのです。本当の「私」を人間の（私）にしてしまったから、マントラが必要になったのです。本当の「私」は生命なる「私」ですから、『「私」「私」「私」……』と思うだけでマントラになったのです。しかし、自分を人間と誤解し、生命なる「私」を波動の低い人間なる（私）にしてしまったため、「私」をマントラに使えなくしてしまったのです。なぜなら、人間なる（私）をマントラに使えば、人間をイメージすることになり、波動を落としてしまからです。マントラは、あくまでも精妙な波動の高い言葉でなくてはなりません。鈍重な波動の低い人間のマントラでは、使い物にならないのです。だから、「私」の代わりにマントラが必要になったわけです。私たちの意識は、限定された物に向いている時は固着し、抽象的なものに向いている時は拡大するように

できています。私たちの帰るべきところは、無限生命・無限宇宙ですから、できるだけ抽象的なものへ意識を向ける必要があるのです。ですから、代わりのマントラを用いるにしても、意識を拡大させる抽象的な言葉を選ばねばならないわけです。瞑想のマントラに、「生命・神・無限・空・愛・光」などの言葉が多く使われているのは、抽象的で掴みどころがなく意識が拡大しやすいからです。

マントラは、本当の自分を思い出すための呼び水です。その呼び水は、生命（神）に対する理解力を深めれば深めるほど、大きな効果を生み出します。□先だけで唱えたのでは、ただの自己満足で終わってしまいます。どうか理解力を持って唱えてください。深い理解力を持って唱えることができたなら、原子核（生命核・魂）を大きく増やすことができるでしょう。

### ○自覚の高まりと弱まり

自覚の高まりは、一度に押し寄せてくるものではありません。少しずつ、少しずつ、夜が明けるようになってくるのです。それも押しては返す波のように、ある時は激しく、ある時は静かに……。その驚きと喜びは、言葉でいい表すことはできません。「この意識状態がいつまでも続いたら、どんなに幸せだろう！」と何度思ったことでしょう。しかし、そう簡単にゆかないのが自覚の高まりです。昨日あれ程自覚が強かったのに、今日のなんと低調なこと……。しかも、突然自覚が弱まったり強まったりもする、その落差とブレは私を悩ませたものです。

自覚が薄れたり弱まったりするのは、物欲（情欲・物欲・食欲など）の誘惑を受け、自我（サタン）が活発化

するためです。自我が活発化すると波動が落ちるため、どうしても自覚が薄れるのです。波動が落ちれば集中力が散漫になりますから、満足に瞑想もできなくなるのです。そうなるとさらに波動が落ちますので、ますます自覚が薄れるのです。この悪循環を断ち切るには、強い意志を持って誘惑を退けることです。そうすれば自我の活動は弱まりますから、瞑想がしやすくなるのです。自覚が弱まるのは欲に誘われた時である、ということをお忘れなくください。

### ○自覚に伴う変性変容

面白いから面白いのです。美味しいから美味しいのです。面白いにも、美味しいにも理屈がいらぬように、自覚も理屈はいらぬのです。本当に、私は生命だと思えるのです。ただ、自分は生命だと思えるのです。そう思えるから、そう思えるのです。生命と思えるのに何の理屈もいらぬのです。

本当にそう思えるのですから仕方がありません。そう思えたら自分が変わるので、何かに誰かに、変えてもらうのではないのです。そう思えたらひとりで変わるのです。いつそう思えるようになるかは、誰にも分かりません。ある日突然、そう思えるようになるのです。思えるようになったら、誰でも変性変容が起きてきます。それも目に見える形で起きてきます。

たとえば、

・細胞が振動するようになる。

・内的光が見えてくる。

・心が安らぎ、幸せな気分になる。

・気持ちが良いくなる。

・吸う空気がおいしくなる。

・何を見ても自分に思えてくる。だから愛深くなる。

・物欲・色欲・自己顕示欲など、あらゆる欲望がなくなる。

・疲れなくなる。

・病気をしなくなる。

・あまり眠る必要がなくなる。

・あまり食べる必要がなくなる。

・胸が熱くなる。息が熱くなる。（口の中をやケドすることもある。）

このように、様々な変性変容が起きてくるのです。あまり現象に囚われてもいけません、瞑想（求道）の励みになることは間違いありませんので、あえて強調しておきます。

今日、そう思えるようになるかもしれません。明日、そう思えるようになるかもしれません。あるいは一年先か、十年先か、来生か分かりませんが、焦らず希望を持って瞑想を続ければ必ず思えるようになります。

これは宇宙の法則が保証するので間違いありません。

## ○瞑想を限定してはならない！

目をつぶってする瞑想だけが瞑想ではありません。目を開いていても、思いが真実に向いている時は、瞑想していることになるのです。ですから、知花先生の講話を聴いている時は、深い瞑想状態にあるわけです。花に生命を感じている時も、山に生命を感じている時も、海に生命を感じている時も、人に生命を感じている時も、みな瞑想していることになるのです。その意味では、いつでもどこでも瞑想は可能だということですから。瞑想が進み、本当の自分を光として見られるようになった人は、目を開いていても、目をつぶっていても、いつでもどこでも、本当の自分に意識が留められるようになります。そうなったら瞑想はもう自由自在です。

瞑想は形や作法ではありません。あくまでも意識状態です。座り方がどうか、手足の恰好がどうか、息の吸い方や吐き方がどうか、目のつぶり方がどうか、そんなものに囚われなくてください。どんな座り方をしても、どんな手足の恰好をしてもいいのです。周囲に人がいなくなったら、声を出してやってもいいのです。足を投げ出してやっても、横になってやってもいいのです。ただ横になってやると眠ってしまいますので、できるだけ起きてやった方がいいでしょう。また、声を出す方法は、素人に効果があっても、ベテランには逆効果になる場合がありますから注意してください。

瞑想は形ではなく、あくまでも意識状態です。いかに「生命に・神に・無限に・本当の自分に」意識が集中できているかが大切なのです。

## ○囚われた瞑想をしてはならない！

私たちは食事をしますが、何を食べたのでしょうか。形を食べたのでしょうか。エネルギーを食べたのでしょうか。

エネルギーを摂取したのです。そのエネルギーは形の中にだけあるのではなく、水の中にも空気の中にもあるのです。食事をとると眠気を催すのは、エネルギーが充滿したためです。エネルギーが高まると雑念が少なくなるので、眠気を催すようになるのです。深呼吸すると心が落ち着くのも、エネルギーが充滿したためです。喉の渴きを癒した時生きた心地になるのも、エネルギーのおかげです。エネルギーは命の素ですから、このようなことが起きるのです。だから私は、エネルギーの高い時に瞑想した方がいいといっています。食後の瞑想をタブー視する人がおりますが、集中できればかえっていいのです。食後はエネルギーが充実しているからです。食前・食後の瞑想に囚われないでください。また場所や時間、形や作法、個人瞑想や集団瞑想などにも囚われないでください。何度もいうように、瞑想の本分は作法や形ではなく、意識状態だからです。

## ○瞑想と洗礼（霊）との関係

洗礼には水の洗礼と火の洗礼の二通りがあります。水の洗礼はお風呂で体の汚れを落とす外的作業のこと、火の洗礼は心の汚れを落とす内的作業のことです。火の洗礼の必要な理由は分かりますが、なぜ水の洗礼が必要なのでしょう。

食べた物はエネルギーに変換され、残りかすは排尿排便として体外に出されます。エネルギーの吸収された残りかすは波動が低いのです。汗もアカも波動が低いですから、そんなものを体につけては良い瞑想ができるわけがありません。だから、瞑想前に身体の汚れを落とさないというわけで、昔から水の洗礼が取り入れられてきたのです。事実、お風呂に入った後の瞑想は入りやすいのです。あまりこだわってもありませんが、できるだけそうした方がいいでしょう。

火の洗礼は心を清める作業といいましたが、これは反省・懺悔によって心の汚れを落とす作業です。身体が汚れていても瞑想がしづらいように、心が汚れていても瞑想はしづらいのです。ですからどの宗教にも反省・懺悔の行が組み込まれているのです。今や洗礼は儀式となってしまうましたが、本当の目的は水と火で体の内外を清めることだったのです。

### ○思いを重ねる瞑想

瞑想し始めるのころは、誰でも雑念に悩まされるものです。これは集中できていないせいですが、あまり気にしないことです。雑念は放っておき、マントラに思いを重ねることです。思いを重ねてゆけば、いつのまにか雑念は消えて行くものです。だからメトロノームのような瞑想も、瞑想し始めるころは有効なわけです。ただし、眠くなるので気をつけてください。あくまでも意識をしっかり保ち、マントラに一心集中することを心掛けてください。どうしても雑念が消えない場合は中止し、時を改めてすることです。

思いを重ねる瞑想とは、「吾生命なり!」と思えば終わるやいなや「吾生命なり!」と思いを重ねるやり方

です。思いと思いの間に隙間を入れないのです。隙間があれば隙間に雑念が入ってきますので、雑念が入ってこないよう「吾生命なり！」の「なり！」の思いが終わらない内に、「吾」とすぐに思い始めるのです。これが連続的祈りによる瞑想法です。どうか試してみてください。

満足な瞑想ができず悩んでいる人がおりますが、瞑想はそんなに簡単にできるものではありません。今この世で、満足に瞑想できている人は皆無と断っていいでしょう。それほど瞑想は難しいのです。ですから、できないからといってあまり悩まないことです。バタバタ泳いでいればいつか必ず泳げるようになるように、瞑想もやり続けていけば必ずできるようになるのですから、焦らないことです。焦りは瞑想の大敵です。焦れば焦るほど、真の瞑想から遠のいてゆきます。

何でもそうですが、初め動かすときには力があるものですが、惰性がつきだしたら意外と力はいらぬものです。後は根気よく続けてゆけば、ドンドンスピードアップしてゆきます。瞑想も同じで、やり続けていれば段々とスピードアップしてゆきます。「継続は力なり！」といわれるように、根気よく続ければ必ず扉は開かれるのです。宇宙の仕組みはそうなっているのです。

### ○瞑想で注意しなければならない点

瞑想で注意しなければならない点は沢山ありますが、次の五点については特に注意してください。

一、よく瞑想で陥りやすいのは、焦るあまり生命になろうとすることです。私たちの本性はすでに生命です。生命になろう！ とする必要はないのです。必要なのは、生命である、という瞑想です。生命にな



ろう！ とする瞑想は、生命でないと思っているからなろうとするのですから、生命を否定していることになるのです。生命である！ という瞑想は、すでに生命と思っているから、生命を肯定していることになるのです。この違いは天と地の開きがあるのです。

吾生命なりの瞑想は、肯定の瞑想です。確認の瞑想です。認める瞑想です。肯定の瞑想を続ければ、本当に生命と考えるようになるのです。そう思えるようになったら、自分が光ってきます。内的光が見えてきます。その時は、光そのものが自分であると強く思ってください。光と自分が一つであると強く思うのです。光と自分を重ねるのです。

二、「気づき」と「自覚」を混同してはなりません。生命と気づいたからといって、自覚したわけではなく、気づいたのと、自覚したのとは、全く違うのです。この点を誤解するから、もう私は悟った！ という人が出てくるわけです。自覚は「私は生命である！」と思えた状態です。気づきは「私は生命だ！」と知った状態です。どうかこの違いを混同しないでください。

三、瞑想が深まり、心が安らいでくると、誰でも紫色や黄金色の光が見えるようになります。また、細胞が振動したり体が揺らいだりようになります。しかし、この現象を自覚と混同しないでください。五感に感じる現象は、自覚とは直接関係ありません。自覚はあくまでも、本当に生命だと思える意識状態です。

四、瞑想していると景色が見えたとか、死人の顔が見えたとか、幽界が見えたとかいう人がおりますが、何かが見えたら危険ですから直ちに中止してください。私たちは、形あるものを観るために瞑想しているの

ではありません。真実を観るために、本当の自分を観るために、瞑想しているのです。真実は形がないわけですから、目に見える物ではないのです。五感にかかわるもので真実なるものは一つもありません。決して現象に思いを寄せないでください。

五、瞑想はご利益を得るためにやるものではありません。真実の自分を発見し、真実の自分を自覚するためにやるのです。神秘力を身につけたい！ 幽界と結びつきたい！ 健康になりたい！ お金を儲けたい！ など、欲望を持ってやる瞑想は、その世界の憑依を受け、気を狂わせかねません。瞑想をやるなら、一切の欲望を捨ててください。「悟りたい！」という欲さえ捨ててください。ただ一心に、本当の自分に、生命の自分に、意識を集中させることだけ考えやってください。

### ○意識の高まりは、エネルギーの高まりであり知恵の高まりである

瞑想をしながら思索を続けてゆくと、これまで疑問に思っていたことに対する回答が与えられたり、予期せぬ気づきを与えられたりすることがあります。私は、その気づきや回答を、素早くメモすることにしていきます。ですが、不思議なことに、メモしたものを後で読んでみると、まるで解らないことがあるのです。なぜそのようなことが起きるかといいますと、瞑想している時はエネルギー（波動）が高められているため理解できるのですが、瞑想していない時はエネルギー（波動）が落ちているため理解できないのです。このことからいっても、エネルギーそのものが知恵そのものであり、生命意識そのものであることが分かるわけです。その生命意識の中には、これまで集められた宇宙の知恵のすべてが保存されており、

私たちの潜在意識はその知恵の宝庫につながっていますので、意識を高めればそこから必要な情報がいた  
だけなのです。

これは、瞑想し波動が上がってくると、誰でも体験できるようになります。その者は、もう宇宙エネルギー  
ーの存在をうたぐることはなくなり、生命の存在を、神の存在を、本当の自分の存在を確信するよう  
なるのです。

これはすごいことです。

○瞑想ほど大切なものはなく、また瞑想ほど危険なものはない！

今から十数年前の私は、幻に惑わされ発狂寸前でした。その当時の私は、**見えない物が見えたり、声なき  
声**が聴こえたりしたのです。何とかしなければならぬと思いつつも、そこから抜け出すことができず悩  
んでいたのです。その悩みを解決してくれたのが、知花先生の科学的瞑想法でした。あれほど見えたり聴こ  
えたりしていた現象が、知花先生の瞑想を始めるとすぐに消えてしまったのです。まさに劇的でした。そう  
なった理由は、波動が上がりが同調する世界が変わったからです。それまでの私は、幽界の波動に意識を同調  
させる、間違った瞑想をしていたのです。私の中に、何か神秘力を身につけたいという不純な思いがあつた  
からでしょうが、その不純な思いに同調してくるのがサタン（邪悪な波動）なのです。

確かに現象はおもしろいです。色々と不思議な現象を起こしては、私たちに興味を持たせます。しかし、  
これがサタンのつけ目なのです。現象に興味を抱くようになると、本当の自分を知るといふ本来の目的から

目が逸らされてしまうのです。世の中には超常現象を見せびらかす人がおりますが、これは黒魔術といって、幽界人に心を売った人たちのやる邪悪な技です。なかには、幽界人の指導を受けているという人もおりますが、そもそも迷っているから幽界にいるわけですから、そんな幽界人の指導を受けても、危険こそあれ得るものは何一つないのです。

不思議なことができるから、意識が高いのではありません。生命の自覚の強い人が、意識の高い人なので。意識の高い人は、不思議な現象を見せびらかすようなことは絶対しません。超常現象を見せびらかす人や、崇りの霊の話をする人などにはくれぐれも注意してください。現象はすべて幻ですから、決して相手にしないことです。

これは、瞑想そのものについてもいえることです。世の中には色々な瞑想法がありますが、現象を善しとする瞑想はことごとくまがいものと思つて間違ひありません。特に思いを空白にする瞑想は、危険ですから注意してください。確かに、思いを空白にする瞑想は気持ちが良いなり、空の世界に通じているような錯覚が与えられます。しかし、波動を高めず意識を空白にすれば、邪悪な波動に乗っ取られる危険性が高くなるのです。

意識をしっかり保ち、神に、生命に、靈に、光に、無限に、愛に、意識を留める瞑想に、危険はありません。なぜなら、一兆八千億ヘルツまで波動を高めてくれるからです。何かが見える瞑想は波動の低い瞑想ですから、直ちに中止してください。光だけ見る波動の高い瞑想をしてください。

○できるだけ覚者に添いなさい！

できるだけ覚者に添いなさいといわれる理由は、覚者の言葉から強烈な宇宙エネルギーが放出されているからです。特に、生の言葉には、強烈なエネルギーが含まれています。知花先生が時々大声を上げて話すのは、私たちにできるだけ強いエネルギーを与えてやりたいという親心からです。

もう一つ強調したいことは、覚者は一つひとつの言葉の中に無限の意味を込めて話せるという点です。嘸めば嘸むほどに味が出てくるのはそのためです。私が先生の講話（CDやDVD）を聴きながら瞑想するのは、先生の言葉によって理解力が高められ、自分では得られない自覚の深まりを体験することができるからです。だから私はこのことです。覚者の言葉は、高下駄を履かせてもらっているようなものであると……。

覚者の力強い言葉は意識を高めてくれるため、普通の意識状態では見えない、壁の向こう側を見せてくれるのです。その、意識を高めてくれることを、私は高下駄を履かせてもらっているようなもの、といっているわけです。高下駄を履かせてもらえば、見えない壁の向こう側が見えるようになるため、色々な発見や気づきにつながります。さらにその発見や気づきが、履いている高下駄を自分の足にしてしまうのです。それを続ければ自分の背丈がドンドンと大きくなり、やがて自覚に結びつくのです。このように、覚者に添っている、色々な恩恵を受けることができるのです。

○世に貢献したければ瞑想することである

なぜ瞑想すると周囲に良い影響を与えられるかといいますと、私たちは宇宙に遍満する本質そのもの、エ

ネルギーそのものだからです。たとえば、今どこかに不幸があったとしても、私が瞑想して幸せな気分になれば、本質が光り輝き不幸を軽減してくれるのです。なぜなら、その不幸の中に私がいるからです。私はすべての全てです。その私が光り輝けば、すべてのものに良い影響を与えずにはおかないのです。

ハルマゲドンとは、闇人間と光人間との戦い（自我と真我との戦い）です。今、地球は闇の思いが強烈に働いていますが、それはネガティブな思いを持つ人の方が圧倒的に多いからです。瞑想によって、ネガティブな思いを少しでも解消できたら、どんなボランティアよりも地球に貢献したことになるでしょう。目で確かめることはできませんが、私の瞑想が、あなたの瞑想が、不幸を、災いを軽減していることは間違いないのです。どうか、世のため人のため地球のためになりたいなら、瞑想してください。瞑想の苦手な人は、「嬉しい!」「楽しい!」「有り難う!」と、ポジティブな思いを持ち続けてください。それだけで、多額の寄付をする人より世に貢献できているのです。

### ○真理の実践とは瞑想をすることである

現代宗教では、真理の実践を、お経を読んだり、正しい行いをしたり、人助けをすることだと教えています。確かに、正しい行いをすることは大切です。しかし、正しい行いをしたら悟れるのでしょうか。お経を読んだら本当の自分を発見できるのでしょうか。いいえ、できません。どんなに良いことをしても、どんなに沢山お経を読んでも、本当の自分を発見できなくては何の意味もないのです。

真理の実践の真の意味は、次のようなものです。

- ・ 本当の自分を発見すること。
- ・ 瞑想によって生命の自覚を高めること。
- ・ 生命に生きること。

瞑想は歩くことなのです。お経を読んだり良いことをしたりするのは、ただの自己満足に過ぎません。足踏みしているだけで、一步も前進していません。たとえUFOを見ても、幽界人を見ても、どんな素晴らしい講演を聴いても、生命の自覚が高まらなくては、一步も前進していません。一番大切なのは、外側で何かをすることでも、何かを見たり聴いたりすることでもなく、生命の自分を発見し、生命の自覚を高めることです。それは、瞑想によって自分の心を叩かなくてはできないのです。だから昔から、「叩きなさい！」といわれてきたのです。

さあ瞑想し、生命の自分に目覚めましょう。生命の自覚ができれば、そこにいるだけで、ただ息をしているだけで、世に貢献できるのですから……。

### ○時空界は夢幻の世界である

時空界は夢幻の世界です。肉体は時空界を見聞するために用意された乗物で、一種のUFOなのです。私たちは魂を成長させるために時空界に出てきましたが、あまりにも時空界に慣れ親しんだために、本当にある世界のような錯覚に陥ってしまったのです。だから、この世のモノに執着し、競い合い、奪い合い、戦い合って、苦しみや悲しみをつくっているのです。

生きる苦しみも、老いる苦しみも、病む苦しみも、死ぬ苦しみも、みな夢のなかのできごとです。学校で勉強することも、社会に出て働くことも、結婚して子供を設けることも、みな夢のなかのできごとです。今私たちは、「人間だ！ 個人だ！ 肉体だ！」と、夢を見ている真つ最中というわけです。七十数億人全員が、夢を真実と思い込み、夢の虜になっているのです。もうそろそろ、夢から覚めたいものです。

では、どうすれば目覚めることができるのでしょうか。それは瞑想です。神は時空界から一時避難させる手段として、瞑想を用意されたのです。瞑想している時は、時空界から真実の世界へ抜け出していますので、目覚めているのです。反対に、夢の虜になっている時は幻の世界におりますので、眠っているのです。すなわち瞑想している時は生きており、夢の虜になっている時は死んでいるのです。

どうでしょう。起きていて夢が見られますか。眠っているから、夢が見られるではありませんか。今、私たちは、夢を見ている真つ最中なのです。それなのに、そのことに気づいている人は一人もいないのです。どうか瞑想してください。瞑想している内にやがて目覚めます。目覚めは（生命の自覚は）時空界から抜け出した証なのです。

### ○南無とは？

南無の「南」は、「ない」という意味です。南はマイナスを意味しますから、南無とは、マイナスはない！ 陰はない！ 影はない！ 物質はない！ 人間はない！ という意味になります。裏返せば、実際に有るのは、北である！ プラスである！ 陽である！ 光である！ エネルギーである！ 生命である！ という



ことになります。

浄土教に南無阿弥陀というお経がありますが、「阿弥」とは「私」のことを意味し「陀仏」とは「ほとけ」のことを意味し、通して解釈すれば、私は肉体ではなく仏であると唱えていることになるのです。つまり、南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏の念仏は、私は人間ではなく仏である！ 神である！ と宣言していることと等しいのです。だから、念仏の意味をしっかりと知った上で唱えれば、瞑想と同じ効果を生み出すのです。

念仏三昧とは、一心に南無阿弥陀仏を唱えて神・仏に帰依すること、神・仏そのものに成り切ることを意味しており、南無阿弥陀仏の意味をしっかりと知った上で念仏三昧は、決して誤っていないわけです。ちなみに「念仏」とは、「今」の「心」に「仏」を想うと書き、瞑想のことを意味しているのです。

### ○瞑想の技術

ここまで瞑想について述べてきましたが、瞑想に技術などありません。何度もいつてきたように、瞑想は文字や言葉で伝えられるものではないからです。ここでは、私が体験したことを語ったままでです。意識の世界は掴みどころのないものですから、一人一人が自分の体験を通して核心に迫るしかありません。

私がお願したいのは、何も変化が起きなくても、諦めず続けることです。それが何にも勝る技術です。瞑想に技術があるとすれば、続けることです。諦めないことです。どうか根気よく続けてください。

## (7) 物質と霊から宇宙を探る

### ○霊と物質を相対させて考える

いつも思うことですが、日本の漢字は実に便利です。漢字を分析すると、漢字に込められた意味が解るのです。では、「物質」の意味を漢字からひも解いてみましょう。

物質の「物」には、集まったモノとか、固まったモノという意味があります。また、色の着いたモノとか、触れるモノという意味もあります。つまり、「物」は目に見え、触れるのです。一方、「質」とは、本質のことを意味します。その本質は見えないのです。なぜなら、本質はエネルギーだからです。この二文字の意味を通して解釈すれば、「物質」とは本質の固まったもの、すなわち、エネルギーの固まったものという意味になります。

では「霊」とは何でしょうか。霊の上の部分は、「上」「空」「天」「気」、つまりエネルギーを意味しています。下の部分は、「受ける」「収める」「支える」「入れる」、つまり「地」を意味しています。通して解釈すれば、「霊」とは、天から降りてきたエネルギーを地で受けるという意味になります。

物質もあって霊もあるという人がおりますが、霊と物質はもともと同じものなのです。物質は霊の受け入れたものだからです。物質は、霊の固まったものなのです。この宇宙に様々な物質がありますが、すべて、霊という本質によって生み出された物なのです。その物質は見えますが、本質である霊は見えないのです。

それは、先ほども述べたように、霊はエネルギーだからです。エネルギーは見えないのです。そのエネルギーによって物質は生み出されているのですから、物質と霊は同じものです。このことをお釈迦様は「色心不二」と表現し、イエス様は「霊肉一体」と表現したのです。この物質と霊については、霊の誤解を解いた後に、さらに詳しく説明したいと思います。

### ○霊の誤解を解く パート1

私は、霊という言葉があまりにも誤解されて使われていることに、いささか腹立たしさを覚えています。迷える霊などいないのです。狐の霊などいないのです。蛇の霊などいないのです。巷間でいわれているような霊は、存在していません。なぜなら、霊には姿形がないからです。霊は無形にして無双なのです。つまり霊はエネルギー的存在だから見えないのです。姿形のない、見えない霊をどうして見るのですか。姿形を取っている見えないモノなどあるわけがないのです。

霊能者のいつている霊は霊ではなく、エーテル体(幽体)です。エーテルは半物質ですから姿形を取れますが、霊はエネルギーですから姿形が取れないのです。

この表現宇宙には、物質界と幽界の二通りの仮相世界があるのです。物質と半物質の仮相世界は見えます。しかし、本源の霊の世界は見えないのです。霊は見えるものではありません。くれぐれも「霊」と「幽」を誤解しないようにしてください。

## ○霊の誤解を解く パート2

誤解してもらいたくないのは、物体も幽体も、実際に存在しているものではないということです。いってみれば、物体も幽体も、一時空中に浮遊している蜃気楼のようなものと考えたらいいでしょう。たとえば、空気が冷やされ水になり、水が凍って氷になっているように、霊が波動を下げ幽体となり、幽体が波動を下げ物体(肉体)となっているのです。水も氷も一時の存在であるように、物体も幽体も一時の存在なのです。水も氷も空気が生まれたように、物体も幽体も霊から生まれたのですから、三者は本質的には同じものです。ただ、見える状態になったものを、物質とか幽体とか呼んでいるだけです。

霊は怖いものではありません。それどころか、霊は全能です。完全です。絶対善なる存在です。光そのものです。エネルギーそのものです。愛そのものです。くれぐれも霊を誤解して受け取らないでください。

### ○霊とは何か？

では、霊について、さらに踏み込んで考えてみることにしましょう。

霊は見ることも触ることもできないものといいましたが、それは、姿形を取らないエネルギー的存在だからです。だから、言葉や文字で説明することはできません。あえて言葉にするとすれば、霊は生命です。エネルギーです。知恵です。光です。愛です。計り知れない知恵と、力と、光を持った、無形無双の生きものです。すべてのものの本源となり本質となっているものです。

すなわち、創造主です。宇宙の主です。宇宙の大王です。言い換えれば、性質の違う無数の色光を、一つ

の白光に押しなべたものが霊といえるかもしれません。

霊は絶対實在です。絶対實在なるがゆえに無限なる存在です。不変なる普遍なる存在です。永遠不滅なる存在です。完全無欠なる存在です。絶対善なる存在です。

さらに、霊は意識を持っています。意志と意思を持っています。それゆえ、理念を持っています。計画性と目的性に沿った、真・善・美を現わす創造力を持っています。

### ○物質と霊を比べる

#### 【物質】

物質とは、「有るようでありながら実際にはないもの……一時存在する氷のようなもの……分析不可能なもの……時間と空間を渡り歩く旅人のようなもの……有限なるもの……名だけの存在であり、幻影であり、非真実なるもの」といえるでしょう。

それゆえ、この物質の世界のことを、非真実の世界とか、色界とか、浮世とか、現象界とか、仮相世界とか、幻の世界とか呼んでいるのです。要するに物質界は、泡を掴むような、雲を掴むような、カゲロウを掴むような、虚しい存在なのです。

實在とは、永遠になくならないものを意味しますから、なくなってしまう物質は本当に有るものではないのです。その意味では、私たちの肉体は必ず消えてなくなりまますから、本当に有るものではありません。一時の存在です。無常なる存在です。それゆえ、肉に生きる者には四つの苦しみがあるのです。

## 【靈】

靈とは、「ないようでありながら実際に有るもの……永遠に存在するもの……色も、音も、味も、臭いも、触覚もないものでありながら、分析可能なもの……時空に関係ないもの……無限なるもの」といえるでしょう。

それゆえ、靈の世界のことは、真実の世界とか、絶対界とか、実在界とか、実相世界とか呼ばれているのです。

靈は永遠不滅、不変不動の存在ですから、なくなっていく物質を観察することができません。物質は見られる立場のもの、靈は見る立場のもの、この関係は永遠に変わることはありません。それゆえ、靈に生きる者には、永遠の幸せが与えられるのです。

### ○色即是空・空即是色

お釈迦様は物質と靈について、「色即是空・空即是色」と実にうまい表現をされております。つまり、物質は即靈であり、靈は即物質であるといわれたのです。

なぜ物質を「色」と呼び、靈を「空」と呼んだかといいますと、形ある物にはみな色がついており、形のない靈は空気のように無色透明で見えないからです。その見えない靈が見える物質になったのですから、靈と物質は本質的には同じものです。だからお釈迦様は、「色」すなわち物質は即「空」靈であり、「空」すなわち靈は即「色」物質であるといわれたわけです。もし物質が無色透明なら、物の識別や仕分けができず、

この世は大混乱していたことでしょうが、幸いなことに物質には色がついておりますので、私たちは物の識別や仕分けが容易にできたわけです。

さて、物質と霊が同じものならば、人間は霊ではありませんか。霊は人間ではありませんか。なのに今の坊さんたちは、その真実を教えていません。分からないから教えないのでしょうか、これでは一般人が迷うのも当然です。もし分かっていたなら、今日のような葬式仏教などになっていなかったと思います。もちろん、この社会はもっと平和になっていたはずです。

「色即是空・空即是色」の本当の意味を、世の人々に正しく伝えて欲しいものです。

### ○実体なきものは分析できない

なぜ霊しか知り得ないのかといいますと、この宇宙には霊しか存在しないからです。霊しか存在しないのに、どうして霊以外のものを知り得ましようか。また、知る必要があるでしょうか。私たちが知り得るのは、本当に有るものだけです。本当に有るものとは、実体のあるもの、分析可能なもの、すなわち実在する霊です。

たとえば、

・ コップはガラスを素材としてつくられていますので、素材としてガラスは分析できますが、コップは名前だけの存在ですから、分析しようがありません。

・ 物質は霊を素材としてつくられていますので、素材として霊は分析できますが、物質は名前だけの存在

ですから、分析しようがありません。

・人間は生命を素材として造られていますので、素材として生命は分析できますが、人間は名前だけの存在ですから、分析しようがないのです。

私たちが知り得るのは、本当に存在するものだけです。実体のある霊のみです。生命のみです。名前は幻ですから、永久に知ることはできないのです。

### ○物質観念を捨てよう！

本来、この宇宙には、物質というものはないのです。神の光が人の想念に当たり、幻の影としてできたのが物質といわれるものだからです。有るように見えるけれど、実際にはないのが物質なのです。人間の誤った観念が、そのような幻の物質をつくり上げてしまったのです。

物質の本性は光ですから、物質を光として見ている神には、自由自在な物の創造ができるのです。もし人間が神と同じ目を持つことができたなら、物質を柔らかくしたり、延ばしたり、縮めたり、軽くしたり、消したり、自由にできるでしょう。しかし、それを固い物質として見ている限り、自由な創造ができないばかりか、自然の法則によって窮地に追い込まれることになるのです。

すなわち、「毒は人を死に至らしめる。火は人を焼き殺す。水は人を溺死させる。」これは、人間が物質観念を持っているから起きる不都合です。もしこれを、物質観念から霊的観念に転換できたら、さまざまな不都合はみな余所ごとになるのです。



### ○私と考えることが霊の証である

あなたがどんなに否定しても、あなたが霊であることに違いはないのです。あなたが「私」と思えること自体が、霊である証だからです。この宇宙には、たった一つの霊的意識しかないのです。これは絶対真理ですから、誰も覆すことはできません。ならば、今あなたが「私」と思えていること自体、たった一つしかない霊である証となりませんか。なにせ、思えるのは唯一霊しかないのですからね……。その霊が自分を人間と錯覚しているのです。

よろしいですか、人間が人間と思いでいいしているのではないのですよ！ 霊が人間と思いでいいしているのですよ！ なぜなら、思い違いでできる意識は霊にしかないからです。どんな間違いの罪も、どんな失敗の罪も、実在しない人間が犯せるわけがないのです。間違いや失敗が犯せるのは、唯一、意識を持って実在している霊です。

唯物論を唱える学者も、神を否定する無神論者も、そう思わせる力がどこからきているか知らないがゆえに、霊や神を否定するのです。彼らは、思わせる力そのものを否定している矛盾に気づいていないのです。自分が霊であることを認めましょう。認めれば即、あなたは真正正銘の霊になれるのです。いいえ、なれるのではなく、戻れるのです。蘇れるのです。ただ、認めるだけでいいのです。

### ○宇宙霊は愛そのものである

宇宙霊は、常に平安を望んでおります。永遠の安らぎを維持しようとする、均衡・均等・平等・平坦・平

衝を願う意思そのものが宇宙霊なのです。

霊を思うと安らぐのは、すべての良きものを統合した愛の塊だからです。物質を思うと不安になるのは、すべての悪しきものを統合した不調和の塊だからです。単体になればなるほど不安定化し、一体になればなるほど安定化するのが宇宙の性ですから、物質に偏ればどうしても苦しみが生まれるのです。

これは、愛から遠のいた結果です。一人暮らしが空しいのは、愛が紡がないからです。一本しかない糸は紡がないのです。すべての生き物が群棲の中で安定していられるのは、愛を紡ぎ合っているからです。どんな生き物も、支え合い補い合わなくては生きてゆけないようにできているのです。

### ○物質と霊は切り離すことができない！

確実なことは、物質と霊は絶対切り離せないという事実です。物質のあるところに必ず霊があり、霊のあるところに必ず物質があるのです。今私たちは、物質を見てみると同時に霊を観ており、霊を観ていると同時に物質を見ています。どこか遠くに霊界があるのではなく、今ここが霊界なのです。霊がなかったら物質界は有り得ないし、物質がなかったら霊界はあり得ないのです。見える側面を見るか、見えない側面を見るかだけの話です。

確かに、霊は見ることも触ることもできません。ただし、物質を通してなら見ることができなのです。物質を理解することによって見るのです。霊眼の開かれた人とは、物質を霊として観られる理解力を持った人のことです。物質に対する理解力が深まれば、物質を通して霊が観られるようになるのです。つまり、霊は

光ですから、光として観られるようになるのです。

今ここが霊界だといったら、宗教家たちは怒るでしょうね。特に霊能者といわれる人たちは、カンカンになって怒るでしょうね。なにせ、今までいつてきたことが覆されるのですから……。怒るのは、この宇宙の仕組みを知らないからです。言葉に囚われているからです。

物質の世界(幽界を含む)は幻です。そんな世界をいくら知っても、何の意味もないのです。私たちが知るべき世界は真実の世界です。無形無双の、見えない霊界・神界・天界です。どうか霊の誤解を解いてください。

### ○物質と霊とは同じもの

私たちは、長いこと、物質と霊は別モノだと勘違いしてきました。しかし、物質と霊は同じものであって、決して別モノではないのです。人類の誤った観念が、物質と霊を別モノにしてしまっただけです。物質はそのままにして霊です。霊はそのままにして物質です。外を見れば物質、内を見れば霊(光・エネルギー)です。物質と霊は二つで一つなのです。物質の顔と霊の顔を持つ二重面相がその実体です。

物質は粒子であり霊は波動です。この二つは切っても切れない一对の関係にある、と最先端の量子力学者はいています。釈迦は二千年前にそのことを、「色即是空・空即是色」と説いていました。自由自在の霊を、固く、小さく、重く、不自由にしたのは、人類の誤った観念です。この観念を正しいものに置き換えられたら、物質は柔らかくも、軽くも、引き伸ばすことも、曲げることも、消すことも、自由自在にできるよ

うになるのです。間違つた観念が、物質を不自由なものにしてしまったのです。この誤つた観念から抜け出すには、「真理は汝を自由ならしめん！」という悟りが必要です。悟れば即、物質から解放され、自由の身になれるからです。

そうなれば、この世界に争い事がなくなります。世界は平和になります。物質を沢山欲しがらなくなるからです。

### ○靈は自然の法則を超えた存在

確かに自然の法則はあります。ですが、それが全てでないことを知るべきです。宇宙には宇宙の法則というものが別にあるので、私たちはその支配下にも置かれているのです。私たちは、肉と靈の二つの側面を持つた二重生命体だからです。肉体は自然法則に縛られますが、靈はそれを超越しています。肉に生きれば否応なしに自然法則に縛られますが、靈に生きれば自由自在の生き方ができるのです。だからこそ、靈に生きよといわれるのです。

自然の法則を超越した者は、物質を靈として扱い、それを大いに活用できるでしょう。またその者は、天と地を自由に行き来できるでしょう。物質と靈は同じモノであって、決して別モノではないことを知ってください。私たちの誤つた観念が別モノにただけです。この宇宙には、根本的に違うものなど何一つないのです。根が一つだから、誰とでも愛し合えるし、何とでも融合し合えるのです。

形の違いは、単なる靈の顔の違いにしか過ぎません。形の違いは、単なる上皮の違いにしか過ぎません。

どんなに形が違ってても、それはみな霊の現れです。様々なものがあると思っはなりません。覚者が指一本立てて宇宙を示すのは、そのことをいつているのです。

### ○一度も変わったことがない霊の本性

霊がどんなに姿を変えても、霊は霊です。霊が別モノになることは絶対ないのです。霊は不変・不動・永遠・不滅なのです。たとえ物質という色をつけていても、霊の本性は何ら変わらないのです。だから霊は真理そのものなのです。

よく、汚れた水といいますが、水はいまだかつて汚れたことはありません。水が汚れているのではなく、水にゴミが付着しているだけです。水はどんなに濁っても純粹無垢の水です。役者が、面を変え、カツラを変え、衣装を変えても別人になることがないように、霊がどんなに姿を変えても霊そのものに何ら変わりはないのです。

出世魚という魚がありますが、この魚は大きくなるにつれ呼び名が変わります。たとえば、ハマチ→メジロ→ブリ、といったふうに……。私たちも出世魚のようなもので、子供の頃は「人間」と呼ばれ、青年の頃は「幽」と呼ばれ、大人になれば「霊」と呼ばれるようになるのです。ただし、呼び名は違ってても、その本性は何ら変わっていないのです。

### ○霊性を進化させるもの

過去を懐かしがり、未来を憂うは、霊性の進化を遅らせる結果を招きます。懐かしがるのはこの世に未練

がある証であり、憂うのは再び生まれる準備をしている証だからです。そのような想念を持っては、必ず再び生まれてこなければなりません。過去も、未来も、幻です。そんなものはこの宇宙にないのです。真実なるものは、今の今、想念の中にある、神・霊・生命のみです。ないものに想念を使つてはなりません。使うなら本当に有る、神・霊・生命にしてください。

「吾は靈なり！」 「吾は靈なり！」 「吾は靈なり！」

この言葉の中に私の思いを込めました。私が自覚した味を、どうぞあなたも味わってください。そして「吾大靈なり！」 「吾大靈なり！」 「吾大靈なり！」と、何度も何度も思い続けてください。

## ( 8 ) 生命から宇宙を探る

### ○生命とは？

生命は姿形のないものです。だから見えません。触ることができません。また、生命は、過去現在未来に關係ないものです。大きい小さいに關係ないものです。重い軽いに關係ないものです。広い狭いに關係ないものです。

生命には意識があります。知恵があります。力があります。光があります。愛があります。ゆえに、大宇宙は生命そのものです。万象万物は生命そのものです。あなたは生命そのものです。私は生命そのものです。

なぜなら、大宇宙も、万象万物も、あなたも、私も、意識あるものだからです。知恵あるものだからです。力あるものだからです。光あるものだからです。愛あるものだからです。

その生命は、

・この宇宙に一つしかありません。

・生まれもしなければ、消えてなくなることもありません。

・生命は無所得です。無差別です。

だから、

・無限なる存在です。

・普遍なる存在です。

・永遠なる存在です。

### ○命と生命と生命体の違い

【命】とは、意識そのもの、エネルギーそのものを指します。宇宙を創造した意識主そのものが「命」なのです。その意識主は神ですから、神が命ということになります。すなわち、命⇨神⇨意識⇨エネルギーというわけです。

【生命】とは、「命」のみが「生」きているという、「命」の意味を明示している言葉です。つまり、この宇宙に「生」きているのは「命」であると断言している言葉が「生命」なのです。

【生命体】とは、命を宿している個体のことを意味しています。たとえば、原子にも命が宿っていますから、原子は生命体になります。その原子でつくられている鉱物や、植物や、動物や、人間も、当然生命体になります。その意味では、生命体は到るところに存在していることになります。そして、神も到るところに存在していることになります。なぜなら、神⇨命⇨生命体だからです。

### ○すべては同根

すべてのものは、生命という名の本質から生まれました。だから、どんなものとも融合し合えるのです。もし異質のものなら、物と物との融合はあり得なかつたでしょう。一なる光から発生し、無数の色に分かれ、多様な元素となり、その組み合わせによって生まれた物質同士だから融合し合えるのです。

人も同じこと……、白色人種も、黒色人種も、黄色人種も、赤色人種も、緑色人種も、みな同根だから交わり合えるのです。信じ合えるのです。許し合えるのです。どんなものも根は一つです。根が一つだから、この宇宙は永遠に存続できるのです。この意味の深さは海よりも深いのです。どうかどんな人とも仲良くしてください。みなあなたなのですから……。みな私なのですから……。

### ○変えられないものを変えようとしている人間

人間の本性は、永遠に変わらない生命です。どんなに変えようとしても、この本性は変えられるものではないのです。なのに人間は、人間だ！ 肉体だ！ 個人だ！ といって変えようとしています。本来ならば、二セモノの人間を捨てねばならないのに、ホンモノの生命を捨てようとしているのです。これは、明らかに



神に対する反逆です。

どんなに金を塗りたくっても金を泥に変えることができないように、どんなに生命に人間という泥を塗りたくっても、生命を人間に変えることはできないのです。ニセモノはどこまでもニセモノです。ホンモノはどこまでもホンモノです。ニセモノでホンモノを変えることなどできないのです。何が変えられるもので何が変えられないものか、私たちは確固たる識別心を持ちたいものです。

### ○カモとアヒル

自分のことをアヒルだと錯覚しているカモが、アヒルに生きるのは当たり前です。自分のことを人間だと錯覚している生命が、人間に生きるのもまた当たり前です。カモがもし、自分はアヒルではなくカモであった、と目覚めたら、おそらく大空を自由に飛び回ることでしょう。人間も生命に目覚めたら、宇宙を自由に闊歩することでしょう。

ホンモノがホンモノに生きるのは当たり前です。ホンモノがニセモノに生きるのがおかしいのです。生命である私たちが、人間に生きるのをおかしなことなのです。

私たちは思っている通りの生き方しかできないのです。つまり、自分をアヒルだと思っているカモが、カモに生きることは絶対できないということなのです。だから、自分を人間だと思っている者に、生命に生きなさいといっても無理な話なのです。

本当の自分を知らない者が、どうして正しい見識が持てましようか。どうして正しい物事の判断ができま

しょうか。どうして正しく生きられましょうか。カモに生きるには、カモの自分に目覚めるしかないのです。生命に生きるには、生命の自分に目覚めるしかないのです。

では、どうしたら目覚めることができるのでしょうか。

そのためには、本当の自分を常に意識することです。すなわち、生命の自分を常に意識することです。もし人類の割でも、生命に目覚めることができたなら、この世から一切の争い事はなくなるでしょう。

### ○本当に有るもの、それは生命！

本当に有るものとは、永遠に失わないもの、絶対なくならないもの、不滅なるもの、つまり、生命のことをいいます。本当にないものとは、時が来れば失うもの、朽ち果ててしまうもの、消えてなくなるもの、つまり、物質のことをいいます。

形あるものは必ずなくなりますから、本当にはないものです。形のないものは絶対なくなりませんから、本当にあるものです。その定義からいえば、私たちの肉体は必ずなくなりますから、本当にはないことになります。しかし、「意識・生命」は絶対なくなりませんから、本当に有ることになります。その絶対なくならない意識・生命こそ、本当の私たちなのです。

今、私と思っている私が、今、考えている私が、実在する生命の私です。今まで私たちは、生命が思い考えていたのに、肉体が思い考えていたと勘違いしていたのです。思い、考えられるのは生命しかないので、みな生命の仕業だったのです。

形に騙されなくてください。実在とは、形の有るなしではないのです。生きていたとは、形の有るなしではないのです。今、私と思っている意識こそが、本当の私なのです。本当に有るもの、すなわち意識です。本当に有るもの、すなわち生命です。本当に有るもの、すなわちエネルギーです。それこそが本当の私なのです。

本当に有るものもないものを見分けるキーポイントは、意識が有るかないか、永遠になくならないものか、なくなるものか、です。

### ○生命が存在を示す方法

天使とて生命を見たことがないといわれるように、生命は決して見ることはできません。生命は無形無双の存在だからです。では、無形無双の存在を、どうして知ることができるのでしょうか。生命は、自らの存在を示す方法をたった一つだけ残しました。それは物質を通して示す方法です。生命は、見える物質に自ら化身することで、生命の存在を示したのです。

見える物となっても生命です。見えないモノとなっても生命です。形を取っても生命です。形を取らなくても生命です。この理解が、唯一生命の存在を明らかにできるのです。この宇宙には、たった一つの生命しかないのです。何を見ても感じて、生命と思ったらいいのです。

・今私は山を見ている！ いや、あれは山ではない、生命である。

・今私は海を見ている！ いや、あれは海ではない、生命である。

・今私は鳥を見ている！ いや、あれは鳥ではない、生命である。

・今私は花を見ている！ いや、あれは花ではない、生命である。

・今私は人間を見ている！ いや、あれは人間ではない、生命である。

このように、どんなものも生命ですから、生命以外何も見てはならないし、また、考えてもならないのです。

### ○生命は実在・名前は非実在

昨日まで元気だった「花子さん」が、突然交通事故で亡くなりました。家族も親しい友達も、みな嘆き悲しんでいます。でも、よく考えてみてください。花子さんって、本当にいたのでしょうか。花子さんという名前は、形につけられた固有名詞にしか過ぎません。実際にいたのは花子さんではなく、花子さんの形をした「生命」です。私たちは形に惑わされ、あたかも「花子さん」がいたかのような錯覚に陥っているのです。

形は必ず消えてなくなりませう。形が消えてなくなれば、形につけられた名前はどうなるのでしょうか。しばらくは、親しい人の記憶の中に残っているでしょうが、いずれ忘れ去られてしまうでしょう。では花子さんとはいったい何だったのでしょうか。

「幻」だったのです。実際にいたのは、花子さんの形をした生命です。生命がしゃべり、泣き、笑い、生きていたのです。ところが、そうは思えない、どうしても形である花子さんが生きていたとは思えない、そういった思い違いが悲しみを誘っているのです。

生命は永遠不滅ですから、決してなくなることはありません。だから、人が亡くなったからといって、悲しんではならないのです。現に、花子さんの中に生きていた生命は、今も厳然として宇宙に存在し、泣き笑いで生きていますから……。

私も娘を亡くしましたが、涙が出てこないのです。なぜ涙が出てこないのか。それは娘が死んでいないことを知っているからです。娘の形をした肉体は死んだけれど、命は死んでいないのです。もし命が死んだのなら私は大泣きしていたかもしれませんが、命は死んでいないのですから、悲しいはずがないのです。この宇宙に死はないのです。どうか、これまで持っていた死の概念を捨ててください。

### ○ドラマは延々と続く

宇宙生命は、宇宙ドラマの演出者として、また、演技者として地上界で活躍しております。しかし、その生命は、いつまでも演技しているわけではありません。自らを悟れば、もう肉を持って生まれてこないのです。

「悟るとなぜ肉体を持って生まれてこないのでしょうか？」

それは、私やあなたがあるからドラマになるのであって、自他の区別のなくなった悟り人の演じるドラマは、ドラマにはならないからです。要するに、自分相手に一人芝居はできないからです。

「となると、地上に降り立つ人間は、みな自我人間(迷い人)ばかりということになりますか……」

そうです。この地上界に生まれてくる人間は、みな迷い人ばかりです。

「では、すべての人間が悟り、この世に理想の世が開かれたら、もう地上にドラマを演じる舞台は必要なくなるのでしょうか？」

当然です。膨張した宇宙はいつか必ず収縮し、形ある物はいつか必ず消えてなくなり、開かれた舞台はいつか必ず閉じられます。ですが、心配いりません。収縮した宇宙はいつか再び膨張し、消えた物はいつか再び形を取り、閉じられた舞台はいつか再び開かれます。宇宙は循環の法則によって永遠の命を得ているからです。ですから、一時のドラマの中断はあっても、永遠のドラマの中断はないのです。

こうして、生命は、ドラマの演出者として、また演技者として、延々と活躍し続けているのです。

### ○意識は生きもの、生命は生きもの

生きもの(生命)とは、すでに説明したように「意識」あるものを指します。形があるがなかるうが、意識あるものはみな生きものなのです。素粒子も生き物です。空気も生き物です。水も生き物です。石も生き物です。花も生き物です。犬も生き物です。人間も生き物です。万象万物すべて生き物です。ということは、その集まりである地球も生き物ということになりませんか。そうです。宇宙そのものが生き物なのです。ミクロからマクロまで、生き物で埋まっているのが宇宙の実体なのです。

宇宙は意識の海なのです。生命の海なのです。生き物の海なのです。私たちは今、意識の中に住み、意識は今、私たちの中に住んでいるのです。私たちは今、生命の中に住み、生命は今、私たちの中に住んでいるのです。私たちは今、生き物の中に住み、生き物は今、私たちの中に住んでいるのです。「意識」は、「生

命」は、「生き物」は、私たちの外にも内にも存在しているからです。

### ○すべては生命の表現である

臭いも、味も、触覚も、生命(エネルギー)の一表現方法です。たとえば、生命力の強い間は、臭いも強く味も良く触覚も敏感ですが、エネルギーが弱まってくると、臭いも弱くなり味も悪くなり触覚も鈍ってきます。若者は音に敏感ですが、老人は鈍感です。若者の目は青く澄んでいますが、老いてくると黄色く濁ってきます。死ぬ間際の人の影が薄くなるのも、生命力が弱化したために起きる現象です。

こうしたことは、すべて生命力の強さと関係しているのです。五感を利用した瞑想法が開発されたのも、太極拳が開発されたのも、この生命の特性を考慮してのことでした。

この表現の世界で、生命と関係していない物など一つもないのです。すべての表現、すべての働き、すべての現象に、生命は顔を出しているのです。生命の表現が多様なるがゆえに宇宙は面白いのです。

### ○生命に死はない！

死を一言でいえば、不自由な状態を指します。形ある物は、固着化された不自由な状態だから死んでいるのです。形ある物は時間と空間に縛られるので、自由な動きや働きができないのです。だから、その世界には死の概念があるのです。しかし実際には、形ある物は形のない世界へ帰り、再び形ある世界へ戻ってきますので、私たちの考えているような死の概念はないのです。形のある宇宙と形のない宇宙との循環は、二つの宇宙を永続させている命の支柱なのです。

生命は形がありませんので、時・空に縛られない自由な身です。生命に死の概念がないのは自由だからです。

「自由は生、不自由は死です」

この意味を心から理解した者は、もう永遠の命を得たのです。

### ○生命(宇宙)に死がない理由

生命(宇宙)に死はありません。私たちがいつている死は、死ではなく一つの変化です。変化があるから生命は永遠なのです。宇宙は常に安定(バランス・愛)を保とうとしております。でも、その安定が不動の安定であれば、宇宙は固着化してしまい、死んでいるのと同じになります。だから時々凹凸を生み出しては、新鮮さを吹き込んでいます。凹凸は一つの変化なのです。凹凸を埋め安定を保とうとする働きそのものが変化だからです。宇宙における、誕生・成長・古い・消滅のサイクルは、新鮮さを吹き込む新陳代謝の変化なのです。

滞りは腐敗させ、固着化は死をもたらします。流れは清め、動きは新鮮さを吹き込みます。生命(宇宙)が永遠なのは、流れているからです。動いているからです。循環しているからです。

### ○初めから有る生命が生みの親である

形は、生命という名の本質によってつくられた生命の棲家です。もし、形が生命を生むなら、肉体が生命を生むことになり、唯物論者と同じ考えになってしまいます。



「パンがパンを生むでしょうか。コップがコップを生むでしょうか。人間が人間を生むでしょうか」

パンもコップも人間も名前ですから、名前が物を生むことはないのです。本質である小麦粉がパンを生み、本質であるガラスがコップを生み、本質である生命が人間を生むのです。初めから有った本質が物を生むのが創造の原理ですから、途中で生まれた物が物を生むことはあり得ないのです。途中で生まれた物が、どうして初めから有った生命を生むでしょうか。初めから有ったものが、生みの親なのです。先祖なのです。実際に有るものなのです。

・途中で生まれた物が物を生むことはありません。初めから有った生命が物を生むのです。

・影が影を生むことはありません。実際に有る光が影を生むのです。

・名前が形を生むことはありません。実際に有る本質が形を生むのです。

### ○形と本質・地と天・人間と生命は絶対不可分

形は、本質から離れて存在することはできません。また、本質も形から離れて存在することはできません。

もともと本質の中に形の要素が潜在していたから、本質が形になることができたのです。もともと天の中の要素が潜在していたから、天が地になることができたのです。もともと生命の中に人間の要素が潜在していたから、生命が人間になることができたのです。

形と本質が絶対不可分であるように、地と天も、人間と生命も、絶対不可分です。もし、形と本質を強引に切り離したら、その時点で時空は消え、表現宇宙は消滅してしまうでしょう。宇宙が存続していられるの

は、二つが一つに結びつき調和されているからです。だから、形と本質は絶対切り離せないし、地と天も絶対切り離せないし、人間と生命も絶対切り離せないのです。すべては一つであるということです。

### ○生命と形の識別

形の中に本質である生命を観ることができたら、私たちは光る者となれます。しかし、心の目で見なくては光る者となれません。なぜなら、本質という生命は心でしか観えないからです。

・コップはガラスという本質によってつくられました。そこにはコップがあるのではなく、本質であるガラスがあるだけです。本質であるガラスがコップの形をしているだけです。だから本当にあるのはコップではなく、ガラスという本質です。

・人間は生命という本質によってつくられました。そこには人間があるのではなく、本質である生命があるだけです。本質である生命が人間の形をしているだけです。だから実際にあるのは人間ではなく、生命という本質です。

形が形を生むことはありません。形の生みの親は、あくまでも本質である生命です。生命という本質がなくては、いかなる形も生まれません。このことが心の底で理解できたら、途端に私たちは光り出します。理解力は私たちを迷いから救い出します。どうか物の本質が何なのか理解を深めてください。

### ○本当に有るもののみが生きている

本当に有るモノのみが、もの思えるのです。本当に有るモノのみが、もの語れるのです。本当に有るモノ

のみが、もの行えるのです。ニセモノのあなた(人間)がやったものではありません。ホンモノのあなた(生命)がやったのです。人間は本当に有るモノではありませんから、もの思うことも、もの語ることも、もの行うこともできません。本当にある生命が、思い、語り、行っているのです。だから、今、思っている私は生命です。今、語っている私は生命です。今、行っている私は生命です。

そうです。

・あなたが家族と団欒できるのは、あなたの中に生命が生きているからです。

・あなたが恋人と甘い恋を語れるのは、あなたの中に生命が生きているからです。

・あなたが偉大なアスリートとして活躍できるのは、あなたの中に生命が生きているからです。

・あなたが自動車を運転できるのは、あなたの中に生命が生きているからです。

・あなたが偉大な発明家になれたのは、あなたの中に生命が生きていたからです。

### ○生命に形は関係ない

生命に形は関係ありません。それゆえ、私は形に関係ないものです。ただ、何と申うかで私の形が決まるだけです。花だと思えば花になるし、雲だと思えば雲になるし、人間だと思えば人間になるし、宇宙だと思えば宇宙になるし、生命だと思えば生命になるだけです。それなのに、どうしても生命になれない私がいま。なぜでしょう。それは、形に囚われているからです。

生命になるのに形は無関係です。私はもともと形のない意識ですから、形にこだわる必要はないのです。

そのものになりたいと思えば、形があるうがなかうがそのものになれるのです。なのに私たちは、どうしても形にこだわります。形がなくては、生きていと思えないのです。でも、よく考えてみてください。形は永遠ですか。必ずなくなってしまうのではありませんか。どんな歴史ドラマを見ても、刻々と状況が変わり、時代は移り変わってゆきます。どんな権力者も、いつまでも権力者のままではいられません。息子に、孫に、ひ孫に、実権は移ってゆきます。それでも、生命は永遠不動です。どこにでも自由に移動できます。どんな中にも入れます。生命こそが、意識を持って本当に生きているのです。

意識 || 生命です。生命 || 私です。私 || 意識です。

形に惑わされないでください。私たちは何にでもなれる自由な生命（意識）なのですから……。

### ○人間の皮をかぶった生命！

大生命が人間を造り、大生命が人間の中に宿っているなら、人間は大生命そのものではありませんか。大生命が人間になったら、別モノになるのでしょうか。形を取ったら人間で、形を取らなかつたら大生命ということはあり得ません。形を取っても生命であれば、形を取らなくても大生命であるはず……。もし生命と人間が別モノなら、人間から生命が抜けても、人間はそのまま存在していなければなりません。生命が抜けた途端、人間は消えてなくなるのです。では、そこにあったのは何だったのか、ということになります。「人間はそのままにして大生命です。肉体はそのままにして大生命です。人間即生命、生命即人間であります」

この宇宙には、大生命以外何もないのです。あなたは「人間の皮をかぶった生命」なのです。「人間の形をしたロボットの中で運転している生命」なのです。

### ○実際に有る生命のみが理解できる

実際に有るものが、実際に有るものを理解するのであって、実際にはないものが、実際に有るものを理解できるわけではないのです。ホンモノがホンモノを理解するのであって、ニセモノがホンモノを理解できるわけではないということです。たとえ理解できたとしても、それはニセモノのみでしょう。ニセモノはニセモノしか知らないからです。だから、人間はニセモノしか理解できないのです。（この世の知識は、みなニセモノです）人間が真理を理解できない理由はそこにあるのです。だからいわれるのです。

・ 生命を知るには、生命そのものとなって理解せよ！ と……。

・ 神を知るには、神そのものとなって理解せよ！ と……。

・ 宇宙を知るには、宇宙そのものとなって理解せよ！ と……。

記憶するのも、保存するのも、同じ理屈が働いています。無常なるものは無常なるものを一時記憶し、一時保存するだけです。ですから、無常な人間の脳は、無常なるものを一時記憶することしかできないし、一時保存することしかできないのです。永遠に記憶し保存するのは、実際に有る生命です。

### ○永遠なる生命を追い求めよう！

私たちが肉体ある限りのものならば、無常の物を追い求めるのもやむをえないでしょう。しかし、私たち

は永遠になくならない生命なのです。ならば、永遠になくならないものを追い求めるべきではありませんか。見える物は見える限りのものです。この世限りのものです。どんなに沢山のお金を持って、財産を持って、生命の世界に持ち込むことはできないのです。なのに多くの人は、無常の物集めに躍起になっています。私は、貧乏で有りなさいとっているではありません。お金や物よりも、もっとも大切なものがありますよ！ といっているのです。何が一番大切か価値観の識別をしてください！ といっているのです。消えてなくなる物や金集めの一生に、何の価値があるのでしょうか。賢いあなたなら分かるはずで、生命を追い求める一生に価値を見出してください。それはひとえに、あなたの真偽を見分ける判断力次第なのです。

### ○生命の条件は整っている

生命の条件は、すでに整っていたのです。いや、初めから整っていたのです。私たちはもとと知恵そのものであり、光そのものであり、力そのものなのです。これから条件を整え、生命になるわけではないのです。すでに条件の整った生命なのです。あとは、自分が生命であることを認めるだけです。

すなわち、

- ・ 生命と思うか、生命と思わないか。
  - ・ 生命を認めるか、生命を認めないか。
- それだけが残されているのです。

生命になろう、ではないのです。すでに生命なのです。初めから生命なのです。今の今、このままで生命なのです。生命になるのに、何の努力も、何の修行もいらぬのです。ただし、生命になる努力はいらなくとも、生命と考えるようになる努力は必要です。なぜなら、私たちは気の遠くなる年月、人間という思い癖をつけてきたからです。この思い癖を取るには、瞑想という努力がどうしても必要なのです。

### ○一つのものを見せかける宇宙のカラクリ

宇宙のカラクリの見事さは、一つのことを二つに見せかける巧妙な技法です。

たとえば、大と小は二つで一つです。膨張と収縮は二つで一つです。吐き出しと吸い込みは二つで一つです。右と左は二つで一つです。上と下は二つで一つです。人間と生命は二つで一つです。宇宙は、相対させることで、一つの真実を明かそうとしているのです。一つのことを二つに見せかけねば、真実を知ってもらうことができないので、神は相対観念を通して私たちの意識を研ひいでいるのです。

どうでしょう、小さなものがあるから、大きなものがあると解るのではありませんか。右があるから、左があると解るのではありませんか。上があるから、下があると解るのではありませんか。どうかこの意味の深さを知ってください。

### ○生命を思い続けるしかない！

私たちは、気の遠くなる年月人間と誤信して生きてきたために、生命でありながら生命だと思えなくなっ  
てしまいました。オオカミ少年がオオカミに育てられ、自分のことをオオカミだと誤信してしまったように

……。だから、誤信を解く瞑想が必要になるのです。

私は生命である、と思いつけてください。誤信を解くには、反対語を思い、反対語を口にするしかないのです。何の技術も、何の修行もいりません。ただ、生命の自分を思い続けることです。思いつければ、必ず誤信を解くことができます。くだいようですが、私は生命であると無意識に思えるようになるまで思いつけてください。今無意識で人間と思っているように……。瞑想してください！

瞑想を難しく考えないでください。思い続けることが瞑想なのです。

### ○もともと私たちは生命である

私たちは初めから生命なのです。今も生命なのです。未来永劫生命なのです。本質においてすでに生命です。すから、生命になる努力は必要ないのです。努力があるとすれば、生命と考えるようになる努力がいるだけです。

私たちの本質は、もともと金(生命)なのです。ただ金に纏わりついているドロを見て、ドロ(人間)だと思いい違いしているだけです。ドロを取り除けば金が顔を現わすのです。ドロとは、人間と思いい違いしている妄念のことです。概念のことです。私たちは形に惑わされ、ドロだと思いい違いしているだけです。

どんなにドロがついていようと、私たちはもともと金ですから、ドロさえ落とせば「金」に戻ることができますのです。繰り返します。金になる努力はいらないのです。ドロを取り除く努力がいるだけです。ドロを取り除く努力が、瞑想という努力です。



「吾生命なり！」 「吾生命なり！」 「吾生命なり！」

この言葉の中に、私の思いの丈を込めました。私を実感した生命の味を、どうぞあなたも味わってください。そして、「吾生命なり！」 「吾生命なり！」 「吾生命なり！」と、幾度も幾度も思い続けてください。これは、何百万回思おうと思いついて過ぎることはありません。

### (9) 無・空・無限から宇宙を探る

#### ○無我とは？

「無我」とは、「我がない！」という意味ではありません。「無限の我がある！」という意味です。

つまり、

- ・ 無限の知恵
- ・ 無限の力
- ・ 無限の光
- ・ 無限の愛を内蔵した全能の我があるという意味です。

ですから「無我になりなさい！」とは、全能の自分になりなさいという意味になります。

瞑想は、

- ・全能の我に意識を留め置くことです。
- ・全能の我を観ることです。
- ・全能の我に成り切ることです。

### ○無・空とは？

「無・空」とは、何も無いという意味ではありません。限りない性質と、限りない能力と、限りない可能性と、限りない発展性を秘めた状態を「無・空」と呼んでいるのです。

無色とは、全色階を包含している状態です。無音とは、全音階を包含している状態です。無味とは、全味階を包含している状態です。無臭とは、全臭階を包含している状態です。無触とは、全触階を包含している状態です。

すべてを包含している状態の時は、見えず、聞こえず、味がなく、臭わず、触感がないのです。たとえば、白光はすべての色光を包含した状態ですから、無色透明で見えません。見えるようになるのは、分光し、色光となった時です。さらに、聴こえ、味わえ、臭え、触られるようになるのも、色光が元素となり物質化した時です。

このように、無限の性質と能力と可能性と発展性を秘めた包含状態のときは、見えないし、感じないので、でも、それこそが真実なるモノの証であり、宇宙生命の実体なのです。

○始まったことがないから終わったことがない！

知ることに終わりはありません。理解することに終わりはありません。自覚することに終わりはありません。悟ることに終わりはありません。ドラマに終わりはありません。もし終わりがあるなら、宇宙は有限になっただけです。

「宇宙はいつまでも無限です。宇宙はどこまでも無限です。宇宙は永久に無限です」

始まったことがないから、終わったことがないのです。終わったことがないから、始まったことがないのです。絶対宇宙は、アルファーにしてオメガなのです。

ということは、表現宇宙もアルファーにしてオメガであるし、そこに存在する人間もアルファーにしてオメガであるということになります。表現宇宙と絶対宇宙は切り離すことができないからです。

よく人類誕生の話をする人がおりますが、人類はいまだかつて誕生したこともなければ、死んだこともないのです。宇宙がアルファーにしてオメガなら、人間もアルファーにしてオメガでなくてはならないからです。もし、一時でも人類の存在しない時があるなら、神のお留守の時があることになり、それでは、宇宙は永遠でも完全でもなくなっただけです。

宇宙が永遠に脈を打ち続け、呼吸し続けるのは、アルファーにしてオメガだからです。だから私たちも、永遠に脈を打ち続け、呼吸し続けるのです。

### ○私たちが無限である理由

この宇宙で確かなことは、唯一の無限が存在しているという真実です。もし一物でも無限から独立した物があるなら、宇宙は無限でも完全でもなくなってしまう。無限が二つあるなら、無限でなくなってしまうからです。一つしかないから、無限は無限を貫けるのです。一つの無限しかないということは、個体はないということです。個体がないということは、あなたも私も無限であるということです。あなたも私も無限だから、宇宙は無限なのです。

個体がない理由は、個体を形成している本質そのものが無限だからです。つまり、無限のエネルギーと、無限の知恵と、無限の光が、宇宙を構成している本質そのものだから、宇宙はそのままにして無限の生命なのです。その無限の生命の中に、今、私たちは存在し、今、私たちの中に無限の生命が存在しているのです。どんなに無限でないと突っ張っても、私たちの中に無限の本質が生きて働いているわけですから、私たちは無限でないわけにはいかないのです。これが、私たちが無限である理由です。

### ○無限である事実が変わらない！

あなたがどう思おうが、何を思おうが、あなたが無限である事実是不変な事実です。あなたは、初めから無限だったのです。今も無限なのです。どのように時が流れようとも無限なのです。だから、無限になる努力は必要ありません。努力が必要だとすれば、無限と考えるようになる努力が必要なのです。

私たちは、何もなくてもこのままにして無限なのです。ただ、気の遠くなる年月人間（個人）として生

きてきたために、無限だと思えなくなっただけです。思えば、即無限に帰れるのです。私たちの本質（生命・エネルギー）そのものが無限だからです。

宗教はこの事実を伝えることを忘れてしまいました。そして、今も私たちに人間を押しつけているのです。本当は全能なるものなのに、自由なるものなのに、大いなるものなのに、人間と思うことによって、無能で、不自由で、小さな自分にしてしまったのです。これは宗教家にとって大きな責任です。それなのに、誰も責任を感じていないのです。なぜなら、分からないからです。知らないからです。

さあ、無限の自分を思い出しましょう！ 無限の自分を発見しましょう！ 人間という迷妄から目覚めましょう！

### ○無限はどこまでも無限である

無限はどこまでも無限です。無限の中に有限があるはずがないのです。もし、この宇宙に個人が一人でも存在するなら、宇宙は無限でも完全でもなくなってしまう。それでは神は無能な存在になってしまいます。すべてが無限なるがゆえに、神は全能を誇れるのです。

有限に見えるのは、形を見るからです。人間を見るからです。といっても、その人間の本质は無限ですから、やはり無限なのです。私たちは形を見て、自分を有限化しているだけです。それは人間の迷いがつくった幻の有限であって、実際に有る有限ではないのです。身を縛られても心を縛られても苦しいのは、自分の本性が無限だからです。私たちは無限の生命なるがゆえに、自由を欲するのです。もし私たちが有限なる存

在なら、自由！ 自由！ と、これほどまでに自由を希求しなかつたでしょう。人間が必死になって自由を叫ぶのは、自分が融通無碍なる生命だということを本能的に知っているからです。

どうか、自分を人間の中に閉じ込め有限化しないでください。あなたは人間ではありません。個人ではありません。形ではありません。自由無碍なる、無限の生命です。無限の光です。無限の宇宙です。

### ○無限の私を知るのは無限の私のみ

無限の私を知ろうと思えば、無限の私になって知らねばなりません。なぜなら、無限の私を知るのは無限の私だけだからです。ニセモノがホンモノを知ることなどできないのです。ホンモノがホンモノを知るので、ですから、無限の私を知ろうと思えば、無限の私になって知るしかありません。無限の私に對面したくば、無限の私になって對面せよ！ ということです。これが「神を礼拝するには、自らが無限そのものとなって礼拝せよ！」といわれる所以であります。

肉体の私が本当の私を知ることができない理由は、肉体には、一カケラの意識も、一点の知恵も、一寸の力もないからです。ですから、どんなに知りたくとも願っても無駄骨であります。本当の私を知るには、本当の私以外ないことを知ってください。無限の私を知るには、無限の私以外ないことを知ってください。

### ○ないものを考えてはならない！

実在しない肉体の私のことを、とやかく考えてはなりません。その考えそのものが迷いだからです。肉体の私のことを考えている私は、肉我の私であります。つまり、存在しない影の私が、存在しない影の私のこ

とを考えているのです。たとえ、影の私がどんなに偉大なことを成し遂げたとしても、どんなに素晴らしい宝物を手に入れたとしても、それは影を組み立て、影を掴んだに過ぎないのです。影は実在しないのですから、決してないモノのことを考えてはなりません。有るモノのみを考えましょう。

有るモノとは、

- ・ 永遠になくならない無限のこと……
  - ・ 神のこと……
  - ・ 生命のこと……
  - ・ エネルギーのこと……
  - ・ 光のこと……
- すなわち、本当の私のことであります。

### ○無限の自分を小さく限定している私たち

無限とは、限界がないという意味です。それは、空間のことを指しているのではなく、意識のことを指しているのです。私たちの本性が無限なのは、意識そのものが私たちであり、その意識が無限だからであります。その無限意識を限定し、小さな自分に行っているのが私たちなのです。意識を限定しなければ無限の能力が使えるのに、意識を小さく限定し、小さな能力しか使えないようにしているのです。それは、自分のことを人間だと思っているからです。個人だと思っていますからです。肉体だと思っていますからです。まさに私た

ちは、無限宇宙の家の中に小さな家を建て(肉体をつくり)、その家が(肉体が)自分の家だと思い込んでいる  
迷い人です。

私たちは、永遠の昔より、無限宇宙の家の中に住んでいたのです。いや、今も住んでいるのです。これからも永遠に住むのです。その無限宇宙の屋根は、満天に輝く星々です。銀河はシャンデリヤです。こんな素晴らしい家に住んでいるというのに、どうして小さな家を建てて住むのですか。あなたは小さな家の方が好きなのですか。無限の自分を限定しているという意味は、無限宇宙の家に住みながら、そこに小さな家を建てて住んでいるという意味です。大きな意識を小さくし、小さな意識(肉体と思いついでいる意識)の中に住んでいるという意味です。

さあ、小さな建物の屋根(肉体意識)を取っ払ってください。取っ払えば、満天に輝く星々の屋根と、キラメク銀河の屋根が展望できるのですから……。

### ○完全のみが存在する

この宇宙には完全なものしか存在できません。本当に有るものだけが完全だからです。完全だから本当にあるわけです。ということは、この宇宙に不完全なものは何一つ存在しないことになります。

私たちが苦しんできたのは、實在しない不完全なものを追い求めてきたからです。お金や、地位や、名誉など、本当のないものを追い求めてきたために苦しんできたのです。どうして、不完全なものを追い求めて幸せになれるのでしょうか。不完全なものは、實在しないのですよ！ 有るように見えるけれど、実際にはな



い幻なのですよ！ だから覚者は声を大にしているのです。

・ 実在しない不完全なものを追い求めてはならないと……。

・ 本当に有る完全なものを追い求めなさいと……。

内在する真我(生命)は本当に有るものです。それこそが私たちの追い求めるべき真の宝物です。さあ、求めましょう！ 永遠なるもの、完全なるもの、真実なるもの、本当に有るものを……。

### ○何もかも備わっているのが空である

「空」とは、何もないという意味ではありません。むしろ、何もかもある、すべてのものが備わっている、あらゆるものが用意されてある、全存在の本源にして本質なるものを「空」と呼ぶのです。

すべての可能性が包含されたもの、すべての能力が包含されたもの、すべての性質が包含されたもの、すべての色が包含されたもの、すべての感覚が包含されたもの、すべてのバランスが包含されたものが「空」の実体です。

すべてが包含された状態を大調和といいます。そこは均衡のとれた平安の地です。穏やかな天国そのものです。私たちは「空」から出てきたのです。そしていつか「空」に帰るのです。そこには何もかもが揃っています。だから、この世から何も持ち帰る必要はありません。さあ、心一つで帰りましょう！ 裸一貫、何も持たず、手ぶらで帰りましょう！

○ないと思っっているものが有り、有ると思っっているものがない！

私たちは、見える物、触れるものが本当にあると思っっています。しかし、本当に有るものは、見えもせず触れもしないものなのです。この宇宙の実体は、見えないモノが本当に有るもので、見える物はみなニセモノなのです。見える物は、見えないモノによつて写し出された影だからです。どうでしょう、影を實在というでしょうか。影をホンモノというでしょうか。

・影は影からは生まれません。光から生まれるのです。

・見える物は見える物からは生まれません。見えないモノから生まれるのです。

見えないモノは、すべてのものを内蔵している本源本質です。その、内蔵されたものの一部を取り出した時、姿形を現わすのです。ですから、見える物となった物はみな幻で、内蔵された見えないモノこそホンモノなのです。

私たちはジャンケンをして勝ち負けを決めますが、思いの中にあるグー・チョキ・パーは生きております。

それは限定されておらず、可能性が無限だからです。でも、表に現れた途端、グー・チョキ・パーは死んでしまいます。決定した勝負が動かせないのは、現れた途端、結果になってしまうからです。結果は動かせないのです。現れた物は進展しないからです。可能性がゼロだからです。それが死の意味です。

死の概念は、発展性ゼロ、可能性ゼロ、動かしようのない状態をいうのです。表現の世界に現れた物は、発展性ゼロ、可能性ゼロだから死んでいるのです。現れていないものは、発展性も可能性も無限大だから生

きているのです。だから、見える物は非実在で、見えないモノこそ実在だということです。この意味の深さを  
知れば、悟りに大きく近づくでしょう。

### ○意識に不幸はない

宇宙の実態は意識です。すべての創造物は、意識の範疇にあるのです。その意識は無限ですから、すべて  
無限の中に収まるしかありません。したがって、意識を限定したり制限したりしない限り、本来私たちに苦  
しみはないのです。よく考えてみてください。人間が苦しんでいるのは、意識を限定しているからではありませんか。  
それは、誰かが限定しているのではなく、自分の自由な思いが限定しているのです。

そうです。人が苦しむか苦しまないかは、限定意識を持つか持たないかで決まるのです。

たとえば、

- ・何時までやらねばならない、と思えば苦しみとなるでしょう。
- ・いくら儲けねばならない、と思えば苦しみとなるでしょう。
- ・どうしても勝たねばならない、と思えば苦しみとなるでしょう。
- ・不自由な肉体を自分だと限定すれば、苦しみとなるでしょう。
- ・悟りも、いついつまで悟らなければならぬ、と思えば苦しみとなるでしょう。

これらすべて、意識を限定することによって生まれた苦しみです。意識を限定すれば光を遮ってしまつた  
め、どうしてもエネルギーの低下を招くのです。プレッシャーは、意識を「せねばならない！」という限定

枠に閉じ込めた時に起きる現象です。光を閉ざせばエネルギーは低下しますから、持っている力が出せなくなるのです。反対に開き直れば、光を閉ざしていた心の制約を打ち破るので、エネルギーが強まり、持っている以上の力が出せるようになるのです。

意識を限定すれば、必ず苦しみとなります。これは、意識を限定した自分の責任で、誰のせいでもありません。宇宙が常に自由を望んでいるように、私たちの意識も常に自由を望んでいるのです。

さあ、どんな良いことであっても、決して意識を限定しないでください。結果を求めず、黙々とやり続けることです。それも楽しくやりましょう。そうすれば、本来自由な意識を持つ私たちに苦しみはないのです。

### ○私たちはドミノの一つである！

私たちは、一個人であると同時に、家族の一員です。家族の一員であると同時に、一市民です。一市民であると同時に、一国民です。一国民であると同時に、一地球人です。一地球人であると同時に、一宇宙人です。一個の細胞がなければ健全な肉体があり得ないように、私たちの誰一人が欠けても健全な宇宙はあり得ないのです。

私は何の役にも立っていない！ だから居てもいなくてもいいのだ！ といって自殺する人がおりますが、とんでもありません。あなたがいなくては、宇宙は成り立たないのですよ。あなたは大切なドミノの一つなのです。たった一つのドミノがなくなってもドミノ倒しが完成されないように、あなたがいなくては宇宙のドミノ倒しは完成されないのです。

このように考えてください。あなたは、あなたの周囲の人たちの学びの材料の一つなのです。良くも悪くも、あなたがいなければ学べることも学べないのです。たった一つのはめ絵がなくなってしまうたら絵が完成されないように、あなた一人でも欠けてしまつては、宇宙絵は完成されないのです。

このように、個人の集まりが無限宇宙をつくっていますので、あなた一人が欠けても無限宇宙は存在できないのです。無限は一から離れて存在できず、一は無限から離れて存在できないのは、このような理由があるためです。

だから、一は無限であり、あなたは無限であり、すべては無限なのであります。



## 第二章

### 神の独り言

宗教は、何千年もの間、衆生から神を遠ざけてきました。本来近くにあるべき神が、無知なる宗教家のために、手の届かない遠くに祭り上げられてきたのです。神はそのようなものではないかもしれません。神は手よりも足よりも近い存在です。イエス様は弟子たちに「人類の前に真の神が示される時代が来るだろう！」と予言されておりましたが、まさに今がその時です。この章では、神を覆い隠してきたベールを取り外し、真の神をはっきりと示したいと思ひます。



(1) 神とは何か？

○手よりも足よりも近くにいる神

「私」を遠くに探してはなりません。「私」は(私)の手よりも足よりも近くにいるからです。また「私」を外に探してもなりません。「私」は(私)の中にいるからです。また「私」を神秘化してもなりません。「私」はどこにでもいるありふれた存在だからです。「私」は(私)です。(私)は「私」です。

○神とは何か？

盲目の人生を歩む人とは、肉体を自分として生涯を終わる人のこと、つまり外側の影だけ見て、内在する光を観ないで終わる人のことをいいます。

人間は神が天下って化身したものの、人間即神・神即人間であります。神が表現するには、神自らが天下って表現物(人間)になるしかありません。なぜなら、この宇宙には神の外何もないからです。外側を見たら無能の人間に見えますが、内側を観たら全能の神なのです。人が神だからこそ、思い、考え、工夫し、様々なものを創造することができますのです。

・もの思えるのも神だからこそです。

・もの語らえるのも神だからこそです。

・もの行えるのも神だからこそです。

神ならばこそ記憶し、神ならばこそ筆を執り、神ならばこそ物語れるのです。神が神を思い、神が神に奉仕し、神が神を愛するのです。

神は、

- ・ 不滅なるもの。
- ・ 永遠なるもの。
- ・ 完全なるもの。
- ・ 絶対なるもの。
- ・ 実在そのもの。

神は、

- ・ 時間と空間に関係のないもの。
- ・ 大小に関係ないもの。
- ・ 広い狭いに関係ないもの。
- ・ 重い軽いに関係ないもの。
- ・ 過去未来に関係ないもの。

神は、

- ・ 見ることのできないもの。

- ・聴くことのできないもの。
- ・触ることのできないもの。
- ・味わうことのできないもの。
- ・嗅ぐことのできないもの。

神は、

- ・切ることのできないもの。
- ・焼くことのできないもの。
- ・溺れさせることのできないもの。
- ・爆破することのできないもの。

神は永遠にして不滅です。その神は、私の中にも、あなたの中にも、万象万物の中にも宿っているがゆえに、すべては神の分身なのであります。

- ・分身の中に、神のすべての属性が宿っているのです。
- ・分身の中に、全宇宙の知恵と、力と、光が宿っているのです。
- ・分身の中に、神の慈愛のすべてが宿っているのです。

その神は、恐れ多い存在でもなければ、神秘的存在でもありません。神は偉大な下僕であり、ありふれたお方です。

神は、

- ・ 拝むものではありません。
- ・ 祭るものでもありません。
- ・ 崇めるものでもありません。

神は、

- ・ 知るものです。
- ・ 理解するものです。
- ・ 実感するものです。

神は、

- ・ 架空の存在ではありません。
- ・ 空想や妄想の産物でもありません。

神は、

- ・ 現実に生きて働いている力そのものです。
- ・ 心臓を動かしている力そのものです。
- ・ 蜂に巣をつくらせている力そのものです。
- ・ 鳥を羽ばたかせている力そのものです。

- ・花を咲かせ、実を結ばせている力そのものです。
  - ・絵を描かせ、唄を歌わせている力そのものです。
  - ・原子を回転させている力そのものです。
  - ・地球を回転させている力そのものです。
  - ・大宇宙を運行させている力そのものです。
  - ・真・善・美を輝かせている力そのものです。
- 神は、
- ・意識そのものです。
  - ・意志そのものです。
- 神は、
- ・無限です。
  - ・普遍です。
  - ・全体です。
  - ・有りて在るもの、すべての全てです。
- すなわち、存在そのものです。

## ○神を探す

神はどこにおわすのか……。人は永きに渡って神を探し続けてきましたが、いまだかつて、神を探し当てた人は一人もおりません。当然です。神である自分が神を探すのですから、探せるはずがなかったのです。聖者はいいいます。

「人間は自分が神だと気づくまで、永遠に外に神を探し続けるであろう」と……。またこうもいいいます。「あなた方と私との違いはたった一つ、私は自分のことを神だと思っているが、あなた方は自分が神でありながら、神でないと思っているだけである」と……。

自分とは、神が「自」らを「分」けたのです。だから、人間はもともと神だったのです。神はどこか遠くにおわすのではなく、一番身近な私たちの中におわしたのです。どんなに良いことをしようと、どんな宗教をしようと、自分が神だと気づくまでは天に入ることはできません。どうか神を知ってください。本当の自分を知ってください。知った者のみが天に入れるのです。

## ○神は私と共にいる

これまで、神を探し当てた人は、ほんの一握りの人たちにしか過ぎませんでした。なぜでしょう。それは、神があまりにも身近にあり過ぎたからです。神は、初めなき始めより人間と共にあったのです。それなのに、人間は外に神を探し続けてきました。神の中において神を探すのですから、探せるわけがなかったのです。この大宇宙が神であり、その大宇宙の中に人間はおり、人間の中に大宇宙があるので、人間は初めから

神の中の神だったのです。

・私が神なのです。

・あなたが神なのです。

・すべての全てが神なのです。

私たちがすべきことは、自分が神であることを認めることです。宗教に入らなくても、お経を読まなくても、仏壇や神棚に手を会わせなくても、自分が神であることを認めれば、即、神なのです。もしそこに難しさがあるとすれば、神を認めない人間の思いがあるだけです。

さあ、人間の思いを捨て、「吾神なり！」と宣言しましょう。自分に納得させましょう。自分に認めさせましょう。

### ○私を見たとき神を観(見)たのである

神はどこにおわすや……。

神は私の中におわします。神はあなたの中におわします。神はすべての中におわします。ゆえに、私を見たとき、神を観たのです。あなたを見たとき、神を観たのです。何を見ても、神を観たのです。

・あれも神です。

・これも神です。

・それも神です。

神を遠くに探してはなりません。神は到る所におわすのです。

それは、

・石を投げた先にも。

・矢を放った先にも。

・ツバを吐いた先にも。

・罵声を放った先にも。

・いじめたものの中にも。

・痛めつけたものの中にも。

何をいじめても、神をいじめたのです。何を痛めつけても、神を痛めつけたのです。だから、どんなものもいじめてはならないし、痛めつけてもならないのです。

### ○神を観(見)たくば？

もし神を観たいなら、神に思いを向けてください。思いを向けるとは、神を意識することです。切望することです。欲することです。欲すれば与えられるのが宇宙の法則ですから、神はきつと姿を現わしてくれます。瞑想が有効なのは、思いが神を呼ぶからです。それも、思いが強ければ強いほど早く神を呼ぶことができます。だから私は、常に強い気持ちを持って神を呼んでいるのです。吾神なりと……。

もし、瞑想に不信感が生まれたら、私の思いは神の思いだから、成就しないはずがない！ と強く自分に



言い聴かせ、励ますことです。たとえ今生成就しなくても、無駄になることは絶対ありません。一回思えば一円貯金したと思つて続けてください。塵も積もれば山となることを信じ続けてください。

○神が観(見)えるとは？

神が見えるようになってくると、もう神に逆らうことができなくなり、神が見えるといつても、神には姿形がありませんから、目で見えるわけではありません。見えるという意味は、神が創られた宇宙法則の働きが、完全性が、絶対性が、素晴しさが、凄さが、観えるという意味です。その法則の完全性は、目を見張るばかりです。

・どんなに良いことをしても、法を犯せば裁かれます。

・どんなに神に許しを乞うても、法を犯せば裁かれます。

・どんなに神にへつらつても、法を犯せば裁かれます。

そこに情の入る隙間はありません。神は峻厳な愛そのものの、科学法則そのものですから、法を犯せば「因果の法則」によつて誰でも裁かれるのです。悟っている者、迷っている者に関係なく……です。

すなわち、

「目には目を歯には歯を！ 自分が撒いた種は自分が刈り取らねばならない！ 作用と反作用！ 因果

応報！」の働きです。

神が見えるという意味は、愛の法則の働きとその完全性が、宇宙の法則の働きとその完全性が、因果の法

則の働きとその完全性が観えるという意味です。だから、神が観えるようになった人は、法に逆らう愚かなことはしなくなるのです。

人が人を生むならそれは人かもしれない。だが、神が人を生むのだから人は神であるはず。

## (2) すべては神の御業

### ○神は空想や妄想の産物ではない！

神は、空想や妄想の産物ではありません。神は実在そのもの、真実そのもの、現実そのものです。事実、私たちは今、神によって生かされているではありませんか。

- ・息をさせているのは誰でしょう。
- ・心臓を動かしているのは誰でしょう。
- ・食べた物を消化し、エネルギーに変えているのは誰でしょう。
- ・思い、考え、行動に移させているのは誰でしょう。
- ・正確な時を刻んで四季を生み出しているのは誰でしょう。
- ・蜘蛛の巣を幾何学的に編ませているのは誰でしょう。
- ・雨を降らせ風を吹かせているのは誰でしょう。

・銀河を生み出し、星々を生み出し、宇宙を運行させているのは誰でしょう。

みな神ではありませんか。こんなにはつきりと神を見せられているのに、なぜ人間は神を認めようとしな  
いのでしょうか。

恐ろしいから。……怖いから。……従わなくてはならないから。

でも、どんなに人間が認めなくても、神は、今日も、明日も、明後日も、永遠に働き続けてくれるのです、  
下僕のように……。

こうして実際に私たちの生活にかかわり続けてくれているのが神なのです。さあ、神に感謝しましょう。

### ○清くありたい！

今の私に、

・何も欲しいものではありません。

・行きたい所ありません。

・見たいものありません。

・聞きたいこともあります。

・やりたいこともあります。

ただ清くありたいと思うだけ……。そう思うと、ひとりで涙が出てくるのです。なぜ、こうも清くあり  
たいと思うのでしょうか。神の本性ゆえでしょうか。この思いは日々強くなるばかりです。もう私に、どん

な誘惑も無意味です。

○言葉は神なりき！

あなたは今朝、家で妻や子と話しました。本当に、妻や子と話したのでしょうか。先ほどあなたは、お店にやってきたお客様と話しました。本当に、お客様と話したのでしょうか。言葉は神にしかありません。ならば話した相手は、みな神ではありませんか。

そうです。

・あなたは今朝、家で神様と話したのです。

・あなたは先ほど、お店で神様と話したのです。

そういつている私も神です。それを聞いているあなたも神です。神しかいなのですから当然です。ただ、神と違っていいだけ……。でもあなたがどんなに神でないと思おうが、あなたが神である事実は変わらないのです。

○思いを変えれば即神である

この宇宙に存在するもので、神でないものは一つもありません。すべてのものは初めから神であったし、今も神であるし、未来永劫神なのです。だから、あなたは神です。でもあなたは姿形を見て、自分のことを人間だと思っていますね。その迷妄が、あなたを神でなくしているのです。しかし、いかに迷妄を持っていようと、あなたが神である事実は変わらないのです。

あなたは、生まれながらにして神(仏)なのです。だから、神の権利はとうに与えられているのです。ただあなたが、その権利を行使しないだけ……。放棄しているだけ……。否定しているだけ……。でもどんなに否定しようと、あなたの本性は紛れもない神なのです。あなたが神であることは決定済みなのです。だから堂々と神を宣言し、神の権利を行使したらいいのです。あなたを神にしないのはあなたの思いです。あなたの思いがあなたを神にしないだけです。思いを変えれば、即、神なのです。

### ○神しか探せない？

もしあなたが、この宇宙で探し物があるとしたら、どんな探し物でしょうか。いったい何が探し出せるでしょうか。それは神しか探し出せないはずですよ。なぜなら、神しかいないからです。見える物、見えないモノ、みな神です。形の有るもの、形のないもの、みな神です。鉱物、植物、動物、人間、みな神です。

- ・あなたが父母を探しているとき、それは神を探しているのですよ！
- ・あなたが妻や夫を探しているとき、それは神を探しているのですよ！
- ・あなたが子供を探しているとき、それは神を探しているのですよ！
- ・あなたが恋人を探しているとき、それは神を探しているのですよ！
- ・そして誰かがあなたを探しているときも、神を探しているのですよ！

そうです。あなたが何かを探しているとき、誰かがあなたを探しているとき、それは神を探しているのです。全てが神であり、探し物すべてが神だから当然です。

## ○人間は神の窓口である

神はすべてのものの中に内在します。しかし、意識して神を表現できるのは、唯一、人間だけです。鉱物も、植物も、動物も、神の落とし子であり神ご自身ではありますが、意識して神と対面できるのは、私たち人間の外おりません。それほど、私たちは偉大な存在なのです。もし人間が存在しなかったら、神は永遠に日陰の身のままでありましょう。そうなれば、神は永遠に宇宙の迷子です。ですが、幸いなことに人間は、神を意識し、神と語り合うことができます。ゆえに神は、宇宙の王として君臨できるのです。

人間は神の窓口です。人間の思い、言葉、行為は、神の思い、言葉、行為を代弁代行するものです。今思ったこと、今語ったこと、今行ったことは、神の思いであり、神の言葉であり、神の行なったことと等しいのです。だから、人は神なり、神は人なりです。神人とは、神の思いと言葉と行いを、忠実に表現できる人のことです。

役所が抽象的な存在であるように、神も抽象的な存在です。抽象的な役所が何かをする場合、窓口を通してやるしかないように、抽象的な神が何かをする場合も、窓口である人間を通してやるしかないのです。しかし抽象的であっても、役所はしっかりとした意思を持って街に美しい絵を描いております。同様に神も、しっかりとした意思を持って宇宙に素晴らしい絵を描いているのです。役所の心が見えないように、神の心も見えません。でもその創造の心は、手となり足となって働いている人間が実現させているのです。

### ○初めから神の中にいた私たち

私たちは初めから神の中にいたのです。いや、今もいるのです。私たちは、神から一時たりとも離れたことがないので。私たちは神と一体なのです。一体ということは、一つであるということです。神そのものであるということです。今から神になるのも、今から光になるのも、今から完全になるのもありません。私たちは今の今、神であり、光であり、完全なのです。

神の懐に抱かれている私たち、これほど幸せなことがありますか。なのに、あなたは どうして外に飛び出したがるのですか。あなたの心を魅了するものが、外に一つだってありますか。どんなに華やかでも、どんなに美しくても、外側の物はみな幻ですよ！ そんな幻に心を売ってどうするのですか。

さあ、「外に思いを向けるのを止めましょう！ 神の懐の中に錨を降ろしましょう！」

そして、「父の御胸に抱かれましょう！」

そこは至福に満ちた桃源郷、私たちの故郷です。

### ○神に帰る条件とは？

神に帰る条件はすでに整っているのです。いいえ、初めから整っていたのです。私たちは、何かして神になるのではないのです。初めから神だったのです。今の今、このままにして神なのです。ただ、心の底からそう思えない、そんな私がいるだけです。何がそう思わせないのでしょうか。

・神に帰ることが恐ろしいのですか。

・何か失うものでもあると思っっているのですか。

恐ろしいことも、失うものもありません。神の館は平安そのものです。そこには何でも揃っているのです。

この世は、心配と恐怖の錯綜する世界です。煩わしいことも沢山あります。されど、神の館は平安そのものです。そんな平安な世界に帰れるというのに、なぜあなたはためらうのですか。

・何かやり残したこともあるのですか。

・何か心残りなこともあるのですか。

この世の物がみな空しいものであることを、あなたは知ったのですよ！　なのに、どうして決断しようと思わないのですか。

・何か手続きでもいると思っっているのですか。

・誰かの承諾でもいると思っっているのですか。

・何か修行が必要だとも思っっているのですか。

何の手続きも、誰の了承も、何の修行もいらな**い**のです。あなたが神だと認めればいだけです。認めれば即、神に帰れるのです。神に帰る条件は、ただ、あなたが認めるだけです。決断するだけです。さあ、認めましょう！　さあ、決断しましょう！

今決断を迫っっているのは、誰だと思っいますか。

「天にいる私です！　神我の私です！　本当の私です！」



○神でないものはない！

何一つ神でないものはありません。もし神でないものが一つでもあったら、神は全能でも、無限でも、完全でもなくなりません。すべてが神だから、神は全能で無限で完全なのです。

見えない神が何かを表現するには、神自らが見える形を取るしかありません。なぜなら、神の外何もないからです。だから神は、天下って人間の形を取ったのです。それゆえに人間は、神そのものなのであります。

- ・ 神と人間は何一つ違いません。
- ・ 全く同じものです。

・ 天から地に下り、人間の姿を取っただけです。

人間がいるということは、神がいるということです。神がいるということは、人間がいるということです。

私のいる所に神がおり、神のいる所に私がおるのです。

- ・ 姿形のない神が、地に下って人間の形を取っただけ……。
- ・ 天が地に下っただけ……。
- ・ 無限が個人に姿を変えただけ……。

万象万物すべて神そのものです。

- ・ 見えないモノが天下って、見える物になっただけです。
- ・ 見えないモノが見える物になっても、本性は見えないモノです。

・ 神が人間になっても、本性は神そのものであります。

神が天下って形を取ったら、神以外の物になるのでしょうか。天にいても神、地にいても神ではないでしょうか。ガラスがコップの形をしたら、ガラスでなくなるのでしょうか。神が人間の形をしたら、神でなくなるのでしょうか。

・ 何にでもなれるのが神ならば、すべてのものは神であるはず……。

・ 変幻自在が神ならば、すべてのものは神であるはず……。

私は知っています。

・ 私が神であることを……。

・ あなたが神であることを……。

・ すべてが神であることを……。

### ○ 神の光を受ける秘訣

幸せは、いかに多くの光を受けるかで決まります。それは、思いにおいて、言葉において、行為において、いかに神の心に適っているかによります。神は、良き想い、明るい想い、積極的な想いが好きです。また、清純で素直なものが好きです。この性質を利用すれば、私たちは幸せの中に生きることができなのです。

一番気をつけねばならないのは、純粋さを失わないことです。子供のころ神童と呼ばれた者が、大人になりただの人になるのは、純粋さを失ってしまったからです。純粋なうちは光を多く受けるので運命は良くな

りますが、増長して天狗になると光を受けなくなるので運命は悪くなるのです。初心忘れるべからずとは、「純真さを失うべからず！」ということですよ。

### ○神に逆らわない生き方とは？

神に逆らわない生き方とは、ポジティブに生きる生き方です。神の本性は「明るく・楽しく・朗らかに」ですから、ネガティブに生きている人は、神に逆らって生きていることになるのです。

ネガティブに生きたら不幸が待っています。ポジティブに生きたら幸せが待っています。そのどちらを選ぶかは、本人の自主性に委ねられています。なのに、多くの人間は、ネガティブに生きては苦しんでいます。なぜでしょうか。それは、神の愛が信じられないからです。神の愛とは法則のことですから、法則を無視して生きたら苦しいのは当然なのです。

ポジティブに生きている人は、自分で自分を助けています。ネガティブに生きている人は、自分で自分を苦しめています。自分の思いが、言葉が、行いが、自分を苦しめたり、助けたりしているのです。それは、自分が神そのものだからです。法則そのものだからです。自分を助けるのは神なる自分です。法則なる自分です。人が人を助けるのでないことを知ってください。

### ○神とキャッチボールをしている私たち

あなたはノーコン投手で、いつも悪いボールを投げております。でも心配いりません。どんなに悪いボールを投げようと、あなたはいつも神に向かってボールを投じているのですから……。なぜなら、神は土の中

にも、壁の中にも、草の中にも、ネットの中にも、スタンドの中にも、ミットの中にもおられるからです。だから、ボールが右にそれようが、左にそれようが、上にそれようが、下にそれようが構いません。さあ、遠慮せず思いっきり投げましょう。

私たちは、日常生活において、常に神とキャッチボールをしているのです。私たちがどんなひねくれボールを投げようが、どんな癖のあるボールを投げようが、神は文句一ついわず受け取ってくれています。でも神はときおり、きついボールを投げ返すことがあります。それは、良くないボールを投げていることに気づいてもらいたいためです。

・私たちが神に向かって投げるボールは原因です。

・神から投げ返されるボールは結果です。

さあ、神から投げ返されたボールの意味をしっかりと受け止め、神が望むボールを投げ返しましょう。

### (3) 神の中には神しくない!

#### ○神は本当に存在するのか!?

神を否定する人がおりますが、その人は、自分を否定していることに気づいていないのです。なぜなら、自分を生み出した親(創作者)の存在を否定しているからです。親がいなければ自分はいないのですよ!

何かが存在している背後には、必ずそれを存在させている何かがあるのです。たとえば、建築物があるからには、それを建てた建築主が必ず存在しているのです。文学書が文字の偶然の集まりでないように、この世のどんな物にも、それを組み立てた創作者が必ずいるのです。その創作者を、私たちは神と呼んでいるのです。生物学者は、自然発生説や突然変異説を振りかざし、神を否定しますが、これほど幼稚な考えはありません。原因者なしに結果はあり得ないのです。ものの起こりの背後には、必ず起こしている何者かがいるのです。

この宇宙には、様々な形を取って自分を表現している神がいるのです。何もかにもが神です。すべての物は神の分身であり、神そのものなのです。ゆえに、人間は神であります。人間が神であるがゆえに、人間は創造の思いを持つのです。唯物論者は、神を否定することによって、唯物論そのものが否定されていることを知らないのです。唯物論を生み出している力そのものを否定しているからです。

「ものを思う！ ものを考える！」

その力そのものが神であることを知らないのです。

神は間違いない存在します。これは、今あなたが存在しているのと同じくらい確かなことなのです。

### ○神の中には神しくない！

神の中には神しくないのです。この宇宙そのものが神の御神体だからです。私たちは今宇宙の中にいます。ということは、今神の体の中にいるということです。神しくない宇宙で、神の外におれるものなど有るわけ

がないのです。

ゆえに、

・私は神です。

・あなたは神です。

・万象万物は神です。

神は一樣です。一つの中に、二つも三つもあるわけではないのです。神の中には神しかないとは、そういうことなのです。

### ○神の思いの中に闇はない！

「神は光なり！」ですから、本来、神の中に闇などあるわけではないのです。ない闇をつくっているのは人間の心です。悩みは闇です。病は闇です。不幸は闇です。みな人間の迷い心が生み出した幻の闇です。幻の闇であるがゆえに、光を思い、光に生きれば、悩みも、病も、不幸も、消えてなくなるのです。

・神の思いの中には積極しかありません。

・神の思いの中には光しかありません。

・神の思いの中には完全しかありません。

積極の中には積極しかありません。光の中には光しかありません。完全の中には完全しかありません。人の迷いの心の中のみ、闇があり、消極があり、不完全があるのです。

そうです。消極は人の迷いが生み出したもの！ 闇は人の迷いが生み出したもの！ 不完全は人の迷いが生み出したもの！ 目覚めたら、そんなものはどこにもないのです。だから、何も恐れることはありません。幻がホンモノにたてつくことなどできないからです。どんなに幻が抵抗しても、所詮ホンモノには勝てないのです。

### ○神意識しかない！

この宇宙に、神の外何もないならば、神が何かを創造しようと思った場合、神自らが創造物になるしかないでしょう。自分しかない宇宙で、誰かに頼んで創造物になってもらうことなどできないからです。だとすれば、どんな創造物の中にも、必ず創造主である神が宿っていることになり、それは取りも直さず人間の中に神が宿っていることを意味します。

そうです。人間は神であります。

人間など、どこにもいないのです。人間がいないなら、人間意識があるわけがありません。あるのは神意識のみです。では、今、私と持っている意識は、神ではありませんか。意識は神しかないのですから、そうなりませんか。ということは、この宇宙に意識は一つしかないことになります。神は一樣しかないからです。意識が一つしかないなら、意識を持っている私は、神ではありませんか。

意識は神の代名詞です。神は意識であり、意識は神なのです。ですから、意識あるものは、すべて神であります。私が神なのは、意識を持っているからです。あなたが神なのは、意識を持っているからです。

## ○吾思えるがゆえに吾神なり

本当に有るもののみがもの思えるのです。もの思えるのは、絶対実在である証なのです。ならば、もの思える私は、本当に有るものではありませんか。すなわち、絶対実在の神ではありませんか。なぜなら、もの思えるのは神しくないからです。「吾思えるがゆえに吾神なり!」といえるのは、もの思えるのは神しくないからです。

そうです!

- ・有るもののみがもの思えるのです。
- ・有るもののみがもの語れるのです。
- ・有るもののみが事なし得るのです。
- ・有るもののみが瞬けるのです。
- ・有るもののみが脈打てるのです。
- ・有るもののみが息できるのです。
- ・有るもののみが愛せるのです。

有るもののみが永遠に保存し、有るもののみが永遠に記憶するのです。だから、神であるこの宇宙は、永遠の保存庫であり、永遠の記憶庫（アカシックレコード）なのであります。



## ○神はすべてを知りたもう

なぜ神は、すべてを知っているのでしょうか。それは、神はすべての全てだからです。あなたが何か考えごとをしているとき、あなたの中におられる神が考えごとをしているのです。その神は私の中にもいるわけですから、あなたの考えは私の考えとなり、一なる神の考えとなるのです。

神は到るところにいます。神のいないところはないのです。一柱の神がすべてのものの中にいるわけですから、あなたの考えは神の考えとなり、私の考えは神の考えとなるのです。その私の、あなたの、考えしていることを、神が知らないわけがないのです。

・私を知っているということは、神が知っているということです。

・あなたが知っているということは、神が知っているということです。

だから、己を知ったとき神を知ったことになり、神を知ったとき己を知ったことになるのです。己を知ったときすべてのものを知ることができるのは、すべてのものは神そのものであり、己そのものだからです。ゆえに、神には嘘がつけないし、己にも嘘がつけないのであります。

## ○神はこういいます

神はこういいます。

・偽物を通して本物を知りなさい！

・無常なるものを通して常在なるものを知りなさい！

・ 見える物を通して見えないモノを知りなさい！

・ ない物を通して有るものを知りなさい！

・ 影を通して光を知りなさい！

・ 人間を通して神を知りなさい！ と……。

また、神はこうもいます。

・ 悪を通して善を知りなさい！

・ 不完全を通して完全を知りなさい！

・ 不調和を通して愛を知りなさい！ と……。

そうです、

・ 偽りを知った者のみが、真実を知るのです。

・ ニセモノに気づいた者のみが、ホンモノに気づくのです。

・ 不幸の味を知った者のみが、幸せの味を知るのです。

・ 悪の苦みを知った者のみが、善の喜びを知るのです。

・ 個の気持ちの分った者のみが、全体の気持ちが分かるのです。

目覚めた者は、一なる世界から多なる世界を見つつ、多なる世界が一なるもので創られていることを観ておられます。したがって、何を見ても、一なるものには観えないのであります。つまり、一つ目になってい

るのであります。

### ○初めから神であった

万象万物は初めから神であった、といえるのは、神が万象万物に化身しても神には何ら変化はなく、依然として神そのものであり続けるからです。神は素材そのものですから、素材が万象万物に化身しても、その素材自身は、依然として神そのものであるはずです。だから万象万物は、初めから神だといえるのです。

どんなに古くても、途中で生まれたものは子孫と呼ばれ、すべて消えゆく存在です。生まれたものは必ず消える定めにあるからです。ゆえに、途中で生まれた人間は神にはなれないのです。もともと人間は神だから、神になれるのです。初めから神だから、神になれるのです。

ホンモノである神は、創れるものではありません。造れるものはニセモノ(幻)だけです。だから、造られた人間はニセモノ(幻)です。でもその人間の中に創れない神が宿っているのです。ニセモノの人間の中に、ホンモノである神が生きて働いているのです。だから人間は、初めから神だったのです。

人間が人間を生んだのなら、それは人間かもしれません。でも神が人間を生んだのですから、人間は神であるはず。原因が神で、結果が人間では理屈に合わないからです。だから私たちは、堂々と「私は神である！」と宣言すればいいのです。

### ○納得させるしかない！

・神は物質を造らなかつた。

・神は地を造らなかつた。

・神は人間を造らなかつた。

・神は一なるものしか創らなかつた。

人間の迷いの目が、霊と物質とを分け、天と地を分け、神と人間を分け、一を二に分けてしまったのです。すべてのものを一つとして見られるなら、人間と神の境目はなくなるでしょう。境目がないなら、どこからどこまでが人間で、どこからどこまでが神だとはいえなくなります。ならば、すべて人間といつてもいいし、すべて神だといつてもいいことになります。

この宇宙には神しくないのです。見える物、見えないモノ、形のある物形のないもの、すべて神です。だから私も神です。あなたも神です。それなのに、どうしてもそう思えない、認められない、納得できない難しさがあるのです。では、どうしたら納得させることができるのでしょうか。

それは、瞑想によつて、頑なに拒む自我の壁を打ち砕くことです。いくら頭で納得しても、心の底から納得できなければ駄目なのです。どのような理屈を並べても、どのような神秘を見せても、自分の心が納得できなくては神と思えないのです。だから、一にも、二にも、瞑想するしかありません。

#### (4) 神に生きる

##### ○神に生きる

神に生きるとは……。良きものの見方をし、良きものの考え方をし、良き言葉を使い、良き行いをし、常に「吾神なり！」の想いをもち続けることです。

神の中に不調和な思いは一切ありません。神の心には一点の曇りも、一つのシミもないのです。まだ自分の心の中にそのようなものがあるなら、私たちは神に生きているとはいえないのです。どうか、あなたの心の中を探して見てください。

・もし、すべてのものを分け隔てなく愛せる心があるなら、あなたは神に生きていることになります。

・もし、宇宙を自分の如く愛せる心があるなら、あなたは神に生きていることになります。

それは、本当の自分を知っているからできるのです。本当の自分を知って、本当の自分を愛しているからできるのです。

##### ○神しかない！

・ここに何かがあります。(本当は何もない)でも、外から見えないので何があるか分かりません。しかし、それは神です。なぜなら、神の外何もないからです。

・ガラス越しにリングが見えます。しかし、それは神です。なぜなら、神の外何もないからです。

・ガラス越しに人間が見えます。しかし、それは神です。なぜなら、神の外何もないからです。

何を見ようと見まいと、すべて神です。この宇宙に、神でないものは一つもないのです。したがって、何を質問されても、あなたは神以外の答えを出してはならないのです。

### ○神を宣言する

神一元の世界、これは絶対真理です。この宇宙には、神以外何も存在しないのです。ならば、人＝神ということになり、人間は存在しないことになります。なぜ存在しないか。神しかいないなら、人間は神であるはずだからです。そこに何かがある。「それは神である！」と、躊躇なくいえるのも、神しかいないからです。だから、私たちは、堂々と宣言したらいいいのです。「私は神である！」と……。神しかいないのですから当然です。

### ○私は神しか知らない！

もし、何か知っているものがありますか？ と質問されたら、あなたは何と答えますか。もし、これもあります！ あれもあります！ それもあります！ と答えるなら、あなたは何も知っていないことになりました。私は、神の外何も知りません！ と答えるなら、あなたは真実を知っていることになりました。

この宇宙には、神の外何もありません。ならばあなたは、神以外何も知ってはならないのではありませんか。多くの人は、私は、これも知っています！ あれも知っています！ と自慢げにいます。しかし、私からいわせれば、彼らは何も知らない人たちです。幻を見て何か有るという人たちは、何も知らない人たち

なのです。どうか、私は神以外何も知りません、といえる人になってください。

### ○神が生きて働いている

人は神から離れたことがないし、神は人から離れたことがないのです。神は常に人と共にいるのです。人は神なる本質で創られた、神の表現媒体だからです。

神なる本質は、

- ・知恵そのものです。
- ・力そのものです。
- ・光そのものです。
- ・愛そのものです。

宇宙には、この命の働きがあるだけです。人間などどこにもいないのです。人間がいなければ、人の御業などあるわけがありません。御業を成しているのは、すべて神です。

- ・今、仕事をしているのも神です。
- ・今、絵を描いているのも神です。
- ・今、ピアノを弾いているのも神です。
- ・今、踊っているのも神です。
- ・今、ボールを追いかけているのも神です。

・今、神を思っているのも神です。  
そうです。

・神が神を思っているのです。

・神が神を確かめているのです。

・神が神を理解しようとしているのです。

・神が神の自覚を求めているのです。

すべて、神がやっていることなのです。

### ○無心の中に神宿る

神の自覚を得た者の行いは、みな神の御業です。神の自覚を得た者の言葉は、みな神の御言葉です。神の自覚を得た者の奉仕は、みな神のご奉仕です。神の自覚を得た者の愛は、みな神の純愛です。ただし、神の自覚のない者であっても、無心でやっているときは神の御業に等しいのです。

・あなたは今、無心で仕事に打ち込んでいます。その姿はまさに神そのものです。

・あなたは今、無心でスポーツに打ち込んでいます。その姿はまさに神そのものです。

・あなたは今、無心でタクトを振っています。その姿はまさに神そのものです。

・あなたは今、無心で芸に打ち込んでいます。その姿はまさに神そのものです。

・あなたは今、無心で人を癒そうとしています。その姿はまさに神そのものです。



・あなたは今、無心で人助けをしようとしています。その姿はまさに神そのものです。

これまでの思い、これまでの考え、これまでの行いは、みな神の御業だったのです。なぜなら、もともとあなたは神だからです。初めから神だからです。そのまま神だからです。ただ、神と思えなかったから、正しい思いも、正しい考えも、正しい行いもできなかっただけです。でも、その思いも、考えも、行いも、神がやっていたことに違いはなかったのです。

今、あなたに必要なのは、

- ・ 純粹であること
- ・ 素直であること
- ・ 誠実であること
- ・ 無欲であること
- ・ 無心であること、です。

### ○ 恋い焦がれるほど神を想う

神に会いたいなら、常に神に意識を向けてください。私は神を意識しているが、神が現われたことがないという人は、神を想う時間が少なかったか、真剣に神を想っていないかどちらかです。（両方かもしれません）

どうでしょう。今まで神を忘れ生きていた者が、気まぐれに神を呼んだからといって、神が応えてくれる

と思いますか。神は常に、あなたのハートを叩いていたのですよ！でも、あなたは、振り向こうともしなかつた。そんな者が、気まぐれに神を呼んだところで、神が応えてくれるはずがないのです。

本当に神に会いたいなら、恋い焦がれるほど神を想ってください！恋い焦がれるほど親を呼んでいるのに、知らぬふりする親がいると思いますか。神とて同じです。恋い焦がれるほど神を想っているのに、知らぬふりする神がいるわけがないのです。あなたが今の奥さんと結婚できたのは、恋い焦がれるほど奥さんのことを想っていたからではありませんか。どうか、恋い焦がれるほど神を想ってください。神はきっとあなたの想いに応えてくれるでしょう。

### (5) 神の偉大さ！

#### ○神の偉大さ！

見えない神の偉大さは、見える物を通して立証できます。

ご覧なさい！

・美しい大自然！

・寸分も狂わない宇宙の運行！

・肉体の精緻な働き！

・粒子の見事な配列！

どれをとっても称賛に値します。

なかでも最も誇れるのは、人が神の自覚を得て、地上に「真・善・美」を具現したときでしょう。私たちはそのとき、神の偉大さに敬服することになるのです。この地上に「真・善・美」が輝けば輝くほど、私たちは神に頭を垂れることになるのです。

### ○神は光の糸を紡ぐ織物職人

神は、自ら放った光の糸を巧みに織り成し、この宇宙に様々な織物をお創りになりました。まさに神は偉大な織物職人です。人間はその技を受け継ぎ、地上に光(神)の世界を具現させねばなりません。そのため、すべてのものを光として認め、光として受け入れねばなりません。

「すべてのものを光(神)として認めたとき、すべてのものは事実上光(神)るものとなる」という覚者の言葉があります。光の織物を織るためには、影の糸(物質)を光の糸(神)として認めなければ使えないのです。なぜなら、認めなければ、いつまでも影の糸のままだからです。それでは光の世界は創造できません。

さあ、認めましょう。

・見える物、見えないモノ、みな光だと……。

・現れているもの現れていないもの、みな光だと……。

・私も光、あなたも光、万象万物みな光だと……。

光の糸とは、神の理念です。創造物の本質です。神そのものです。

### ○なぜ人間に言葉があるのか

なぜ人間に言葉があるのかといいますと、言葉を持たない神の代弁役を果たすためです。もし人間に言葉がなかったら、神は自分の思いを永久に呑み込んだままでいなくてはなりません。そうなれば、宇宙は「無・無……」のままです。宇宙に素晴らしい絵を描くためには、どうしても言葉が必要なのです。

言葉は創造の力です。宇宙の創造は、言葉によって行われているのです。「初めに言葉ありき、その言葉によって宇宙は成れり！」であります。その言葉を話せるのは、この宇宙において唯一、人間だけなのです。

人間の言葉は、紛れもない神の言葉なのです。私も、あなたも、神から遣わされた神の代弁代行者です。大いに言葉を使い、行動を起こし、神の代弁、代行役を果たしましょう。

### ○神と同じ能力を持つには？

たしかに人間は、神の代弁代行者であります。しかし、神の代弁代行者であるとはつきり自覚するまでは、神と同じ能力は使えないのです。人間は欲張りです。嫉妬します。嘘をつきます。怒ります。もし、自覚を持たない人間に神と同じ能力を与えたら、おそらく宇宙を破壊してしまうでしょう。だから神は、自覚に相応した力しか使えないよう、段階的制約を設けたのです。

神と同じ能力が欲しかったら、宇宙の仕組みをよく知ることです。宇宙の仕組みを知れば、何が危険で何が安全か、分かるようになります。そのとき神は、安心して段階的制約を解除してくれるでしょう。

## ○人間はとうに救われている

人間は、とうに救われているにもかかわらず、いまだに苦しみに呻いています。なぜでしょう。それは、自分のことを人間だと思っているからです。神であるにもかかわらず、人間と錯覚している私たち……すでに救われているにもかかわらず、救われていないと錯覚している私たち……なんと悲しいことでしょう。億万の富を持たされていながら、ゴミ箱をあさって生活している浮浪者のようなものです。

私たちは、同時に二つの信仰を持つことはできないのです。すなわち、神(光)にも生き、人間(闇)にも生きることはできないのです。どちらか一つを選ばねばなりません。しかし多くの人間は、人間を信じ人間に生きています。「人間」に生きるから、苦しむのです。「神」に生きれば苦しむことはないのです。こう思いませんか。

・すでに私は、自然の法則を超えた者である。

・すでに私は、天界に引き上げられた者である。

・すでに私は、光の世界に引き上げられた者である。と……。

神を想い神に生きましょう！ 光を想い光に生きましょう！ 時間あるごとに、神を、光を、瞑想しましょう。そうすれば、もうあなたの人生は約束されたも同然です。

## ○だから私は神です

宇宙は、対になって表現宇宙を演出しています。たとえば、陰と陽が対になって完全を演出しています。

女と男が対になって完全を演出しています。人と神とが対になって完全を演出しています。一方は不完全で一方は完全です。その不完全と完全とが支え合い、絶対完全を生み出しているのです。だから、不完全は完全なのです。

- ・ 悪の中に善が輝いています。……だから悪は善そのものです。
- ・ 闇の中に光が輝いています。……だから闇は光そのものです。
- ・ 物質の中に霊が輝いています。……だから物質は霊そのものです。
- ・ 元素の中にエネルギーが輝いています。……だから元素はエネルギーそのものです。
- ・ 私の中に本質が輝いています。……だから私は本質そのものです。
- ・ 私の中に神が輝いています。……だから私は神そのものです。

この宇宙のすべてのものは、相反するものが対となり、完全を演出しているのです。ゆえに、片方だけを見て判断してはならないのです。どうか両方を見て判断してください。そのように見られたら、もう不完全な物や悪なるものに脅かされることはないでしょう。

○神はえこひいきはしない！

喧嘩（戦争）に勝っても、得することは絶対ありません。人の目には勝ち負けがあるように見えても、神の目には勝ち負けはないからです。喧嘩すれば、必ず双方が痛い目に遭います。喧嘩両成敗が宇宙のしきたりです。平等を旨とする宇宙に、一方は結果が良く、一方は結果が悪い、ということはないのです。

そこには、平等な原因に基づいた平等な結果があるだけです。人間の目にその平等性が見えないから、勝った負けたといっているだけです。

我が国は神国だとか、我々は選民だとかいう人たちがおりますが、我が子をえこひいきする神がいると思いますか。どんな人も、どんな国も、みな神の子であり神の国なのですよ！もし、そこにえこひいきがあるとすれば、神の意に則した生き方をしているか、していないかの違いだと思います。

神は、我が子を平等に愛しております。決してえこひいきすることはありません。だから、我が国は神国だとも、選民だとも、いってはならないのです。ただし、人間の親がそうであるように、神もできそこないの子には目配りをするものです。でもその目配りは、人の目配りと違い、峻厳な愛を持って応える目配りです。つまり叱咤激励の意味を込めてふるう、愛のムチ(因果応報による目配り)による目配りです。決していじめめるためではありません。

### (6) 神の愛は完璧である

#### ○神の愛は完璧である

神の愛は完璧です。

だから何も思い煩うことはありません。すべて良き方向へ運んでくれます。

- ・どんな出来事も、すべて善しです。
- ・どんな苦しみも、すべて善しです。
- ・どんな悲しみも、すべて善しです。
- ・どんな人生も、すべて善しです。

神の愛を信じ、ひたすら今成すべきことを成しましょう！ そのように生きていけば、やがて目の前の霧が晴れ、今まで疑問に思っていたことが納得して受け入れられるようになるでしょう。そうか、自分を強くするための試練だったのか！ 魂を成長させるための厳しさだったのか！ と・・・そう思えたとき、あなたは感謝の思いで涙あふれることでしょう。

### ○神の愛に抱かれている私たち

神の愛の本性は、穏やか、安定、安寧、平安、平和、大調和です。どこかに愛の凹凸が生まれれば、即座に凸から凹に向かって愛のエネルギーが流れ、不バランスを解消しようとしみます。これが神の愛の仕組みです。宇宙が常に安定を保っていられるのは、この愛の仕組みがどこまでも行き届いているからです。まさに宇宙は、愛そのものなのです。

私たちは愛に支えられ、愛に励まされ、愛に揺り動かされ、次第に有るべき姿に収まっていくよう計られているのです。それはまさに、上下左右に揺り動かされ、有るべき型に収まっていくジグソーパズルに似ています。



・どんなに先が見えなくても、未来には希望の光が輝いているのです。

・どんなに闇が濃くとも、闇の向こうには夜明けが控えているのです。

だから私たちは、今与えられた環境で精いっぱい努力して待てばいいのです。そうすれば神は、間違いない私たちに行くべきところへ運んでくれるでしょう。さあ、神の愛を信じましょう。私たちは神の愛に抱かれている神の子なのですから……。

### ○有り難いことです！

蝶が嬉々として飛び回り、小鳥が憂いなくさえずり、子猫がところはばからずじゃれ合っていられるのは、神の愛を心から信じているからです。しかし人間は、いつも憂い、疑い、恐怖し、落ち着かない日々を過ごしております。これは神の愛を信じていないからです。

しかし、人間がどんなに神を疑いどんなに恐怖しようが、また、何を思い、何を行い、何を行い、その結果どんなことが起ころうが、すべて神の愛が消化し、最善へと運んでくれるのです。神の愛は完全へ向かって突き進む意思そのものだからです。

私たちは初めから神の懐の中にいたのです。いいえ、今もいるのです。私たちはいついかなるときも、神の愛に抱かれているのです。だから安心して生きてたらいいのです。

すべて善です。すべて善です。すべて善です。

有り難いことです。有り難いことです。有り難いことです。

「有り難う！」の言葉は、神の愛を心から信じられたとき出てくる言葉です。もう、有り難くて！ 有り難くて！ 仕方がないので。神の愛があまりにも、高く、深く、大き過ぎて、「有り難う！」の言葉しか出てこないのです。

### ○神の愛を信じよう！

今のあなたに苦しみがあるなら、それは必要だから与えてくれた神様からの贈り物だと考えてください。今のあなたにはその苦しみが必要なのです。だから決して神を恨んではなりません。神の愛を信じている者は決して恨みごとをいいません。神の愛を信じられない者が恨みごとをいうのです。

神の愛は完璧です。それは、後で振り返れば納得のゆくものばかりです。今のあなたの目には非情に写っているかもしれませんが、いつかその意味の深さに感謝できるときがくるでしょう。ですから神の愛を信じ、今できることを精いっぱいやって待つことです。そうすれば、必ず前途は開けてきます。そうはいつでも私は苦しい、といわれる人は、その苦しみが外から来ていると思っているからです。今あなたが背負っている苦しみは「貴方が」あなたに課した、あなたのお荷物です。だから、あなたが担がねばならないのです。担いだ分、必ず強くなれます。大きくなれます。

「貴方」とは、本当のあなたのことです。つまり、神様のことです。ですから心配いりません。きっとうまくゆきます。きっと成功します。神の愛を信じ待ちましょう。

### ○神は人を裁かず

神罰が当たるのではないかと恐怖する人がおりますが、神が人に罰を与えることはありません。神は人を裁かないからです。もし神が人を裁くなら、とうに私たちはこの世に存在していません。あなたは今日まで、いかほど悪いことをしてきたと思えますか。「いいえ、私は何も悪いことはしていません！」というなら、私はお訊きしたい、あなたは毎日どれほど多くの生き物を殺してきたかと……それはそれは、大変な数の生き物を殺してきたのですよ（鉱物も植物も動物もみな生き物です）。加えて、心の中で犯した罪を考えれば、あなたはきっと罪の重さに身震いするはずです。幸い、神は人を裁かないがゆえに、今、私たちは存在できているのです。

私たちが苦しんでいるのは、みな自己処罰です。罪を犯した自分が自分を裁き、自分を罰しているのです。神罰を恐れてはなりません。恐れるなら、自分の思いと行為を恐れてください。

### (7)すべてに神を観る

#### ○たった一つの真実、それは神！

世の中には、真実を知りたいという人は大勢おりますが、真実が何なのか教える人はほとんどいません。それは、自分が何なのか知らないからです。自分を知らなければ、真実が分るはずがないのです。なぜなら、

自分そのものが真実だからです。この宇宙には、たった一つの真実があるだけです。それは、すべてが自分であるという真実です。

ならば、

・私は神ではありませんか。

・あなたは神ではありませんか。

・万象万物は神ではありませんか。

なぜなら、

・真実は一つしかないからです。

・神は一つしかないからです。

・私は一つしかないからです。

たった一つの真実である神が、私であり、あなたであり、万象万物なのです。

この宇宙には、一つのものしかないのです。その一つのもので、すべての物を創っているのです。その一つしかないものを神と呼び、真実と呼んでいるだけです。ならば、たった一つしかない神によって創られた私たちが真実なのは、当然ではありませんか。

○神を素直に認めよう！

どんなものにも親がいるなら、神を創られた親はいったい誰なのでしょう？ と質問する人がおります。

しかし、それは愚問というものです。神は初めなき始めより存在していたからです。もし神に親がいるなら、その親を生んだ親を探さねばなりません。またその親を生んだ親も探さねばなりません。そうなると、永久に神の親を探し続けなければなりません。原因なき原因が神ですから、神に親がいるはずがないのです。私たちはただ、素直に神を認めたらいいだけです。なぜなら、私が神だからです。あなたが神だからです。すべてが神だからです。

神は初めなき始めから存在していたのです。初めがないということは、終わりがないということです。終わりがないということは、初めがないということです。つまり、永遠であるということです。もし神に初めと終わりがあるなら、神は永遠でも完全でもなくなってしまうです。そんな神がいるわけがありません。

造られた人間が、創り主の誕生について詮索する必要などないのです。ただ神を素直に認めたらいいだけです。それでも神の親を探したければ、ご自分に訊いてください。あなた自身が神なのですから、答えられるはずですよ。

### ○神のみぞ知る！

神のみぞ知る、とは、神だけが知っているという意味ではありません。神の外に何も知りません！ という意味です。この宇宙には神しか存在しないからです。神しか存在しないなら、どうして神以外のものを知り得ましようか。だから、あなたの知っているものは何ですかと問われたら、神の外何も知りませんと答えねばならないのです。

もし神以外のものを知っているなら、あなたは迷妄を描いていることになります。迷妄を描いている者が、何を知ろうというのですか。神を知らない者が、何を知ろうというのですか。すべてのものが神だから、あなたはすべてのものを知ることができるのです。

この宇宙には、神のみが独存するのです。その神を知らなくては、何も知ることができないのです。すべてが神だから、私たちはすべてを知ることができるのです。どうかこの意味の深さを知ってください。

○神は言葉なりき、言葉は神なりき！

この宇宙で確かなことは、実際に有るもののみが語れることです。実際に有るのは神ですから、言葉を持つ人間は実際に有るもの、すなわち「神」であります。

あなたは先ほど、友達と語り合いましたね。本当に友達と語り合ったのでしょうか。いいえ、本当は神と語り合ったのです。神であるあなたが、神である友達と語り合ったのです。人間は、神が話しているのに、人間が話していると勘違いしているのです。これは神に対する冒瀆です。これでは神様から「あなたは言葉を盗んでいますよ！」といわれても仕方がありません。

また、あなたは先ほど、自分のことを人間だといいましたね！これも神に対する冒瀆です。これでは神様から「あなたは嘘をついていますよ！」といわれても仕方ありません。どうか、盗まない！嘘をつかない！自分になってください。

○神は自らを助くる者を助く

眞実の扉を閉ざしているのは誰でもない、自分自身です。なぜなら、自分で自分のことを人間だと思わせているからです。神が人間だと思わせているなら、神の力を借りねばなりません。思わせているのは自分自身ですから、自分の力で扉を開くしかありません。「神は自らを助くる者を助く」とは、自分で閉ざした眞実の扉は、自分で開きなさいという意味です。

この世には、他力信仰者がごまんとおりますが、彼らは自分で目隠ししながら、誰かに目隠しを取ってもらおうとしているのです。これでは、いつまでたっても目明きになることはできません。この世に救い主がいるとすれば、自分自身です。自分が唯一の救い主です。決して人を頼ってはなりません。宗教を頼ってもなりません。

さあ、人間という思いを自分で捨て、自分で神だと思えるようになりましょう。

○何を見ても神！

何を見ても神！ 何を感じても神！ 前を向いても神！ 後ろを向いても神！ 横を向いても神！ 下を向いても神！ 上を向いても神 「神、神、神、神」……神あるのみです。

もし、何か知っているものがありますかと質問されたら、私は躊躇なく、神以外何も知りません、と答えるでしょう。なぜなら、すべての全てが神だからです。花一輪の中にも、砂一粒の中にも、あなたの中にも、私の中にも、神はおられるのです。すべてが神だから、私は神以外知る必要もなければ、知ろうともしない

のです。

・私は神を吸い、神を吐き出しています。

・私は神を食べ、神を排泄しています。

私の表現は神の表現、神の表現は私の表現です。

・笑って神の表現です。

・唄って神の表現です。

・踊って神の表現です。

### ○神と人とは瓜二つ

神と人とは瓜二つです。姿形が瓜二つとっているわけではありません。能力において、機能性において、本性において、瓜二つとっているのです。すなわち、知恵と、力と、光と、愛において瓜二つだといっているのです。ゆえに、神に生きたら、私たちは幸せになれるのです。しかし、人間は自由意志を悪用し、この地上界に様々な悪しきものをつくってしまいました。これは、人間が神であることを知らない、無知ゆえの罪です。

・戦争もそうです。

・病気もそうです。

・事件も事故もそうです。



・自然災害もそうです。

神は、人間に自由意志という特権を与えておりますが、良心や理性も与えているのです。その二つをバランス良く使い、この地球上に間違いない表現をすることが、人間に課せられた使命なのであります。

○神は見えないモノにして見える物

天使とて神を見たことがないといわれるように、神を見ることは誰もできません。神には姿形がないからです。「その子を見たとき神を見た」のです。その子とは私です。あなたです。万象万物です。だから、私は神です。あなたは神です。万象万物は神です。なのに、人間は、自分を神だと思っていないのです。これは神に対して失礼です。

花一輪の中にも、砂粒一個の中にも、虫一匹の中にも、神を観てください。土の中にも、水の中にも、火の中にも、空気の中にも、神を観てください。神は到るところにおられるのですから……。神を決して神秘化してはなりません。といって、軽んじてもなりません。神は全てのですべて、有りてあるものです。

ゆえに、あらゆるものを愛してください。あらゆるものを慈しんでください！

・見える物、見えないモノ、すべて神なのですから……。

・醜いもの美しいもの、すべて神なのですから……。

・あなたも私も、すべて神なのですから……。

( 8 ) 神は完全なり

○神の目にはすべてが完全に見える

もし、あなたが不完全や悪を信じているなら、神は「私はあなたを知りません！」といわれるでしょう。なぜなら、神は不完全も悪も創らなかつたからであります。不完全や悪は、不完全や悪を知っている者のみにあるのであって、知らない者にはないのです。その証に、悪を知らない赤ちゃんは、泥棒を見ても笑っているでしょう。これは、自分を汚さずして相手を汚すことはできないという、真理の真髄を突いているところなのです。自分が汚れているから、相手が汚れて見えるのです。自分が清ければ、汚れなど見えるわけがないのです

赤子のようにになりなさいとは、

- ・疑いのない目で見なさい！
  - ・曇りのない目で見なさい！
  - ・すべてに良きものを見なさい！
- という意味なのです。

○神は不必要なものは創らなかつた

神は不必要なものを、何一つお創りになりませんでした。また、不完全なものも、何一つお創りになりま

せんでした。

・あなたは今朝家で、蚊に刺されました。

・あなたは今朝電車の中で、財布をすられました。

どちらも、あなたにとっては災難です。ですが、神様が不必要なものをお創りになっていないなら、それは必要だから起きた災難だと思わなくてはなりません。事実あなたは、その災難から沢山のことを学んだのですから……。すべて必然です。もしその体験が不必要なものなら、神は完全でなくなりません。

私は駄目な人間だから、死んだ方がましだといって自殺する人がおりますが、神は駄目な人間など一人もお創りになっていません。もしその人が不必要なら、神はその人を誕生させなかつたはずです。もし、蚊やスリが不必要なら、神は蚊やスリをお創りにならなかつたはずです。

なぜ神は、ヨボヨボになってまで人を生かしていると思いますか。まだその人が必要だからではありませんか。神が必要のない人を生かしておくはずがないのです。もし人の誕生が偶然なら、神は完全でなくならず。もし人の死が偶然なら、神は完全でなくならず。もし事件や事故や災害が偶然なら、神は完全でなくならず。どんな出来事も、必要だから起きているのです。

このように考えてください。今あなたの身の周りに何か問題が起こっているとしたら、それは、必要だから与えられた神からのメッセージだと思ってください。そのメッセージに応えれば、問題は起きなくなりません。課題を克服し終わり、学ぶ必要がなくなったからです。

どうして苦しみから抜け出せないのだと嘆く人がおりますが、それはまだメッセージに応えていないからです。課題を克服していないから苦しみがなくならないのです。誤解しては困りますので言い添えますが、神が苦しみを与えているわけではありません。神なる自分が、自分に苦しみを与えているのです。気づかせるために……目覚めさせるために……。

**どのような出来事にも必ず意味がある！** と思つて生きる者の成長は竹林のごとし……。

○神は完全なりき！

神は完全であるといいながら、なぜこの世に沢山の不完全があるのでしょうか、と、人は神に問いかけます。

「えっ！ どこに不完全があるのですか」神は問い返します。

病や、飢餓や、戦争など、沢山の不幸があるじゃないですか。と、人は詰め寄ります。

「あなたがいつている不幸は、決して不幸ではないのですよ！」と、神は静かにいいます。

なぜ、苦しみや悲しみが不幸でないのですか、と、人は語調を強めて迫ります。

「幸せは幸せの中にはないのですよ！ 完全は完全の中にはないのですよ！ 光の中に光はないのですよ！ このように考えてください。光しか知らない者は、光の中にも光の中にいると思えないのです。幸せの中に浸り切りの者は、幸せの中にも幸せだと思えないのです。幸せだと思えない、幸せだと思わない、こんな不幸なことがあるでしょうか。砂糖の味しか知らない者が、『甘いものが欲しい！』と駄々をこねて

いるようなものです。これは悲しいことです。不完全は、完全たらしめるスパイスのようなものです。そのスパイスを不完全というでしょうか」

でも、やはり、苦しみや悲しみは体験したくありません。人は首をうなだれいます。

「苦しみや悲しみを知らない者は、どんなに幸せでも幸せだと感じないものです。よろしいですか。辛味を知って甘味を知るのですよ！ 苦しみを知って喜びを知るのですよ！ 悪を知って善を知るのですよ！ だから悪は悪ではないし、不完全は不完全ではないのです」

では、苦しみや悲しみは必要悪だといわれるのですか。

「そうですね。苦しみや悲しみがどのようなもので、なぜ必要なか知らない者には、不完全は不完全に見えるし、嫌なものは嫌なものに見えるのです。ですが、苦しみや悲しみの正体を知った者は、不完全も嫌なものも、必要不可欠なものとして受け入れられるようになります。火の扱い方を知らない者は、火は脅威です。しかし、知った者には火は脅威ではなく、むしろなくてはならないものになります。不完全の必要性を知った者は、不完全はもはや不完全ではなく、むしろなくてはならないものになります。私たちがこの相対界に出てくる理由は、相対的体験を通して不完全や悪の正体を知るためなのです」

○あなたが神でなかったら、あなたは今いない！

あなたが神でなかったら、今あなたはいないのですよ！ なぜなら、神はすべての全て在りて有るものだからです。神がいるということは、あなたがいるということです。あなたがいるということは、神がいると

いうことです。

もし「これが神だ！ あれが神だ！」と限定してしまえば、もうそれは神ではありません。なぜなら、今もいったように神は、すべての全てだからです。ゆえに、私もあなたも神です。砂一粒も、虫一匹も、山も、海も、地球も、大宇宙も、神です。ということは、砂一粒は私であり、あなたではありませんか。虫一匹は私であり、あなたではありませんか。山も、海も、地球も、大宇宙も、私であり、あなたではありませんか。

・ツバを吐いたその先にも、神が、私が、あなたがいますのです。

・鉄砲を撃ったその先にも、神が、私が、あなたがいますのです。

・罵声を浴びせたその先にも、神が、私が、あなたがいますのです。

だから、決してツバを吐いたり、鉄砲を撃ったり、罵声を浴びせたりしてはならないのです。もしそのようなことをすれば、神を、私を、あなたを、汚し、殺し、いたぶることになるからです。

### ○一つの神があるだけ

宇宙には、たった一つの真実があるのみです。それは、すべてが神であるという真実です。

ならば、

・私は神ではありませんか。

・あなたは神ではありませんか。

・見える物見えないモノ、すべては神ではありませんか。

・美しいもの醜いもの、みな神ではありませんか。

すべてが神だと知ったら、誰を蔑み、誰を罵倒し、誰を憎めるでしょうか……。

私たちは今から神になるのではないのです。私たちは初めから神だったし、今も神だし、未来永劫神なのです。神になるもならないもありません。私たちは、そのままにして、そのままにして、神なのです。あなたがどんなに違うといい張っても、この既成事実は絶対曲げられないのです。ですから、神になる努力は必要ないのです。必要なのは、神と思えるようになることだけです。

繰り返し返します。

浮浪者も神です。やくざも神です。酔っぱらいも神です。暴走族も神です。黒人も、白人も、みな神です。全人類みな神です。どんな生き物もみな神です。そう思えば、何を見てもみな愛おしく思えるでしょう。

**汝自身を知れ！ さすれば神と対面できるであろう。なぜなら、汝自身が神だからである。**

○あなたが神でなかったら、いったいあなたは何なの？

この宇宙には、たった一つの真実があるだけです。それは全てが神であるという真実です。

ならば、

・あなたは神ではありませんか。

・私は神ではありませんか。

・万象万物は神ではありませんか。

・ あなたの髪の毛に絡んでくる一本のクモの糸も、やさしく頬を撫でるそよ風も、神ではありませんか。  
・ あなたの目を楽しませてくれる、蝶も、花も、虹も、海も、山も、星も、みな神ではありませんか。  
もしそうでなかったら、すべてが神であるという真実は崩れ、宇宙は消滅しなくてはなりません。しかし、今、現に宇宙が存在しているわけですから、あなたも、私も、万象万物も、みな神だという証になるのです。この真実を、誰が崩せましょうか。このようにいっても、まだあなたは疑うのですか。もしあなたが神でなかったら、いったいあなたは何なのか？ と私は訊きたい！ あなたが神だから、思い、考え、語り、慈しみ、愛することができるとは、さあ、私は神である、と、堂々と宣言しましょう。

・ 神が神を想うのです。

・ 神が神を慈しむのです。

・ 神が神を愛するのです。

どうかこの宇宙の理を信じてください。

### ○神の愛は完全なり！

神の愛はなぜ完全なのでしょう。それは、どんな苦しみの中にも、どんな悲しみの中にも、神の愛が宿り、完全を表現しているからです。もし、苦しみや悲しみが無駄で終わるならば、神は完全でなくなり、宇宙は消滅してしまわなくてはなりません。そんな無能な神がおられるわけがありません。私が胸を張って神



の愛は完全なりといえるのは、神のなされることに一つも無駄はないからです。

・ 神の愛は、どんな痛みの中にも息づいています。

・ 神の愛は、どんな苦しみの中にも息づいています。

・ 神の愛は、どんな悲しみの中にも息づいています。

・ 神の愛は、どんな嫌な出来事の中にも息づいています。

それが神の愛の証であり、私たちが希望を持って生きられる根拠です。どうか、神の愛の完全性を信じてください。今の苦しみや悲しみが、いつかきつと幸せとなって返ってくることを信じてください。

「吾神なり！」 「吾神なり！」 「吾神なり！」

この言葉の中に私の思いを込めました。私が実感した神の香りを、どうぞあなたも味わってください。



# 第四章

## 眞実はひとつ

世の中には、非眞実を知ろうとしている人はたくさんおりますが、眞実を知ろうとしてい  
る人はわずかしかおりません。ほとんどの人が、眞実を知らぬまま一生を終えているのです。  
これでは何のために生まれてきたのか分かりません。

さあ、せつかくの人生を無駄にしないためにも、眞実を知ろうではありませんか。それは  
自分のためだけではない、人類のため、地球のため、いや宇宙のためなのですから……。

## (1) 宇宙の法と宗教

### ○代理贖罪だいりしよんざいについて

キリスト教では、イエス様が、人類のすべての罪を背負って十字架にかかったと教えています。また、イエス様は神の一人子であるとも教えています。いずれも、イエス様を神秘化するためにつくり上げた話です。どうして他人の罪をイエス様が肩代わりすることができるのでしょうか。また、同じ手順を踏んで生まれた人間なのに、どうしてイエス様だけが神の子で、私たちは人間の子なのでしょうか。人間の子ならまだしも、キリスト教では罪の子と教えているのですよ！ おかしいとは思いませんか。

この宇宙には「因果応報」「作用と反作用」「自分が蒔いた種は自分が刈り取らねばならない！」という法則が厳然と存在し、その法の下に、すべての生き物が平等に生かされております。この法則は宇宙を支えている絶対的法則ですから、いかなる者も曲げるわけにはゆきません。

なのにどうして、他人が蒔いた種をイエス様が刈り取ることができるのでしょうか。池に石を投げ入れたら、投げ入れた人のところに波は返ってくるのですよ！ 投げ入れてもないイエス様のところに、どうして波が返ってくるのでしょうか。もし、イエス様が人類の罪を背負って磔にかかったのなら、なぜ人類は、今もって多くの罪に喘いでいるのでしょうか。

もし代理贖罪が可能なら、人間に自由意思が与えられることはなかったでしょう。自由意思で悪いことをしておきながら他人が罪をかぶってくれるなら、自由意思を与えた意味がなくなるからです。また、そんな無秩序がまかり通るなら、この宇宙は一瞬の存在も許されなはずだからです。

イエス様が身を犠牲にして磔にかかった理由は、二つありました。一つは神に対する信仰心の深さを示すため、もう一つは、原因をつくれれば必ず結果がやってくるという「因果の法則」の確かさを示すためでした。イエス様は、手や足に釘を打たれようが、槍で突き刺されようが、最後まで神への信仰心を捨てようとしませんでした。身を消すこともできたイエス様が、わざわざ磔にかかったのは、どんなにひどい目にあわされても神を否定してはならないという、信仰心の深さを人類に見せるためだったのです。それができたのは、いついかなる状態に置かれようと、神は決して私たちを見捨てない！ 神は必ず良きようにしてくれるという、神の愛の完全性を心から信じていたからです。

神は完全です。その完全なる神が、理由なく人間を苦しめるわけがないのです。苦しむには、苦しむだけの理由がちゃんとあるのです。その理由が分かれば、私たちは大きく成長できるのです。苦しみは悪いことではない、とイエス様が常々いっておられたのは、苦しまなければ人は成長できないからです。そのことが信じられたら、もう何の憂いも、何の恐れも、何の心配もなくなりませう。傷ついても善し、病んでも善し、老いても善し、死んでも善しと、この身を神に委ねることができるのです。それをイエス様は、我が身を犠牲にして教えてくれたのです。

イエス様は、あえていい逃れをせず(自ら磔になる原因をつくり)磔にかかったわけですが、その理由は、どんな偉大な覚者であっても、原因をつくればこのような結果を招きますよ、ということ人類に教えたかったからです。ところが、キリスト教はそれを代理贖罪にすり替え、イエス様が一番伝えたかったことを闇に葬ってしまったのです。

この事実を知ったとき、私は身震いしました。これでは、イエス様の死は無駄死にはないかと……。もし、イエス様の教えが正しく伝えられていたら、今のような地球にはなっていないかと思えます。

知花先生も手や足に怪我をしたことがありましたが、それは「どんな覚者も、注意を怠り法則を犯せば、このような結果を招くのですよ!」ということを私たちに教えたかったからです。私たちは、イエス様や知花先生の実証実験(因果の法則)の確かさを見せられたのですから、もうそのような真似をする必要はないのです。私たちは、イエス様の犠牲を無駄にしないためにも、法を守ることです。

神を信ずるとは、「宇宙の法を信じ、守ることです」。人類が法を犯さなくなったら、十字架にかかったイエス様の犠牲も報われると思います。

### ○原因と結果の法則は神のご慈悲である

火のない所に煙は立たぬといわれるように、原因のないところに結果は生まれません。事の起こりの背後には、必ず原因があるのです。だから私たちは、結果を見て原因を修正することができるわけです。この宇宙が原因と結果によって支えられているのは、結果を見て原因を探り、過ちを正すことができるからです。

人間は、頭を叩かれなくては、過ちに気づかないのです。結果が苦しくなければ、原因を追究しようと思わないのです。そのために、この世には様々な苦しみや悲しみが用意されているのです。しかし、これは神のお慈悲であって、決して私たちをいじめるためではありません。神は私たちに気づいてもらいたいのです。悔い改めてもらいたいのです。

たとえば、今日あなたに災難が降ってきたとします。その時あなたは腹を立てて人のせいにするのか。それとも自分の中に原因を探そうとするのか。もし前者なら、あなたは再び同じ痛い目に会うでしょう。後者なら、もうそのような痛い目に会うことはないでしょう。さあ、あなたはどちらでしょうか。

### ○原因と結果の法則を検証しよう！

因果関係を確かめる方法はありません。因果の絡みつきは途方もなく深遠で、掴みどころのないものだからです。だから、人間は因果の法則を無視しようとするのでしようが、それではいつまでたっても苦しみが逃れることはできません。人間がどう思おうが、因果の法則に齟齬はないのです。

「だから因果の法則を信じなさい！」といったのでは身も蓋もありませんので、私は一つの提案をしたいと思います。それは、因果の法則を科学的に検証することです。科学的検証とは、統計を取ることです。このような原因に対してこのような結果が生まれるという統計を数百年間に渡って取り、因果関係の正しさを立証するのです。百パーセントまでとはいかなくても、私たちの理性を納得させるだけの数字は掴めるはず。そして、もし立証されたら、理屈をいわず素直に従うことです。



人類はこれまで、このような統計を取ったことも検証したこともありません。やりもしないで因果の法則を無視するなど、万物の霊長のやる所業ではありません。ぜひ国を挙げて、いや世界を挙げて取り組んでほしいと思います。立証できたら、法則に逆らう者は一人もいなくなるでしょうから、黙っていても世界は平和になるでしょう。軍備を増強し平和を維持するより、この方がどれほど確実な平和を手にすることができるか……人類はもうそろそろ気づいて良いころです。

### ○四苦は灯台の明かりのようなもの

人生には、生・老・病・死という四つの苦しみがあります。私たちはその四苦を忌み嫌いますが、もし四苦がなかったら、私たちは道を外さず歩むことができるでしょうか。四苦は迷子にならないために用意された、灯台の明かりのようなものです。もしこの明かりがなかったら、私たちはおそらく迷子になってしまうでしょう。また、四苦は目覚まし時計のようなものです。苦しいから、痛いから、目覚めるのです。ただし、その苦しみは誰が与えたのでもなく、因果の法則を犯した自分が与えたのです。

神は夜道をさ迷わないよう、私たちに生・老・病・死という四つの明かりを用意してくれました。今は明かりの意味が分からないかもしれませんが、いつかその意味の有り難さに感謝できる日がくるでしょう。私はその感謝した一人です。この年になって明かりの意味を知ると同時に、神の愛の深さも知ったのです。その有り難さは、言葉でいい尽くすことはできません。ただただ、「ありがとう！」と神に頭を垂れるだけです。

### ○原因と結果の法則が宇宙の完全性を支えている

宇宙の完全性は、原因と結果は必ず一致するという因果の法則が支えています。今、宇宙が存在できているのは、その証といつていいでしょう。もし原因と結果が一致しないなら、宇宙はとうに滅びていたはずで

す。

この宇宙は、絶対宇宙と相対宇宙の対によって成り立っています。絶対宇宙は原因の世界で、相対宇宙は結果の世界です。相対宇宙で起きている出来事は、すべて絶対宇宙でつくられた結果なのです。いい換えれば、結果世界である相対宇宙は、原因世界である絶対宇宙の光によって生み出された影（結果）で、真実ではないのです。私たちは真実でない影（結果）に翻弄され、様々な苦しみをつくっているのです。

この光（原因）と影（結果）の関係は、想念と行為の関係に置換えることができます。私たちの想念行為は絶対宇宙に属し、肉体行為は相対宇宙に属するのです。原因である想念行為は見えませんが、結果である肉体行為は見えます。その見えない想念がはじめに動き、後に肉体行為がついてくるのです。事の起りの背後にあるのは、すべて想念であるということです。だから、心（原因）のあり方が大切になってくるのです。このことを前提に、この世の出来事を考えてみましょう。

スポーツにおいて結果が重視されるのは、原因の良し悪しが、勝敗という形で私たちの目にはっきりと見えるからです。結果が良いということは「心・技・体」において相手を上回る原因をつくっていたということであり、それは努力のたまものです。スポーツはこの因果関係がはっきり見えるため、原因が修正しやす

く、リベンジも適うわけです。

経済面においても、裕福な人は一生懸命働いた結果であり、貧乏人は怠けて働かなかった結果です。働かざる者食うべからずの諺は、悪しき原因をつくった者は悪しき結果に甘んじなさい！ という誠めの言葉なのです。「私は働きたいけれど、どこも雇ってくれない！」と言いわけをする人がおりますが、それは仕事を選んでいるからです。人の嫌がる仕事ならいくらでもあるのです。

病気になるのも、偏った生き方をした結果であって、誰のせいでもありません。要するに、健康な人は健康になる原因をつくった結果であり、不健康な人は不健康になる原因をつくった結果であって、偶然になっただけではないということです。

自然災害は、一見止むを得ぬ不幸のように見えますが、これとて、人類の不調和な集合意識が生み出した必然的結果であって、偶然に起きたわけではありません。だから、不幸を全員で平等に分け合ねばならないのです。不幸を全員で平等に分け合ねばならない、という意味は、一人一人応分の原因に見合った結果を、一人一人応分に受け取らねばならないという意味です。だから、同じ自然災害にあっても、被害の多い人と少ない人が出てくるわけです。

人類の不幸は、自ら不幸の種（原因）を撒きながら、それに気づかない無知がもたらしているのです。不幸は、因果の法則を犯さなければ起きないのです。このことに気づいてください。

## ○原因と結果は循環している

禍福はあざなえる縄のごとしという諺がありますが、これは、因果の法則の循環を通して進化してゆく様子を語ったものです。人間は過ちを犯します。そして苦しみます。でもその苦しみから学び、生き方を正すようになります。そうなると幸せがやってきます。しかし、人間は増長し、再び過ちを犯します。そして苦しみます。再びその過ちから学び、生き方を正すようになります。すると、また幸せがやってきます。このようにして、不幸と幸せの間を行き来しながら成長してゆく姿を「あざなえる縄」のようだといっているわけです。

この宇宙は、悪が勝つようにはできておりません。また善が勝つようにもできておりません。善悪の消却を通し、完全な善に向かって進化してゆく営みがあるだけです。善悪の消却とは、原因と結果の循環のことを指しており、この循環の営みがあればこそ、表現宇宙はより完全に向かって進化してゆくことができるのです。

## ○原因と結果の悪循環

人間には五官という感覚器官があるため、心はどうしても痛みや苦しみのダメージを受けます。一旦痛みや苦しみが現象化されると、ますます気が（心が）落ち込みますので、痛みや苦しみは増大します。これが原因と結果の（心と現象の）悪循環といわれるもので、こうなると病気が主導権を握るようになり、あなたも病気が先に有ったかのような錯覚を与えてしまうのです。

持病とか慢性病といわれる疾患は、心が長期間ダメージを受け、思い癖がついた状態なのです。体の病気が心まで病気にしてしまうわけです。こうなると、原因と結果が逆転してしまい、先に現象（結果）をなくす必要が出てくるのです。つまり、心が新たな原因をつくり出さないよう、薬や手術によって結果（痛みや苦しみ）を摘み取る必要が出てくるのです。

（原因と結果の悪循環）

心の歪み（原因）が、↓↓↓痛みや苦しみ（病気という結果）を生み

痛みや苦しみ（病気という結果）が、↓↓↓心に新たな歪み（原因）をつくる

私が現代医学を否定しないのは、心と現象の関係があまりにも複雑なため、痛みや苦しみを先に取る物理的な療法が必要だからです。ですが、本末転倒だけはしないでください。どんなに病気が主導権を握っても、あくまでも病気の主原因は心ですから、心の管理だけは忘れないでください。

○決して報復してはならない！

「主よ！ 主よ！」と、神の名を語り殺し合っている者がおります。

「ジハードだ！ 聖戦だ！」と叫びながら、ロケット弾を打ち合っている者がおります。

「神は偉大なり！」と叫びながら、自爆テロを起こしている者がおります。

そんな姿を見て、神様がお喜びになると思えますか。あなたのお父さんやお母さんが、我が子が喧嘩し合っている姿を見て喜ぶと思いますか。お父さんやお母さんが、仲良くすることを願っているように、神様も

仲良くすることを願っているのです。

旧約聖書にも謳われているではありませんか。「目には目を、齒には齒を」と……。やられたらやり返さない、とっているのではありません。自分が受けた同じ苦しみを、人に与えてはならないとっているのです。イエス様だつていっているではありませんか。「右の頬を打たれたら左の頬を出しなさい」と……。どんなことをされても許しなさい！ 決して報復してはなりませんよ、とイエス様はいつているのです。

暴力で物事が解決したことなど、ただの一度もありません。鬭争はどこまでも鬭争です。相手を痛めつけることは己を痛めつけることである！ という因果の法則を思い出してください。

### ○ただ信じなさいでは人を変えることはできない

どの宗教も、ただ信じなさいというだけで、人を変えようとしません。人を変えない宗教は、ホンモノの宗教とはいえないのです。難しい文言を暗記させたり、唱和させたりする教会で、どうして人を変えられましょうか。増長マンをつくるだけです。

お釈迦様もイエス様も、子供にも分かるやさしい説き方をしたのですよ。それを今のような難しい学問宗教にしたのは、自分たちの地位を守ろうとする坊さんたちや、牧師さんたちではありませんか。だから私は、そのような難しい經典で固めた宗教を否定するのです。宗教大学を出た人は悟った人なのですか。難しい經典を学んだ人は悟った人なのですか。宗教は学問ではないのです。知識ではないのです。お釈迦様もイエス様も、どこの学校も出ていないし、誰にも教わっていないのです。

また、儀式で固めた宗教も正しい宗教とはいえません。今の宗教家のほとんどは、儀式と祭事の上にあぐらかいて生活している職業人です。職業化している宗教で、どうして人を救え（変えられ）ましようか。

人を救いたいなら、まず自分が救われていなければなりません。自分が救われてもいないのに、人を救おうなど傲慢というものです。人に説教できる人は、自分が救われている人です。自分を救った人のみが人に説教でき、人を変え、人を救うことができます。まずは自分からです。

### ○信仰の深さは理解力の深さ

真の宗教は、宇宙の仕組み（法則）を深く理解させるものでなくてはなりません。また、真の宗教は、本当の自分が何なのか自覚させるものでなくてはなりません。だから、信仰の深さとは、理解力の深さや自覚の深さのことをいうのです。お経を読んだり、手を合わせたり、儀式をしたり、そんなことをしても何の意味もありません。宗教は、一人一人の意識の問題なのです。

さらに、真の宗教は、他力による大乘仏教ではなく、自力による小乗仏教でなくてはなりません。自分は何もしなくても、同じ船（同じ宗教）に乗っていたら彼岸に連れて行ってくれる、というような甘いものではないのです。あくまでも自分の足で歩き、彼岸に到達すべきものです。

不思議なもので、宗教に入り同じ仲間になると、なんとなく安心感を生むものです。「みんなで渡れば怖くない」といった集団心理が働くからでしょうが、その仲間意識が、異教徒を排斥するようになるのです。これが宗教戦争の始まりです。ナシヨナリズムが恐ろしいのは、同じような心理状態が働くからです。だか

ら、ホンモノの覚者は、決して会や宗教団体をつくらないのです。会や宗教に入らなくては悟れないということは、絶対ありません。悟りは自分の心（意識状態）の中の出来事だからです。眞実は外側にあるのではなく、自分の心の中にあることを知ってください。

**広い意味では、一人の悟りは全体の進化を押し上げることになるので、小乗仏教は大乗仏教でもある。**

### ○確信が人を変える

生長の家という宗教団体がありますが、その経典を読んで病が癒された人がおります。なぜそのようなことが起きるかといいますと、もともと私たちは何にも冒されない生命だからです。その経典に書かれてある文言は、一時的に生命の自覚を高める働きをしたのです。経典が病を癒したのではなく、経典を読み、一時的に生命の自覚を持った本人が病気を退散させたのです。

このように、生命の確信が深まれば、肉体的な変化が起きてくるのです。ただし、この確信も、揺らげば人間に戻ってしまいますので、病気は再発します。一時そのような意識状態になっただけで、魂が目覚めたわけではありませんから、一時的な現象で終わってしまうのです。

心の底から生命の自覚のできた者は、もう病気になることはありません。経典の文言で一時だけそのような境地になるのではなく、自力でそのような境地になるよう、意識を高めてください。その境地に導いてくれるのが瞑想です。その境地に至った人は、もう外側からの援助は一切必要なくなるでしょう。



○悟りの最大の妨げは自尊心である

魂の大小は、学びの後先に関係ありません。求道は永遠に続けられているものだからです。当然、性別、年齢、職業、頭の良し悪し、人種、国籍なども関係ありません。しかし、多くの人は、学びを錯覚して捕らえています。

- ・二十年前から学んでいるから私は上だ！
  - ・多くお経を読んだから私は上だ！
  - ・多く瞑想したから私は上だ！
  - ・多く講演を聴いているから私は上だ！
  - ・坊さんや牧師さんの中には、
  - ・金色の袈裟を纏っているから私は位が上である。
  - ・祭壇の何処どこに座っているから私は位が上である。
  - ・説教しているから私は位が上である。
- このように、信仰はいつの間にか、自尊心を満足させる変形した姿に変わってしまったのです。
- 信仰の深さを示すのは、あくまでも理解力と自覚の深さです。いかに宇宙の仕組みを知り得たか。本当の自分を知り得たか。それも、心の底で知り得たか。それに尽きるのです。

○真実を曲げて伝えてはならない！

真の覚者は、自尊心を守るために真実を閉ざすようなことはしません。真実は真実として、はっきりと衆生に伝えます。多くの弟子たちは、覚者を神秘的存在に祭り上げようとします。その方が自分たちの格が上がると思うからです。でもこれは、覚者に対する大変な反逆です。覚者を神秘的な存在に祭り上げれば、衆生を覚者から遠ざけるだけでなく、神からも遠ざけてしまうからです。これでは覚者が下生してきた意味が無くなります。

よく考えてみてください。原因と結果の法則は、どんな覚者であっても曲げるわけにはゆかないのですよ！ 注意を怠り原因をつくれれば、どんな覚者であろうと結果から免れることはできないのです。だからイエス様は、磔の刑にかかってしまったのです。覚者には業がないといわれますが、業を持っていたから生まれてきたのです。この事実から目をそむけないで下さい。もしそむけるなら、因果の法則は破壊され、宇宙の秩序は保たれなくなります。

確かに覚者は、衆生に真理を伝える目的を持って下生しますが、目的はそれだけではないのです。自分が抱えている課題を克服する目的もあるのです。覚者も私たちも肉体を持ってしまえば、少なからず業をつけてしまうものなのです。それほど、この荒野といわれる地上界は厳しいのです。

どうでしょう。自尊心を守るために真実を閉ざすのと、自尊心を捨て真実を伝えるのと、真の覚者ならどちらを選ぶと思いますか。後者の方を選ぶはずです。どうか覚者を神秘化しないでください。神秘化すれば

するほど、衆生を真実から遠ざけることを知ってください。このようにいうと、キリスト教徒や仏教徒は怒るかもしれませんが、真実を閉ざすのと、真実を明らかにするのは、どちらが人類のためになると思いますか。心ある人なら分かってもらえると思います。

### ○復活祭とは？

なぜ、人間が真実を知ることができないかといえば、人間は実在していないからです。実在しない人間が、どうして真実を知ることができるでしょうか。真実を知らないから人間をやっているのですから、そんな無知な者が真実を知ることなど、できるわけがないのです。だからいわれるのです。真実を知るには真実そのものとなって知りなさい！ すなわち、生命を知るには生命そのものになって知りなさい！ と……。

生命を心から知るには、自分が生命そのものとなって知るしかありません。言葉や文字で知ろうと思っても、それは無駄骨というものです。ということは、あなたが私を知るには、あなたが私になるしかないということです。あなたが生命を知るには、あなたが生命になるしかないということです。そんな無茶な！といわれるかもしれませんが、私たちはもともと生命だったのですから、できないことはないのです。今はただ、その記憶を失っているだけです。記憶を呼び戻せば、即、生命に振り返ることが可能です。

生命は私です。その私が、私（生命）のことを知らない方がおかしいのです。だから、記憶を取り戻せば、即、生命に復活できるのです。復活祭とは、本来の自分に振り返いたときにするお祭りのことです。すなわち、本当の自分を知ったときにするお祭りのことです。

## ○キリストの再臨とは？

キリストの再臨とは、イエス様が再び誕生するという意味ではありません。本当の自分（神・生命）を自覚したとき、再臨したということです。キリストは神（生命）であり、神（生命）は私たちだからです。ですから、誰でも神を自覚すれば再臨者となるのです。イエス様のことをいっているではありません。イエス様は人の名です。人の名は、その肉体がなくなれば消えてしまうものです。消えてしまうイエス様が、どうして神なのでしょう。だから、決して覚者を拜んではならないのです。

同じように、仏陀とは神のことです。お釈迦様が神ではないのです。お釈迦様は人間につけられた名前です。肉体がなくなれば消えてしまう幻です。そんな幻を神だと思ってはなりません。人の名前を拜むのは偶像崇拜です。肉体を拜むのは偶像崇拜です。どうか間違わないようにしてください。

繰り返します。キリストとは、神のことです。仏陀とは、神のことです。神はこの宇宙に一樣しかないのです。ただ時代によって、国によって、呼び名が違っていただけです。だから、名前が違うからといって、宗教戦争してはならないのです。今、宗教戦争している人たちは、同じ神同士が戦争しているようなものです。どうか、自分の神、あなたの神、あなたの国の神、私の国の神、と分けなくてください。神はこの宇宙に一樣しかいないのですから……。

私たちの中には、神（生命・キリスト・仏陀）がおられるのです。だから、本当の自分が自覚できれば、誰でも神に、キリストに、仏陀になれるのです。どうか神に対する誤解を解いてください。キリストや、仏

陀や、アラアヤ、ヤウエエに対する誤解を解いてください。そうすれば、宗教戦争は一切なくなるのですから……。

#### ○四苦の克服とは？

どの宗教でも、私たちの宗教に帰依したら救われると説きます。しかし、人間を認めている宗教に入っても、決して救われることはありません。なぜなら、人間は必ず老い、病み、死ぬものだからです。

真の意味での「生・老・病・死の克服」とは、次のようなことです。

肉体は時が来れば必ず死にます。しかし、生命（心・意識・魂）は永遠に生き通しです。私たちは肉体を自分だと思い込んでいますが、本当の自分は生命なのです。思い、考え、語り、肉体を操っているのは生命なのです。その生命を自分として生きれば、四苦は克服できるのです。

どうでしょう、肉体を自分だと思っている者が、四苦を前に平然としていられますか。いつも恐怖し、心配し、怯えていなければならぬではありませんか。宗教が人を救うことができないうのは、死ぬ人間を認めているからです。死ぬ人間を認めながら、どうして人を救えますか。

人を救うには、死なない自分を知らしめなくてはなりません。すなわち、人間の本性が生命であることを知らしめなくては救えないのです。それも、心の底から知らしめる必要があるのです。頭で知っただけでは変化は起きないからです。心底から生命の自覚ができて、はじめてその心境になり、心身ともに変化が起きます。単にキリスト教に帰依したから、仏教に帰依したから、イスラム教に帰依したから、といって四

苦が克服できるものではないのです。あくまでも、生命に対する理解力と自覚の強さが鍵になるのです。それは己の意識の問題で、外のいかなる問題でもないのです。

確認します。

本当に有るものは何でしょうか。肉体ですか。生命ですか。肉体の自分をどんなに大切にしても、必ず老い、病になり、死んでしまうのですよ！しかし、生命の自分は、決して老いることも、病になることも、死ぬこともありません。ならば、何を大切にしなければならぬのでしょうか。永遠に死なない生命ですね。では、あなたは今、生命に生きておりますか。死ぬ肉体に生きているではありませんか。それでは心が安らぐがありません。

さあ、四苦を克服したかったら、生命を自分として生きましょう。そのためにはまず、本当の自分が生命であることを知ることです。知ったら、生命に対する理解力を高めることです。さらに、生命の自覚を強めることです。瞑想はそれを可能にする唯一の方法なのです。

## (2) 真実は自分の中にある

### ○私たちは普段、見えない生命(霊)を観ている

私たちは普段、肉の目で色々な見える物を見ています。しかし、本当は見えないモノを見ているのです。

見ているのに見ていないと思っただけです。そう思うのは、物質と生命（霊）を分離して見ているからです。

物質と生命は絶対不可分といって、分けられるものではないのです。分けられない理由は、一つのモノだからです。同じモノだからです。一つのモノをどうして分けられましょうか。分けられないのに、私たちは分けて見ているのです。それは、物質と生命に対する理解力が乏しいからです。

物質と生命は絶対不可分なのです。不可分である生命は見えないのです。物質は見えるのです。見える物質と見えない生命が絶対不可分なら、物質は生命ではありませんか。生命は物質ではありませんか。ならばあなたは今、見えない生命を見ているではありませんか。毎日寸分の休みなく、見えない生命を見ているではありませんか。ただ、それを物質だと思いついていただけです。

そうなのです。私たちは常に生命を見ているのです。一つのモノしかないならば、一つのモノしか見られないのは当然ではありませんか。どうして二つに分けてしまうのですか。物質は即生命なのです。生命は即物質なのです。お釈迦様も「色即是空・空即是色」といつているではありませんか。物質を生命だと思えば、それは生命なのです。ただ思えば、それは生命なのです。本当にそうなのですから仕方がありません。

### ○誕生祝はいらない！

初めからあったものがホンモノで、途中で生まれた物はすべてニセモノです。ニセモノはなくなりませんが、ホンモノは決してなくなることはありません。途中で生まれた物には寿命がつきまといりますが、初めからあ

ったものには寿命がつきまとわれないのです。ホンモノは永遠不滅なのです。だからホンモノには誕生日がないのです。誕生日があるのは、途中で生まれた二セモノだけです。

人間は盛大に誕生日を祝いますが、それは死に近づいたことを祝っているようなものです。肉体を自分だと思っている者は、どうしても誕生日をしたがるものなのです。でも、それでいいのかもしれない。肉体から解放される日が近づいていることを祝っているともしえるからです。

誕生がなければ死ぬことがありません。死ぬことがなければ生まれることもありません。だから本来、私たち（生命）に誕生日は不要なのです。誕生日は、生命に目覚めたときにしてください。いや、それは誕生日とはいわず、目覚めの祝いというべきかもしれません。

### ○波動を上げるには!?

この宇宙で一番波動の低いのは物質です。その次に波動の低いのは幽質です。一番波動の高いのは霊質です。その意味では、唯物主義者は一番低い波動を持っていることになります。一番鈍重な波動を持っているがゆえに、幽界の存在を知っただけでも波動は上がるのです。だからこそ、無闇に幽界の話の話を退けてはならないのです。幽界があると知らしめることは、唯物論者を唯心論者に変えるきっかけになるからです。どんな進歩も、一挙にというわけにはゆきません。少しずつ少しずつ、無理解の垣根を取り払い、真実に近づけてゆくしかないのです。

ちなみに、波動は次のような意識を持っただけでも上がります。



- ・ 抽象的なもの（無限・普遍・空など）に意識を向けただけでも上がります。
- ・ 目に見えない何かがあると思っただけでも上がります。
- ・ 神や仏を信じる心が生まれただけでも上がります。
- ・ 世のため、人のため、地球のために何かしたいと思っただけでも上がります。
- ・ 人生の思索をしようと心に決めただけでも上がります。
- ・ 宇宙に興味を持ちはじめただけでも上がります。
- ・ 人間は肉体だけの存在なのか、と疑問を持ちはじめただけでも上がります。
- ・ 己の本性が生命だと「知った」だけでも上がります。
- ・ 瞑想をしようと決心しただけでも上がります。
- ・ 当然、瞑想を始めたらすごく上がります。

私たちは、最終的に、一番波動の高い生命の世界へ帰らなくてはなりません。そのためには、波動を上げる訓練がどうしても必要なのです。波動を上げる訓練とは、意識を高める瞑想のことです。波動は正直です。決して裏切ることはありません。あなたが成長した分、波動はついてきます。ぜひ波動を上げる訓練をしてください。

### ○この世の実体を観察する

私たちが住んでいる物質の世界は幻の世界です。といっても、そう思えないのが私たちですが、それは、

どんな物も同じ土俵の上に乗って相撲を取っているからです。つまり、同じ時の流れの中で生きているから幻と思えないのです。

これについては、次のようなことがいえるでしょう。

落ち葉と自分の乗っているボートが、同じ川の流れに沿って前進しているとします。その時の落ち葉とボートは、同じ流れの中におりますので、どちらも動いている実感がないのです。しかし、岸边（実相）から見れば、動いていることが分かります。

つまり、動かない意識（実相）の目で見れば、自分が動いているかどうか分かるのです。ですが、仮相（物質の世界）の中に取り込まれている私たちは、同じ変化する目で見ているため、どうしても物質の世界があるような錯覚に陥ってしまうのです。その錯覚は、命の儚さや人生の虚しさを体験しなければ解けないのです。要するに、ショックを与え、一時的に仮相の世界から実相の世界に意識を向けさせる必要があるのです。

命の儚さを表わすことわざに「カゲロウは一日の命、蝉はひと夏の命」という名句がありますが、実生活から離れているため、なかなか命の儚さを我が身に置き換えることはできません。命の儚さを我が身に置き換えられるのは、自分の不幸や肉親の不幸に出会った時です。不幸は、命の儚さや人生の虚しさを実感させてくれる好機なのです。

この世の時の流れから外に出て、冷静に観察する目を養いましょう。そのためには、肉体と意識を分離し、

意識で物を見る訓練をすることです。肉体は時の流れの外に置くことはできませんが、意識は時の流れの外に置くことができます。そこからこの世の出来事を観察し、本当に有るものとなないものを識別することができます。もうこの世のニセモノに騙されることはないでしょう。また、その観察力が身につくにしたがい、あなたはこの世の出来事に心を痛めなくなるでしょう。

### ○想念の動きを観察する

あなたは一日、いったい何を思いながら過ごしていますか。自分の想念の動きを観察して見たことがありますか。百人が百人とも、過去のこと、未来のこと、今の雑事のことを思いながら過ごしているわけではありませんか。それも、色々な妄想を描いて……。これでは、本当に生きているとはいえません。過去も未来も、今の雑事も、みな幻だからです。今の雑事を思っているならまだしも、昨日に憤怒し明日に恐怖し、様々な妄想を描いて人殺しまでしている人がおります。ないものを自分の妄念で有るように組み立て、憤怒し恐怖し、自分を苦しめているのです。なんと恐ろしいことでしょう。

過去は過ぎ去ったページです。未来はいまだ来ぬページです。今、雑事に追われている人も、幻に生きている限り、本当に生きているとはいえません。真に生きているのは、真実に思いを向けているときです。つまり、生命の自分に意識を向け、生命を自分として生きているときです。

何度もいいますように、この世は刻々と変化する無常の世界です。この世の物に、一つだってホンモノはないのです。そんな幻に時間を費やすほど愚かなことはありません。人生を意義あるものにしたければ、本

当に有る生命に意識を留め、生命を我が思いとして生きることです。瞑想している時は、生命に意識を留めていますので、本当に生きていくことになります。また、外側の物を見ている、その物の背後にある生命を意識している時は、本当に生きていくことになります。

さあ、自分の想念をよく観察しましょう。そして、できるだけ生命に思いを向ける生き方をしましょう。それができる人は、人生を無駄なく生きていく人です。

### ○真実を観る目を養おう！

有るものとなないものの識別は、形の有るなしや、見える見えないで判断してはなりません。見えても実際にはないし、見えなくても実際に有るからです。この宇宙のカラクリは、実際に有るものは見えず、実際にないものは見えるのです。なぜ見える物がなく、見えないモノが有るのかといいますと、見える物は必ず消えてなくなり、見えないモノは永遠になくならないからです。

次のような見方をしてください。そうすれば、真実を観る目を養うことができます。

本当の私たちは永遠不滅の存在ですから、永遠不滅の私たちに對して、永遠不滅のモノは絶対的存在となるので、本当に有ることになります。對して、永遠不滅の私たちに對して、消えてなくなるモノは相対的存在となるので、本当でないことになるのです。この宇宙は絶対が真実で相対は非真実ですから、そのような論理が導き出されるわけです。

絶対なる私たちは、絶対なる目で観ることです。決して相対の目で見ないでください。多くの人が苦しん

でいるのは、この世のニセモノを相対の目で見ているからです。それは、真実（絶対）を観る目を養えば回避できるのです。どうか真実を観る目を養ってください。私たちはそのために生まれてきたのですから……。

### ○人間が実在しない理由パート1

#### （理由一）

形あるものは必ず消えてなくなりません。見える物は、見えない生命の現われとして一時存在しているだけで、実在しているものではないのです。雲が色々な形を取って一時空に浮かんでいるように、蜃気楼が一時空中に漂っているように、人間も時空に一時形を取って現れている幻なのです。

形はすべて幻なのです。形は見えない生命によって一時現わされているだけで、実在するものではないのです。見える形は、見えないモノによって生かされ、動かされているのです。もし、形が生きているというなら、冷蔵庫が動いているといわねばなりません。冷蔵庫は見えない電気によって動かされているのです。人間も見えない生命というエネルギーによって生かされているのです。生かされていると生きているのは、天地の違いがあるのです。

自分の力で生きているもののみが実在するのです。何かの力で生きているのは、実在するものではないのです。人間は生命によって生かされ、自分の力で生きていないのですから、実在するものではないのです。

#### （理由二）

永遠になくならないものは、生まれもしなければ死にもしません。ならば、人間は実在しないことになり

ませんか。なぜなら、人間は生まれて死ぬからです。人間が実在しない、と私がいうのは、人間は必ず生まれて必ず死ぬからです。

実在するものは、生まれもしなければ消えてなくなることもありません。生まれるのは、実在しないからです。消えてなくなるのは、実在しないからです。生まれるということは、死ぬということです。死ぬという事は、生まれるということです。そのような一時の存在を、どうして実在と呼ぶでしょうか。このような理由から、人間は実在しないのです。

(理由三)

何かが有るからには、その何かを生み出した本質(素材)が必ずあるはずですが、本質がなくては、何も有り得ないからです。私たちは、建物が有るとか、肉体が有るとかいつていますが、本当に有るのは、それらの物を形つくっている本質(材料・細胞)です。もし本当に建物や肉体があるなら、建物や肉体から本質を差し引いても、建物や肉体は残らなくてはなりません。本質を差し引いたら建物も肉体も消えてなくなるのです。消えてなくなるのは、実際にはないからです。

だから私は、人間は実在しないというのです。私たちは、消えてなくなる形に「誰々さん!」と名前をつけ、呼び合っているだけです。

○一番大切なことは?

何が一番大切かといえば、本当の自分を知ることほど大切なことはありません。この世の何を知っても、

何を成しても、何を手に入れても、自分が何なのか知らなくては何の意味もないのです。

あなたは学校で、アメリカの何代目の大統領は誰であるとか、何代目の天皇は誰であるとか教えられたと思いますが、それがあなたを変えましたか。たとえ相対性理論を知ったところで、古代遺跡を発見したところで、彗星を発見したところで、あなたが変わらなくては何の意味もないのです。ただ増長マンを一人つくるだけです。

一番大切なのは、自分を変える生命の自覚です。この世の何を知らうと、何を発見しよう、何を手に入れようと、そんなものはみなニセモノですから、何の偉業にもなりません。が、本当の自分を発見した人は真実を手に入れたわけですから、これは大変な偉業です。

ニセモノの発見にエネルギーを費やすのか、ホンモノの発見にエネルギーを費やすのか、あなたはどちらにしますか。真実の発見にエネルギーを使いましょう。そのために人生はあるのですから……。

○人が人を生むことはない！

「私が子供を産んだ！」というお母さんがおりますが、人が人を産むことは絶対ありません。もし産んだのなら、子供の悪くなった体の部品を取り換えることができますはずです。人間は、爪一つ、髪の毛一本つくれません。

人間を生み出したのは宇宙生命です。人間は、宇宙生命の理念の具象化したものなのです。つまり、理念の主である宇宙生命が素材を組み立て、創った傑作作品が人間なのです。

人体の仕組みの精緻さ、働きの精密さ、能力の偉大さ、これは宇宙生命ならばこそ創れる逸品です。その肉体を私のものというなら、その人は、盗みの罪と嘘の罪を犯していることになります。人間が生きているのも、肉体が働いているのもありません。生きて働いているのは全能の生命です。その生命にすべてを委ねましょう。そうすれば、幸せな人生を送ることができるのですから……。

### ○人間が実在しない理由 パート2

人間には「花子」だとか「太郎」だとか、色々な名前がつけられていますが、それは、形を区別するためにつけられた固有名詞であって、名前そのものが実在しているわけではないのです。本質は一つしかありませんので、形の違う物を同じ本質の名で呼び合っては区別がつかないので、便宜上個別の名前をつけただけです。形の数だけ本質があるなら、形に名前をつける必要はなかったのですが、本質は一つしかありませんので、そうするしかなかったわけです。でも、人間はその固有名詞に惑わされ、あたかも名前が実在するかのような錯覚に陥っているのです。

たとえば、コップとは、コップの形をしたガラスです。コップは形につけられた固有の名詞で、実在するものではありません。実在しているのはガラスです。ガラスが形を取ったものにコップと名前をつけただけで、実際にあるのはコップではなくガラスです。コップは名前だけの存在ですから実在していません。それなのに、私たちはあたかもコップがあるような錯覚に陥っているのです。

同様に、人間とは、人間の形をした生命です。実際にあるのは人間ではなく、生命という名の本質です。



生命が形を取ったものに、人間と名前をつけているだけで、実際にあるのは人間ではなく生命です。人間は名前だけの存在ですから、実在していません。その証拠に、コップを粉々にすれば誰もコップとは呼びません。人間を分子状に粉々にすれば誰も人間とは呼びません。本当に実在するなら、コップも人間も分析できますが、コップも人間もタダの名前ですから、分析しようがないのです。だから私は、人間は実在しないということです。

なぜ錯覚がいけないかといいますと、本質に生きないで名前に生きてしまうからです。つまり、生命に生きないで人間に生きてしまうからです。人間に生きれば四苦があります。でも、生命に生きれば四苦はないのです。今、私たちは、実在しない人間に生きながら、本当に生きていると信じているのです。

### (3) 本質はひとつ

#### ○生み出した本質がホンモノである

何もないところから、ポカリと物が生まれることはありません。物が生まれるからには、その物(結果)を生み出した本質(原因)が必ずあるのです。形がもう一つの形を生み出すことはできないのです。結果が結果を生み出すことはできないのです。本質が形を生み、原因が結果を生み出すのです。原因が結果を生み出すがゆえに、生み出された形はニセモノで、生み出した本質がホンモノなのです。その証拠に、ホンモノ

である本質はなくなりませんが、ニセモノである形は必ず消えてなくなりません。なくなるのは、実際にかからず。なくならないのは、実際に有るからです。

そして、実際に有るものは、生まれることはありません。実際にはないものが生まれるのです。生まれるということは、死ぬということ。現れるということは、消えるということです。ならば、生まれて死ぬもの、現れて消えるものは、すべて幻ということになりませんか。本当にあるものなら、生まれもしなければ死ぬこともないからです。だから私は、形ある物はすべて幻で、見えない本質がホンモノだということです。繰り返します。

物質は必ずなくなりますので幻です。生命は永遠になくなりませんのでホンモノです。ゆえに、人間は幻で、生命こそホンモノといえるのです。

### ○本質から離れた形はない！

形がつくられる場合、形から本質(生命)が離れてつくられることはありません。創られた物と創り主である本質は、絶対不可分なのです。ということは、創られた私たちの中に創り主である本質が存在していることとなります。形があるということは、本質である生命が必ず内在しているということです。ならばすべての物は、生命そのものではありませんか。あれも生命、これも生命、それも生命、みな生命です。あなたが先ほど食べたハンバーグも、蹴飛ばした猫も、罵声を浴びせた店員も、みな生命です。

そうです。私は生命そのものなのです。あなたは生命そのものなのです。万象万物は生命そのものなので

す。これは絶対に覆せない真理です。私が、生命である、と平気でいえるのは、本質から離れた形はないからです。生命から離れた人間はないからです。

○見えない本質なしに見える形はない

見えないモノを頑なに否定する人がおりますが、見えないモノがなくては絶対に、見える物はありません。見える物には絶対に見えないモノがなくては生きていくことはできません。

- ・あなたは見えない空気を吸って生きていくではありませんか。
- ・見えない空気が風車を回し電気を生み出しているではありませんか。
- ・見えない空気が火を明々と燃やしているではありませんか。

このように、見えないモノがなくては、見える物の働きはあり得ないのです。見えないモノ、それは本質です。本質あればこそ、形があり、物があるのです。その本質が生きていくのです。その本質が働いているのです。その本質がものを考え、工夫し、創造しているのです。その本質を、私たちは生命とか神とか呼んでいるのです。

今、私たちが存在できているのは、生命が私たちの中で生きて働いているからです。形が生きることが絶対ない！物が生きることが絶対ない！人間が生きることが絶対ない！ということを知ってください。

○本質と形は絶対不可分

どんな形も、素材あつての物種です。形があるということは、その背後に必ず素材である本質があるとい

うことです。形と本質は絶対不可分といって、切り離すことができないのです。本質そのものが、形そのものとなっていているわけですから当然です。

よく、一つ目とか二つ目とかいわれますが、造られた物もあり、創り主もあると見るなら、二つ目になります。造られた物と創り主が同じと見るなら、一つ目になります。

つまり、

・ 一つのものしかないのに、二つのものが有ると見るのは迷いの目です。

・ 見えないモノがホンモノなのに、見える物をホンモノと見るのは迷いの目です。

・ 本質が実在なのに、形を実在と見るのは迷いの目です。

二つの物があるものではありません。そこには、たった一つの見えないモノ、本質的なもの、創り主のみが存在するのです。

宇宙には、本質のみがあるのです。ですから、何を見ても本質を見ること、本質を思うこと、本質を感じることで、そう見えたら、思えたら、感じられたら、開眼（二つ目）です。宇宙には一つのものしかない！すべては一つのもの現れである！と思えるようになるまで瞑想しましょう。

○ **不完全を知ればこそ、完全を知ることができる**

私たちは、見える物や触れる物が本当に有ると思っています。しかし、本当に有るものは、見えもせず触れもしないものなのです。見える物は、見えないモノによって写し出された影だからです。

見えないモノは、すべてのものを内蔵している本源・本質です。見えない本源・本質の中に、すべての見える物が内蔵されているのです。その、内蔵された見えないモノの一部を取り出した時、姿形を現し、見える物になるのです。ですから、見えるようになった物はすべて幻で、内蔵された見えないモノこそホンモノなのです。これが、見えないモノこそ絶対実在であるといわれる理由です。

すべてを包含しているものは見えないのです。それは完成されたものだからです。一部分のものは見えるのです。それは未完成のものだからです。私たちは今、見える世界にいますが、それは取りも直さず、不完全な世界にいることを意味します。ですが、落胆することはありません。なぜなら、不完全な世界にいればこそ、完全を知ることができるからです。私たちは完全を知るために、不完全な世界に出てきたのです。

### ○原子一個の体験も糧になる

糧になるのは原子であって、形ではありません。形はただの演技者で、役割が終われば消えてなくなる虚しい存在だからです。ですが、原子は、表現宇宙を進化させる素材として永遠に受け継がれてゆくものから、決してなくなることはないのです。原子は様々な体験を栄養とし、表現宇宙の血や肉になっているのです。原子一個一個の体験が、原子一個一個の進化を促し、さらに、表現宇宙の進化をも促しているのです。その原子一個一個も、最終的には絶対原子の核に取り込まれ、本来の自分に帰って行く運命にあります。本源から出てきたものは、体験を積んで大きく成長し、いつか必ず本源に帰るのです。

鉱物や、植物や、動物が上位の生き物に食べられることを喜ぶのは、原子一個一個が得た糧を人間にバト

ンタッチできるからです。彼らがバトンタッチしてくれた貴重な糧を、私たちは無駄にしたくないものです。  
(私たちの魂の中に、彼らが得た貴重な糧が蓄積されている。)

### ○一つの本質一つの光

なぜすべての物が私なのかといいますと、一つしかない本質＝私だからです。私を形つくっている本質は、この宇宙に一つしかないのです。一つしかない本質が、私の中にも万象万物の中にも生きて働いているわけですから、すべての物が私なのは当然なのです。これは丁度、光と影になぞらえることができるでしょう。

この世に写し出された様々な影は、一つの光の現れとして存在するのであって、影一つ一つに光一つ一つが有るわけではないのです。たった一つの光が、様々な影を写し出しているのです。一つしかない光が、私やあなたや万象万物を写し出しているのですから、私もあなたも万象万物も、同じ影なのは当然ではありませんか。同様に、一つしかない本質が様々な形を現わしているのですから、そこには一つの物しかないはずです。名前の違うパンや、クッキーや、ケーキが同じ小麦粉でつくられているように、私たちも一つしかない光(生命)という本質で造られているのです。

「本質」は宇宙に一つしかないのです。「光」は宇宙に一つしかないのです。その本質が、その光が、知恵と力を持ち、生きて働いているのです。様々な形の中で生きて働いている本質は共有されているのであって、形によって区分されているわけではないのです。共通の本質です。普遍的本質です。だから、すべての物が私であるといえるのです。

形が形を生むなら、それは形かもしれない。しかし、本質が形を生むのだから、それは本質であるはず。

### ○一つの意識・一つの命・一つの本質

ここで、命の本質も物質の本質も、同じ一つの創造主から生まれたことを確認しておきたいと思えます。創造主という表現をするのは、本質そのものに意識と意志が存在するからです。その本質によって埋め尽くされた宇宙は、当然創造主そのものといえるでしょう。要するに、宇宙そのものが、意識と意志を持った一匹の生き物なのです。

宇宙そのものが一つの命であり本質ならば、そこに存在する砂一粒も虫一匹も花一輪もみな創造主ではありませんか。そうであるなら、万物の霊長である人間が創造主なのは当然でしょう。

一つの意識・一つの命・一つの本質はイコールですから、自分が創造し、自分が生き、自分が働くことができるのです。この宇宙に一つのものしかないがゆえに、宇宙は永遠に存続し得るのです。もし二つのものがあるなら、ぶつかり合いが生じ、とうに宇宙は消滅してはたはずです。この宇宙には一つの本質しかないのです。一つの命しかないのです。一つの意識しかないのです。すなわち、私しかないのです。

### ○本質について パート1

では、本質のベールを一つずつ剥がしてみることにしましょう。その実体が分かれば、いかに私たちが偉大な存在かも分かるでしょう。

一、本質は意識そのものです。意志そのものです。理念そのものです。

本質には意識と意志があります。ということは、理念があるということです。理念があるということは、計画性があり、目的があるということです。その本質で埋め尽くされているのが宇宙ですから、宇宙のどんな動きにも、働きにも意味があることになりません。だから、宇宙に偶然はありません。すべてにおいて目的性があり、計画性があり、その意志の基に物が造られ、成長し、消滅しているのです。

二、本質は一にして無限です。

本質は、今、絶対界（意識界）に一点として存在し、同時に相対界（物質界）に無限として存在しております。相対界に「多」なる物として存在し、絶対界に「一」なる意識として存在しているという意味です。では、なぜ「一」なる意識が、沢山の物質の中に存在できるのでしょうか。この辺りが非常に理解のしづらいところですが、このように考えてください。一つの光が無数の影をつくり、その影と光が表裏一体になっていると……。

「多」なる物とは原子のことで、影を意味します。「一」なるものとは光のことで本質を意味します。光と影は表裏一体、意識と物質は表裏一体、一と無限は表裏一体、本質と原子は表裏一体、ですから、その原子で造られている私たちも、一にして無限の存在なのです。

三、本質は永遠です。完全です。

本質は永遠不滅です。決してなくなることはありません。本質は生まれもしなければなくなりもしない、アルファーにしてオメガなのです。アルファーにしてオメガなるがゆえに、宇宙は完全なのです。



この宇宙には、不完全な物は一つもないのです。もし不完全な物が一つでもあるなら、神は完全でなくなつてしまいます。不完全があるように見えるのは人間の目を通して見るからで、遠くを見通せる神の目で見れば、そこに不完全はないのです。どうか、神のような、遠くを見通せる目を持つてください。そうすれば、宇宙の完全性がはつきりと観えるはずで。

#### 四、本質は絶対善なる存在です。

本質は絶対善なる性質を持っています。ですから、その本質で創られている宇宙に、悪なるモノがはびこることはないのです。どんなに悪に見えるものも、みな善の塊なのです。なぜなら、本質（神）は完全だからです。勸善懲惡は宇宙の性です。因果応報がそれを支えています。ゆえに宇宙には、善のみが輝いているのです。

#### 五、本質は知恵そのものです。力そのものです。光そのものです。愛そのものです。

「知恵」は本質そのものです。因果の法則がそれを証明しています。因果の法則に齟齬がないのは、その知恵から生まれたものだからです。そのため、この宇宙に不要な創造も、不要な動きも、不要な働きも、不要な消滅もないのです。

また、本質は「力」そのものです。宇宙の創造原理は、この力が源となつています。その力は時折偏るうねりを見せますが、それは均衡を保つ運動調整の一環で、最終的には平坦へと運ばれているのです。それを支えているのがエネルギー均衡の法則です。そのおかげで、この宇宙は、常に安定した運航が可能なのです。

「光」は、表現宇宙を照らすサーチライトのようなものです。理念そのものが光なのです。その光の放射によって様々な影が生まれ、表現世界に無限の物語が展開されて行くのです。

「愛」は、その光と影をバランス良く結びつける、接着剤のような存在です。ゆえに、愛あるところに生命体（形・結晶）が生まれるのです。愛は、陰陽のバランスを司る主導的役割をはたしているのです。

六、本質は時空を超越しています。

本質は時空を超越しています。時空を超越しているという意味は、二〇〇〇年前、イエス様の中に宿っていた同じ本質が、今、私たちの中にも宿っているという意味です。本質は絶対界に属するものだから、そこに時空は存在しないのです。時空は現象界にのみある姿です。つまり、本質が原子の姿を取った時に、時空が生まれているのです。私たちが時空を感じているのは、その、原子によって造られた宇宙を認め、物質を認め、人間を認め、信じているからです。

さて、本質のベールを一つずつ剥がしてみましたがお解かりになったでしょうか。もし、自分が本質そのものであると心の底で思えたら、本質の持つ能力が自分のものとなるでしょう。そのためには、自分を含めあらゆる物が本質の現れだと、心の底で思えなければなりません。物を見るのに理解力と実感が必要なように、本質を観るにも理解力と実感が必要なのです。

○見えないモノが宇宙を牛耳っている

ここで、見えないモノが宇宙を牛耳っている証を立てて見たいと思います。

・見える物が見える物を生み出しているなら、それは見える物かもしれません。でも、見えないモノが見える物を生み出しているのですから、それは見えないモノであるはずですよ。あなたは、見える物から見える物が生まれたのを見たことがありますか。種も、卵も、赤ちゃんも、どんな物も、見えないモノから生まれ出てくるのですよ。

・形だけが人間ですか。もし形だけが人間なら、勝手に口や手足が動くはずですよ。でも、口を動かしているのも、手足を動かしているのも、見えない思いなのです。思いは形ですか。形は見えない思いによって動かされ、働かされているのですよ！ だから、形だけを見ては片手落ちになるのです。

・見える物は、見えないモノによって生かされ、働かされているのです。その証拠に、力も知恵も愛も見えませんが、もちろん、意識も意志も理念も見えませんが、その見えない意識や意志や理念が、すべての物を創造し生かし動かしているのです。

・この世には、運動エネルギーや、位置エネルギーや、熱エネルギーや、バネエネルギーなどが存在しますが、そのエネルギーを見た人は一人もいません。しかし、目には見えなくても、厳然として存在し、役立ってくれているのです。

・もし見える物が永遠に実在するなら、この宇宙は見える物で埋まり、身動きできなくなってしまいうでしょう。幸い、見える物は消えてなくなるから、この宇宙は安泰なのです。ということは、見えないモノが宇宙を永続させていることになるでしょう。

・もし見える物が実在するなら、肉体は永遠の命を持っていなければなりません。でも、肉体は必ず消えてなくなってしまう。あなたは腐らない死体を見たことがありますか。その腐る肉体を生み出しているのは、見えないモノなのです。もし見える物が実在するなら、自分の先祖や子孫と、永遠に顔を突き合わせて暮らさねばなりません。また、肉体が不滅なら、病み傷つく私たちは永遠に苦しまねばなりません。幸いなことに、見える物はみな消えてなくなるから、私たちは安心して生きられるのです。そうです。見えないモノが見える物を牛耳っているから、私たちは安心して生きられるのです。

### ○本質に生きるとは？

もし人間が形だけの存在なら、形に生きても仕方がないかもしれません。でも、人間は、形と本質（生命）が一体となった二重生命体なのです。ならば、どう生きるべきでしょうか。そうです！ 形と生命の両方を意識して生きるべきです。

両方を意識して生きるといっても、私たちはすでに形を意識し過ぎていますから、もう形を意識する必要はないのです。意識すべきは生命のみです。すなわち、日常生活において、できるだけ生命を意識して生きることです。

具体的にはこうです。

何を思っている、何を見ている、何をやっている、今、生命が思っている！ 今、生命が見ている！ 今、生命がやっている！ と思いつつながら生きることです。肉体の自分が思っている、見ている、やっている、

と思つてはなりません。肉体を動かしている生命が、思つている、見ている、やつている、と思ひ生きることでです。あなたの周りにあるすべての物の中に、生命を感じながら生きることです。

すなわち、あれもこれもそれも、みな生命が生き、生命が働き、生命が事を成していると思ひ生きることです。慣れるまでは大変でしょうが、慣れたら無理なくできるようになります。本質に生きるとは、このように、できうる限り生命を意識して生きることなのです。ぜひ挑戦してみてください。

## ○本質について パート2

ほとんどの人は、人間が実在すると思つています。しかし、人間つて、いつたどこに実在するのでしょうか。実在とは、永遠になくならないもののことを意味しますから、なくなつてしまふ人間が実在するわけはないのです。

人間には二つの側面があるのです。一つは形の側面、もう一つは本質の側面です。形は無常なる物ですが、本質は永遠なるものです。私たちは無常なる形の側面だけ見て、永遠なる本質の側面を見ていないのです。ということは、名前だけ見て中身を見ていないということです。

どうでしょう、名前は実在するものですか。形に実体がないように、名前も実体がないのですよ。実体ないものを、どうして分析するのですか。人間を論じ合つている学者たちは、実際には名前をマナ板の上に乗せ、ああやつてさばこう！ いや、こうやつてさばこう！ と論じ合つているようなものです。実体のない名前を論じ合うなんて、金の浪費、時間の浪費です。論じ合うなら、実在する本質にしましょう。

確かに、人間という形は、目を見開き、言葉を語り、手足を動かし、色々なパフォーマンスをしますから、本来にあるような錯覚を与えるのも無理はありません。ですが、その人間という形は、一時空中に浮いている雲のような存在なのです。雲は実在していますか。実在しているのは、雲の形をした水蒸気ではありませんか。人間も、実在しているのは、人間の形をした本質ではありませんか。私たちは形に惑わされ、本当の自分を見失っているのです。もし、本質が自分だと心の底で思えたら、途端に自分が変わるのです。観念的に変わるのではなく、現実的に、実際的に、変わるのです。つまり、生・老・病・死から解放されるのです。なぜなら、本質は、生まれもしない、老いもしない、病にもならない、死にもしないからです。

#### (4) 真実はひとつ

##### ○真実とは何か？ パート1

真実とは何でしょうか。この設問を軽々しく考えてはなりません。この設問の中に、宇宙の謎、生命の謎、人類の謎が折りたたまれているからです。したがって、明快な回答が与えられれば、人類が抱えているあらゆる難問がごとく解決されてしまうでしょう。

真実とは、永遠になくならないモノのことをいいます。では、永遠になくならないモノがこの世にあるのでしょうか。

山はどうでしょう？

海はどうでしょう？

地球は？

月は？

太陽は？

人間は？

残念ながら、すべて消えてなくなりそうです。ということは、この世に真実なるものは一つもないことになり  
ます。だとしたら、真実は、何処に、どんな形で存在するのでしょうか。

真実は姿形がないので、見ることも触ることもできません。しかし、真実は厳然として存在しています。  
意識として、意志として、知恵として、力として、光として、愛として、その総合された生命として……。  
ところが、姿形のない生命は、そのままでは存在意味がありません。そこで生命は、自分を代弁代行する媒  
体として、人間を創ったのです。そのため、人間の中には、生命のあらゆる能力が受け継がれているのです。  
人間を知れば生命の実体が解るのはそのためです。

真実とは、このように、意識・意志・知恵・力・光・愛、そのすべてを併せ持った「生命」のことをいう  
のです。その生命のことを私たちは「神」とも呼んでいるのです。

## ○真実とは何か？ パート2

私たちは氷があると思っていますが、氷はどこにも存在していません。存在しているのは、氷の形をした水蒸気です。なぜなら、水蒸気が冷えて水になり、水が凍って氷となっているからです。永遠になくならないものが真実ですから、なくなってしまう氷や水は真実ではないのです。

次のようなたとえも同じです。

国会議事堂が有るといいますが、国会議事堂はどこにも存在していません。存在しているのは、国会議事堂を形造っている材料です。なぜなら、国会議事堂は壊せばなくなります。材料は壊してもなくならないからです。同様に、人間はどこにも存在しておりません。存在しているのは、人間の形をした生命です。生命が形をとったものに「人間」と名前をつけ、更に「花子」だとか「太郎」だとか名前をつけ、呼んでいるだけです。人間が死ねば、形は消えてなくなります。

では、今まで存在していたのはいったい何だったのか、ということになります。

よろしいですか。花子も太郎もただの名前ですよ。名前が実在するわけがありません。だから私は、人間などどこにも実在しないというのです。実在しているのは、人間の形をした生命です。私たちは、形に惑わされ、実在する生命を見失っているのです。この真実が解ったら、この世から物の奪い合いはなくなるでしょう。

人間が追い求めている、



- ・土地は永遠なるものですか。
- ・資源は永遠なるものですか。
- ・お金は永遠なるものですか。
- ・財産は永遠なるものですか。
- ・地位や名譽は永遠なるものですか。

ダイヤモンドは？ 金は？ プラチナは？ 家は？ 車は？ あなたの家族は？ あなたの肉体は？  
 ……残念ながら、どんな物も時と共に朽ち果て、崩壊し、死に、消えてなくなります。その消えてなくなる物のために、競い合い、戦い合い、奪い合い、血を流し合っているのが人間ではないでしょうか。愚かだとは思いませんか。求めるなら、永遠になくならない「生命」を追い求めましょう。その者は、永遠の宝物を手に入れたのです。

### ○非真実とは何か？

あなたが、どんなにこの世で偉大なことを成し遂げても、人の羨むような素晴らしい家庭を築いても、どんなに大金持ちになっても、そんなものは、みな時と共に消え去る非真実です。あなたがどんな見事な国宝を見ても、どんな素晴らしい世界遺産を見ても、どんな感動的な天体ショーを見ても、それもみな、時と共に消え去る非真実です。五官で感じるもので、真実なるものは何一つないのです。では、真実はいったどこにあるのでしょうか。

私たちの意識が永遠になくならないことは、すでに知りました。だからこそ、意識の処遇に苦慮したはずです。この永遠になくならない意識こそ、真実なるものなのです。私たちはよく「自分」といいますが、自分とは、意識が「自」らを「分」けたのです。本来意識は一つしかないのですが、形を自分と思うことで、一つの意識を沢山の意識に分けてしまったのです。しかし、どんなに分けようと、一つの意識はどこまでも一つの意識のままです。意識が一つしかないから、宇宙は真実を貫き通すことができます。

もう一度いいます。真実はこの宇宙に一つしかありません。それは「私」という意識です。「あなた」という意識です。この事実を知った者は、真実を手に入れたのです。不動の幸せを手に入れたのです。意識こそ幸せの本源だからです。

考えても見てください。

- ・ 永遠になくならない意識の自分のことを……。
- ・ 永遠に病まない意識の自分のことを……。
- ・ 永遠に老いない意識の自分のことを……。
- ・ 永遠に生まれることも死ぬこともない意識の自分のことを……。
- ・ 宇宙を自由自在に闊歩できる意識の自分のことを……。
- ・ 無限大で無限小の意識の自分のことを……。
- ・ 何でも創造し得る意識の自分のことを……。

これ以上の幸せがこの宇宙にありましようか。

何が真実で何が非真実か悟った者は、もう外にも求めなくなるでしょう。その者は、自分の意識の中で、究極の幸せを満喫するでありましよう。

### ○無限の宝物を持ち帰るには？

この宇宙には、永遠になくならない無限の宝物が存在します。それは無限の知恵として、無限の力として、無限の光として、無限の愛として、その総合された生命として……。この無限の宝物は、誰でも自由に持ち帰ることができるようになっていきます。ただし、持ち帰るためには入れ物が必要です。それも、あなたが望む大きさの入れ物が必要です。なぜなら、この宝物は、入れ物の大きさに比例して与えられるようになっていくからです。だから無限の宝物が欲しかったら、無限の入れ物を用意しなければなりません。

でも無限の入れ物など、この宇宙に有るのでしょうか。有ります。それは意識という入れ物です。神様は、私たちに意識という自在な入れ物をお与えくださいました。その入れ物を使えば、無限の宝物を持ち帰ることができるのです。小さな入れ物にして少しの宝物を持ち帰るか、大きな入れ物にして無限の宝物を持ち帰るかは、すべて本人次第だということです。神様は、なんと素晴らしい仕組みをおつくりになったことでしょうか……。

### ○たった一つの真実を知ろう！

人間は何でも知りたがりです。それが万物の霊長たる所以なのでしょうが、はたして私たちは何でも知る

ことができるのでしょうか。また、知る必要があるのでしょうか。

この表現宇宙には、無限の元素の組み合わせによって創られた、無限の物質が存在します。それも、刻々と変化する物質です。その刻々と変化する無限の物質を、すべて知ることができるのでしょうか。

よく、物知り博士だとか、クイズマニアだとか自慢する人がおりますが、彼らは海岸の砂粒（知識）を数えるような空しいことをしているのです。数字を一、二、三、四、五……と最後まで読み切ることができないように、無限に存在する物質もすべてを読み切る（知る）ことはできないからです。しかし、神様は、無限の存在物を知る方法の一つだけ用意されました。それは、たった一つのことを知れば、すべての物を知ることができる、という方法です。

たった一つのものとは、真実です。このたった一つの真実を知れば、宇宙のすべてを知ることができるのです。すべてのものは、たった一つの真実から生まれ出たものだからです。海岸で砂粒（知識）を数える暇があるなら、たった一つの真実を知ることには生涯をかけましょう。たった一つの真実を知れば、宇宙のすべてを知ることができるのですから……。

### ○本当に知るべきものは何か？

私たちは何を知るべきでしょうか。過去生の自分でしょうか。それとも本当の自分でしょうか。よく「あなたの過去生は誰々だったのですよ！」と、人の過去生を教える宗教団体がありますが、そんなものを知っていったい何になるのでしょうか。

この現象界は幻の世界ですよ。しかも過去は過ぎ去ったページです。そんな幻の世界の幻を追いかけ、何か得することでもあるのでしょうか。たとえ過去生で偉大な名を残した者であっても、今、人間として生きている限り、何の意味もないのです。ただ自己顕示欲を満足させるだけです。

私たちが知るべきことはそんな幻の自分ではなく、真実の自分だと思えます。真実の自分は生命（神）です。私たちが知るべきことは心の底で知ることが大切なことです。過去生の自分を知っても幻の世界へ帰るだけです。が、真実の自分を知れば生命の世界へ帰ることができるからです。幻の世界に帰りましたら、どうぞ過去生の自分に酔いしれてください。しかし、真実の世界へ帰りましたら、過去生の自分に思いを寄せないことです。

どうか過去生病にかからないようにしてください。過去はもう終わったのです。今の今、本当の自分を知ることが大切なのです。

### ○外側に青い鳥を探し続ける人間

外側に幸せの青い鳥を探している者は、ボディを脱ぎ捨てた後も、外側に幸せの青い鳥を探そうとするでしょう。なぜなら、外側に本当の世界があると思っっているからです。だから彼らは、幾度となく形の世界（この世とあの世）を行ったり来たりするのです。もし、この地上界にいる多くの者が内側に幸せを求めるようになれば、幽界にいる兄弟姉妹もそれを見習って、きっと内側に幸せを求めるようになるでしょう。そうならば、わざわざ外側に幸せの青い鳥を探しに出かけることもなくなり、輪廻から抜け出すことができる

でしょう。

内側に幸せを求めるという意味は、生命を想い続けるという意味です。つまり、瞑想をするという意味です。瞑想は、幸せの青い鳥を見つける唯一の方法なのです。その瞑想は、ボディーを持つ者だけがするのはありません。幽体をまとった意識の高い者もしているのです。いや、瞑想は、形を持つ持たないにかかわらず、宇宙の至る所で行われているのです。

幸せの青い鳥は、私たちの心の中でずっと訴え続けています。「カゴの扉を開け、一時も早く私を自由にしてください！」と……。

さあ、私は肉体ではない、生命である！と宣言しましょう。それがカゴの扉を開ける秘訣なのです。

### ○死を悪と捕らえてはならない！

物事を点（デジタル的）で捕らえると、前後のつながりが不明になるため、予見がしづらくなります。でも、線（アナログ的）で捕らえると、前後のつながりが明確になるため、予見がしやすくなります。だから、間違いのない未来を開くためには、物事を点で捕えるのではなく線で捕え、正しい方向へ舵取りしなくてはなりません。

生と死も同じです。

死をデジタル的に捕えると、人生の流れが見えないため、恐ろしいもの、悲しいものとして嫌われます。しかしアナログ的に捕えれば、人生の流れが良く見えるため、尊ぶべきもの、喜ぶべきものとして受け入れ

ることができるとです。死を終わりとする今の世の中の考えでは、人生の流れを消し去ってしまうことになり、進化を目指す私たちにとって非常に損です。第一、死を恐れること自体、真実を目隠ししてしまうことになり、成長の妨げとなります。

このようなことがありました。臨終を間近に控えたおばあさんが、病院のベッドで寝ておりました。あまり枕元で家族が泣き叫ぶので、おばあさんが意識を取り戻したのです。その第一声がこうでした。

「なぜ呼び戻したのですか。せっかく気持ちのいい世界にいたのに……」

肉体は苦しんでいるように見えても、本人は苦しんでいないのです。いや、苦しいどころか、喜びに満ちているのです。死を苦しみの代名詞にする人がおりますが、死は苦しいものではなく、喜ぶべきことなのです。ただ、青い内にもぎ取るから苦しいのです。熟した柿が自然と落ちるように、十分本懐を遂げた生命は、苦しむことなく肉体から離れて行くのです。カゴから解き放され喜ばない鳥がいないように、私たちも本懐を遂げれば、喜んで天に舞い上がってゆくことができます。

私たちはこれまで、何万回となく死を体験してきたのですよ！ 今更どうして死を恐れるのですか。

死は、生と生とをつなぐ一時の休息です。前の生と今の生はつながっているのです。今の生と未来の生もつながっているのです。今、私たちは前後の生をバトンタッチし、より高い進化の階段を上っている真つ最中なのです。このことが分かれば、死を恐れることも悲しむこともなくなります。当然、肉体への執着もなくなるでしょう。もう豪華な棺桶はいらなくなります。お墓も納骨堂もいりません。衛生上、火葬場は必要

かもしれませんが、焼いた骨は、砕いて土に埋めるか川に捨てるかすればいいのです。土から出た物は土にかえすのが自然です。もし、骨壺に入れ大切に保存しようものなら、骨が元の原子に戻るのに時間がかかるので、原子の進化を遅らせることになるでしょう。

迷信や俗信に惑わされず、何事も科学的に考えてください。お経が人を救うことなどないのです。神仏を拜んで救われることなどないのです。救うのは自分自身です。人間だ！ 肉体だ！ 個人だ！ と誤解しているのは自分ですから、自分で誤解を解くしかありません。他力はありません。すべて自力です。

死を点で捕らえ、過去・現在・未来の線を消している社会に進歩はありません。さあ、デジタル的な死生観を捨て、アナログ的な死生観を持ちましょう。

### ○偽りは偽りしか語れず真実は真実しか語れない

人間は造られたもの、生命は創り主。人間が真実なるものを創れない理由は、人間は造られたニセモノだからです。造られたニセモノは、真実なるものを考えることも、真実なるものを語ることも、真実なるものを創造することもできないのです。なぜなら、真実を知らないからです。真実を知らないから人間をやっているのですから、そんな無知な者が真実なるものを創造できるわけがないのです。

真実は真実しか知らないのです。偽りは偽りしか知らないのです。真実しか知らない者は、真実しか考えられないし、真実しか語れないし、真実しか創れないのです。反対に、偽りしか知らない者は、偽りしか考えられないし、偽りしか語れないし、偽りの物しか造れないのです。だから、偽りの人間は、環境を破壊す



るのです。人間社会に不幸が絶えないのは、偽りを偽りとも思わず、偽りの物を創造しているからです。

だからこそ人間は、一日も早く生命に目覚めなければならぬのです。本当の自分が生命だと知れば、真実しか知らない者になりますので、偽りを考えることも、偽りを語ることも、偽りの物を造ることもなくなるでしょう。

### ○認めるからある！

外側の物がすべて幻であることは、これまで何度もいい続けてきたところですが、その意味の深さを知るのは容易なことではありません。そこで再度、復習を兼ね勉強してみたいと思います。

外側に現れた物は死に絵だといい、本当にあるものでないといいましたが、その理由は、形を取った物は次元が違うからです。私たちの意識（心）は絶対界に属するものですから、本来、次元の違う外側の物の影響を受けることはないのです。影響を受けるのは、外側の物を本当であると認めるからです。それはあたかも、恐ろしいテレビ・ドラマを見て恐怖しているようなものです。テレビ・ドラマは次元が違うのですから、影響を受けることはないのです。同様に、この世の出来事も次元が違うのですから、絶対界に属する私たちの心に影響が及ぶことはないのです。

どんなに外側の物が暴れても、自分の心が認めなければ、シミ一つ、傷一つつくことはないのです。それは影だからです。幻だからです。もし傷ついたとしたら、それは誰が悪いのでもなく、外側の物を認めた自分が悪いのです。本当はないのに、あると認めるから傷つくのです。

この宇宙には、たった一つの主観的な意識しかないのですから、主観的宇宙しかないのです。主観的宇宙しかないということは、自分の宇宙しかないということですから、自分の意志で自分の宇宙をどうにでもできるのです。ゆえに、意識の持ち方が大切になってくるのです。そのためにも、宇宙の仕組みをよく知ることです。

恐れるべきは、唯一自分の想いです。心穏やかでありたかったら、自分の心をネガティブな想いで汚さないことです。そのためには、実際には、外側の物を認めないことです。受け入れないことです。「認めるからある！」この意味の深さをよく考えてください。

### ○知る・伝える

私たちは知ったといいますが、ここまで、知ったという言葉は使えても、全部知ったという言葉は使えないのです。なぜなら、知ることには際限がないからです。また、その知る内容も、知る人の意識の高さや理解力の高さによって違ってきますので、一様な知り方はできないのです。その意味では、この宇宙の仕組みを一様に、しかも完全に知ることは永久にできないでしょう。

たとえば、ある宇宙の仕組みを知ったとしましょう。その知り得た内容は、その人の意識の高さや理解力の範疇で知ったのであり、すべてを知り得たわけではないのです。ましてやそれを人に伝えるとなると、伝える側と受け取る側に意識的ずれがある（意識の高さや理解力が違う）ため、一様に伝えられないし、一樣に受け取れないし、また真意も伝わらないのです。ですから、現代科学で重視されている、普遍性や、再現

性や、客観性は、意識の世界ではあり得ないのです。受け取る側の意識の高さや理解力の高さが違えば違うほど、普遍性や客観性が失われてしまうからです。意識の世界が一つの枠の中に収められないのはそのためです。

主観で知ったことを客観的に伝えることは絶対にできません。したがって、一人一人が自力で、自分の主観の中で知るしかないので。人をあてにしなければならない理由は、人の思いを自分の思いにできないからです。裏返せば、自分しかない！ 自分の意識しか存在しない！ 自分の外何も存在しない！ という証なのです。

### ○真実とは何か？ パート3

これまで真実について述べてきましたが、ここで総まとめをしてみたいと思います。

真実とは、この宇宙にたった一つしかない意識です。意志です。理念の主です。知恵です。力です。光です。愛です。これらをすべて併せ持った生命です。

すなわち、私です。その私は永遠不滅です。完全無欠です。無限なるもの、普遍なるもの、絶対善なるもの、それは無形にして無双です。目で見えることも肌で感じることもできません。ですが、意識でなら観ることも感じることもできます。なぜなら、意識を持っている私そのものが、真実そのものだからです。

なぜ私が真実かは、次のような論理で示すことができますでしょう。

もし、肉体がなくなると同時に私の意識がなくなってしまうなら、意識は肉体に対して絶対的なものにな

りますから、宇宙は「無」となり、真実を失ってしまいうでしょう。しかし、肉体がなくなっても、私の意識は決してなくならないわけですから、意識は肉体に対して相対的なものとなり、宇宙は真実なる「有」を貫き通すことができるのです。

「無」の宇宙に何の意味があるでしょうか。「有」の宇宙だから意味があるのです。私の意識は、その「有」を実感してやれる唯一の存在なのです。だからこそ、私の意識は真実そのもの、生命そのもの、宇宙そのものといえるのです。意識こそ真実の実態です。意識あるものは、すべて真実そのものなのです。

ということとは、すべての物に意識があるわけですから、宇宙そのものが真実そのものということになるでしょう。それゆえに私たちは、何を見ても、何を感じても、真実と思わなくてはならないのです。

あなたの両親は真実そのものです。あなたの妻（夫）は真実そのものです。あなたの子供は真実そのものです。隣人も、友人も、会社の上司も、同僚も、部下も、みな真実そのものです。黒人も、白人も、どんな人たちも、みな真実そのものです。鉱物も、植物も、動物も、みな真実そのものです。だから、すべての人たちは、すべての物を、等しく愛さねばならないのです。ただし、形を真実だといっているわけではありません。形の中で生きて働いている一なる生命を真実だといっているのです。その点を誤解しないでください。

(5) 真理のよろず箱

○日々科学研究にいそしんでいる私たち

私たちは、日々、化学研究所と科学研究所の両研究所で研究にいそしんでいます。

化学研究所は物質の法則を主な研究課題にしており、その場所は最も身近な私たちの家庭です。特に台所や風呂場やトイレは、化学研究の重要な実践の場です。また、肉體そのものも研究課題の一つでしょう。一方、科学研究所における研究の主題は心です。その実践の場は、家庭や職場や社会です。そこで様々な心の機微を研究します。中でも、どのような想いを持ち、どのような言葉遣いをし、どのような行動をすれば幸せになれるかなどの研究は、最も重要な研究題材の一つでしょう。

私たちは、家庭や職場や社会で、実践を通して研究し、一つ一つ自分の心の中に研究成果を積み上げて行くのです。その成果は、実践者自らが受け取ります。そして、その成果を基に、宇宙の仕組みや本当の自分を発見してゆくのです。このように、一人一人の心が研究所であり、実践の場であり、成果の受取人です。すべてそこに自分が入っています。

科学は、本当に有るものを研究する学問です。対して化学は、本当でない物を研究する学問です。本当に有るものとは、真理の世界のこと、心の世界のことですから、科学を研究することほど大切なことはないのです。その研究の鍵となっているのが疑問です。日々の生活の中で疑問を持ち、その疑問を自分に問いかけ、

気づいたことを実践する、この実践自体が研究発表になっているのです。

どんな偉大な物を造るより、どんな偉大なことを成すより、心の科学ほど大切な研究はありません。心こそ真実なるものだからです。その心についての研究は、日々意識せずやっています。私たちの日常生活そのものが、科学研究そのものなのです。私たちは毎日科学研究の中で研究しているのに、そのことに気づいていないだけです。

### ○真の人類救済とは？

真の人類救済とは、病気を治してやったり、経済的に助けてやったりすることでしょうか。いいえ、そのような救済はインスタントの救いであり、真の救いではありません。真の救いとは、本当の自分に帰してやることです。すなわち、生命に目覚めさせてやることです。人を目覚めさせる救いは、永遠の救いです。だから覚者たちは救いの予先をその一点に絞り、必死になって訴え続けているのです。

もちろん、肉体が不健全であれば真理の探究どころではないでしょうから、病気を治してやることも、経済的に助けてやることも、必要な場合があるでしょう。しかし、それを安易にやっては、返って真理の探究の邪魔になる場合があります。なぜなら、必要だから貧しくなり、必要だから病気になるたのですから、その学びの材料を安易に奪っては成長を遅らせかねないからです。だから、物的救済はよほど慎重にやらねばならないのです。肉体は無常なるものですが、心は永遠なるものです。永遠なるものを救ってこそ、真の救いになるのです。このように、真の人類救済とは、生命の自分に目覚めさせることなのです。

## ○失敗は成功である

人前で失敗すると誰もが恥じ入りますが、そんな恥は、成長の喜びに比べたらどうということはありません。それよりも、何も失敗せず成長しない方が恥なのです。確かに人前で失敗すると恥ずかしいし、気も滅入るかもしれませんが。でも、その体験から大変な学びをさせてもらったと思えば、むしろ喜べるはずです。

失敗は失敗ではありません。大きな成功です。失敗を怖がり何もしない方が失敗です。失敗を後まで引きずる方が失敗です。失敗を糧とし、後々生かせば、それは成功なのです。小さな恥を嘆くより、そこから学んだ大きな収穫を喜んでください。一時の失敗を恥じるか、体験から学んだ収穫を喜ぶかは、人生の意味を知った人なら分かるはずです。

## ○迷えば迷うほど成長する

迷いを毛嫌いする人がおりますが、迷いは決して悪いことではありません。迷った者ほど多くの道を知ることからです。歩いて損する道など一つもないのです。たとえその道が迷い道だとしても、迷うことによって色々な体験ができ、それが多くの発見につながってゆくからです。

迷いは、本当の道を発見するために必要なのです。迷った者ほど多くのことを知るので。迷った者ほど多くの何かを発見するのです。迷わず悟った覚者など一人もいないのです。多く迷いなさい！ といっているわけではありません。できるだけ迷わない方がいいに決まっています。しかし、そうはいかないのがこの世の厳しさです。それならばいっそ大いに迷い、早く本当の道を発見した方が利口ではないでしょうか。

歩かなければ棒に当たるとはありません。棒に当たらなければ、躓くことも、転ぶこともありません。それでは、何の発見もできないのではありませんか。迷うことが悪いのではなく、迷いから何も学ばないことが悪いのです。

さあ、勇気を持って未踏の道を歩きましょう。そして、未踏の道から色々なことを学びましょう。それが賢い人の生き方です。

### ○白と黒の謎

宇宙には白と黒が存在します。白いものの代表は白光で、すべての命の源になっています。黒いものの代表は物質で、元素がその源となっています。命の源も、物質の源も、出所は同じ白光です。ですから、命をさかのぼっても、物質をさかのぼっても、白光にたどり着くわけです。ために、白いものをジッと見詰めてみてください。そこに何かうごめくものを感じるでしょう。また黒いものをジッと見詰めてみてください。どんな色もイメージしやすいはず。単色の中に七色をイメージするより、白や黒の中にイメージする方がイメージしやすいのは、白と黒の中にすべての色が包含されているからです。白と黒は同じものなのです。ただ物質の世界では黒となり、生命の世界では白となっているだけです。

この表現の世界には様々な生き物が存在していますが、面白いことに必ず白色の生き物と黒色の生き物が存在しております。たとえば、黒蟻と白蟻・白蛇と黒蛇・黒熊と白熊・白鯨と黒鯨・人間にも白人と黒人がおります。なぜ神は、このように、白と黒の生き物を誕生させたのでしょうか。その理由は、白と黒の中に



深い意味を持たせられるからです。

白と黒は基本色です。つまり、すべての色を包含した総合色です。総合色は飽きないのです。可能性が無限大なのです。ために、白と黒をジッと見詰めてみてください。多彩な色のイメージがわいてきて飽きないでしょう。単色である赤をジッと見詰めてみてください。すぐに飽きてしまうでしょう。色彩画よりモノクロの方が飽きないといわれるのは、白と黒は多彩な色を含み持った総合色だからです。ですから、もし、心の目で総合色（白・黒）を観ることができたら、黒色の中に色々な物質の色を観ることができ、また白色の中に色々な光の色を観ることができましょう。

神は私たちに、黒と白を通して大切な真理を教えようとしているのです。それは、黒と白は基本色であるが、黒は白の影であるということ。つまり、肉体（黒）は生命（白）の影であるということを教えているのです。やがて人間はそのことを知るでしょう。そのとき人間は、生命（白）として生きられるようになるのです。

### ○死を真剣に考える

私が一番不思議に思うのは、人間はあまりにも死に対して無頓着すぎるといふ点です。死は誰にでも間違はなくやってきます。これほど確実に平等なものはありません。生まれてくる子供のことは色々考えるのに、確実にやってくる死をどうして真剣に考えようとしないのでしょうか。子供は間違っって生まれてこないことはあっても、人の死は百パーセント間違いないことなのです。

「出入り」という言葉はあっても、「入り出」という言葉はありません。初めに「出」があって、後に「入り」があるのです。息も吐くから吸えるのです。すべて出から始まるのです。だから「出発点」というのです。「発出点」とはいいません。死は出口であり、出発点なのです。

世間の人はよくこういいます。「誰々さんが死にました。惜しい人を亡くしましたね。かわいそうですね！人間は死んだらお終いですよ！」と……。

そういつているあなたは死なないのですか、と私はお訊きしたい！あなたも、あなたも、あなたも、いつか必ず死ぬのですよ！他人事みたいにいつて欲しくないものです。自分だけは死なないとでも思っているのでしょうか。

死は誰にでも必ずやってくるのです。ただ、どの様な死に方をするか、早く死ぬか遅く死ぬかだけの話です。その早い遅いも、宇宙時間から見れば一瞬です。その一瞬の命のやり取りに、人間は血を流し合っているのです。それもこれも、死に対して無知だからです。もし死を真剣に考えるようになったら、

・人間とは何か。

・人生とは何か。

・人は何のために生きているのか。

・人間は何をなさねばならないのか。

など、人間そのものを考えざるを得なくなるので、人の生き方も大きく変わってくるでしょう。

人間は人間のことを知ろうとしないのです。自分のことを知ろうとしないのです。あなたは自分のことをどれほど知っていますか。おそらく見て触れる、このボディーのことぐらいしか知らないではありませんか。それで本当の自分を知ったといえるでしょうか。

政治も経済も科学も教育も、すべて「人間とは何か」から始まるのです。殺人兵器に沢山のお金をかけるのに、一番大切な死の問題にお金をかけないとはおかしい話です。そろそろ人間は本当の自分を知るべきです。本当の自分を知れば、あらゆる難題が解決されるのですから……。

### ○現実とは何か？ 真実とは何か？

現実とは「現われている物」、すなわち今は有るように見えるが、いつか必ず消えてなくなる物のことをいいます。消えてなくなるのは、本当にないからです。つまり、幻だからです。鉱物や植物や動物や人間は、なくなりませんから現実です。

一方、真実とは「現わしているもの」、どんなに時が経とうとなくなならないもののことをいいます。永遠になくならないのは、本当に有るからです。すなわち、ホンモノだからです。神や生命や意識や光は、永遠になくなりませんから真実です。

私たちはよく「現実的ですね！」という言葉づかいをしますが、それは言葉の誤用です。なぜなら、本当に有るという意味で使っているからです。この世の物は幻ですから、「現実的ですね！」というより「幻的ですね！」といわねばならないのです。本当に有るという意味で使うならば「真実的ですね！」といわねば

ならないわけですが、この世に真実なるものは一つもないわけですから、言葉不足を補うために「現実的」といつているだけなのです。どうか、現実と真実の意味を履き違えないでください。

### ○名は体を表す!?

昔より「名は体を表す!」といわれてきましたが、本当は「名は役割を表す」あるいは「立場を表す」といわねばならないのです。なぜなら、人名は持つて生まれた役割や、立場を示すものでなくてはならないからです。

たとえば「耕作」という人の名は、畑を「耕」して食べ物を作「作」る役割を持った人です。「賢治」という人の名は、世を「賢」く「治」める役割を持った人です。「拓」という人の名は「石」を「拾い」道を開拓する役割を持った人です。

名前をつけるとき、昔の人は、字画や字数や字の持つ意味をよく考えてつけたものですが、今は当て字を使うことが多くなり、意味不明な名前がつけられるようになりました。これでは人の役割が見えてきません。人間は神の代弁代行を果たす役割があるわけですから、本当は字の意味をよく考えた上でつけるべきなのです。とはいえ、全く意味のない名前はつけられていませんので、一度自分の名前の意味を調べてみてください。役割が見えてくるかもしれません。

ちなみに「名字」は、祖先が住んでいた地名や場所名などを使っている場合が多いようです。たとえば、「川上」さんは「川」の「上」に住んでいる人、寺下さんは「お寺」の「下」に住んでいる人、田端さんは

「田」の「端」に住んでいる人、といった具合です。

### ○普遍法

人の世に普遍法の網はかけられません。みな個々の立場の意識しか持ち合わせていないからです。個々の立場の意識しか持ち合わせていなければ、当然立場の違いによる利害のぶつかり合いが生じるでしょうから、それを同じ法の網で収めようとしても、できるものではないのです。立場の違いを超えてこそその普遍法であり、それは、個々人が同じ生命としての立場に立たない限り無理な話なのです。家族間においてさえ立場の違いが生まれるのですから、それを人類全体に押しなべようとしても、できるものではないということです。

今日の人為法は、立場の違いをできるだけ客観的に捕らえて矛盾を埋めたものですが、どんなに矛盾を埋めても全員を納得させることなどできないのです。あなた私のある社会において、すべての人に都合のいい法などあるわけがないのです。どんなに議論しても、それは時間の浪費というものです。だから人間社会では、常に法律の改正が行われているのです。

もし真の人間を知り、人間が普遍的な存在であると知れば、もうそこに立場の違いは生まれませんから、普遍法の網にかけられても何の不都合も生まれませんでしょう。そもそも、普遍的自分になったら普遍法そのものが自分ですから、もうそのような法自体必要なくなるのです。

### ○真に問題にすべき問題などこの世にない！

この世に、真に問題にすべき問題など何一つ存在しません。なぜなら、この世のモノはみな消えてなくな

る幻だからです。どんなに地位や名誉や財産を築いても、いつか必ず消えてなくなってしまうのですよ！  
第一、自分のものと思っているこの肉体さえも、自分のものではないのですからね……。沢山の財産を築いて亡くなったあなたの祖父は、築いた財産をあの世に持ち帰りましたか。また、地位や名誉を築いて亡くなったあなたの叔父は、築いた地位や名誉をあの世に持ち帰りましたか。あなたもそうです。どんなに地位や名誉や財産を築いても、死ねばみなこの世に置いてゆかねばならないのですよ！ そんな世界に、どうして問題にすべき問題があるでしょうか。この世は腰掛けの世界なのですよ！ ならば黄金の椅子など、いろいろなではありませんか。

人間関係に悩み自殺する人がおりますが、どうして腰掛けの世界に死ぬほど悩む問題があるのでしょうか。自分で勝手に問題を大きくして、苦しんでいるだけです。また、テロで世界を変えようとしている人もおりますが、この世は時々刻々と状況が変わる先の見えない世界です。十年もしたら社会の情勢が全く変わってしまう、掴みどころのない世界なのです。そんな世の中に、真に問題にすべき問題などあるはずがないのです。山より大きな猪は出ないのでしょ！ 明日は明日の風が吹くのですよ！ ですから自殺や爆弾テロなど、短絡的なことはしないことです。

私が、何事も五十歩百歩で止めなさいというのは、どんなに車をピカピカに磨いても、すぐにハトの糞が落ちてくるかも知れないからです。あなたは、車を磨いたすぐ後に泥水をかけられた体験はありませんか。それなら、五十歩の力でやればいいではありませんか。

この世が本当に有ると思っている人や、肉体が自分だと信じている人は、どうしても小さな問題を大きな問題にして悩むのです。それは、この世の物に執着しているからです。その執着は無知から来るのです。だから、無知こそ最大の罪といわれるのです。この世が幻だと知った賢い者は、決してこの世の物に執着しません。だから、彼らの目には、どのような大きな問題も小さな問題にしか写らないのです。

誤解しては困りますので言い添えますが、私が五十歩百歩で止めなさいといったのは、この世は腰掛けの世界だからです。しかし、生命の世界はそういうわけにいきません。生命の世界は真実の世界ですから、い加減な生き方をしては、大変なことになってしまいます。このことだけは脳裏に止めておいてください。

### ○身を守り過ぎて身を滅ぼしている人間

知花先生は、「肉に生きるは死である。肉に死んでこそ真に生きる者となる！」とおっしゃっておられますが、この言葉は、人の生き様を考えたとき、なるほどと頷けるのです。

たとえば、私たちは、

- ・ 身を守ろうとして必死に戦い、身を滅ぼしているではありませんか。
- ・ 身を守ろうとして必死に働き、身を滅ぼしているではありませんか。
- ・ 身を守ろうとして悪事に手を染め、身を亡ぼしているではありませんか。
- ・ 身を守ろうとして人を騙し、身を亡ぼしているではありませんか。
- ・ 身を守ろうとして人を脅し、身を亡ぼしているではありませんか。

・身を守ろうとして盗み、犯し、傷つけ、殺し、身を亡ぼしているではありませんか。

生活を守るため、家族を守るため、一生懸命生きている人たちは私は批判するつもりはありませんが、その行き過ぎで身を滅ぼしている人たちが人間社会には多いのです。人はどんなに生きても百年そこそこです。ならば、日々生きられるだけのお金や物があればいいのではないのでしょうか。しかし、人間は欲に誘われ、百年そこそこの命を守ろうとして、返って命を縮めています。この世に争いが絶えないのは、あまりにも保身に走り過ぎるからです。もし足る事を知り、必要最小限度の生活で甘んじるなら、人と人のいさかいはもちろん、国と国とのいさかいても決して起こらないでしょう。

「あの島は私の国の島である！ いや、私の国の島である！」と、島の取り合いをしていますが、これほど滑稽な話はありません。この地球上に、私の島あなたの島などないのです。あるのは皆の島です。神は私たちに、何でも平等に与えてくれております。それを崩しているのは、人間の欲です。人より多くの物を、人より豊かに。こうした欲望が争い事を生み出しているのです。

過剰なほど身を守ろうとするのは、自分のことを肉体だと思っているからです。肉体を自分だと思っている限り、この世から争いをなくすことはできません。だから覚者は口を酸っぱくしているのです。「生命に生きよ！ 欲を捨てよ！ 足る事を知りなさい！」と……。

身を捨ててこそ渡る瀬もあり！ という諺がありますが、その意味は、身を捨てる気なら渡る瀬はいくらでもありますよ！ すなわち、過剰な保身に走らなければ生きる方法（道）はいくらでもありますよ！ と



いつているのです。もし人類がこの諺を杖として生きるなら、戦争はもちろんのこと、経済問題も、環境問題も、国内外の諸問題も、ことごとく解決するでしょう。

○**本当に有るものを前提に社会を築こう！**

本当でない人間を前提に社会を組み立て、どうしてまともな社会が築けましょうか。それは、砂の上に築かれた建物のようなものです。

永遠の生命を前提に築かれた社会と、無常の人間を前提に築かれた社会のどちらが揺るぎない社会になるかは、誰が考えても分かることです。しかし、今人類は、無常の人間を前提に社会を築いています。これでは建物が傾くのも無理はありません。もし永遠の生命を前提に社会を築くなら、どのような嵐が襲ってもビクともしないでしょう。

地に足をつけた社会とは、本当に有る生命を前提に築いた社会のことです。地に足を浮かした社会とは、本当でない人間を前提に築いた社会のことです。本当に有るものと本当でないものの識別がいかに大切か、もうそろそろ人間は気づいてもいいころです。さあ、永遠に崩れない土台の上に社会を組み立てましょう。そこには、何一つ不安も苦しみも生まれようがないのですから……。

○**社会は人の心の反映**

有るものとなないものの識別は、形の有るなしや、見える見えないで判断してはなりません。見えても実際にはないし、見えなくても実際に有るからです。

どんなものにも、見える側面と見えない側面があるのです。社会も同じです。見える側面と見えない側面があるのです。見える側面とは形として現れた社会のこと、見えない側面とは人の心の中にある社会のことです。社会は人の心が集まってつくられたものですから、社会の下図は人の心の中にあるのです。今の社会が混迷に喘いでいるのは、人の心が混迷に喘いでいるからです。裏と表は二つで一つです。内側の見えない人の思い（裏）が、形（表）となって外側に現れているのです。

どんな心が集まればどんな社会を生み出すかは、推して知るべしです。だから、私は心を重要視するので、どんなに結果をいじくり回しても解決しないのは、現れた物は結果次元だからです。事の起こりの背後にあるのは心（原因）ですから、心（原因）を直さない限り解決しないのです。こんなことは子供でも分かる当たり前なことです。その子供でも分かる当たり前なことを政治家たちは分かろうとしないで、無駄な予算を結果に費やしているのです。

人は心の反映です。社会は心の反映です。地球は心の反映です。宇宙は心の反映です。何がこの世界をつくっているのか、気づいてください。

### ○原因の究明とは？

今、人類は、環境問題、経済問題、人種問題、教育問題、医療問題など、様々な難問に直面していますが、何一つ解決策を見いだせないままです。それは、原因を放って置き、結果ばかりを追いかけているからです。原因を究明すればすべての難問が解決されるというのに、人間はそれをしようとしません。

原因の究明とは、人間を知ることです。本当の自分を知ることです。しかし、人間は人間を知ろうとしません。人間を知らないということは、自分を知らないということです。自分を知らないということは、何も知らないということです。そんな無知な者が、何をしに何処へ行こうというのですか。それはまさに、羅針盤も持たず大海原を航海する船のようなものではありませんか。これでは座礁するのも無理はありません。人類はそんな航海を、何百万年もやってきたのですよ！

肉体を自分だと思えば、保身に走るのも当たり前、欲を持つのも当たり前、物の奪い合いをするのも当たり前、戦争をするのも当たり前です。しかし、本当の人間を知れば、そのような愚かなことはしなくなるのです。なぜなら、本当の人間を知れば、成すべきことも行先も見えてくるからです。

ほとんどの人は、一生を迷妄の中で終えております。これでは何のために生まれてきたのか分かりません。ぜひ、本当の自分を知ってください。そうすれば、すべての難問が解決されるのですから……。

### ○有るものを想念せよ！

どうしたら幸福感が得られるか、簡単な方法を教えましょう。それは、有るものを想念し続けることです。有るものとは、神のこと、生命のこと、光のこと、すなわち真実のことです。ない物とは、物質のこと、闇のこと、すなわち非真実のことです。有るものを想念すれば、心は精妙な世界に入りますから、心が落ち着き幸福感が得られるのです。反対に、ない物を想念すれば、心は粗雑な世界に入りますから、心はざわめき不快感を味わうのです。

多くの人が苦しんでいるのは、大半の時間を、ない物の世界に意識を向けているからです。前にも述べたように、来ないと分かっている電車を待つことほど苦しいことはありません。私たちの心は、ない物に意識を向けると苦しくなるようにできているのです。ない物に意識を向ければ、粗い波動の世界に入るため、心穏やかに生きられないからです。

あなたは一日、何を想って暮らしていますか。家族のこと、友達のこと、学校のこと、会社のこと、上司や同僚のこと、恋人のこと、買い物のこと、旅行のことですか。それらは本当に有るものですか。みな幻ではありませんか。幻を想い、どうして幸せになれましょうか。

どうか真実に意識を向けてください。本当に有るものに意識を向けてください。そうすれば幸福感が得られます。さあ、一日二十四時間のうち、せめて四時間でもいいから有るものに意識を向けましょう。何の技術もありません。ただ、「神に、生命に、光に、真実に」意識を向けるだけでいいのです。それを続けたら、体調が良くなります。気持ちが晴れ晴れとしてきます。心が穏やかになります。幸福感が得られます。ぜひ試してみてください。

### ○本当に賢い者とは？

本当に賢い者とは、己の心の中に常に平安を持っている人のことでもあります。人間の幸せを決定づけているのは何だと思えますか。それは心の平安ではありませんか。そのことを知っている賢者は、自分の心の中に闇をつくらぬのです。闇をつくれれば、悩みとなり、苦しみとなり、平安が去って行くからです。

闇とは、恨み・憎しみ・悔しさ・心配・恐怖・怒り・嫉妬・妬み・嫉みなどの思いです。それは、過去に囚われ、現在に悩み、未来に憂うところから生まれる心の燻りです。そのことを知っている賢者は、過去のことや、今の生事のことや、未来のことを、くよくよ考えるようなことはしないのです。

賢者は、今の今を正しく生きようとします。今正しく生きれば、過去を正当化し、未来も正当化させることができますからです。

たとえば、あなたは過去に、何か失敗を犯したとします。もしあなたが、その過去を引きずって今生きているなら、その過去は死んだ過去になります。でも、その過去から教訓を受け取り、今正しく生きています。その過去は生きた過去になります。今正しく生きられるのは過去から学んだ結果であり、それは過去を生かしたことになるからです。いや、それだけではありません。今正しく生きれば、当然未来も正しく生きられるでしょう。

—ということは、過去を正当化しただけでなく、未来も正当化させられるということです。過去は今を築いています。今は未来を築いています。だから今を正しく築けば、過去を正しく築き変え、未来も正しく築くことができるのです。今の中に過去も未来もあるといわれるのは、今どう生きるかで、過去も未来も変えることができるからです。

よく過去を思い出し、懐かしがったり、悔やんだり、腹を立てたりしている人がおりますが、その人は出し終わったジャンケンを悔しがっているようなものです。出し終わったジャンケンの勝ち負け（結果）は変

えることはできないのですから、いさぎよく諦めることです。それよりも、今正しく生きる努力をすることです。

戦争や災害を忘れてはならないといって、毎年国を挙げて祭典や式典を行っています。そんなことをしたって過去を元に戻すことはできないのです。どうしてわざわざ嫌な過去を思い出し、心を痛めるのでしょうか。そんな時間があるのなら、今の今を正しく生きることに時間を費やすべきです。今の今正しく生きれば、過去を正当化し、未来も正当化できるからです。過去の不幸が今の幸せに役立ったわけですから、その過去はもう不幸な過去でなくなるのです。つまり、過去悲惨な死を遂げた人の死は、無駄死にでなくなるのです。本当に賢い者とはこのように、今の今を正しく生きている人のことなのです。

### ○求道者の誰もが体験する心の葛藤

求道者の中に、このようなことをいう人がおりました。「真理を知らない前は心から楽しめたのに、真理を知ってからは楽しめなくなった」と……。

そうです。この世が本当に有ると思っていたときは、この世の楽しみは心から楽しめるのです。しかし、この世が幻だと知れば、どんな楽しみも心から楽しめなくなるのです。これは求道者が一様に体験する心の変化です。自我は楽しみを求めるのに対して真我は拒むため、自我の自分と真我の自分との間で葛藤が生まれるからです。特に、瞑想を生活の一部にしている人は、真我と自我の板挟みになって多く苦しむでしょう。でも、そこまで来た人は、もう諦めてください。たとえ自我が勝ち、この世の楽しみを味わったとしても、

真理を知った魂は心から楽しめないのですから……。味わっても虚しくなるのですから……。

「でも、なかなか葛藤から抜け出せません！」という人がおりますが、それはまだ、真理に対する確信が持てないからです。この葛藤から抜け出すには、心から真理を信じる以外ありません。今追及している真理が、間違ひなく究極の幸せへ連れて行ってくれると信じられたら、この世の一時の幸せを求めなくなるでしょう。

ただし私は、この世の楽しみをすべて手放しなさい、とっているわけではありません。肉体を持っている限り、ある程度の楽しみは必要です。ホドホドの楽しみはあつていいのです。ただ、その楽しみにのめり込み、人生の目的を見失うようなことだけはしてほしくないのです。

以前は、悪いことをしてもそんなに良心が痛まなかつたけれど、真理を知つてからは良心が痛むようになったという人、あるいは、真理の探究が深まるにつれ、心からこの世の楽しみが味わえなくなったという人は、魂が成長した証ですから大いに誇つていいのです。

### ○天孫降臨

天孫降臨といへば、何か神秘的なことと思われるかもしれませんが、人間はもとより、この世に存在するどんな物もみな天孫降臨したものののです。なぜなら、鉱物も、植物も、動物も、人間も、神なる本質によつて生み出されたものだからです。天孫降臨していないものなど一つもないのです。ということは、みな同じ仲間だということです。同じ仲間どころか、みな自分なのです。神なる本質は宇宙に一つしかないわけ

すから、みな自分なのは当然でしょう。

天孫降臨した同じ仲間なのに、人間はどうして差別するのでしょうか。神の体をどうして差別するのでしょうか。砂も石も花も木も鳥も犬も猿も人間も、みな神の体なのですよ！ だから何とでも仲良くしなければならぬのです。これも神、あれも神、それも神、あなたも神、私も神です。神同士がいがみ合うなんて愚かです。さあ、皆仲良く手をつないでこの地球を守りましょう。

### ○この世はあべこべ！

あるところに鏡のない国がありました。その国の者は、誰も自分を見たことがないので。「いったい自分はどうな姿をしているのだろう」と、みな自分を知りました。ある日隣国から鏡が寄贈され、それ以来国民は自分の姿を見ることができるようになりました。でもそれは、真実の目を狂わされる始まりでもあったのです。なぜなら、鏡に写っているニセモノの自分を、ホンモノの自分だと錯覚するようになったからです。鏡に写っている自分は左と右が反対です。目も耳も逆様です。

この話は比喩的に語られたものですが、宇宙の真髄を突いている、見逃すことのできない真理なのです。ここで語られている鏡とは、見えないモノを見える物として写し出す道具のことで、この表現の世界のことをいっています。この世は、見えないモノを写し出す鏡なのです。その鏡は、すべて逆様に写し出すようにつくられています。だから私たちは、いつも逆様なものを見ているのです。

私たちが住んでいるこの世界は、写真の原板（ネガ）と同じようなものなのです。暗いところが明るく、



明るいところが暗いのです。つまり、この世はすべて逆様なのです。

列挙してみましよう。

- ・活字は逆様です。
- ・鏡に写っているのは逆様です。
- ・宇宙は明るく、地球は暗いのです。
- ・黒は白です。
- ・見えないモノがホンモノで、見える物はニセモノです。
- ・見えない人間がホンモノで、見える人間はニセモノです。
- ・富める者は貧しい者です。貧しい者は富める者です。
- ・知る者は知らない者です。知らない者は知る者です。
- ・悪は善です。
- ・不完全は完全です。

このように、この世はあべこべなのです。神はあべこべを通して、私たちに眞実を発見してもらおうとしているのです。生まれたばかりの赤ちゃんは、物を逆様に見ているといわれますが、大人の私たちの方が逆様に見ているのです。

## ○震災が残した教訓

二〇一一年三月十一日の東日本大震災では沢山の犠牲者が出ましたが、これを単に偶然で済ませたり、仕方ないで済ませたのでは、犠牲者は犬死になってしまいます。また、何の進歩もありません。神は完全ですから、意味のない災害は起きないのです。つまり、震災が起きたからには、起きた理由（原因）が必ずあったのです。その原因を追究しないで、ただ頑張ろうで終わったのでは、犠牲になった人たちは浮かばれません。確かに、多くの人が亡くなったわけですから、悲嘆にくれるのは当然でしょう。でも、その教訓から大切なことを学んでこそ、亡くなった人たちに報いることができるのです。

では、この震災は私たちにどんな教訓を残したのでしょうか。

- ・ 人類に対しては、物質文明に対する教訓です。
- ・ 市町村に対しては、自然と人間社会の調和に対する教訓です。
- ・ 人間一人一人に対しては、日々の生活に対する教訓です。
- ・ 最も重要な教訓は、人生の意味に対する教訓です。

細かく追及すればとても書ききれないほどの教訓が、あの災害にはあったのです。どうか、心を澄まして教訓の意味を考えてみてください。沢山の気づきがあるはずですよ。

## ○パンドラの箱

ギリシャ神話に登場してくる人物にパンドラという名の女性がおりますが、パンドラという女性は物質を

擬人化したもので、人間の女性のことをいっているわけではありません。なぜ擬人化したかといいますと、表現宇宙において、女性は物質の象徴的存在となっているからです。

「神ゼウスはある一人の女性に、あらゆる災いの種を封じ込めたパンドラの箱を持たせ地上に遣わしました。ところが誤って箱を開けたため、地上は苦しみや悲しみで覆われることになった」と、ギリシャ神話ではいわれています。しかし、この神話の本当の意味は次のようなものです。

神は自分の存在を明らかにするために表現宇宙を創造しようと思ひ立ち、自らの意識核(光)を放射しました。「初めに光ありき、その光によってすべては成れり！」と旧約聖書で謳われているのは、そのことをいっているのです。

創造の思いとは「神の想い・理念」のことです。パンドラの女とは「物質・原子」のことです。そして意識核(光)の放射のことを、パンドラの箱を開けたといっているわけです。だから、誤って箱を開けたのではなく、神自らが意図を持って開けたのです。

神は、その表現宇宙に、銀河を創り、星々を創り、その星々に様々な生き物をお創りになりました。まさに神は、偉大な設計家であり、画家であり、彫刻家であり、建築家であり、またドラマの作家であり、演出家であり、演技者であります。人間はドラマを演じる役者として創られたわけですが、その中に宿って生きて働いているのは神の分身である生命核(魂)です。分身である生命核は、しっかりとした意識と意志を持ち、自らドラマをつくり、自ら演じているのです。人間神の子のいわれは、神のあらゆる能力を備え持った神の

ミニチュアだからです。それなのに、人間にはその自覚がありません。肉体を自分だと思い違いし、無力で、不自由で、苦しみ多い人生を送っています。

ですが、人間は、ドラマを演じる中で自分が神であることを悟り、お土産であるドラマを持って神意識の中に(パンドラの箱の中に)帰ってゆくのです。パンドラの箱とは、このように、神の想いの箱・理念の箱のことであり、私たちの故郷なのであります。

パンドラの箱から出てきた意識核が様々な生き物を生み、その生き物たちが様々なドラマを生み、そのドラマを携えて再びパンドラの箱の中に帰って行く、その繰り返しは宇宙の脈動運動です。相対宇宙と絶対宇宙は、この脈動運動によって永遠の命を得ているのです。また、究極の幸せも、この働きの中から生まれてくるのです。

### ○偽りは偽りしか語れず 眞実は眞実しか語れない

人間は造られたもの、生命は創り主。人間が眞実なるものを創れない理由は、人間は造られたニセモノだからです。造られたニセモノは、眞実を考えることも、眞実を語ることも、眞実なるものを創造することもできないのです。結局のところ、眞実を知らないからできないのです。眞実を知らないからこそ人間をやっているのですから、そんな無知な者が眞実なるものを創造できるわけがないのです。

眞実は眞実しか知らないのです。偽りは偽りしか知らないのです。眞実しか知らない者は、眞実しか考えられないし、眞実しか語れないし、眞実しか創れないのです。反対に偽りしか知らない者は、偽りしか考え

られないし、偽りしか語れないし、偽りの物しか造れないのです。それで、偽りの人間は環境を破壊するのです。人間社会に不幸が絶えないのは、偽りを偽りとも思わず偽りの物を創造しているからです。だから人間は、一日も早く生命に目覚めなければなりません。本当の自分が生命だと知れば、真実しか知らない者になりますので、偽りを考えることも、偽りを語ることも、偽りの物を造ることもなくなるのです。

### ○先生は自分の中にいる

「先生」とは、「先」に「生」まれた、と書きます。この世に存在しているものは、すべて途中で生まれたものですから「後生」と書き、一人として先生の資格はありません。真に先生と呼べるのは、永遠の昔よりこの宇宙に存在していた「生命・神」だけです。だから覚者はいうのです。「この世の何者も先生と呼んではならない！」と……。

よく、私があなたの苦しみを取ってあげましょうとか、救ってあげましょうとかいう人がおりますが、他人が他人を救うことは絶対できません。なぜなら、人間と思わせているのは他人ではなく、自分自身だからです。自分で自分のことを、人間だ！ 肉体だ！ 個人だ！ といって苦しんでいるわけですから、自分自身で苦しみを取るしかありません。

確かに、迷っている人に外側から、あなたは人間ではなく生命ですよ、とアドバイスはできるかもしれませんが。しかし、そのアドバイスを受け入れ、生命と思えるようにするのは自分しかいないのです。自分が自分に教え、自分が自分を目覚めさせ、自分が自分を救うのです。いまだかつて真理の導き手が人手に渡った

ことがないといわれるのは、私たちの中にホンモノの指導者がおられるからです。自分が自分を救うとは、そういう意味なのです。

さあ、永遠の昔よりいる先生（大師・生命）から教えを請いましょう。その先生は、手よりも足よりも近い自分の中にいるのです。

○納得のいかないものは受け入れてはならない！

私たちの中には神がおられます。その神は納得のいかないことは認めようとしません。もしあなたに納得できないことがあるなら、それは神が認めないからです。神は認めないものは受け入れないのです。夫婦は生まれる前に契約済みだといわれますが、通常二人の出会い、合うべきにして合うようになっていくのです。偶然に出会うことはありません。すべて縁が演出してくれる必然です。その縁によって出会ったら、必ずその人につき合うようになり、結ばれるようになるのです。これは、魂同士が引きつけ合うからです。本人同士はそのことを知らないかもしれませんが、魂同士はちゃんと知っているのです。だからほとんど不調和な意識を持っていない限り、契約どおり結婚するのです。

不思議なもので、二人の出会いには縁の糸によって巧妙に仕組まれております。それは、地理的に近い縁を持つとか、学校関係で縁を持つとか、親戚関係で縁を持つとか、スポーツや芸術関係で縁を持つとか、二人が結びつきやすい環境の下に生まれてきます。その出会いのタイミングも実に巧妙に行われ、二人を自然な状態で結びつけてくれます。これは夫婦間の縁だけに止まらず、友達関係においても、職場関係においても、

師弟の関係においても、実に巧みな手綱さばきで結びつけてくれます。ですから、偶然で友達になる人も、先生になる人も、上司になる人も、同僚になる人もおりません。よほど不調和な意識を持っていない限り、縁の演出によって計画通り出会います。

でも、こんな場合は注意してください。もし、ある出会いにおいて、嫌な気分になった時、どうしても受け入れる気持ちになれない時、納得がゆかない時、その場合は拒否してください。それは、神なるあなたが、その出会いを拒否しているのです。納得のゆかない出会いは受け入れないことです。これは出会いに限らず、道を選択する場合にも当てはまることです。

私たちは人生において、選択を迫られる時期があります。「どちらの道を選べばいいか」ほとんどの人は悩みます。けれども、本当はあまり悩む必要はありません。自分の思った通りの道を行けばいいのです。あなたの中には全能なる神がおられるからです。どうか自分の思いを信じてください。

### ○人情とは？

人情という言葉がありますが、「人情」とは、この世で体験した物事に基づいて生まれた人の感情のことです。五感的なのが「情」なのです。私が情を好ましく思わないのは、情に流されればこの世の出来事に流されてしまい、どうしても苦しみや悲しみをつくってしまうからです。これは魂にとって良くありません。情は人のためならずで、決して情を深く持つてはならないのです。だから、悟りの条件の二番目に、感情の克服が出てくるのです。

人情をかけ過ぎて人を駄目にした例はいくらでもあります。また、あまりにも人情が深いため、悲しみや苦しみが深くなる、あるいは、恨みや憎しみが深くなる、といった例も沢山あります。ですから私は、人情をあまり好ましく思わないのです。

この宇宙には、天の情と地の情があるのです。天の情を愛情といい、地の情を人情といいます。愛情は天から来ており、人情は地から来ているところからそのように呼んでいるわけですが、その中身はまるで違うのです。天から来ている情は魂を成長させ、地から来ている情は魂を墮落させるのです。

たとえば、すぐに助け船を出すのが地の情けです。この行為は、助ける方は自己顕示欲を満足させ、助けられる方は甘やかしを助長させるといった、人を墮落させる方向に働くのです。対して、すぐに助け船を出さず、アドバイスをしながら見守るのが天の情けです。もちろん、耐え切れない場合は助け船を出しますが、苦しみから何かを掴むまで、できるだけ助け船を出さないようにするのが天の情けなのです。

巢立ちを怖がる小鳥を巣から突き落とす親鳥の愛のように、峻厳な愛こそ真に人を成長させてくれるのです。甘やかしの愛では、決して人を成長させないことを知ってください。

### ○真実とは幸せを味わうことである

真実という漢字を分解してみると、「真」の「実」と書きます。「真」とはいうまでもなく真理のことです。つまり、永遠不滅不変不動なるモノを指します。「実」とは結実したモノ、実ったモノ、でき上がったモノを指します。ですから通して解釈すると、永遠に失わない結実した完全なるモノが「真実」ということ



になります。

ではこの表現の世界に、そのようなモノがあるでしょうか。いいえ、一つもありません。なぜなら、この世にあるモノは、すべて消えてなくなる幻だからです。私は真実を知りたいという人がおりますが、この世で真実を知るとは絶対にできません。真実を知りたければ、本当の私を知るしかないのです。つまり、生命を、神を、知るしかないのです。なぜなら、生命は永遠不滅不変不動の絶対実在だからです。誤解しては困りますのでつけ加えますが、「知る」という言葉の本当の意味は、頭で知るといいう意味ではなく、心で知るといいう意味です。つまり、心で味わう、体感・体験する、それが知るといふ本当の意味なのです。

生命(神)の世界は、永遠不滅、不変不動の実在界のことで、そこが幸せの国、天国です。ということは、真実とは天国を意味することになります。

そうです。真実とは天国のことなのです。その天国は、天国という場所があるのではなく、天国のような幸せな意識状態があるという意味です。ですから、天国のような幸せな意識状態を体験した時、真実を知ったことになるのです。真実を知りなさいとは、「幸せを味わいなさい！ 体感・体験しなさい！ それはすべて意識状態ですよ！」といっているわけです。

覚者たちが一様に目指すのは、この真実を知ることです。知れば幸せを味わえるからです。幸せを体感・体験できるからです。それが覚者たちの目指す目的であり、迷った人たちを導く指針でもあるのです。

意識こそ真実の実態です。意識あるものは、全て真実そのものなのです。全てのモノに意識があるわけで

すから、宇宙そのものが真実そのものということになるでしょう。だから覚者たちは口々にいうのです。天国はどこにでも転がっている、と……。

### ○宇宙（神）は個性の集まり

この宇宙は、個性の集まりによって成り立っています。たとえば色は、数知れない色が集まって無色（白光）となっています。音は、無数の音が集まって無音（聖音）となっています。臭いは、無数の臭いが集まって無臭となっています。味覚も、触覚も、また同様です。どんなものも、個性が集まることによって、無限の可能性と発展性を秘めた、生きた「無態・空態」になるのです。

「無態・空態」とは、「何もない状態！」という意味ではありません。無限の可能性と発展性を秘めた、全能の結集状態を意味するのです。それはまた、夢と希望と憧れの集まりでもあり、湧き出る幸せの源泉でもあるのです。宇宙が完全なのは、無態・空態の個性が支えているからです。完全は、個性の集まりそのものなのです。だから、私たち一人一人が大切になってくるのです。

この宇宙には、何でも記憶するアカシックレコードという万能のコンピューター（記憶装置）があります。転生において演じたドラマのすべては、このアカシックレコードの中に一つももれなく記憶されているのです。それも、鉱物時代・植物時代・動物時代・人間時代のすべての記憶です。あなたの過去の記憶も記憶されているし、今生の記憶も当然記憶されるでしょう。どんなに嫌だといっても、これは意識を持つ者の逃れられない宿命なのです。なぜなら、意識が宇宙を生み、意識がドラマを生んでいるからです。

人間は死ぬと、その一生を映像によって振り返られるといいます。それは、アカシックレコードに記憶される前の、原板の一部だと思っただけでしょう。私たちの意識は最終的に宇宙意識に統合されていますが、アカシックレコードに記憶されたドラマは、究極の幸せを生み出す味つけ材料として利用されるのです。

私は何の役にも立っていない、といって横を向く人がおりますが、あなたがいなければ宇宙は成り立たないのです。もし、海水の一滴が、私は何の役にも立っていないからいい方がいい！ といっていないなくなったら、海は成り立つでしょうか。もし、体の細胞の一つが、自分一つくらいなくてもかまわない！ といっていないとなったら、身体は成り立つでしょうか。一つは全体です。全体は一つです。一つと全体の重みは変わらないのです。どうか自分を蔑まないでください。卑下しないでください。あなたは宇宙にとって、掛け替えのない存在なのですから……。

このように、宇宙は個性の集まりによって成り立っているのです。だから私は、自分を大切にしてくださいというのです。さあ、与えられた役割が終わるまで、精いっぱい生きましょう。それが、命を与えて下さった神様への恩返しです。自殺などもっての外です。

(6) 地球の夜明けは近い！

○宇宙には、秩序と計画と目的がある

人間が突然変異や偶然を信じている限り、私たちはいつまでも同じ進化の階段で足踏みしていなければなりません。人間が偶然に生まれ、偶然に病気になる、偶然に事故を起こし、偶然に死ぬなら、どんな生き方をしようと同じだからです。そこに倫理も、道徳も、宗教も、正義も、向上心も、努力も、何も必要ありません。今日の社会が混乱に喘いでいるのは、多くの人が偶然を信じて生きているからです。でも神は、そんな野放図な宇宙はお創りになりませんでした。

宇宙には偶然も、突発的なこともないのです。すべて必然です。それも、原因に見合った結果の伴う必然があるだけです。原因に見合った結果の伴う必然があるという意味は、そこに法則性があり、法則を差配している意志があるということです。そうです。この宇宙には、ちゃんとした秩序があり、計画性があり、目的があるのです。

【秩序がある】

もし宇宙が偶然に運行しているなら、宇宙の存続は有り得なかつたでしょう。きつちりとした秩序の下に運航されてきたから、今までも存続してこられたし、これからも存続できるのです。その秩序を束ねてきたのが、宇宙の法則です。(この宇宙の法則は、宇宙生命の意志と意思そのものである)特に因果の法則は、

人類の生き方に厳しい制約をかけてきました。この世に様々な苦しみや悲しみがあるのは、まさにその法則によるもので、これまで曲りなりにも人類が存続してこられたのは、この法則が人類の生き方に制約をかけたからです。もしこの法則がなかったら、人類はとうに滅びていたことでしょう。

### 【計画性がある】

宇宙は二つの計画を持っています。

一つは創造の計画、もう一つは進化の計画です。

#### 一、創造の計画

表現宇宙の創造は、次のような計画の意図を持って行われています。

- ・ 宇宙の大きな意志は、大きな創造を目的としています。（維持・発展・消滅を含む）
- ・ 中位の意志は、中位の創造を目的としています。
- ・ 小位の意志は、小位の創造を目的としています。
- ・ 微位の意志は、微位の創造を目的としています。

その計画指令は、大きな意志から中位の意志へ、中位の意志から下位の意志へ、下位の意志から微位の意志へ順次降ろされ、この表現宇宙に美しい絵を描くことになっていきます。人類は、その微位の創造を任せられているのです。微位の創造とは、この地上界に理想の世を築くことです。

#### 二、進化の計画

宇宙生命は表現宇宙を創造するにあたって、自ら意識核を放射し、時空を生み出しました。その段階で意識が希薄になったわけですが、その希薄になった意識を濃縮し（進化させ）、元の生命意識に帰すことが計画の目的なのです。鉱物から植物へ、植物から動物へ、動物から人間へと進化を遂げてきたのは、みなその目的に沿ったものです。

今、人類は微位な意識段階にあるわけですが、やがて微位の意識段階を卒業し、小位の意識段階へ進化を遂げることになるでしょう。今、地球はその直前にいるのです。進化計画はその後、小位の意識段階から中位の意識段階へ、中位の意識段階から大位の意識段階へと発展し、最終目的である宇宙意識に帰ることになるので。

このように、宇宙は着々と進化計画を進めてきたわけですが、これを支えてきたのが二つの循環の法則です。一つは表現宇宙内における循環の法則、もう一つは絶対宇宙と表現宇宙にまたがる循環の法則です。この二つの法則に支えられ、表現宇宙と絶対宇宙の目的が達成されるよう計画されているのです。

#### 【目的がある】

では、そのように計画を推進している宇宙生命は、最終的に何を目指しているのでしょうか。

「それは究極の幸せです」

人間は誰もが幸せを求めています。これは宇宙生命とて同じです。ただ、宇宙生命の幸せは、自ら永遠の命を持つがゆえに永遠の幸せが必要で、これが一時的な幸せを求めたがる人間との違いです。しかし、幸せ

を求める思いは同じなのです。

宇宙に秩序があり、計画性があり、目的があるということが理解できましたでしょうか。人類が正しく生きるためには、宇宙が何を意図しているか知らねばなりません。知れば、個人が目指す方向性も、社会が目指す方向性も、国家が目指す方向性も、人類が目指す方向性も見えてくるはずですよ。

### ○模範を示す宇宙

宇宙は人類にどのように生きなければならないかを「真」と「善」と「美」を通して教えようとしています。

#### 【真】

宇宙は、

- ・ 真実を貫き通しています。
- ・ 揺るがぬ法則の下にあります。

#### 【善】

宇宙は、

- ・ 絶対善、絶対正義を貫き通しております。
- ・ 一切のしがらみを超越しております。
- ・ まっすぐな動機に基づいて働いています。

- ・ 純朴・純粹そのものです。
- ・ 清心・誠心・聖心そのものです。

### 【美】

宇宙は、

- ・ 高いエネルギーを分け隔たりなく放出しております。
- ・ 全ての創造物に、均衡・平安・安寧と、久遠の喜びを与えております。
- ・ 宇宙の運航がバランス良くなされる心配りがなされています。
- ・ 表現宇宙におけるドラマが、より喜び多いものとなるよう、より高度なものとなるよう、より美しいものとなるよう、心配りがなされています。

このように、宇宙は、一思一念の中に、一姿一形の中に、一挙一動の中に、真と善と美を織り込みながら、より高い調和を目指しているのです。ですから、人類はその宇宙の意思を受け継ぎ、この地球上に理想の世を築かねばならないのです。

### ○人類の意識に連動して働く自然界

今、人類は物に溺れ、完全に我を見失っています。この状態が続けば、間違ひなく大きな悲劇を生み出すでしょう。でも、そうなつては大変なので、地球は今、人類に様々な警告を発しています。それが奇病であり、動・植・鉱物の暴走であり、菌たちの暴走であり、異常気象であり、火山や地震です。



微生物から鉱・植・動物に至るまで、人類の意識に連動して働くようになってくるのが、地球の生態系の仕組みです。ですから、人間の意識が物質に偏ると、彼らも追従して偏った働きをするため、様々な災いが顕在化してくるのです。奇病も異常気象も火山も地震も、連鎖的に起きている人災です。連鎖的という意味は、自然界の生き物たちは最微から最大まで連鎖的につながっているため、最微に狂いが生じれば最大まで狂うようになるのです。

要するに、微生物は、大気の中で、水の中で、土の中で、あらゆる生き物の中で連鎖的つながりを持って働いているため、微生物が狂えば、大気を狂わし、水を狂わし、土を狂わし、生き物を狂わし、最終的に地球体をも狂わすことになるのです。

この地球上で、つながっていない生き物など一つもないのです。どんな生き物も、みな連鎖としたつながりを保ちながら、助け合い、補い合い、維持し合って生きています。その最も基本的な部分にいる微生物が狂えば、地球が狂うのは当たり前なのです。

この宇宙に意識は一つしかありません。どんな生き物も、一つの意識でつながっているのです。だから、万物の霊長である人間の意識が偏れば、大気の働きが偏り、水の働きが偏り、土の働きが偏り、生き物の働きが偏り、地球の働きが偏るのは当然なのです。局地的日照り、局地的猛暑、局地的冷夏、局地的厳寒、局地的豪雨、台風・竜巻・噴火・地震など、この偏りが何を意味しているのか、富の偏りとも考え合わせ、もうそろそろ人類は気づいて良いころです。

さあ、局地的異常が全世界に拡大する前に何とかしましょう！ それは人間にしかできないのです。地球は今思っています。「あなたたちが地球を狂わしたのですから、あなたたちの手で取り戻しなさい！」と…

### ○なぜ火の洗礼（洗霊）が必要なのか

火の洗礼には二つの意味合いがあります。一つは、人間一人一人が霊的自覚を高め自らを浄化すること、もう一つは、地球自らが自らを焼き清め浄化することです。地球において水の洗礼は度々行われてきましたが、火の洗礼はまだ数回しか行われておりません。水の洗礼は文明のやり直しですが、火の洗礼は魂のやり直しなのです。といっても、全部が全部やり直しさせられるわけではありません。

・見込みのない魂は解体されます。（解体された魂の元である意識核は、解体されても依然進化を続けている。その意味では、この宇宙に進化はあっても退化はない）

・解体するに惜しい魂は、同じような舞台でやり直しさせられます。

・そこそこ熟した魂は、新しい舞台が待っています。

火の洗礼とは選別のことなのです。聖書で謳われている最後の審判とは、この選別のことをいっているのです。このままでは、いつ火の洗礼を受けるか分かりません。火の洗礼を受けたくなければ、自力で浄化することです。

そのためには、

・自分の本性に気づくことです。

・人生の目的を知り、それに沿った生き方をする事です。

・反省によって悪的波動を消すことです。

・ポジティブな生き方をする事です。

・瞑想によって生命の自覚（靈的）を高め、波動を上げることです。

人類の波動が上がれば、黙っていても地球の波動は上がります。そうすることで、地球は浄化されるのです。人類の波動が上がれば、地球自らが自らを焼き清める必要がなくなるので、火の洗礼は回避されるのです。

### ○地球の大掃除

自分の家の二階に下宿人を住まわせていたとしましょう。もしその下宿人がだらしない人で、いつも部屋を汚していたらあなたはどうしますか。部屋をきれいに使ってくださいと注意するでしょう。しかし、いくら注意してもいうことを聞いてくれなかったら、出て行ってもらうか、自分で部屋を掃除するか、どちらかを選択するでしょう。地球だって同じことをするはずですよ。

これまで地球は人類に、何度も何度も警告を発してきました。しかし人類は、一向に改めようとしません。さあ、いったい地球はどうするでしょう。追い出しにかかるでしょう。……それとも大掃除をするでしょうか……。大掃除とは、ご破算のことです。一から文明のやり直しをさせられるという意味です。そうさ

れる前に、何とかしたいものです。

### ○人の自由意志は犯せない！

「人の自由意志は犯せない！」

これは宇宙のしきたりです。いくら美しい景色を見たいからといって、無理やり人を連れて行くわけにはいきません。その人にとっては素晴らしくても、すべての人に素晴らしきとは限らないからです。理想世界が次のステップだとしても、全人類がその世界に連れ込まれると限らないのはそのためです。

人それぞれ好みが変わります。興奮好きな者もいれば、静かさを好む者もいます。おしゃべり好きな者もいれば、寡黙な者もいます。物欲の強い者もいれば、精神的なものを好む者もいます。このように好みの違う者全員を、精神的喜びを旨とする世界へ連れ込むことがはたして幸せかどうか。もし強引に手を下したとすれば、おそらく一年もしない内に狂った者が出てくるでしょう。だから、自由な棲み分けが必要なのです。

「環境は自らが選ぶ、これが自由を尊ぶ宇宙のしきたりです」

### ○環境を悪くするのも人の心ならば良くするのも人の心

環境問題と向き合うとき、一番気をつけねばならない点は、本当に必要かどうかの見極めです。自然物は偶然に置かれているわけではありません。微生物一個、虫一匹、花一輪、石ころ一つ、その物がその場所にどうしても必要だから置かれているのです。なのに、人類は、自分たちの欲望を満たすために、勝手に生き物を移動させたり、殺したり、破壊したりしています。

・ 魚釣り、闘牛、闘鶏、闘犬などの遊びは、本当に必要なのでしょうか。

・ 爬虫類などのペットは本当に必要なのでしょうか。

・ 外国から取り寄せてまでやらねばならない植物観賞なのでしょうか。

・ 本当に必要なあって、鉱物や、植物や、動物を移動させているのでしょうか。

・ 海を埋め、山を削り、自然をコンクリートで固める自然破壊は、本当に必要なのでしょうか。

すべての生き物を進化させる使命を持っているのが人類ですから、使命に合うことなら何をしても許されるのです。でも、本当に必要なあってやっているのでしょうか。金儲けのため、欲望を満足させるため、遊びのためにやっていないでしょうか。自然は必要に迫られた時以外破壊しません。殺しません。腹一杯の時は、大好物が目の前にいても食べようとしません。人間は吐いてでも食べようとします。なんと恐ろしいことでしょうか。

神様は美しい地球を私たちにお与えくださいました。その美しい地球を汚したのは人の心です。その心を放っておき、小手先で何をやっても良くなるわけではないのです。人の心が地球環境を悪くしたのであれば、良くするのも人の心です。さあ、源流を清めましょう！ 人の心を清めましょう！ 本当の自分を知れば、欲望も、遊び心もなくなり、黙っていても地球環境は良くなるのですから……。

### ○ 生命人間ばかりにしよう！

誰が地球を汚したのでしょうか。鉱物でしょうか、植物でしょうか、動物でしょうか、人間でしょうか。

人間ですね。では、地球から人間をなくしたら、地球は息を吹き返すのではないのでしょうか。これが私の持論であり結論です。

「といっても、私は、人間を抹殺しなさいといっているわけではありません。「自我人間」をなくしましょう！」といっているのです。つまり、人間と違いしている人たちに生命の自覚を持ってもらい、生命として生きてもらうのです。

私たちは人間がいると思っていますが、人間などどこにもいないのです。生命が人間の中で生きているだけです。人間は、人間の皮をかぶった生命なのです。人間の形をした生命なのです。なのに思い違いし、人間だと思っただけです。だから、何も、生命に生きることは不思議ではないのです。ただ、生命と考えるか思えないかだけの話です。

生命の自覚を持った人は、我欲がなくなりますので、足ることを知るようになります。また自他の隔たりがなくなり、争い事を起こさなくなります。すべてを自分として見られるようになりますので、地球を自分の如く愛せるようになります。そうなれば、黙っていても地球環境は良くなります。地球を汚していた人間がいなくなったのですから当然です。さあ、地球を生命人間ばかりにしましょう！

### ○菌たちの警告！

神は地球上にバランスを取る使者を送りました。その使者とは、陰と陽の一对となった無数の菌たちです。人間は菌たちを毛嫌いますが、彼らは地球環境になくってはならない、大切なセンサーの役割をはたしてい

るのです。陰の菌たちは、破壊・崩壊・腐敗の方に働きます。陽の菌たちは、建設・維持・蘇生の方に働きます。その菌たちのバランスが取れている時は、何の悪さもしないのです。しかし、人間が物質に偏ると、陰の菌の方が勝つようになり、様々な災いをもたらすようになるのです。今、地球環境がおかしくなっているのも、奇病が蔓延しているのも、陰の菌の働きが強くなっているからです。しかしこれは、決して悪いことではないのです。苦しいから人間は疑問を持ち、解決しようと務めるようになるのです。だから、人間を苦しめる菌たちは、悪ではなく善です。もしこのセンサーを殺したら、より危険な方向へ進むことになり、取り返しのつかない事態になるでしょう。菌を殺すということは、警報器を取り外すようなものですから、地球は無防備になり、大惨事を招くことになるのです。

この地球上では、無数の菌たちが、大気の中で、大地の中で、水の中で、あらゆる生き物の中で、バランスを取りあって健全を維持しているのです。ですから、菌を殺すのではなく、バランスを取ってやるのが大切なのです。それにはまず、人間自らがバランスを取らねばなりません。すなわち、偏り過ぎている物欲を、正常な状態にまで回復させることです。私が高当の自分を知って欲しいと願うのは、人間と思想している限り、物欲から離れられないからです。

どんな頑丈な車も乱暴にあつかえば壊れてしまうように、地球も乱暴にあつかえば壊れてしまうのです。人類の悪思想が、地球を病気にしているのです。今、人類は、地球を救おうと様々な環境対策を講じていますが、造られた人間が造られた地球を救えるわけがないのです。唯一救えるのは、創り主である生命です。

そのためにも、人間は一日も早く生命に目覚めなければならぬのです。生命に目覚めれば、造られた者から創り主に変身するわけですから、地球を救うことなど朝飯前にできるのです。

これまで人類は、幾度となく文明崩壊の憂き目を見てきましたが、もう同じ轍を踏んではなりません。さあ、菌たちの警告に謙虚に耳を傾け、生き方を正しましょう。

### ○神の計らいに気づこう！

私が感心するのは、人間が思うことと自然界(神)が思うことがあまり変わらない点です。たとえば、人間は何か不都合が生じると、不都合を回避しようと様々な手を打ちます。同じように、自然界も何か不都合が生じると、それを回避しようと様々な手を打ってくるのです。たとえば、人間が物質に偏りはじめると、ガンという病気を与えました。性の退廃が進むと、エイズという病気を与えました。食生活が乱れてくると、狂牛病とか鳥インフルエンザという奇病を与えました。大津波でリゾート地が破壊されたり、洪水や地震などで工業団地や物流基地や原子力発電所が破壊されたりしたのも、娯楽の行き過ぎや経済の行き過ぎに対する警告です。

でも、自然界は、人間に対して悪いことばかりに手を下しているわけではありません。いや、むしろ人間のためになることをしてくれている方が多いのです。たとえば、牛一頭から一日20リットルから30リットルの乳がとれますが、なぜ牛はそんなに沢山乳を出すのでしょうか。ニワトリは沢山の卵を産み、ミツバチは沢山の蜜を集めますが、自分たちが生きるのにあれほど沢山必要なのでしょうか。今や貴重な魚になりま



したが、一昔前まではイワシやサンマなど、庶民向きな魚ほど沢山とれました。また、イモや根菜類など、ところかまわず沢山とれます。こうしてみると、自然界は、人間が生きるに必要な物を、みな用意してくれていることに気づきます。

次のような計らいもそうです。

自然界は、必要度の高い物ほど身近に沢山置いてくれており、必要度の低い物ほど遠くに少なく置いておられます。たとえば、空気がなければ私たちは数分と生きられませんが、空気は私たちの周りに沢山あります。水がなければ一週間と生きられませんが、水も身近に沢山あります。金やダイヤモンドは手に入れるのが大変ですが、そんなものがなくても私たちは生きられます。

自然界は、このように人間のために心憎いほどの配慮をしてくれているのです。人間はあまりにも慣れすぎて、そのことに気づかないのです。私が、人間の思いと自然界の思い(考え)があまり変わらないというのは、私の思い(考え)と自然界の思いが一致するからです。

自然はいつたい人間に何をいいたいのか。どうか心を澄まして聞いてください。「行き過ぎはいけませんよ！ 足ることを知った生活をしてくださいよ！」という叫び声が聞こえてくると思います。

○地上を照らす光の媒体になってください！

今の地球はとても薄暗いのです。それは、地球上に光の媒体になる人間が少ないからです。私が声を大にして訴えるのは、一人でも多くの人に真理を知ってもらい、光の媒体になってほしいからです。

あなたは神の子なのですよ！ 神の子でない者は一人もいないのです。だから、目覚めれば誰でも光の媒体になれるのですが、残念なことに神に目覚める人が少ないのです。それは、この肉体が自分だと思えて仕方がないからです。無理ありません。これまで気の遠くなる年月、人間として生きてきたのですからね……。その人間に、あなたは神の子ですよといっても、すぐに信じられないのも無理はないのです。しかしあなたは、ずっと心に疑問を抱えて生きてきたのではありませんか。「何かがおかしい。何かが変わだ」と……。そうです。神はあなたのハートをずっと叩いていたのです。でも、なかなか気づいてくれなかった。でも、今日やっと気づいてくださいました。だから今あなたは、この本を手にしているのだと思います。

いつか、誰でも、神の世界に帰らねばならないのが定めです。それは否応なしです。神の世界が私たちの故郷だからです。今この本を手にしているあなたは、自分が神の子だと薄々気づきはじめて、偉大な魂だと思いません。さあ、もう一押しです。もう一押しすれば、きつと故郷に向かって歩を踏み出してくれるでしょう。どうか、地上を照らす光の媒体になってください。地球はあなたが放つ光を待っているのですから……。

### ○地球の夜明けは近い！

地球は、うお座のエネルギーの支配を受けるゾーンから、みずがめ座のエネルギーの支配を受けるゾーンにシフトすることによって、もうすぐ黄金時代が訪れるといわれております。確かに今、地球は節目のときを迎えており、様々な変化が起こりはじめております。でも、この変化は、直接エネルギーのシフトとは関係ないのです。

神は地球という荒れ地に、魂という種を蒔かれたのです。その魂という種は、春の穏やかな日差しを受けて成長し、夏の強い日差しを浴びて実を着け、やがて秋の収穫時期を迎えます。地球に黄金時代が訪れるという説が生まれたのは、この度の収穫時期がみずがめ座を通る位置に当たるためです。でも、この宇宙に、魂を成熟させる特別なエネルギーゾーンがあるわけではないのです。もしそのようなゾーンがあるなら、こんな楽なことはありません。でも神は、そんな怠け者に都合のいい仕組みはおつくりになっていないのです。

魂を成熟させるのは体験です。つまり、転生における体験時間が人類の魂を成熟させるのです。何事も時間が解決するといわれるのは、時間の生みの親はエネルギーだからです。エネルギーは、物質を変質させたり、気持ちを変化させたり、環境を変えたりする働きがあるのです。といっても、エネルギーそのものが魂を成熟させるわけではありません。転生の中で培った学びが、魂を成熟させるのです。あくまでも、自力によつて学んだ中から得た気づきや発見です。

もうすぐ地球に、収穫の時期がやってまいります。でもこの度の収穫は、地球の進化と重なる特別な時期に当たるため、これまでにない大きな変化が予想されるのです。その変化に対応するため、特にこの数十年間、覚者たちは真理の普及に力を入れてきました。私の恩師である知花敏彦先生の真理の火花もその一つです。今まで迷妄に喘いでいた人類が、この真理の火花によつて刺激を受け、人間神の子、仏の子、生命の子に目覚めるのです。その時こそ、私が提唱してきた理想社会（奉仕社会）が現実のものとなるのです。科学が、宗教が、政治が、経済が、地球を変えるではありません。人間神の子（生命の子）に目覚めることによ

って地球は変わるのです。

今地球上では様々な混乱が起きておりますが、これは夜明け前の暗さのはじまりだと思つたらいいでしょう。イエス様はいわれました。「私はこの世に平和を持ってきたのではない、混乱を持ってきたのである」と・・・。私も同じことをいいます。なぜなら、私はこの書を通して「人間は神である！」という真理を普及させようとしているからです。この真理が普及すれば、地球に大きな波紋が起きるのは間違いないでしょう。つまり、これまで地球で体験したことのない思想の大変革が起き、多くの人が混乱に巻き込まれるのです。しかし、どんなに世界が混乱しようと、いつまでも真実を隠しておくわけにはいきません。真実は真実としてはつきりと示さなくては、人類の成長はあり得ないからです。もうすぐ世界は、経済面においても、政治面においても、宗教面においても、大混乱に陥ることでしょう。でもその暗闇を通らなければ、夜は明けられないのです。地球の夜明けは、もう目前です。

## おわりに

二十世紀から二十一世紀にかけて、人類の物質科学は飛躍的な進歩を遂げましたが、精神科学はどれほど進歩したでしょうか。いまだに迷信にしがみつき、いまだに崇りに脅え、いまだに神を畏怖している人たちが後を絶たないのでしょうか。

ロケットに乗って月に行ける時代になったというのに、人類の精神年齢は二千年前とほとんど変わっていないのです。この責任はいったい誰にあるのでしょうか。科学者にあるのでしょうか。それとも宗教家にあるのでしょうか。科学者は見えないモノを真つ向から否定し、宗教家は儀式や祭事に明け暮れ、一向に眞実に目を向けようとしません。これでは、いつまでたっても人類の精神年齢は向上しないでしょう。

皆さんは神なのですよ！ その神である皆さんが、どうしてカルシウムを拝むのですか。なぜ木や金属でつくった仏像を拝むのですか。なぜ仏壇や神棚に手を合わせるのですか。そんなことをして、何か変わりましたか。

確かに、目に見える世界で生きている人に、見えない世界を理解させるのは容易ではないことは分かります。理解できる人にその世界はあっても、理解できない人にその世界はないからです。でも、この本を読んでいるあなたは違うと思います。なぜなら、見えない世界を理解できる偉大な魂だからです。この本は、そういう人たちのために用意しました。どうか、眞実に目を向け、眞実に生きてください。そのような人が一

人でも多くなれば、間違いなく地球に陽が差してきます。

さて、先に出版した「人類の夜明2〜真実を探し求めている人へのメッセージ」は、自分探しの旅行案内書として用意しました。そしてこの「人類の夜明3〜真実はひとつ」は、その解説書(手引書)として用意しました。この両書によって少しでも目的地に近づくことができれば、こんな嬉しいことはありません。ぜひこの本を、ハッピーな道案内書にしてください。

二〇一三年十二月

かとうはかる

〈著者プロフィール〉

かとう はかる

一九四一年北海道生まれ。

覚者知花敏彦に十数年師受し、二〇〇二年四月真理の真髓を掴む。

現在、静岡県伊豆市に在住。

理想社会の実現を夢見、東京・大阪・博多・清里・修善寺で「理想社会を考える会・・・かとう塾」を主宰していた。

著書に「偉大なる魂」「人類の夜明1（理想世界への誘い）」「人類の夜明2（真実を探し求めている人へのメッセージ）」ほか

◎理想社会を考える会公式ホームページ。

<https://katou-jyuku.jimdo.com>